

AREA CAMPUS MOGAMI

エリアキャンパスもがみ 研究年報 2018



山形大学
Yamagata University

エリアキャンパスもがみ
研究年報 2018

「エリアキャンパスもがみ研究年報2018」発刊にあたって

エリアキャンパスもがみキャンパス長 玉手 英利

「エリアキャンパスもがみ」は、山形大学と山形県最上地域の皆様が一体となって、地域の未来を担う人材を育成する事業で、2005年3月にスタートしました。その後、文部科学省の補助事業による支援を受けた時期を経て、現在では山形大学の小白川キャンパスが実施主体となり地域での実践的教育を行っております。「フィールドワークー共生の森もがみ」の授業を履修した学生は、スタート以来の累計で3,214名になり、多数の学生が最上地域の皆様から様々な教をいただけてきました。これらの成果を踏まえて、2017年度からは基盤共通教育において「フィールドワークー共生の森」が必修の授業の一つとなりました。スタートから12年が過ぎた今では、最上地域の皆様のご協力とご支援によって、地域社会のなかで若者を育てる大学教育がすっかり定着し、卒業生も様々な場所で活躍しています。

この研究年報は、2018年度のエリアキャンパスもがみの活動を記録したもので、今回が第13号となります。第1部は事業内容、第2部は「フィールドワークー共生の森もがみ」を受講した学生が作成した授業記録です。この授業では、2018年度の前期に15プログラム、後期に7プログラムが実施され、新庄市、金山町、最上町、舟形町、真室川町、大蔵村、鮭川村、戸沢村で学生が様々な学習を行いました。授業記録では、学生一人一人が地域の皆様とどのように関わり、どのようなことを体験し、それを通じて感じたことや考えたことが詳細に記述されています。学生がこの授業を通じて得た地域に対する理解は、地域の皆様から見るとまだ十分ではないと感じることもあるかと思いますが、大学の教室では得られない貴重な体験をしたことは、これからの彼らの人生のなかで必ず糧になるものと信じております。

2018年は最上地域が豪雨災害に見舞われ、多くの被害を受けられたなかで、変わらずに学生たちを受け入れて暖かく接して下さった各市町村の皆様に、心から感謝申し上げます。多くの労を要する事業ではありますが、この活動を通じて、地域の諸課題を解決していく若者が育っていくことを期待しています。どうか、これからも関係各位から変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

目 次

「エリアキャンパスもがみ研究年報2018」発刊にあたって エリアキャンパスもがみキャンパス長 玉手英利 ……	2
-----------------------------------------------------------	---

第一部 研究年報

第1章 エリアキャンパスもがみ平成30年度事業の概要 ……………	5
第2章 初年次教育 フィールドワーカー共生の森もがみ フィールドラーニングー共生の森もがみ ……………	8
第3章 もがみ専門科目 ……………	14
第4章 もがみ活性化事業 ……………	27
第5章 今後の展望 ……………	40

第二部 授業記録

前期「フィールドワーカー共生の森もがみ」プログラム ……………	46
後期プログラム「フィールドラーニングー共生の森もがみ」 ……………	150
エリアキャンパスもがみ関係者名簿 ……………	192

第一部 研究年報

第1章 エリアキャンパスもがみ 平成30年度事業の概要

I エリアキャンパスもがみの概要

1 はじめに

山形大学は、過疎化の進む最上広域圏全体をキャンパスに見立てて教育・研究・地域貢献を展開する「エリアキャンパスもがみ」を平成16年度に発足させた。

エリアキャンパスもがみでは、「自然と人間の共生」をキーワードに、大学と最上広域圏双方の人材育成と活性化を図ることを目的に、自然や伝統文化を活用した実践的活動について、その知識や知恵、ノウハウを、最上広域圏全体で共有・活用するだけでなく、地域の教育資源として教育活動に活用している。

特に教育活動については、本学の初年次教育の展開に活用しており、本学の学生は、社会性や課題探求能力を身につけるために、地域の講師と子供から老人までの幅広い世代の住民を交えた現地体験型授業や課外活動に参加している。

2 これまでの経緯

県の北東部に位置する最上広域圏は、南西に最上川が流れ、一部盆地を含む大部分が山岳・丘陵地帯の自然豊かで市町村毎に独自の文化を有する農山村地帯である。その一方で、8市町村のうち6市町村が「過疎地域自立促進特別措置法」に基づく過疎地域に指定されている状況にある。

また、最上広域圏は大学・短大が一つもない県内唯一の広域圏であり、山形大学は、平成16年度に最上広域圏の8市町村と包括協定を締結し、広域圏全体をキャンパスとする「山形大学エリアキャンパスもがみ（以下、YAM）」を設立し、総合大学として組織的な地域貢献の挑戦を開始した。

YAMは、地域の自然や伝統文化などを教育資源として活用し、学生自らが現代社会の課題を発見し、探求し、解決するためのフィールドとして好適な場である。YAMの開設以降、最上広域圏を活性化させる様々な事業（以下、それらを総称して「もがみ活性化事業」と呼ぶ）を立ち上げ、多くの学生が課外活動として参加し、学生と住民の交流の中から、地域活性化の新たなシーズが生み出されてきた。

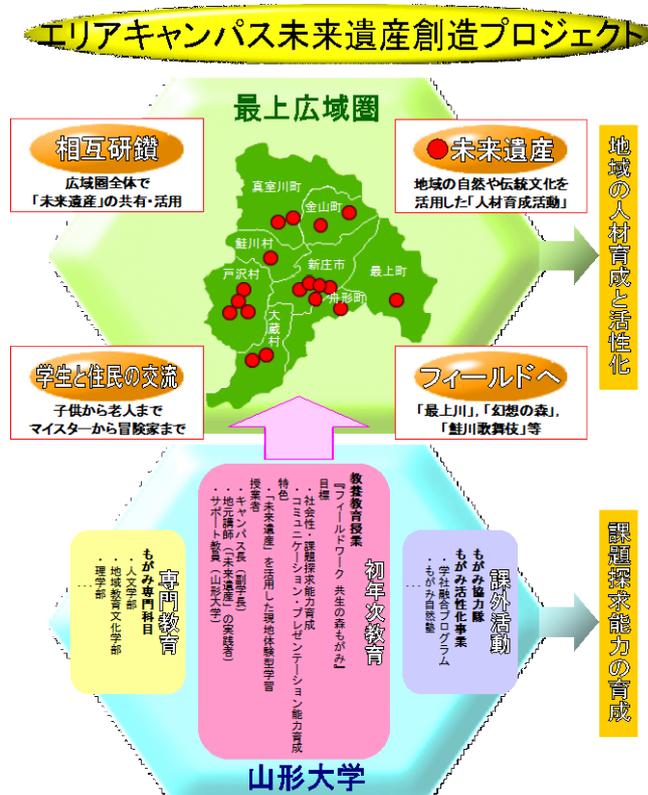
平成17年、大学は、YAMのこれまでの活動を振り返り、学生に社会性を持たせ、広い視野の下、課題探求能力を伸ばしていくには、柔軟性に富んだ初年次の学生を対象とした基盤教育の授業を立

てることが必須である、と考えた。

そこで、地域からの申し出もあり、地域の方を講師として、学生と住民、特に子供たちが現地で一緒に活動することができる初年次の全学生を対象とした基盤教育授業『フィールドワーカー共生の森もがみ』を平成18年度から開講することとした。

この初年次の基盤教育授業を骨格として、それに学部の専門教育の授業と課外活動を連携することによって、地域に根ざした実践的な課題探求能力を育成することになった。

なお、これらの取組については、「エリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト」として、平成18年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に採択された。



「エリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト概念図」

3 目標

エリアキャンパスもがみでは、次の2点を目標に掲げ活動を行っている。

(1) 大学生に対する教育

- ①過疎化、少子高齢化、環境などの現代社会が直面する課題発見・探求・解決能力を向上する。
- ②社会性を向上する。
- ③コミュニケーション能力を向上する。
- ④プレゼンテーション能力を向上する。
- ⑤豊かな地域社会の建設に関わる人材を輩出

する。

(2) 最上広域圏の人材育成と活性化

①未来遺産の共有・活用・発展を図る。②地域の自然や文化を子供たちに伝える。③子供たちの地元に対する誇りを抱かせる。④情報発信力を向上する。⑤豊かな地域社会の建設に関わる人材を輩出する。

4 運営体制

YAMの運営体制は、小白川キャンパス長がエリアキャンパスもがみのキャンパス長を務めており、YAMの運営の中核をなす「運営会議」は、山形大学と最上広域圏から選出された委員で構成されている。

山形大学の運営委員は、キャンパス長、教員8名、事務職員2名、で構成されており、最上広域圏の運営委員は、各市町村の教育長8名、芸術や産業など各分野の代表5名で構成されている。

また、現地に最上広域圏の事務職員が常駐する「最上事務局」を設置し、YAMを円滑に運営するための、橋渡し役を担っている。

本プロジェクトの関連経費は、各事業の内容に応じて大学と各自治体で応分に負担している。また、地元講師の謝金等は市町村が負担する寄付授業となっている。

5 教育改革への有効性

(1) 教育課程、教育方法等の創意工夫

「フィールドワーカー共生の森もがみ」は、正規の授業を地域の人材育成活動と連結させている点に特色があり、学生は、初年次の授業で地域に出て、社会性と課題探求能力を身に付け、それを大学の在籍期間を通して、専門教育と課外活動で伸ばしていくことができる。そのために、本授業では、次のような創意工夫を行っている。

- ①授業そのものが地域のニーズに基づいたもので構成され、地域の活性化に直接結びついている。
- ②現地で行う体験型学習となっている。
- ③現地にいるその道の達人が講師として直接指導に当たる。
- ④開講日を土・日曜日にすることによってたくさんの方々が参加できる。
- ⑤学生は子供の指導に関わることによって責任感を持つ。
- ⑥この授業は、「大学コンソーシアムやまがた」の単位互換協定に基づき県内の大学・短大生が履修できる。

(2) 期待できる成果等の教育改革への有効性

地域活動が活発になればなるほど、教育面での受益者は増すという相乗効果が期待できる。授業「共生の森もがみ」で、学生は世代の異なる住民と交流することによって、社会性が増し、「過疎化」「少子高齢化」「環境」などの現代的な問題群と向き合うこととなる。多くの学生にとって、このような日本が直面している現代的な問題に對峙し、それを考えることは、これからの我が国の発展のために大きな意義がある。

II 事業実施計画

1 基本的な年間スケジュール

- | | |
|-----|-------------------------------------------------|
| 4月 | もがみ担当者会議
前期授業「フィールドワーカー共生の森もがみ」と「もがみ活性化事業」開始 |
| 7月 | エリアキャンパスもがみ運営会議
前期フィールドワーク活動報告会 |
| 9月 | もがみ担当者会議 |
| 10月 | 後期授業の開始
エリアキャンパスもがみ懇談会 |
| 11月 | タウンミーティング |
| 2月 | 後期フィールドワーク活動報告会 |
| 3月 | エリアキャンパスもがみ運営会議
研究年報刊行 |

2 平成30年度実施事業

(1) 教育活動 ※事業詳細は第4章を参照

①初年次教育

「フィールドワーカー共生の森もがみ」

【前期】15プログラム

【後期】10プログラム

②主なもがみ専門科目

- ・地域教育文化学部「教育実践実習」新庄市
- ・大学院教育実践研究科（教職大学院）
「学社融合の実践と課題」戸沢村

など

(2) もがみ活性化事業

①山形大学見学旅行

- ・新庄市立新庄小学校
(4年生72名) 6月22日(金)
- ・金山町立金山小学校
(4年生26名) 6月22日(金)

- ・新庄市立萩野学園
(4年生45名) 6月29日(金)
- ・最上町立向町小学校
最上町立東法田小学校
(4年生28名) 9月7日(金)

②学習支援ボランティア活動

- ・舟形町立舟形中学校
8月1日(水)～2日(木)3名参加
- ・戸沢村立戸沢中学校
8月1日(水)～3日(金)4名参加

③タウンミーティング

- ・開催日：11月17日(土)
- ・場所：新庄市民プラザ

※事業詳細は第4章を参照

④フィールドワーク応用編

(3) 学生支援事業

吉田奨励金(エリアキャンパスもがみ後援会)
工学部 2年 庄司 宜徳

(4) もがみ関連事業

山形大学研究室訪問

新庄市立新庄北高等学校 2年生5名

<受け入れ教員>

- ・人文社会科学部 赤倉 泉
- ・人文社会科学部 丸山正巳
- ・農学部 加来伸夫

(5) 広報事業

- ・エリアキャンパスもがみキャンパス通信(3月)
- ・エリアキャンパスもがみ研究年報(3月)

第2章 初年次教育

フィールドワーカー共生の森もがみ

フィールドラーニング共生の森もがみ

I 意義

本授業は、山形大学の全学共通教育である基盤教育の正規の授業として開講された。本授業の特色は、①初年次教育、②全学共通教育、③現地体験宿泊型学習、④少人数教育、⑤山形大学の理念「自然と人間の共生」の具現化、⑥自然豊かな農山村地の活用、⑦現地講師による指導、である。

初年次教育は、通常、アメリカで初年次の学生の退学を防ぐことを目的として、大学への適応を意図した教育プログラムを指す。初年次学生の退学者が少ない日本ではおかれている状況がアメリカとは大きく異なっており、そこから必然的に初年次教育はアメリカのそれと異なったプログラムとなる。

我々がこの授業を初年次教育として強く意識しているのは、本学の学生は一年目に基盤教育を受講し、その後は各学部で専門課程を受講することから、専門に入る前に学問の専門性を超えた社会に対する問題意識を持ってもらいたいということである。

混沌とした社会においては、これが問題ですよというように、はっきりとしたかたちでは現れてはくれない。急激に変化する時代にあって、我々の知恵と感受性で問題を主体的に拾い出していくしかない。それが現代の市民に求められている。社会に主体的に関わっていくためには、自分で問題を発見していく能力を養っていかねばならないのだ。この授業の教育目標は、社会の様々な事象の中から学生自らが問題を発見することにある。

山形大学は6学部からなる総合大学であるが、6学部の学生が交流する機会はそれほど多くない。学生は学生の交流の中から自らを発見していく。本授業は全学共通教育の特性を活かして、学部を越えた学生の交流を図っている。

現代の若者は体験が少なくなっている。大学教育において意図的にこの体験を増やしていくしかない。リアルな体験を通して、学生の思考を深め、社会性を涵養させ、行動的にしていくことが求められている。そこでこの体験を濃密にするために、現地体験宿泊型学習を導入した。土・日曜日の宿泊型にすることによって、平日の授業と競合することがない。また、食事や宿泊を共にすることによって、人間関係が濃密になる。

この授業は10名程度の少人数教育となっており、地域の講師の人々との交流が密になり、教育

効果もあがるように設計されている。

山形大学の理念である「自然と人間の共生」を教育に反映するために、この自然豊かな「エリアキャンパスもがみ」を活用する。しかし、同時に、そこは少子高齢化、過疎化の進む現代の課題の先進地域でもある。こうして、学生が多くのことを考える場になっている。

この授業の大きな特色は、現地の達人を講師とし、この達人を中心とした授業を地元の方と大学で設計し、実施している点にある。大学という学問に立脚した知の拠点が、学問的知を越境し、社会的、日常的、実践的な知に踏み込む教育活動でもある。このことは教育の主役を教員から学生に重心移動したことの一つの表れでもある。つまり、学生にいま必要なことは何なのかを問い詰めていけば、授業において様々な可能性を試していかなければならない時代に入ったということが考えられる。学生は現地講師を通して、コミュニティということ意識し、故郷や家庭、そして自己を再考するきっかけとなっている。

本授業のもう一つの重要な側面は、この授業を学生教育だけでなく地域活性化のために活用するという点にある。では、この大学の授業が地域活性化にどのように貢献するのであろうか。

一つには、大学がなく若者があまりいない地に学生が入るだけで活性化される。学生が入ることは授業でなくてもいいのだが、正規授業でもなければ学生が観光地でもない遠隔地に集団で入ることはまずない。

二つ目は、授業の中に子どもを含めた地域住民との交流が入っており、学生と地域住民との交流が密になる。そこには、大学生による地域の子どもの指導なども組み込まれている。

三つ目は、全国から集まった大学生の新鮮な眼によって、地域が再発見されていく。そのことによって、地域の人々に地元の誇りが醸成される。

四つ目は、学生によってまちおこしなどの具体的な提言がなされる。

この授業によって上記のような地域活性化が考えられるが、実際にはことはそううまくは運ばない。授業に参加する学生は一年生であって、学問的な専門性を身につけているわけではない。そこで、専門的な視点からの提案を求めることはほとんど不可能である。また、現実には熱意のない学生が参加することも十分に考えられる。

この授業を大学と地域の双方に利益がある形に高めていくためには、これからのたゆまぬ授業改善が必要である。特に、上記の特性を踏まえた綿密な授業設計が重要である。このことは最終章で再考する。

II 平成30年度シラバス

【前期】フィールドワーカー共生の森もがみ
(領域：山形から考える)

【後期】フィールドラーニング共生の森もがみ
(領域：学際)

【担当教員】小田隆治(教育開発連携支援センター)

【授業概要】

・授業の目的

自然豊かな最上広域圏でのフィールドワークを通して、地域、文化、歴史、過疎化、少子高齢化等の現代日本が直面する諸問題を地域の人たちと一緒に考えます。この科目は、最上広域圏の8市町村そのものをキャンパスとして活動を展開する授業科目として創出されました。この地域を舞台に、「達人講師」の指導のもと、8市町村選りすぐりのプログラムが展開されます。もがみを知ること、山形を知り、日本を知り、ひいては世界を知ることにつながっていきます。山形大学に来て良かったと思える授業です。

・授業の到達目標

課題発見能力、課題探求能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、行動力、社会性の基礎的な力を身につけること。

【授業計画】

・授業の方法

この授業は、各自が以下のプログラムから1つを選択して受講します。各プログラムはオリエンテーションから始まり、事前学習の後、1泊2日のフィールドワーク×2回と中間学習、事後学習を行います。2回目のフィールドワーク終了後に最終レポートを提出してもらいます。また、フィールドワーク終了後には、学びの成果を示す「活動報告会」を行います。これら全ての活動が成績評価の対象となります。

〔前期プログラムリスト〕

- ①「新庄まつりとオレ」～日本一の山車行列～
(新庄市)
- ②「作陶に挑戦！」新庄東山焼の世界
(新庄市)
- ③地域の資源を活かし山屋の魅力を探る
(新庄市)
- ④マルシェ“本活プロジェクト”～本と人をつなげる
出前図書館～
(新庄市)
- ⑤山間地の宝物を探そう
(金山町)
- ⑥歴史的地域資源の保存と活用を考える
(金山町)
- ⑦森と人との共存を考えるⅠ～山間地の歴史を探り
地域振興へ～
(金山町)
- ⑧最上町の人・自然・文化に触れよう①
(最上町)
- ⑨里地里山の再生Ⅰ
(舟形町)
- ⑩田舎体験で考える～豊かな暮らしをつくる生き方働
き方～
(真室川町)
- ⑪子どもの自然体験支援講座Ⅰ
(真室川町)
- ⑫大蔵村の生活と伝統の継承
(大蔵村)

- ⑬鮭川の歴史・文化探訪
(鮭川村)
 - ⑭戸沢村の超元気印！幸齢者集団の生きざまに学ぶ
(戸沢村)
 - ⑮里山保全と山菜料理
(戸沢村)
 - ⑯創作太鼓と伝承野菜栽培
(戸沢村)
- 以上、15プログラム

〔後期プログラムリスト〕

- ①七所明神伝説と地域活動のあり方を探る
(新庄市)
 - ②新庄伝統の民俗文化を体験しよう～隠明寺風と昔語
り～
(新庄市)
 - ③新庄市の市報を創ってみよう！！
(新庄市)
 - ④山里の秋を体感しよう
(金山町)
 - ⑤森と人との共存を考えるⅡ～山間地の文化を探り地
域振興へ～
(金山町)
 - ⑥最上町の人・自然・文化に触れよう②
(最上町)
 - ⑦里地里山の再生Ⅱ
(舟形町)
 - ⑧子どもの自然体験支援講座Ⅱ
(真室川町)
 - ⑨里山保全とキノコ料理
(戸沢村)
 - ⑩創作太鼓と里山ぐらし体験
(戸沢村)
- 以上、10プログラム

・授業日程

- ① プログラムの紹介・プログラム選択希望調査
前期 4月6日(金) 16:30～ 132教室
後期 10月3日(水) 16:30～ 221教室
- ② オリエンテーション班編制・顔合わせ・フィ
ールドワークの心構えについて
前期 4月20日(金) 16:30～ 221教室
後期 10月16日(火) 16:30～ 221教室
- ③ フィールドワーク活動実施
前期 5月12日～7月8日
後期 10月27日～1月20日
- ④ 活動報告会
前期 7月21日(金) 16:30～ 221教室
後期 2月2日(金) 16:30～ 221教室

【学習の方法】

・受講のあり方

- 1) 安全第一を心がけ、積極的に活動に参加して
ください。
- 2) 専門分野の方法論や数値的なデータだけでは
なく、フィールドワーク(あるく・みる・
きく)で集めたデータをもとに考えるよう心
がけてください。「現場で考える」「体で考
える」(もちろん頭も使います)ことが合言
葉！そして、自分の想像力を大事にしてくだ
さい。

・授業時間外学習へのアドバイス

- 1) オリエンテーションで配布される「しおり」

を熟読し、内容を理解して授業に臨んでください。

- 2) オリエンテーションでの詳細説明に基づき、①事前学習、②中間学習、③最終レポートに取り組んでください。
- 3) フィールドワーク終了後、活動報告会に向けて準備を進めてください。方法については説明会を開催します。発表指導を2回以上行います。

【成績評価】

・基準

- 1) 地域での活動により課題を発見し、探求により深め、活動報告会の発表により他者に伝える事ができたかどうかを評価の基準とします。
- 2) 一連グループ学習の中でコミュニケーション能力や主体的学習力、社会性などを発揮できる事を評価の基準とします。

・方法

フィールドワーク活動への参加度 30%
 活動報告会での発表の完成度 20%
 現地講師による活動評価 40%
 受講生による相互評価 10%

【テキスト・参考書】

オリエンテーションで配布する「フィールドワークの手引き」及び「しおり」を参照の他、活動中に地域で配布される資料を活用してください。

【学生へのメッセージ】

最上広域圏は、学生諸君を温かく迎え入れてくれるでしょう。是非、もがみを見て、聞いて、感じて（味わって）、「共生の森」のパワーを体全体で吸収してきてください。大学から最上広域圏までは借り上げバスを利用し、最上広域圏内の移動は、各市町村で手配します。プログラムによっては、宿泊や実技体験を伴いますので、参加費が必要となります。（詳細は、「各プログラムの紹介」の際に説明します。）

【オフィスアワー】

オフィスアワーはありませんが、この授業の運営に協力する小白川キャンパス事務部教務課の事務職員が窓口にあたります。（学生センター内エリアキャンパスもがみ事務局・小白川キャンパス事務部教務課：023-628-4707）

Ⅲ 受講者数

プログラム No.	前期開講プログラム	受講者
1	「新庄まつりとオレ」～日本一の山車行列～	11人
2	「作陶に挑戦！」新庄東山焼の世界	11人
3	地域の資源を活かし山屋の魅力を探る	10人
4	マルシェ“本活プロジェクト”～本と人をつなげる出前図書館～	9人
5	山間地の宝物を探そう	10人
6	森と人の共存を考えるⅠ～山間地の歴史を探り地域振興へ～	9人
7	最上町の人・自然・文化に触れよう①	10人
8	里地里山の再生Ⅰ	10人
9	田舎体験で考える～豊かな暮らしをつくる生き方働き方～	10人
10	子どもの自然体験活動支援講座1	12人
11	大蔵村の生活と伝統の継承	15人
12	鮭川の歴史・文化探訪	7人
13	戸沢村の超元気印！幸齢者集団の生きざまに学ぶ	15人
14	里山保全と山菜料理	10人
15	創作太鼓と伝承野菜栽培	10人

プログラム No.	後期開講プログラム	受講者
1	七所明神伝説と地域活動のあり方を探る	8人
2	新庄伝統の民俗文化を体験しよう～隠明寺風と昔語り～	0人
3	新庄市の市報を創ってみよう！！	10人
4	山間地のお祭りを企画しよう	10人
5	森と人の共存を考えるⅡ～山間地の文化を探り地域振興へ～	10人
6	最上町の人・自然・文化に触れよう②	5人
7	里地里山の再生Ⅱ	0人
8	子どもの自然体験支援講座2	11人
9	里山保全とキノコ料理	8人
10	創作太鼓と里山ぐらし体験	0人

IV 活動報告会

1 フィールドワーカー共生の森もがみ

司会：学士課程基盤教育機構 講師
阿部 宇洋

日時：7月27日(金)16:30～

場所：基盤教育2号館221教室

2 フィールドラーニング共生の森もがみ

司会：学士課程基盤教育機構 講師
阿部 宇洋

日時：1月26日(土)13:00～

場所：新庄市民プラザ大ホール



この授業を総合的に判断すると良い授業だと思いますか。	4.8	4.4
----------------------------	-----	-----

②後期

質問項目	FL	全体平均
この授業を意欲的に受講しましたか	4.9	4.3
この授業の内容を理解できましたか	4.8	4.3
考え方、能力、知識、技術などは向上しましたか。	4.9	4.3
自ら学ぶ意欲は湧きましたか。	4.8	4.1
自ら進んで課題を発見し、探求する力が身につきましたか。	4.8	4.0
教員に熱意は感じられましたか。	4.8	4.5
考え方(教授法)はわかりやすかったですか。	4.7	4.4
教員の一方的な授業ではなく、コミュニケーションはとれていましたか。	4.8	4.3
板書や配布物、提示資料は読みやすかったですか。	4.6	4.3
教員は教室内の勉学の環境を良好に保つよう、配慮していましたか。	4.7	4.4
この授業を総合的に判断すると良い授業だと思いますか。	4.9	4.5

V 授業改善アンケート結果について

本年度に実施した授業改善アンケートについて、前期 156 人（回収率 98.1%）及び後期 62 人（回収率 91.8%）から回答があった。

アンケート結果については、表のとおりであり、基盤共通教育科目全体の平均値と比較してみると、総じて学生の満足度が高いことが読みとれる。

表：「フィールドワーカー共生の森もがみ」および「フィールドラーニング共生の森もがみ」の授業改善アンケート結果と基盤教育科目全体の平均値との比較

①前期

質問項目	FW	全体平均
この授業を意欲的に受講しましたか	4.8	4.3
この授業の内容を理解できましたか	4.8	4.3
考え方、能力、知識、技術などは向上しましたか。	4.8	4.3
自ら学ぶ意欲は湧きましたか。	4.7	4.1
自ら進んで課題を発見し、探求する力が身につきましたか。	4.7	4.0
教員に熱意は感じられましたか。	4.6	4.5
考え方(教授法)はわかりやすかったですか。	4.5	4.3
教員の一方的な授業ではなく、コミュニケーションはとれていましたか。	4.5	4.2
板書や配布物、提示資料は読みやすかったですか。	4.5	4.2
教員は教室内の勉学の環境を良好に保つよう、配慮していましたか。	4.3	4.4

「フィールドワーカー共生の森もがみ」

「フィールドラーニング共生の森もがみ」コラム
毛を加えると美しくなる

基盤教育機構 講師 阿部宇洋

毛の問題というのは昔から話題であった。お笑い芸人の中にも、自身の髪の毛の薄さをネタに笑いをとる方もいる。

AA（アスキーアート）の世界においても毛髪の話はネタとされ増毛（ましけ）や福生（ふっさ）などの地名もよく扱われる。

一方で戦地に向かう者が妻の髪の毛をお守り袋に入れ、持参していたり、遺品として髪の毛が届いたといった事例もあった。

民俗的には髪そのものが自身の一部であり、切り離されてなお自身の分身として機能するといった考え方がなされ、呪術に利用された歴史もある。現在でも呪術用具わら人形作成時には呪う相手の人毛を加えるという方法もあるようで、呪いそのものが対象のみへと働くような工夫が施されている。

なぜ毛の話なのかというと、最上地域の名前の由来とされる古来の地名に関連している。

最上は古来「毛加美」と記述された（※2）。もちろん、音に漢字を当てたであろうと推測されるが、なぜ森が豊かであったであろう最上の土地に「毛」という字を宛てたのかに関して邪推はしてしまう。

歴史地名に関して、毛に関する記述は小字単位所々見ることが出来る。兀山のような場所を冗（はげ）と記述している例があり、近隣には阿部市冗（庄内町）などの地名もある。

なにが言いたいかというと毛は大事だという事であるが、何かを加えると美しいという漢字そのものに現代に通じる魅力を感じるのである。

この過去の歴史地名のメッセージを少し考えてみたい。

蛇足であるが私の家系はだんだんと薄くなるか家系のように大切にしたい一方で、加えることの出来る時代に生まれたこと感謝せねばならない時

が近いうちにあるのかもしれない、来たる日に備えて心の準備も必要であろうか。

何かを加えると美しいのはなにも毛だけではなく、地域もそうなのだろうと思っている。

地域という大きな空間であるが、一番小さい、生活空間でたとえてみる。

私の場合、加わって美しく（豊かに）、生活が変化したのはコーヒーである。

元々実家においてもコーヒーは飲んでいたのであるが、大学の一人暮らしで籠が外れコーヒーに傾倒し生活に加わった。

ゼミ室にコーヒーメーカーが完備されていた事もあるが、講義終わりに某有名メーカーの缶コーヒーやゼミ室でコーヒーを必ず飲む、友人がドトールのアルバイトというコーヒーが身近な存在であり、身近にコーヒーを飲む場所、また、自動販売機が設置されていたという優れた環境がへの気づきが私の生活にコーヒーを加えたきっかけであったといまでは感じる。

それ以降、コーヒーを「飲む」から、コーヒーを「入れる」、コーヒー「豆をひく」、コーヒー「豆を煎る」（一度やったが失敗して以来やっていない）とこだわることになる（※3）。

今でも寝起きにコーヒーを飲むことがあるが、習慣からかコーヒーでスイッチが入るようになった。

また、美味しい豆を求めて様々な場所を訪れる事にもなる。そして様々な出会いが生まれる。

嬉しい出会いはこの講義中にもあり、新庄市のプログラム「マルシェ“本活プロジェクト”～本と人をつなぐ出前図書館～」に引率の際には前職で出会った方との再会があった。

5月20日、キトマルシェというイベントに参加させていただいた。学生達が図書館ブースの設営等をしている時間を利用して、各所観察していると、ひときわ行列の出来ている店舗があり、なぜこのような行列ができるのかと疑問に思って聞いてみると、新しく新庄に出来たコーヒーショップであることが判明し、さらに美味しいと評判だという情報も得た。ぜひ試飲したいと思いなが

ら、アイドルタイムを探って購入してみると、その方には以前、米沢市の民俗資料館内の樹を伐採していただいた方であったのである。

どこかで見たことのある…。から会話がはじまり、やっぱり！あの時のなどと話が弾んだ。

その方は、現在新庄市でコーヒーショップを営んでおり、自家焙煎で、新鮮なコーヒーを提供していたのである。そしてこのマルシェにも参加し、地元のコーヒーショップとして活躍されていた。

この再開は、転職して身分も変わっていたが、ともにこだわりは貫いている、そして新しい文化的な芽を地域に芽生えさせたのだと感じた。

仮に、コーヒーに興味が無く、こだわりがなかったなら、あえて行列が出来る店のアイドル時にならぶことはなかっただろうし、この再開もコーヒーがもたらした縁なのかなと思いながら、美味しいコーヒーをいただいた。

これも何かを加えたからこそ、意識的にもたらされ事象なのだろうと思う。

何かを加えると美しくなるという方程式は必ず成立するわけではないが、自身の生活や地域の文化として、何かを加える事は何らかの効果はもたらずし、もたらしてくれることは間違いない。加わった当初の効果は薄く成果等はみえにくいかもしれないが加え続けることの重要性がこの地域の名前の本質なのではないだろうか。

加える事をしなければ美しさや豊かさにすらならず、ただなくなっていくだけである。無情な兀山がそこにできあがるのである。

髪の毛の手入れもそうで、ストレス無く、頭皮のケアを行い、喫煙もせず、頭皮環境を整える必要がある（※4）。

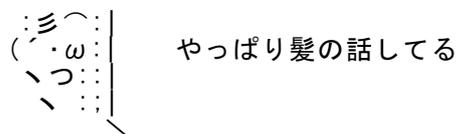
毛加美がさらに美しい、豊かな地として維持するにも様々加える事を怠ってはいけないと思うのである。

あきらめないことが肝心であろう。そして私は毛加美の地に何を加える事が出来るのであろうか。

註

1、AA（アスキーアート）テキストで作成された視覚的表現方法。髪の毛の話のAAは多種にわたる。

（例 掲示板にて毛の話をしている際に用いられるAA）



2、『角川日本地名大辞典6山形』S56

3、ガスコンロを使用して豆を煎るのであるが、想像以上のにおいと煙と、飛び散った豆の皮の処理が面倒でした。

4、なぜ筆者が毛にこだわっているかということ、坊主にした時の似あわなさがトラウマになっており、毛髪の重要性を早くから考えはじめた結果の事象であります。よってこの毛髪に関することは他者を、なんら非難するものではありません。

第3章 もがみ専門科目

I 地域教育文化学部

“新庄市での教育実習（もがみ教育実習）”

山形大学大学院教育実践研究科 江間史明

1 「もがみ教育実習」の12年の歩み

新庄市での教育実習プログラムは、学生が、実習期間中（3週間）、新庄市内に合宿して実習を行うという現地滞在型の教育実習である。「小規模から中規模までの学校を実習校に選べる」「地域の人々を交えた懇談会の開催」など、学校での授業実習に加えて、広く地域と関わって教育実習を行えるという特徴を持つ。新庄市教育委員会の全面的なバックアップによるものである。

この教育実習は、平成18年度にスタートし、次の表1のように実習生が参加してきた。

表1 新庄市の教育実習実施状況

年 平成	2年基礎実習 (1週間)	3年実践実習 (3週間)	栄 養 実 習	合計 (人)
18	8			8
19	18	10		28
20	15	11		26
21		14		14
22		14		14
23		12		12
24		18(4年生 含)		18
25		20	2	22
26		25	4	29
27		20	6	26
28		24	4	28
29		12	6	18

平成21年度から、基礎実習(1週間)は、附属学校で実施することになり、新庄市教育実習では実施しなくなった。栄養教育実習は、平成25年度より実施している。

この教育実習で学んだ学生から8名が最上地域の市町村で教師として第1歩を踏み出している(平成21年に2名、平成22年に1名、平成24年に2名、平成27年に1名、平成28年に1名、平成29年に1名)。地域と大学が連携し、地域を担う教師を育てるという取組が、具体的成果を

生みつつあると言える。

以下、平成30年度、13回目をむかえた新庄市での教育実習について報告する。

2 新庄市教育委員会からの申し入れと実習生

平成29年12月5日付で、新庄市教育委員会よりエリアキャンパスもがみのキャンパス長あてに「山形大学地域教育文化学部教育実習の新庄市での実施について(要望)」(新学発第5486号)という文書が、提出された。

要望書は、平成29年度教育実習において、「実習校においても、教育実習生を受け入れることを大きな刺激として受け止め」ていたことを述べて、「新庄市ならではの少人数指導、小中一貫教育、地域と密着した教育活動」を活かし、平成30年度も引き続き新庄市での教育実習を継続して実施できるよう要望していた。新庄市教委は、平成25年度より教育実習の宿泊施設である山屋セミナーハウスの使用料(一人あたり1人600円×20泊)を予算化して、充実した教育実習ができるように、宿泊施設の環境改善も行っている。

平成29年12月の学生オリエンテーションでこの実習への参加者を募り、平成30年度の新庄市の教育実習生は、最終的に次のようになった。

3年生 22名(小学校11名、中学校5名、
栄養教育実習6名)

3 平成30年度 教育実習への準備と指導体制

平成30年度の新庄市の教育実習は、次のように行われた。

○教育実践実習(3年生、3週間、16名)

2018年8月27日(月)～9月14日(金)

小学校11名、中学校5名

○栄養教育実習(3年生、合計6名)

2018年9月3日(月)～9月7日(金)

小学校実習校は、7校(新庄小、沼田小、北辰小、日新小、萩野学園、本合海小、升形小)、中学校実習校は、3校(新庄中、日新中、明倫中)であった。

栄養教育実習は、新庄小、日新小、沼田小で実施した。

この実習への準備として、7月31日(火)に「山形大学エリアキャンパスもがみ教育実習打合せ」を新庄市民プラザで行った。大森桂教授(副学部長、栄養教育実習担当)と江間が実習生と参加した。ここが、学生と実習校との顔合わせの場所になる。全体打合せのあと、学生は、実習校を訪問しての打合せ、宿泊場所の見学を行い、実習

への準備をすすめた。

このプログラムは、現地滞在型（3週間）の教育実習であるため、その宿泊先を確保する必要がある。この点については、新庄市教育委員会の特段のサポートにより、男子学生は、山屋セミナーハウス、女子学生は、新庄南高校同窓会館を利用することができた。

合宿形式の教育実習であるため、学生は、実習校から戻ると、自分たちで食事の準備をしつつ、互いの授業準備を協力して行う。新庄市教育委員会指導主事の学習指導案等の個別指導もあり、学生には充実した実習環境となった。

教育実習期間中、3年生の実践実習については、地域教育文化学部の教員が研究授業を参観し、事後研究会にも可能な限り参加した。山形市など村山地域の実習校と同様の指導体制をとった。



打ち合わせ会の様子

4 「地域懇談会」の実施

地域懇談会は、9月7日（金）に実施された。新庄市は、「小中一貫教育」を地域ごとに進めている。懇談会には、新庄市教育委員会、各実習校の校長およびPTA代表者が参加し、大学側からは、大森桂副学部長と江間が参加した。

今年の懇談会のテーマは、「学校と家庭の連携における課題と対策について」であった。学校区ごとの7グループに分かれ、次の8つの課題から一つをグループで選択して、①学校と家庭が連携していかなければならないこと（課題）、②現状は？③有効な手立てや方策は？について意見を交わした。課題は、生活リズム、家庭学習、スマホの使い方、家庭教育、ふるさと学習、地域行事、学力向上、PTA活動の在り方などであった。

このうち、スマホの使い方を3つのグループが、ふるさと学習を2つのグループが、生活リズムとあいさつを各1グループがとりあげた。スマ

ホについては、全国的に議論になっていることである。携帯しないのは難しいという意見の一方、その使い方の指導について意見が交わされた。ふるさと学習については、地域を大事にしてほしいという願いの一方、ただ活動しているだけで学習になっ

ているのかという指摘もあった。学校側、保護者側、実習生の各々の立場から率直な交流があった。

懇談会のあと、玄柳館に場所をうつして、懇親会を行い、懇親と議論を深めることができた。



地域懇談会の様子

5 今後の課題

資料3の実習生の今回のアンケートは、回収数14（栄養教育実習を除く。回収率87.5%）であった。アンケートからは、次の3点を指摘できる。

第1点。今回の教育実習の期間中、新庄市が豪雨にみまわれた。全国ネットのテレビニュースでも取り上げられた。この時の対応について、実習生アンケートの自由記述欄に改善の要望があった。

「テレビやラジオなどが無かったため、豪雨があった時の状況把握に戸惑った。」「今回のように大雨等の災害があったときにテレビなど情報網がないと非常に不安です。まわりがどのような状況なのか、どこに避難すればよいのかわからない状況にありました。改善していただきたいです。」

この点については、新庄市教委と連携をとりながら、来年度にむけて対応策を考えたい。

第2点。実習の前と後で、教職への意欲・関心（問2）が、「大幅に高まった」「少し高まった」とする学生が11名（78.6%）いたことである。教職への強い意欲を示した点で、本実習が、教師を目指す学生に対して高い教育効果を持った

ことを指摘できる。

他方で、「大幅に下がった」という学生が1名いた。「教師の大変さを知った」という理由で、別のキャリア（心理職）への考えが明確になり、今後の大学での勉強への意欲が高まったことがわかる。教職をリアルに考えられる充実した実習であることの、別の現れとみることができる。

第3点。実習を体験して勉強になった点（問4）について、「②授業の進め方（板書・発問・展開・等々の仕方）」を回答者の92.9%が勉強になったとしている。これにあわせて、「⑥個々の児童生徒の理解と受容の仕方」を回答者の78.6%が勉強になったとしている。これは、実習生が、授業の基本的な進め方とあわせて、個々の児童生徒へ向き合い方を、同時に学んだことを示している。単純に、授業のやり方が上手くなればよいというわけではないことの気づきである。後述の資料1にある実習生の文章にも、「その時々の子どもに合わせることで子どもの学びが深まったり、広がったりすることもあるということを実感しました」（藤田さん）とある通りである。これ続いて、「④学級経営の仕方」について学生は学んでいる。

第4点。新庄市の実習は、合宿をしながらの実習である。「もがみ地域で一緒に実習をした仲間」への感謝を述べるなど、合宿を積極的にみる学生がいる。一方、「ひとりになる時間がなくつらい」という意見もあった。宿泊先のネットへの接続環境の整備の要望もある。これらの課題については、引き続き、検討していきたい。

実習校からのアンケート（資料3）をみると、実習生の意欲を肯定的に受け止めていただいている。例えば、次の指摘があった。

「本校の児童にとっても、教育実習生と触れ合えるのは、大変貴重な機会となっていると思います。また、担当する先生をはじめ、他の教職員にとっても、実習生に指導したり、取り組みを見たりすることで、初心に帰り、改めて授業をする際の『課題の吟味』『発問』や『板書』などを考える良い機会となっています。」

他方、「指導案の書き方について戸惑っていました。」「板書の字や漢字の書き順が違うのが気になりました。生徒に見られるということを意識して書くことが必要です。」との指摘もあった。実習中の訪問教員の連絡や実習日誌の郵送など、大学と実習校との連絡についての要望もあった。指摘された課題については、次年度の検討課題としていきたい。

資料1

新庄市での教育実習を振り返って

地域教育文化学部3年 藤田真帆

私は、新庄市立北辰小学校で3週間の教育実習をさせていただきました。今回は昨年度の基礎実習より2週間長い実習でしたが、北辰小の子どもたちや、職員の方々を始めとするたくさんの人に支えられ、充実した時間にすることができました。この3週間を通して学んだこと、考えたことを二つ述べます。

一つ目は、授業づくりについてです。今回の実習で私が特に課題としていたのが授業づくりでした。昨年度の基礎実習で1度だけ授業をした際、反省点や課題が多く、来年は力を入れて取り組もうと心に決めていました。実習担当の先生は、私になるべく多くの教科を最低1回ずつは経験できるように時間割を組んでくださいました。3週間の実習で私が担当した授業は全部で10コマ以上。限られた時間の中で授業を考え、各教科の指導案を作成したり授業の準備をしたりすることは、慣れない私にとってかなり苦しいことでした。

しかし、今振り返って考えると大変貴重な経験になったと思います。実際に授業をしてみて、どんなに時間をかけてつくった授業でもその時々の子どもの思考や環境によって予想外の反応が出てきたり、思いもよらないことが起こったりするということを感じました。初めのうちは指導案通りに授業が進まないことが不安で、どのようにして「上手く」授業を進めるかということばかり考えていました。しかし、担任の先生と相談したり、授業を参観させていただいたりしているうちに、その時々の子どもに合わせることで子どもの学びが深まったり、広がったりすることもあるということを実感しました。それからは板書をなるべく子どもの発言に沿って書いたり、子どものつぶやきやノートの記述を全体に共有しながら授業を進めたりするようにしました。「子ども主体」という言葉はよく聞きますが、実際に授業をしてみるとか

なり難しく感じます。たくさんご指導をいただきながら、子どもの目線で、子どもと一緒に授業をつくる姿勢を学ぶことができました。

二つ目は、子どもや先生方とよく関わることの大切さについてです。子どもと休み時間を一緒に過ごしたり、たくさん話したりすると、子どもたちの人間関係や興味関心、悩んでいることなどを知ることができるので非常に大切であるということは昨年の教育実習のときも感じていました。今回は3週間だったので、より深くこのことを感じました。

昨年と違ったのは、職員の方々と関わる時間がとても多かったということです。今回私がお世話になった北辰小は、学年1クラスの、最上地域では中規模に属する学校です。児童数が少ないということもあってか、子どもも先生も互いによく見知った仲で、とても温かい雰囲気の学校でした。朝、私が職員室の自分の机で授業の準備をしていると、登校してきた子どもたちが一人ひとり順番に「おはようございます！」と元気に挨拶をしに来ます。私はその時間がとても好きでした。先生方は登校してくる子どもたちの様子を見ながら、昨日あったことや最近の子どもの様子など、情報を交換していることもありました。学年1クラスということは、学年に担任の先生は一人です。そのような学校だからこそ、朝や放課後に気軽に子どもの情報を交換し合ったり、悩みを相談し合ったりできる職員室のアットホームな環境がとても大切なのだと感じました。私が授業について悩んだり疲れていたりした時も、職員室で先生方と話したり、お茶を飲んだりする時はほっとできました。また、自分が知らなかった子どもの情報を得ることができ、関わる際や、授業をするときのヒントになることも多くありました。これらのことから改めて、子どもや先生とよく関わり、みんなで学校をつくっていくことの大切さを学びました。

最後になりますが、お忙しい中温かくご指導してくださった北辰小学校の先生方、素敵な経験をさせてくれた子どもたちをはじめ、新庄市教育委員会の皆様、地域の方々、保護者の皆様、本当に

ありがとうございました。この教育実習で学んだことを、これからの学生生活と将来に、活かして生きたいと思います。

資料2

新庄市の教育実習で学んだこと

地域教育文化学部3年 佐藤 航

私は今回、新庄市立日新小学校に3週間、教育実習生としてお世話になりました。教育実習を通して、教師という職業の魅力をたくさん学ばせていただきました。大変な面もありましたが、とても楽しく充実した日々を送らせていただき、将来のことをじっくり考える大切な機会になりました。



6年生の学級を担当させていただき、教室内では児童とたくさんのコミュニケーションをとることができました。6年生の児童は最上級生としてとても立派でした。子どもらしさを見せながらも、大人同士のようなかかわり方をみせている児童も多かったです。担任の先生も、児童一人一人を子どものようには扱わず、その子が立派に社会人になれるようなことを指導していた印象があり、子どもがどのような姿になってほしいかをしっかり考える必要があるなと思いました。なぜこの決まりを守らせるのか、なぜ宿題を出すのかということなど、子どものどういうところを育てたいのか、意図をもって指導していきたいと思いました。

授業もいくつか経験させていただきました。教師はずっと勉強し続ける職業だと大学の講義で

教わったことを実感するものでした。その授業で学んでほしいことをその時間だけで教えるのではなく、単元や1年間を通してどのような力を身につけてほしいかをしっかり子どもの姿から計画しているのだということを感じました。導入の授業を担当させてもらったときに、導入一つでその後の授業の進み方や、その単元の子どもの学びの内容や質が変わってしまうと指導を受け、授業に対し責任感を持つことが大事だと分かりました。

授業外でも教師は常に考え続け、学年や学級のことを判断する場面がかなり多いことが分かりました。どのような指示をすれば効率が良いかということや、問題場面での子どもの成長を考えた指導等、全てに意図があって納得のできる判断をする。それが、教師の責任だということに改めて感じました。

最後に、指導して下さった日新小学校の先生方、新庄市教育委員会の先生方には大変お世話になりました。また、実習を応援して下さったもがみ地域で一緒に実習をした仲間や、保護者の方や地域の方、そして小学校の児童には多大な感謝をしています。本当にありがとうございました。

資料3 実習工及び実習生アンケート

1 実習生を指導してみて、実習前に特にどのような指導が必要と思われますか。

- ・指導案の作成や授業実践など事前にしっかりと学んでいることが伝わってきました。
- ・実習打合せの際に、担当学級担任との打合せの時間を持つことができた。そこで、学級の様子や授業のイメージを話し合うことができ、スムーズに実習に入ることができたのがよかった。
- ・事前指導が行き届き、特に不都合はなかった。
- ・実習に対する心構えがきちんとできており、事前指導を十分に行っていただいていると感じています。
- ・現場で実際に子どもに接することはもちろん、教職員とも同僚として関わることになるので、社会人としての常識的ふるまいは、どの学生にも見つけてほしい。
- ・実習への意欲が高く、心構えがしっかりできて

いるとよい。今年の学生はできていたと思うので、今後もこのような面を大切にしていきたい。

- ・実習への心構えをはじめ、時間・服装・言葉遣い等に関わる事項を今後も指導頂きたいと思いません。(きちんと取り組んでいました。)
- ・指導案の書き方について、戸惑っていました。今後ご検討頂ければと思います。
- ・実習に臨む心構えとして、「1日を元気に過ごすこと」「気持ちの切り替えを行いながら過ごすこと」「子どもとのかかわりを大切にする」と等が大切であることを指導していただくと、教育実習が有意義なものになると思います。
- ・今回は、特に必要な指導があるようには感じられませんでした。
- ・板書の字や漢字の書き順が違うのが気になりました。生徒に見られるということ意識して書くことが必要です。板書は慣れないとなかなか書けません、教師として大切なところだと考えます。

2 今年の学生の印象をお聞かせください。

- ・授業づくりなどについて、学んだことを実践しよう意識がありました。
- ・礼儀正しく、身だしなみも整っていました。
- ・自分の課題にねばり強く取り組むことができました。
- ・非常に真面目で、表情も柔らかく、笑顔で過ごすことができていた。担当の話もしっかりと聞くことができ、教育実習に向かう姿勢ができていた。
- ・指導教官等の指導を前向きにとらえて、次の実践に生かすことができていた。
- ・休み時間等に子どもたちと一緒に遊ぶなど、明るく笑顔で進んで子どもに関わることができていた。
- ・いつも笑顔で、元気そうな受け答えは大変好感が持てました。また、アドバイスされたことを次の授業にすぐに生かそうという前向きな姿勢がありました。さらに、子どもたちとも積極的にコミュニケーションを取ろうという姿勢があり、子どもたちとの信頼関係を築くことができていました。
- ・大変真面目で、さわやかな印象で、子どもの方から声をかけていた。教材研究にも熱心に取り組んでいた。休み時間には、進んで子どもと遊び、ふれあっていた。

・自分から学ぼうとする姿勢が見られ、授業づくりや児童への接し方等について担当教員と常に話をしていた。さらに、周りの多くの教員にも「教えてください」と自分から指導を仰ぐと、もっと多くのアドバイスをもらうことができたのではないかと思う。

・積極的に児童と関わったり、進んで授業を行ったりする姿に好感が持てました。

・とても一生懸命な姿、チャレンジする姿が印象的でした。子どもたちを温かく見守ってくれた3週間でした。自分の考えもしっかりあり、アドバイスも受け入れてくれて、「次の時間は～しよう」という、前向きな姿勢でした。

・授業づくりや進め方がうまいと感じた。実習を楽しむ余裕も感じられた。教科書を購入していることにも感心した。

・教師になりたいという気持ちを強く持っており、また、教師の仕事についてもよく理解できている学生という印象です。

・明るく爽やかで、何事にも一生懸命に取り組んでいました。生徒とも積極的に交流する姿がありました。

3 その他

もがみ教育実習について、改善すべき点等があればご意見をお聞かせください。（自由にご記入ください。）

・実習終了後に教育実習日誌を郵送していただくことを確認していたが、早めにいただけるとありがたい。

・本校の児童にとっても、教育実習生と触れ合えるのは、大変貴重な体験となっていると思います。また、担当する担任を始め、他の教職員にとっても、実習生に指導したり、取り組みを見たりすることで、初心に帰り、改めて授業をする際の「課題の吟味」「発問」や「板書」などを考える良い機会となっています。今後も是非実習生の受け入れを継続していきたいと存じます。

・大学担当者から「小研・特研の訪問教員のお知らせメール」が来たのが、実施前々日の17時近くだった。学生本人にはそれ以前に情報が入っていたようだったので、もう少し早く知らせていただけるとありがたいと思った。（学校間の調整で、訪問日決定までに時間がかかるのだと承知していますが、できればということで書かせていただきました。）

・山屋セミナーハウスでの共同生活の利点を最大

限に生かして、互いに語り合い、学び合いができるチャンスと実習生が考えてもらえれば、意味ある「もがみ教育実習」であると思います。また、生徒にとっても、夢に向かってがんばっているお兄さんお姉さんを感じられる大事な機会だと思います。

・同じ教科2名だと、実習生は相談もでき、心強い部分があったと思います。一方で、受け入れる側としては、同一教科2名の台頭は難しいところもありましたので、異教科における複数の受け入れを希望します。

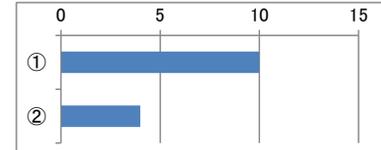
教育実習に関するアンケート
(地域教育文化学部3年次・もがみ教育実習)結果

以下の質問について該当する選択肢に☑してください。

1. あなたはどこで教育実践実習(以下「実践実習」)を行いましたか。

- ①小学校
②中学校

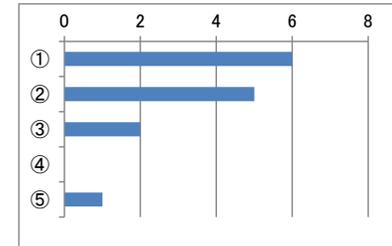
①	10
②	4
計	14



2. 教育実践実習(以下、「実践実習」)体験後の教職への意欲・関心の変化

- ①実習前より大幅に高まった。
②実習前より少し高まった。
③実習前とあまり変わらない。
④実習前より少し下がった。
⑤実習前より大幅に下がった。

①	6
②	5
③	2
④	0
⑤	1
計	14

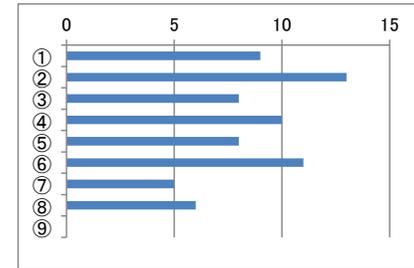


3. 問2で④または⑤を選択した方は、その理由を記入してください。(自由記述)
教師の大変さを知った。違うアプローチで、教師を心理的に助けたいなと感じたため。

4. 実践実習を体験してどんなところが勉強になりましたか。(複数選択可)

- ①教科・道徳の指導案の書き方
②授業の進め方(板書・発問・展開・等々の仕方)
③教材研究の方法
④学級経営の仕方(個性に合わせた指導の仕方・学級会やHRの進め方など)
⑤児童生徒集団の理解の仕方
⑥個々の児童生徒の理解と受容の仕方
⑦教具・教育機器の活用の仕方
⑧特別活動(児童会・生徒会活動・クラブ活動・学校行事)の指導の仕方
⑨その他()

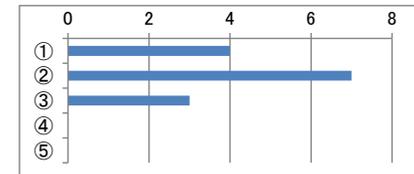
①	9
②	13
③	8
④	10
⑤	8
⑥	11
⑦	5
⑧	6
⑨	0
計	70



5. 実践実習体験後の大学の授業への意欲・関心の変化

- ①実習前より大幅に高まった。
②実習前より少し高まった。
③実習前とあまり変わらない。
④実習前より少し下がった。
⑤実習前より大幅に下がった。

①	4
②	7
③	3
④	0
⑤	0
計	14



6. 問5で④または⑤を選択した方は、その理由を記入してください。(自由記述)
心理学をもっともっと頑張りたいと思った！

7. 大学の授業の効果について

小研・特研を行った教科と、役立ったと思う授業科目名を記入してください。

小研:算数 教育実践Ⅱ(算数)

数学科教育法

道徳教育実践指導論

国語やまなしの導入の授業

特研:国語 教育実践Ⅱ(国語)

小研:道徳 特になし

小研:図画工作 図画工作の基礎

数学 数学の教材分析A,B 情報数学、数学科教育法A

特研:数学

教育実践社会

小研:数学 数学科教育法

小研:算数、教育実践算数

小研:国語 教育実践Ⅱ国語

国語 教育実践Ⅱ(国語)

8. その他実践実習で役立ったと思う授業科目名を記入してください。

生徒指導・進路指導、認知心理学

発達心理学

教育経営学

道徳教育実践指導論

生徒指導・進路指導

代数学A,B

生徒指導・進路指導

生徒指導・進路指導

教育経営学、生徒指導・進路指導

生徒指導・進路指導

9. それらの授業が役立ったところはどんな点ですか。(複数回答可)

①教科の内容の理解

②教科・道徳の指導案の書き方

③学級経営案の書き方

④児童生徒集団の理解の仕方

⑤個々の児童生徒の理解と受容の仕方

⑥教材研究の仕方

⑦授業の進め方(板書・発問・展開等々の仕方)

⑧その他()

①

②

③

④

⑤

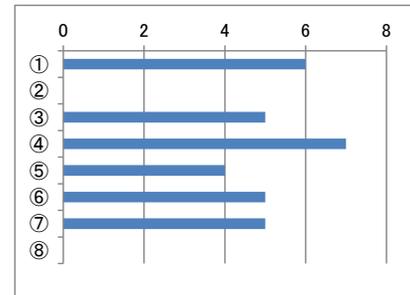
⑥

⑦

⑧

計

	6
	0
	5
	7
	4
	5
	5
	0
	32



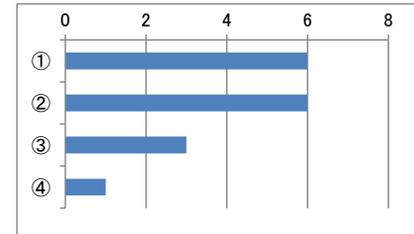
10. 「もがみ教育実習」の内容で、よかったのはどんな点ですか。(複数選択可)

- ①最上地域の学校で実習ができたこと
- ②保護者や地域の人を交えた懇談会
- ③指導主事による学習指導案等への指導
- ④その他()

①
②
③
④
計

①	6
②	6
③	3
④	1
計	16

素直な子供達、優しい先生方、アットホームな学校の環境、実習生のみならず協力して助け合える環境
職員室の先生方のあたたかさ
子どもたちがみんな素直だった



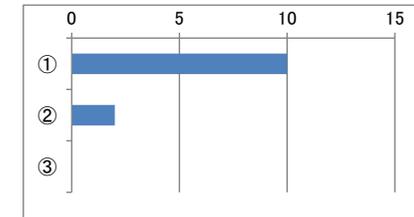
11. 「基礎実習」(2年次)の効果について

(あなたは、「基礎実習」の経験が役立ったと思いますか。)

- ①大いに役立った
- ②少し役立った
- ③あまり役立たなかった

①
②
③
計

①	10
②	2
③	0
計	12



12. 問11で答えた理由・改善して欲しい点など(自由記述)

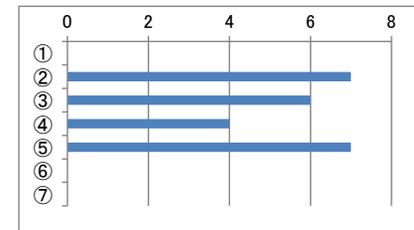
大学で学んだことと実習で求められていることが違うこと。
昨年子どもとたくさん関わることを目標に実習をしたので、今年はそれを前提にして、さらに授業づくりに力を入れることができたから。
しかし、1週間の基礎実習は短く感じる。もっと頻繁に学校をみにいたり、子どもを相手に授業をしたりする経験を積みたかった。
去年1週間実習を行っていたことで落ち着いてできた。
授業の考え方や仕方、子どもとの関わり方、授業の参観の仕方など。
基礎実習での反省点を今回の実習に生かすことができた

13. 「基礎実習」の経験で役立ったところはどんな点ですか。(複数選択可)

- ①教科・道徳の指導案の書き方
- ②学級経営案の書き方
- ③児童生徒集団の理解の仕方
- ④個々の児童生徒の理解と受容の仕方
- ⑤教材研究の仕方
- ⑥授業の進め方(板書・発問・展開・等々の仕方)
- ⑦その他()

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
計

①	0
②	7
③	6
④	4
⑤	7
⑥	0
⑦	0
計	24



14. 実践実習の前に、学習・準備しておくことについて自由にご記入ください。

指導案下書き
感謝状の書き方を教えてほしかったです。
子供達と関われる特技を準備しておいてよかった
自己紹介の仕方の工夫
実習中にあたる各教科の単元を見ておくこと。
板書の仕方

15. もがみ教育実習について、改善すべき点等があればご意見をお聞かせください。

ありません。

最高でした。

災害の情報が分からなくて不安だったので、情報が分かるものがあるとよかった。災害の時にどうしたらいいか事前に教えてもらえるといい。

実習中の宿泊先にネット環境がなく、教材準備に支障がある部分があった。また、テレビやラジオなどが無かったため、豪雨が来た時の状況把握に戸惑った。

今回のように大雨等の災害があったときにテレビなどの情報網がないと非常に不安です。田舎がどのような状況なのか、どこに避難すればよいのかなど分からない状況にありました。改善していただきたいです。

懇談会は大変有意義であった一方、その後の懇親会は、学校や保護者との関わりが難しく、苦痛であった。

自転車を新しくしてほしい

ひとりになる時間がなくつらい

宿舎の設備

16. 以下は、来年度教育実習予定者のみ回答してください。

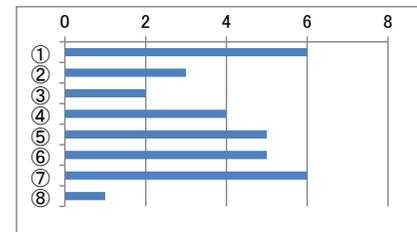
教育実習を終えて、来年度の教育実習までに重点的に取り組む必要があると感じたことはどんな点ですか。

(複数選択可)

- ①教える教科の内容をより深めること
- ②教科・道徳の指導案の書き方
- ③学級経営案の書き方
- ④児童生徒集団の理解の仕方
- ⑤個々の児童生徒の理解と受容の仕方
- ⑥教材研究の仕方
- ⑦授業の進め方(板書・発問・展開・等々の仕方)
- ⑧その他()

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- ⑥
- ⑦
- ⑧
- 計

①	6
②	3
③	2
④	4
⑤	5
⑥	5
⑦	6
⑧	1
計	32



感謝状の書き方を心得る。

II 大学院教育実践研究科

“学社融合の実践と課題”

山形大学大学院教育実践研究科 江間 史明

加藤 咲子

「学社融合の実践と課題」は、大学院教育実践研究科（教職大学院）「学校力開発分野」の選択科目の一つである。本授業は、学社融合の実践を学び、学校と地域社会の学習活動をコーディネートする教師の役割と方法の基礎を身につけることを目的とする。その実践事例として、山形県戸沢村や日本各地の学校支援地域本部事業を取り上げて検討している。

本授業の到達目標は、次の通りである。

- ① 学社融合実践の事例から、学校と地域の連携による教育効果を自分の言葉で説明できる。
- ② 学校と地域の教育活動をコーディネートできる教師の役割を、授業で学んだことをもとに説明できる。
- ③ 学校と地域を結びつけるアクションプラン（案）を提案できる。

平成30年度は、現職教員学生3名（田中翔志、成澤久美、松田浩明）が、本授業を受講した。本授業で、戸沢村での実地調査実習を、実施した。上記の3名に加えて、現職教員学生の三上裕子、学部新卒学生の眞木惟暢が参加した。

戸沢村は、平成25年4月に小学校4校、中学校2校をそれぞれ小学校1校中学校1校に統合した。平成30年度は、統合6年目。小学校と中学校の合築も完成し、施設一体型の小中一貫教育が始まって2年目である。こうした中で、戸沢村全体の学社融合の実践が、どのように再編されたのか。当事者は、どのような特質や課題をとらえているのか。そうした点を調べることを、今回の調査の目的とした。以下、その実地調査実習について報告する。

1 戸沢村実地調査実習の日程

戸沢村教育委員会の柿崎健学社融合主事に調整をお願いした。次のような日程で行った。

12月23日（日曜日）

- | | |
|-------------|--------------------------------------------------|
| 9:00 | 戸沢村神田公民館に到着 |
| 9:00～12:00 | 門松作り・そば打ちに参加 |
| 12:00～12:30 | 昼食 |
| 12:30～13:15 | 聞き取り（加藤久和氏） |
| 13:15～14:00 | 移動（北の妙地区の視察） |
| 14:00～15:30 | 古口公民館での取組の聞き取り
（菊地清一氏、寺内恵一氏、
佐藤雄次氏、門脇憲一氏他） |
| 15:40 | 戸沢村発 |

2 神田公民館での調査

12月23日の「門松づくり・そば打ち体験」は、戸沢小神田学区育成会（戸沢小に通わせる神田地

区の保護者の集まり）の主催である。会場の神田公民館に到着すると、神田地区の老人会のお年寄り20人が、すでに門松づくりを始めていた。参加している神田地区の子どもたちは、16名である。

お年寄りたちは、どんどん門松づくりを進めていく。私たちも、しめ縄の縄をなう活動にまぜてもらった。言葉を交わしながら、教えてもらった活動に取り組んだ。今回は、この神田地区の活動に、戸沢村の学校の先生の参加はなかった。あとで昼食のときに、地域の人が、私たちを、戸沢小学校の先生と誤解していたということがわかった。この点について、松田さんは、次のように述べている。

地域との連携において必要な条件としてお互いの顔が見える連携を考えることが必要であると考えさせられた。（中略）

しめ縄づくりの時私たちのことを小学校の先生と勘違いしていたことはそれだけ、以前に比べ地域との関わりが物理的、精神的にも減少していると感じた。そのことは地域の方は何かしら伝えたいことや学校のことを得たいという気持ちの表れであり、地域の財産がうまく循環していないことを表していると考ええる。（松田）



神田公民館の縄ない

この間、子どもたちは、そば打ちの活動に取り組んでいた。4つのグループに分かれて、上学年の子たちが、はじめてそば打ちに取り組む下学年の子どもたちに、「練る」「のぼす」「切る」という活動に丁寧に組み立てていた。保護者会のお父さん方は別の部屋で昼食用のそば打ちをしていた。お母さん方は、炊事場でおつゆやおでん、漬物の準備をしていた。こうした活動の様子を、田中さんは、次のように述べている。

様子を見てみると、おじいちゃんたちは楽しそうだった。お父さんたちも談笑しながらそばを打っていて楽しそう（前日もわざわざ集まって試作して飲んだとのこと）。お母さんたちは台所で大変そう…でもお母さん同士でも談笑している様子が多くみられた。子どもたちはというと、毎年打っている上学年の子に教わりながらグループで協力して打って

いた。少し物足りなそうな感じもしたが、異学年で交流する姿が見られた。

それぞれの年代ごとに楽しそうに活動をしてきたが、世代を超えた交流が少ないのではないかなと感じた。いろいろな人との関わりが子どもたちを育てるのだとすれば、他の家のお母さんと一緒におつゆを作ったり、おじいちゃんと一緒に普段しないような門松づくり・しめ縄づくりをしたりする場があってもいいのかなと感じた。(中略)

何のために交流するのか。子どもたちを育てるため、自分たちの生きがい・楽しみとしてなど、参加している人によってそれぞれ違うと思うが、お互いが楽しみながら取り組めるようにすることが大切だと学んだ。(田中)

田中さんは、様々な世代が集まり楽しく活動している点をとらえる一方、世代がまじりあった活動にしていくこと、活動の中で世代間交流を活性化させていくことを指摘したと言える。

昼食は、うちたてのそばをごちそうになった。

昼食後に、戸沢小の地域教育コーディネーターである加藤久和氏を囲んで、聞き取りの時間をもった。加藤氏は、統合前の旧神田小でも地域教育コーディネーターをつとめていた。統合後に、戸沢小の地域教育コーディネーターになり、神田地区以外の各地区へ活動範囲も広がっている。



神田公民館の聞き取り

加藤氏の次のような話が、院生にはインパクトがあった。

「この仕事をする中で、子どもらと関わる機会が生まれて、子どもらに顔を覚えてもらって、声をかけてもらえるのがうれしい。」「知らない人との人脈が広がり、自分自身の知識が増えるので。自分が楽しい。」

このように、学校と地域を橋渡しすることにやりがいをもって取り組んでいる人がいる。院生は、率直に大変さを感じながらも、学校が地域と子どもたちを繋げる役割を担える場所であることを再確認している。

他方で、その結びつきに、今、難しさを感じている人もいた。そのような話が聞けたのが、古口公民館での聞き取りであった。

3 古口公民館での調査

次の方の話を聞くことができた。

- ・菊地清一氏(北の妙創郷大学 学長)
- ・寺内恵一氏(戸沢村教育委員会元共有課長)
- ・門脇憲一氏(乙夜塾 代表)
- ・佐藤雄次氏(北の妙創郷大学 事務局長)

あと、通学合宿を担当する加藤さんが加わった。「北ノ妙創郷大学」や「乙夜塾」は、古口地区の地域教育活動団体である。戸沢村の学社融合の基盤は、通学合宿にある。古口地区は、この通学合宿に、村で最もはやく取り組んだ地区である。

通学合宿は、子どもたちが公民館に泊まり通学する2泊3日から3泊4日の取り組みである。食事は婦人会の支援を受けて自分たちでつくる。お風呂は、地域の家にもらい湯に行くものである。現在、戸沢村内の10か所で行われている。

今回の聞き取りで特徴的なのは、小学校と中学校の統合後の変化についての指摘が強く出されたことである。

寺内さんは、率直に、「学校統合の前後で、学校と地域の連携の熱量が違ってしまった」と言う。

例えば、以前の通学合宿には、校長先生をはじめ、学校の先生も顔をだしてくれた。しかし、今は、顔をださなくなった。先にみたとおり、神田公民館での取り組みにも、学校の先生が顔をだしていない。院生が、学校の先生と間違えられたということもある。佐藤雄次さんも、言う。

「学校と地域で連携して取り組む以前の『北の妙ツリーハウス』のような提案ができなくなった。学校と地域が離れてしまったのかな。学校が何を考えているのかわからない。」

地域の側の人からすれば、学校は、保護者や地域の人には、「学校に来てくださいと頼むのに、教師は外へ行かないのか」ということになる。

この発言の基盤には、戸沢村の学社融合が培ってきた、学校と地域の対等のパートナーシップの感覚を指摘できる。



古口公民館の聞き取り

こうした地域の方の問題提起を、院生は、次のように受け止めていた。

学校統合を境に物理的な距離が心の距離を生み出している様子が伺えた。「地域との繋がりがうすい。熱量がなくなった」との話か

ら、一番活発に取り組んでいた世代が高齢化し、くたびれた印象を受けた。取り組みに先生方が顔を出さないという不満について、学校の先生方は、「他人の子」に積極的に関わる力を持った存在だから、地域の人たちが頼りにしているのだろうと理解した。

教員の社会力の養成が必要という意見があり、それも大切なことであると感じたが、それならば子どもの親世代を地域で養成することがそれ以上に大切ではないかと感じた。大人同士が協力している姿勢から、子どもたちが学ぶ点も多いはずである。(成澤)

システムや体制の話の前に、「人と人としての付き合い」が地域との連携を図る上では大切なかもしれない。少なくとも、話し合う時間の確保は学校側として求められるところだろう。(田中)

地域の人たちが言うことはもつともである。…しかし、現職の立場から言えば、顔をだせば喜んでもらえるのだろうが、特に休みの日にまでも地域の行事に出かけていくことは負担な先生もいるだろう。どこまで、という線引きが難しい。何でも学校と地域と一緒に活動することも難しい。お互いが、それぞれの立場や役割を、補い合うことはできないのだろうか。(三上)

現在の学校は、…運営すること、こうする・しなければならぬという考えがあり、自然と地域との間に壁をつくってしまっている状態である。…地域の方にとっては、常に子どもたちの顔が見えること、…自分たちとの関わりにおいて子どもたちが育っていると感じられることが育てる意欲につながると思えた。そのためには、あえて緻密な非効率を求めることで最大の効果を得られる発想が必要であり、小さな学校の存在が重要であると考え。(松田)

この院生のコメントには、次の点を指摘できる。第一に、成澤さんのコメントは、活動を担ってきた地域のお年寄りの世代が、20年におよぶ活動をするなかで高齢化していることを述べている。こうした世代の活動を、60代や保護者の世代とどうつないでいくかが問われていると言える。すでに見た神田公民館の活動は、その端緒と言える。そこでも結節点となっているのが、地域の子どもの存在であった。

第二に、田中さん、三上さん、松田さんのコメントは、学校と地域の関わりが現状で直面している課題について述べている。三上さんの言うように、学校と地域が「補いあう」といった役割分担をなると、学社融合の活動にはならない。共に活動に取り組むことで、お互いに元気がでけると

いう生成的な取組が、学社融合の特徴である。そのために、学校と地域との「人と人としてのつきあい」や、「小さな学校」で敢えて非効率な部分を大事にするというアイデアがでてくる。

社会力を提唱した門脇厚司氏は、かつて、子どもが一人まともに育つためには、村が一つ必要だと述べた。子どもが成長するのは、親や先生以外の、さまざまな社会を担う仕事をする大人との関わりが必要であると述べたものである。そうした関わりをどう再構築するか。戸沢村の直面している課題は、日本のどの地域でも直面する課題であると言える。

4 学社融合の取組の意義

この戸沢村の実地調査は、毎年、行っているが、来る度に発見がある。今回は、学校統合という地域社会の大きな変化が、これまでの戸沢村における学校と地域の変化させていることが、地域の当事者の発言から明らかとなった。統合直後には見えなかったものが、顕在化したと言える。

「学校が何を考えているかわからない。」すでに述べたように、この発言は、戸沢村における学社融合のこれまでの蓄積があるからこそ、地域からでてくるものと言える。

地域の側は、学校との関わりを求めている。それは、子どもの育ちにも有用なものである。これに応える学校と地域をつなぐカリキュラムの構築の任は、学校側の仕事として残されているものと言える。

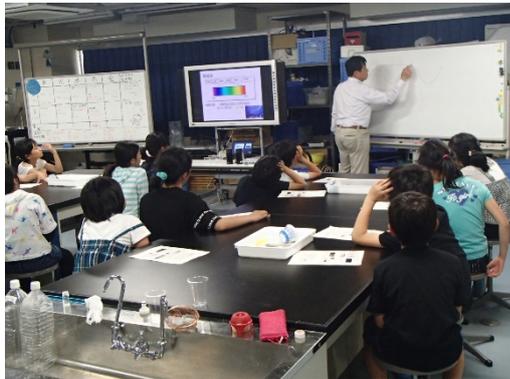
第4章 もがみ活性化事業

I 大学見学旅行

最上地域の子供たちに、もっと山形大学のことを身近に感じてもらうために「山形大学見学旅行」を開催しております。

児童の皆さんには、身近なものを使った「化学実験教室」として、楽しい実験を体験してもらうほか、校内散策や学食の利用等をとおして大学の雰囲気味わってもらいます。平成30年度に来訪した小学校は、次のとおりです。

- (1) 新庄市立新庄小学校(4年生 72名)6月22日(金)
- (2) 金山町立金山小学校(4年生 26名)6月22日(金)
- (3) 新庄市立萩野学園(4年生 45名) 6月29日(金)
- (4) 最上町立向町小学校および
最上町立東法田小学校(4年生 28名)9月7日(金)



大学見学の様子

II もがみ協力隊

もがみ協力隊は、エリアキャンパスもがみに関連した活動へ参加する山形大学の学生組織です。

平成30年度は、主に下記の活動を実施しました。

1 学習支援ボランティア

本活動は、大学生の学習支援により小中学生の学習意欲を喚起し、学力の向上及び進路意識の高揚を図るために行われたものです。

- ・舟形町立舟形中学校
8月1日(水)～2日(木)3名参加
- ・戸沢村立戸沢中学校
8月1日(水)～3日(金)4名参加

2 フィールドワーク応用編

フィールドワークまたはフィールドラーニングを受講した学生が、授業外で自主的に地域へ訪れる活動を「フィールドワーク応用編」と呼んでいます。平成30年度は、以下の活動をとおして最上地域の方々と学生が交流を深めました。

新庄まつり

日程 8月24日(金)～8月25日(土)

参加学生 10名

概要 山車の人形に使われている隈取りの体験、神輿渡御行列のかごを模したゴミ箱によるゴミ回収を行った。

舟形マルシェ

日程 10月20(土)、10月21日(日)

参加学生 10名

概要 前期授業終了後の8月から10月にかけて、舟形町堀内ファームに通って栽培・収穫した野菜を、八峰祭の中で販売した。さらに売上金は、平成30年度夏期豪雨災害で大きな被害に遭われた舟形町へ寄附した。



代表者4名による寄付金贈呈の様子

山形レボリューション～地域共創シンポジウム～

日程 10月27日(土)

参加学生 9名

ほか一般参加者 約30名

概要 学生発表 新庄東山焼、金山遊学の森
地域代表発表

戸沢村地域起こし協力隊 鈴木英策氏
山形大学客員教授 柴田孝
講演 食環境ジャーナリスト 金丸弘美氏
パネルディスカッション



パネルディスカッションの様子

Ⅲ タウンミーティング

【概要】

日 時：平成 29 年 11 月 11 日（土）
13：00～16：30

場 所：最上広域交流センター ゆめりあ（新庄市）

参加者：約 40 名

内 容：

■ 第 1 部 フィールドワーク報告会

第 1 部司会 山形大学小白川キャンパス事務部

教務課係長 佃 美穂

フィールドワーク実施市町村による報告

・「金山町・山間地の宝物を味わおう」

道草ぶんこう運営委員会

事務局長 須藤 幸一 氏

事務局 樋口 勝也 氏

・「最上町のフィールドワーク」について

最上町教育委員会

教育文化課社会教育係 主事 阿部大紀氏

フィールドワーク参加学生による活動報告

・新庄市 マルシェ“本活”プロジェクト

～本と人をつなげる出前図書館～

地域教育文化学部 1 年 小澤 綾乃

地域教育文化学部 1 年 伊藤 真由

・舟形町 里地里山の再生 I

農学部 1 年 叶内 芽依

農学部 1 年 田中 まこ

農学部 1 年 庄司 森

農学部 1 年 生田 聡

■ 第 2 部 グループ討論と発表記録

第 2 部司会 山形大学学士課程基盤教育機構

講師 阿部 宇洋

・テーマ：2030 年のもがみを創造する

■ 第一部 フィールドワーク報告会

○司会

はい、それでは定刻となりましたので、ただ今より「平成 30 年度エリアキャンパスもがみタウンミーティング」を開始させていただきます。私、山形大学小白川キャンパス事務部教務課の佃と申します。司会を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

お手元にお配りしております、資料の確認をまずお願いいたします。封筒の中に、本日のプログラム、あと発表が本日第一部で 4 件ございますので、4 件分の発表の資料、スライドを印刷したものがございます。一番最後に、御協力お願いしたいんですけども、アンケート用紙 1 枚付いてございます。以上がこちらでお配りした資料です。あと学生の発表のほうの資料で 1 枚ですね、フルカラーの A 4 横のチラシをお配りさせていただいておりますので、そちらも

お手元にあるかどうか御確認をお願いいたします。

それではまず、開会に先立ちまして、エリアキャンパスもがみ最上事務局の森事務局長よりごあいさつをいただきたいと思います。お願いいたします。

○森事務局長

皆さん、こんにちは。山形大学エリアキャンパスもがみがスタートして、今年 13 年になりました。スタートして間もなく、もがみ後援会が発足しまして、その会員として私自身もかかわらせていただきまして、今日に至っております。毎年学生が変わっている中で、このエリアキャンパスもがみが 13 年間継続している要因は何かということで、事務局を務めて 3 年目になりますけれども、考えてみました。毎年、年を重ねる度に、こう充実して右肩上がりになっているというわけではないかなというふうに思っております。しかし、この 13 年間継続してきているということは、それなりの要因があるのではないかなというふうに考えました。三つほど私なりに整理したところであります。

一つは、皆さんに事前にお配りしました、このパンフレットでございます。このパンフレットの中の 1 行目に、エリアキャンパスもがみが平成 17 年 3 月 22 日に、山形大学と最上地域における教育・研究・社会貢献、そして地域活性化に資するために設立されました。このことがですね、あの趣旨が、大学と最上地域の目指している方向と一致して、ぶれないで常に原点に戻って確認し合ってきていることが、一つの要因ではないかなというふうに考えたところであります。

もう一つは、最上地域八市町村での試行錯誤しながらの活動で、活動が活動で終わらずに、常に振り返り、そして整理したものを共有していると。その共有が学生、地域指導者、そして大学関係者、事務方含めたですね、そういったところでの適切な共有する場の設定、それによって淘汰されて 13 年間継続しているのかなと。

そして最後に、三つ目のところですが、やっぱり人だと思っています。この人なんていうことを簡単に申し上げましたけれども、参加した学生に少しでも良い体験をしてほしい。大学一年次の体験授業が、学年が進んでも、社会に出てからも、役に立ってほしいという熱い思いを持った人が、大学の指導者の中にもおり、そして最上地域の指導者の中にもいて、その方々が核になって支えてきている 13 年間だったのではないかなというふうに感じたところであります。

以上、大ざっぱな私見を含めた形でありますけれども、これらのことを裏付けることとして、特に感じていることは、毎年変わっている学生の活動報告会、この中身が質的に高まってきているそのことや、最上地域においても、八市町村の中での安定した活動団体が存在していて、その団体の皆さん方がリーダーシップを発揮して、活動の広がりが見られるのではないかなというふうに思って、これが主な要因になっているなということを感じたところでした。

その影響で高校生ボランティア、最上地域の高校生ボランティアが非常に活発になってきていることとか、先週の土曜日、1週間前ですけれども、この市民プラザを会場に、新庄教育の日のコスモスデーのセレモニーがございました。その中で小中学生の発表の最後に、山大エリアキャンパスもがみの活動を発表してくれた、地域教育文化学部の2年生の学生さんが御発表しました。観客というんですか、参加者の中にも、さすがやっぱり大学生だなという声、そして私自身もずっと活動報告を聞いておりましたけれども、特に展望、これからじゃあどうするんだと。課題とかそういうものをずっとこう述べたあと、展望どうするんだというところで、関心を持って聞いておりましたら、非常にこう落ち着いた形の、七所明神の伝説のところの活動した2年生の学生だったんですけれども、非常に展望が、地に足のついた展望でありました。神社ですので、常にきれいにしていることとか、今後も継続していけるような、というようなそういった内容のことをお話しして、参加した方々は非常にこうなずいた形で聞いておられました。

少し長くなりましたけれども、この報告会、このあとの報告会やグループ活動で、今言ったようなことを話題にさせていただければありがたいなというふうに思っているところであります。それではただ今より、平成30年度の山形大学エリアキャンパスもがみタウンミーティングを開会いたします。よろしくお願いたします。

○司会

森事務局長、ありがとうございます。それでは早速、第一部のフィールドワーク報告会を始めさせていただきます。

まず最初は、フィールドワーク実施市町村による報告ということで、金山町、「山間地の宝物を味わおう」、道草ぶんこう運営委員会事務局長の須藤さんと、同じく道草ぶんこう運営委員会の樋口さんのお二人から御紹介をいただきたいと思っております。それではよろしくお願いたします。

○樋口氏

それでは、金山町でもフィールドワークを引き受けて10年くらいになりますので、その間ずっと携わってきたわけですが、金山町は、イザベラバードが明治時代に来て、非常にいいという印象を持っていただきました。それはずっと13号線街道であって、そこからちょっとそれて、本当に山間地、田茂沢地区の中でフィールドワークをしております。今のフィールドが、イザベラバードがピラミッドだというふうに勘違いした金山の三つの山、金山三山ですね。上大山から見た風景なんですけれども、ふるさとを離れた人が、新庄からこの上大峠を越えたときに、ふるさとに戻ってきたという感じをするのが、この光景だというふうに言われています。

その中で、高齢化・少子化になっている本当の山間地で、どういう生活が営まれるのかということをお学生さん方に感じてもらうことが、今後の日本全体

を考えるとときにいいことじゃないかなというふうに思います。高齢化した山間地の中で、人々が暮らす宝物を学生たちに感じてもらいたい。感じるの、単なる目・耳・口だけでなく、五感・六感を全部フル活動させて感じさせるということをお、学生たちに気づかせたいなというふうに思います。こういうふうな山・川・小川を見たときに、学生は何を感じるか。この「道草ぶんこう」の廃校になった分校を15年借りて、17年になりますけれども、道草という名前をつけてくれたのが、これから発表していただく須藤幸一さんであります。

人生の道草、いま皆さん方はどういうふうに感じていますか。子どもたちは道草をくうのは非常に楽しいんですが、100年時代生きたときに、道草をくっている人がどれくらいいるか。その道草というのが非常にいいネーミングだったというので、幸一さんから提示してもらったんですが、ここに描いている壁画が、現在日本でも近代・現代美術の若手一人者とされている、近藤亜樹という人が子どもたちと一緒に描いたものです。ぜひインターネットでクリックして「近藤、近い藤、亜樹は、亜細亜の亜と樹木の樹」を押してもらおうと、その学生、今は30くらい近くなっていますけれども、活動が見られますので、ぜひ御覧になってみてください。そこでいろいろ授業を展開して、学生たちに五感で感じてもらいたいというのを、運営委員を中心にして始めた事業であります。幸一さんのほうからよろしくお願いたします。

○須藤氏

それでは、実は道草ぶんこうは、樋口さんが始まる前、約10年近くあったんですけれども、先に運営委員をしていた方が70という年を境に、我々の代に譲りたいということもありまして、それから今のメンバー、今日また二人、うちのメンバーが見えているんですけれども、メンバーをがらっと入れ替えましてやり始めたのが、平成27年から私が事務局を引き受けて、あと委員長・委員というふうな形で、今まで約4年間活動してまいりました。その中で、これから画面を見ていただくんですけれども、それに沿って説明をしたいと思っております。

これは今年の前期のフィールドワークなんですけれども、たまたま我々も山間地で減反して遊んでいる畑があるものですから、前期の第1日目が6月で、第2回目が7月ということで、その期日の設定が6月の末から田茂沢集落周辺にはたくさんホテルが出ますので、それをぜひ学生さんに見ていただきたいということを考えていましたので、それを逆算して大体その1回目の日程が、大体6月上旬の日程設定になるんです。来ていただいて体験して、その結果を見るのに約1カ月何をさせたらいいかというのが我々運営委員の悩みでしたので、二十日大根だったら次回2回目に来てもらえれば収穫してもらえると、非常に安易な気持ちで二十日大根を毎回、前期の部分ではそういう作業をさせてもらっています。

ラディッシュを植えるにあたって、大体1畝(せ)、まあ我々農家の言葉で言えば、1畝くらいの畑なん

ですけれども、そこにとりあえず定番の筋蒔きして、種が余るものですから、あと学生さんたちに余った畑の余白を利用して、好きな絵文字を描いてください。まあ野菜文字というんですか、そういう活動しながら、まあ楽しみながらやっているんですけれども。大体、去年の場合、山形大学の「山」取って、金山の「山」取って、金山大(きんざんだい)みたいな、野菜で文字を作って、去年は大変収穫のほうもあつたんですが、今年はいいにくの天候だったので、なかなか収穫するまではいかなかったです。

その畑仕事をしまして、帰りに川が近くにあるものですから、そこで生物の観察ということで、今日参加いただいているサトウマサアキ先生から、フィールドワークの講師をお願いしているものですから、その中で、川にすんでいる生物の名前とか、いろいろなことを教えていただいて、田茂沢のところには、ヒメカジカですか、貴重なそういう魚もいるということを知ってもらっています。これが次の日なんですけど、大体皆さん遠くから来る学生さんが多いものですから、山菜というのはなかなか分かりにくいということで、ミズとかワラビとか、季節的にそういうものしかとれませんので、まあ簡単なワラビとミズをとって、昼食にはミズ汁をごちそうするというふうな形をとっております。

我々のところは、一番他町村と違う活動というか、フィールドワークで違うところは、農家に泊まらせていただく、我々民間の家にホームステイしていただくというふうな形をとっておりますので、大体2〜3名ずつ振り分けて泊めていただくんですけれども、そういう部分で、我々の活動を理解してくださっているホームステイ先の皆さんにこういうふうにして、ホテルが出たとき近くのところへ案内していただいて、それぞれに、泊まった先のそれぞれの家の人からホテルを見させてもらって、感動してもらっているようなところです。

次、これは我々もフィールドワークを受け入れはしてみたものの、何をしようかというのは、樋口さんといろいろと運営委員の間で話題になるので、これもそれから、そもそもフィールドワークを受け入れようになったという、先代の役員というか運営委員の方々が、いまここに写っている須藤さんと石井さんというおじいちゃんなんですけれども、こういう方々を引き込まないと、我々もそのフィールドワークを維持していくのが大変だと思ひまして、午後からの体育館で縄ないをしてもらっているんです、学生さんに。その縄ないがなかなか、いま縄をなうということもないものですから、学生さんには非常に新鮮な作業に思えるかと見えています。やっぱり縄をなうというのは、手先というか、そういう器用さも非常に見られるところなので、学生さんもその辺は緊張しながら、あとはフィールドワーク、里の先生って我々おじいちゃん方と呼んでいるんですけれども、里の先生2名から縄ないをしていただくというふうな授業をしています。

これは、前期に2回目に来たときに、大体1回目のときに、前からラディッシュが大体収穫できる時期

になっていますので、ちょっとラディッシュにしては小ぶりなんですけれども、こういうふうには、まいたものが収穫できるという体験をしてもらっています。2日目の昼食なんですけれども、ここに来ていただいたサイトウマサアキ先生の指導で、そば打ちをしています。そば打ちをしていただいて、学生さんが打ったそばで、我々も一緒に昼飯をとるといような形をとっています。これが子どもたちも引き込まうという形で、七夕祭りも兼ねて、飾り付けとか、あとはさっき、あっ、ごめんなさい。七夕ですね。あとは、俺も説明する中で、1回目と2回目のちょっと日程がずれているものですから。

初回、これがですね、初回2日目の昼食なんですけれども、たまたま小野さんという、おばあちゃんとは呼べないかもしれませんが、非常に笹巻作りが上手なものですから、講師に頼んで、学生さん方に指導していただいて笹巻を作って、これを我々お土産にしているんです。結局、笹巻を作って、その日に食することができないものですから、大体2時間くらい煮ないと、笹巻は食べられないというふうな、そういう指導もあつたものですから、学生さんが作ったやつは持ち帰りのお土産にして、あとは小野さん、講師が作った笹巻で昼食をとるといような形。これは山菜鍋ですね。学生さんには、昼食からいろんな、「これしてください、あれしてください」と言って協力をしていただいてやってもらっています。

というふうな形で、我々もどういふ行事を進めていくかというのは、フィールドワークを受け入れして、何を勉強してもらおうかというのは、ただ悩むところではありますけれども、何とかいま出ているメンバー運営委員が若くなったということもありまして、日々やっているような状況です。ありがとうございました。

一応まとめに入りますけれども、毎週土曜日、子どもたちが道草ぶんこうに来て、造形遊びをしております。今日も5名ほど来て、こちらから授業みたいにお膳立てするのでなくて、前もって自分が作りたいものを、土曜日の10時から2時間来て、そして私たちはそこに手伝いするというので、退職された校長先生、アベ先生とかサイトウ先生が来て、手伝ってきてくれます。その子どもたちも学生たちが来るのが非常に楽しみで、できる限り学生と子どもを合わせる場をつくっているところです。

これは縄でなつたのを、リースを作っているところです。初めての経験の学生もいるので、非常に感動的に作っているようです。最後ですが、地域おこし協力隊の柴田さんという方が、作曲作詞、歌も歌いますので、子どもたちと一緒にライブコンサートをしている場面です。最後、田茂沢分校はホームステイが原点だというふうに思います。食べることもそうですが、各家庭に今現在4軒ほど学生さん方を泊めるところがずっと続いております。夏場はいいですけれども、冬場がちょっと寒いので、3人は大変だなという声もあるんですけれども、何かそこら辺を解決すれば、冬の間でも安く学生たちが活動できる場所が出てくるんじゃないかなというふうに思います。

このように山間地の宝物を学生たちがどのように感じるかというのは、学生自身の五感・六感で感じることでありますけれども、ぜひ都会で育った、あるいは原点にあまり生活の基準を置いていない学生たちに、山間地に来て、人間の暮らし方の本当の良さみたいなものを感じてもらえればいいかなというふうに思っ、運営委員の方々と頑張っているところです。御清聴ありがとうございました。

○司会

道草ぶんこうの須藤さんと樋口さんでした。

続きまして、「最上町のフィールドワークについて」と題しまして、最上町教育委員会教育文化課社会教育係主事の阿部さんより御報告をちょうだいいたします。よろしくお願いたします。

○阿部氏

皆さん、お疲れさまです。最上町教育委員会の阿部と申します。山大フィールドワーク事業を担当しまして3年目となりました。ちょっと毎年毎年いろいろ試行錯誤をしているところがあるんですけれども、まず今回につきましては、最上町のフィールドワークの特徴と、あと今年度の前期のプログラムについて紹介をさせていただければと思います。よろしくお願いたします。

まず最上町の特徴といたしまして、「人・自然・文化に触れよう」というテーマのもとフィールドワークを実施しております。載せている2枚の写真は、今年度前期に来てくださった学生の方々の楽しそうな写真ということで載せさせていただきました。あとは内容、スライドにのっとして進めてまいります。次のスライドが最上町の概要となっております。こちらで注目していただきたいのが、やはり人口の部分なんですけれども、昭和29年に最大1万7439人とあったんですけれども、今現在、約その半分、先月9月末現在、10月末現在、8670人となっておりますが、先月末と比べると100人ぐらい、ちょっと今回資料作りにあたって減っているのを確認してきたところでした。ちょっとこの少子高齢化等も含めて、このプログラムについて報告していきたいと思っ。

まずプログラムの目的です。こちらがまず過疎地と呼ばれる地域の課題というのが、今現在どこでもあるんですけれども、これが実際に最上町の課題と考えております。これが少子高齢化や若者転出、あと雇用の創出や若者の定住、こういったところがネックになっているところでもあります。これにのっりまして、実際に学生たちが来るこの4日間で、どこまでのことができるのかなというところで、ちょっとプログラムを考える度に悩んでいるところです。一応私の中で考えているのが次のスライドなんですけれども、学生自体、大学生が町に来てくれているということは、とても貴重な機会なんだなというふうにとらえております。そして、町が誇る人・自然・文化の魅力ということで、学生たちに知っていただいて、その上で町のリピーター、そしてさらに町の魅力の発信役に今後なっていっていただけたらなという

思いで、このプログラムを実施しているところです。

次から実際に体験したプログラムのほうの紹介をしていきたいと思っ。まずこちらが、まず前期初日1回目に担当してくださった団体の紹介になっております。最上町に大堀地区とあるんですが、その公民館を拠点としまして、その地区の方々に対して、地域に根ざした活動を行っている団体となっております。詳細については、ちょっと手元の資料を見ていただければと思っ。実際に学生が、1回目に体験したプログラムの紹介に移ってまいります。まず左上の写真が大堀保育所の児童と交流をしております。そして右下がミズもぎ体験、ミズ汁作りということで、まず学生たち、初めてミズというものを実際に自分たちで処理をして、ミズ汁を作ったということで、なかなかやはり普段、大学に通っているだけでは、家にいるだけではできない活動ということで、新鮮味を持って体験をしていただきました。

この山と川の学校で特徴的な部分がありまして、親倉見という地区があるんですけれども、そちらに自分たちで自前の炭焼き窯、こちらを作っております。今回学生たちは、実際に山間部のほうに入りまして、自分たちで木を伐採して材料をそろえ、そしてその炭焼き窯で炭を、切った木を入れていく作業をしております。このかまどがひたすら熱くて、実際コンタクトを付けた学生たちはやらないでほしいということで、指導ももらいつつ、この左下に写っているこのタオル巻いている子なんですけれども、とにかくバイタリティがあふれる子で、自分がもう率先して、ずっと「熱い、熱い」言いながら、かまどの奥に木を立てておりました。

続いて、こちらも特徴的なところなんですけれども、その大堀地区公民館の敷地内にお手製のピザ焼き窯、こちらが作られております。それを使って、お昼はピザ焼き体験ということで、すみません、これ2日目なんですけれども、ピザ焼き体験を実施しております。晴天のもとでいただきますということでスライドを付けさせていただきます。さらにですね、キノコの植菌体験ということで、実際にその伐採してきた木に穴を開けて、それにキノコの菌をトンカチで叩いて入れていくという作業を大学生にさせていただきました。ちょっとすみません、遊び心で左下にすごくワラビ漬けをおいしそうに食べている写真だったので、こちら差し入れということでワラビ漬けを食べながら、このキノコの植菌体験を行っているところです。これにつきましては、ちょっと実際に実施されるかどうかというところで、まだ未確定なんですけれども、そろそろ植えたキノコが生えてくる時期になりますので、学生のほうで、もし可能ならば、その山と川の学校のほうに連絡をして、実際に行ってみたいということで御相談を受けているところでもあります。

続いて、何かちょっと2が化けているんですけれども、炭焼き体験マル2ということで、こちらは2回目に、初日に炭をやったんですけれども、2回目に、実際にその焼いた炭を取り出す作業を行っております。左上が炭出し、右上がその出した炭はとても熱く

なっておりますので、砂をかけて冷ます作業、そして3枚目が砂にゴミ等が混ざっておりますので、ちょっと振るいにかけてそれを仕分けており、4回目に炭完成ということで、麻袋に炭を入れて完成するところまでが一連の体験として活動していただいております。ちなみにこの出来上がった炭なんですけれども、実際に2回目来ていただいたときの中で、こちらバーベキューということで、実際に使った炭を使って、学生たちが自分たちで焼き肉等を行って食べるというところで、食べるころまで、使うころまで、一連の流れとして炭を使わせていただきました。

続きまして、次のスライドが、こちらが2回目来ていただいた際にお世話になりました、最上町が誇る冒険家・大場満郎氏の紹介になります。まず詳細については手元の資料を見ていただきたいんですけども、まず皆さん御存じの方が多くと思われそうですが、山形県民栄誉賞の第3号を受賞しており、また世界初の両極単独歩行横断者としてギネスブックにも掲載されている方になっております。この方に、2014年から始まっております、最上町の「放課後子ども教室」事業「ワイルド・エド・ベンチャースクール」のコーディネーターということで、こちら御協力をいただいております。この事業につきましては書いてあるとおりなんですけれども、土曜日に、子どもたちに普段ではできない体験をしていただくという目的で実施している事業になっております。

この事業に学生の皆さまも参加いただきまして、槍ヶ先峠というところがあるんですけども、そちらの5合目にピオトープがあります。この下の写真ですね。これを見に行こうということで、けっこう急な峠だったんですけども、学生と子どもたちが協力をして、その見学に行ってきました。この右上の写真を見ていただくと、ちょっと縄があって、そこをたどっていかないと越えられないような場所がありまして、特にこのグレーのTシャツを着ている子、ちょっと難儀していたんですけども、その学生、カノ君ですね、班長なんですけれども、すごく手助けしていただきまして、無事難所を越えていったというところがございます。

次のスライドでは、道中登山の無事を祈る石碑がありました。あと実際に学生の皆様、農学部の子が二人いたんですけども、その子から子どもたちに対して、実際に木の伐採やそういった支障木等の扱いについて、ちょっと講話ということで、学生のほうから子どもたちにものを教えるということで、お話の機会がありましたので、報告させていただきます。真下、真ん中の写真を見ていただくと分かる通り、大変子どもたちと学生たちがなごやかに交流していただきまして、大変効果のある、学生にとっても子どもたちにとっても、実りある体験になったのかなというふうに思っております。

最後にお世話になりましたのが、わくわくファーム前森、すみません、これ切れておるんですけども、わくわくファーム前森高原ということで、株式会社MGMというところがあるんですけども、そちら

が運営をしております、最上町の一大観光地となっております。左側マップで、右がその施設のそれぞれの施設名を羅列しておりますので、気になった方はホームページありますので、そちらで御確認いただければというふうに思います。この中で、実際に学生たちはそのMGMの皆様から御協力いただきまして、朝の朝礼の時間から活動に参加をさせていただいております。特に学生の皆さんにとっては、それぞれ企業の皆様がどういったふうに朝を始めているのか、朝礼ではどのようなことを話しているのかという体験をするのは、とても貴重なものだったのではないかなというふうに思っております。右下は大分アイスブレイキングと言いますか、すごい打ち解けるような遊びを取り入れて、朝礼等を行っている様子です。実際にMGMの方々がやっている運営スタッフということで体験をさせていただいております。左上が宿泊施設のスタッフ、左下が乗馬場のスタッフ、右上がビアハウスのスタッフということで、学生の皆様実際に職員のような扱いで、それぞれ活動体験を実施しております。ちょっと今回、参加するにあたって、どちらかと言えばスタッフ側としての体験だったんですけども、最後はMGMの御厚意によって、実際に学生の皆様も乗馬体験ということでさせていただきまして、大変いい体験になったのではないかなと思います。そして最後に、先ほど朝礼で使った会議室に行って、振り返りということで最後行っております。

ここまでがまずは全体の流れとなります。最後、御清聴ありがとうございましたということで、すごくこの、今回来ていただいて頑張ってくれた、このカナウチ君というんですけども、すごくいい笑顔をしていたので、この写真を最後に使わせていただきました。最上町の今後の特徴としましては、やはりまた町に来ていただくということがすごく町にもつながるし、学生にとってもいい体験をしていただけるんじゃないかなというふうに思っております。実際に、2年ほど前に来ていただいた学生の方から、ちょっと「ワイルド・エド・ベンチャースクール」という事業に、ちょっとまた来たいという御相談も最近いただきまして、今後学生の方々と直接最上町という形でつながって、交流を図っていくことが、まずやはり大学側と町のほうでの人間関係と言いますか、相互協力関係を作っていけるかなというふうに思っております。今後もこのような形で、お互いにとってより良い形というところを求めて事業を進めてまいりたいと思います。皆様、改めまして御清聴ありがとうございました。

○司会

阿部さん、ありがとうございました。それでは市町村の方からの報告は以上となりまして、次に今年の前期の授業で実際にフィールドワークに参加をした学生からの活動報告に移りたいと思います。

今年の4月に大学入学しまして、前期大学の授業として受講して、フィールドワークで参加をさせていただいた1年生の代表の方たちから発表をいただ

きます。まず最初に、舟形町をフィールドにして行われました、「里地里山の再生Ⅰ」のプログラムの受講の代表の方から発表をいただきたいと思います。よろしくお願ひします。

○学生

これから発表を始めます。私たちは最上地方で開講される集中講義「フィールドワーク共生の森もがみ」に集まった10名で構成されています。私たちのグループは山形県の舟形町へ行き、2回にわたって野菜の定植活動や湿地の保全活動などを行いました。こうした活動の中で、私たちは二つの課題を発見しました。一つ目の課題は、私たち学生を含む多くの人が、日本の農村の現状についてきちんと理解できていないということです。講義の中で町の方から、食糧などの面で日本を支えている農村の消滅は、日本存続の危機にもつながりかねないというお話を伺いました。

私たちは、農業や農村に対してある程度理解してこの講義に参加しているつもりでした。しかし、農村での後継者不足や耕作放棄地などの問題が想像以上に深刻化しているという事実を目の当たりにし、農村に対する理解が不十分であることを痛感しました。こうした状況が農村の衰退に歯止めがかからない原因の一つなのではないかと考えました。二つ目の課題は、気候変動や異常気象などにより農作物の収穫量が安定しないため、商品の価格が変動し、それに伴い農家の収入が不安定になっているということです。それと同時に、消費者も適切かつ一定の値段で農作物を購入することができなくなっているのではないのでしょうか。

このような課題を少しでも解決へと導くために、私たちは山形大学で開催される大学祭で「舟形マルシェ」として出店し、野菜の直接販売やリーフレットの配布を行おうと企画しました。今回皆様にも大学祭当日に配布したリーフレットをお配りしたのでぜひ御覧ください。その取組の目的は、私たちの活動の様子や農村に対する考えをポスター掲示やリーフレットの配布を通して、多くの方に知ってもらい、農村の大切さや重要性を私たちの言葉で伝えることです。

また消費者が農家の方と直接つながりを持ち、適切な価格で野菜を購入することのメリットを伝えることも目的の一つとしました。また今回お世話になった舟形町が平成30年夏季、庄内・最上地域豪雨災害で被災されたことから、売上金は舟形町に寄付することにしました。ここまで御紹介した内容が今回、私たちが授業の一環として取り組んだ活動です。

その後、夏休みや週末を利用して、追加で5回舟形町に行き、野菜の定植や収穫のお手伝いをしました。また大学祭当日に使用するポスターやリーフレットの作成にも取り組みました。そして10月20日、21日に行われた大学祭では、フィールドワークでお世話になった舟形町の方々に御協力をいただき、10種類の野菜を販売をしました。この中で私たちは、取組に興味を持ってくださった方々と直接農村についてお話ができたり、野菜を購入してくれた学生から「お

いしかったよ」と感想を送ってもらうなど、直接販売することについて意義を感じることができました。しかし、当初1000枚の配布を予定していたリーフレットは、600枚ほどしか配ることができず、ポスター掲示した場所などの問題からも、一部の人にしか見ていただくことができませんでした。野菜を購入された方だけではなく、ブースの前を通る来場者の方々にもっとリーフレットを配布したり、ポスターを持って、活動の紹介をしながら校内を歩いたりするなど、野菜の販売をしながら、私たちが伝えたいことを積極的に発信していく必要があったと反省しました。

大学祭での出店を通して、直接販売の意義を感じることはできましたが、それによって先に述べた二つの課題が解決したわけではありません。私たち学生のような若者が、農村が抱えている問題と向き合う機会をこの先も継続して持つことが大切だと考えています。そこで今回の取組として、今回使用したポスターやリーフレットを大学内に掲示して、学生に農村について考えるきっかけにしよう。来年このフィールドワークに参加する後輩に、私たちが今回の活動を通して感じた農村に対する思いや考えについて伝える。舟形町のような農村で、農作業や直接販売などのお手伝いをするサークルを作るなどの意見が出ました。ほかにも私たちにできる活動はまだあると考えています。そこで本日、この話し合いの場をお借りして、地域活性化のために尽力されている皆様の御意見もお聞きしたいと思っています。御協力よろしくお願ひします。これで私たちの発表を終わります。御清聴ありがとうございました。

○司会

はい、ありがとうございました。最後に学生さんのほうから、御意見ぜひお伺いしたいというようなこともありましたけれども、ただ今の4名の学生さんからの発表の中で、何か御質問とか御意見等ございましたら、今お受けしたいと思いますが、ございませんでしょうか。それでは第二部でグループ討論等もございますので、そこで個別にお話でもいただければと思います。では改めて4名の学生さん、発表ありがとうございました。

では次、発表をいただきますのが、新庄市で行われました、「マルシェ“本活プロジェクト”～本と人をつなげる出前図書館～」プログラムの皆さんです。発表よろしくお願ひします。

○学生

これから発表を始めます。よろしくお願ひします。私たちは「k i t o k i t oマルシェ」に、新庄市立図書館の移動図書館車「かやの木号」のブースの運営に協力し、新庄市立図書館の魅力を伝える活動をしてきました。「k i t o k i t oマルシェ」とは、新庄市のエコロジーガーデンで行われる地域活性化のためのイベントのことで、ここではさまざまな食べものや雑貨を売る店が多く並び、人々の触れ合いの場となっています。1回目のフィールドワークでは、

初日に準備をし、2日目は新庄出前図書館のサポートという気持ちで参加し、読み聞かせ団体「かやのみ会」の皆さんとの読み聞かせ、コーヒーフィルターでミニバッグ作りをするワークショップ、自分の本を持っていくと、さまざまな人が持ち寄った本と交換できる「k i t o k i t o b o o k s」という三つのブースに分かれて活動しました。

2回目のフィールドワークでは、出前図書館での企画に、私たちが主体となって取り組みました。「k i t o k i t o マルシェ」当日は、前回の企画に加え、ミニゲームのコーナーも設け、ワークショップではフォトフレーム作りをしました。多くの人との交流を通し、新庄市立図書館に足を運ぶきっかけを作ることをコンセプトに取り組んできました。2回目の活動で、私たちは、主にワークショップで、お客さんに図書館に関する聞き込み調査を行いました。そこで聞いた声は、私たちが課題を発見する上で重要な意味を持つものとなりました。

その中でも特徴的だったのは、新庄市外にある図書館を活用するという人が多いということです。その理由として、ほかの図書館のほうがカフェテリアやギャラリー、駐車場が充実しており利用しやすいという意見がありました。またマルシェや学校に来る移動図書館車を利用したとしても、返却には新庄市立図書館まで行かなければならないため、駐車場などの狭さや返却期限を考えると借りづらいという意見もありました。しかし、ワークショップの開催や子どもたちが自由にできる空間、新しい本の増加に力を入れてくれるのなら行きたいという、率直な声もありました。さらに、新庄市内外にかかわらず、学校の図書室を利用したり、本を借りるより買いたいという人も多いと分かりました。

次に、こちらの新庄市立図書館の利用者に関するデータを御覧ください。このデータから分かることは、新庄市の人々が新庄市立図書館を利用するのは、その利用はまだ少なく、また新庄市外の最上地域の町の人々の利用は少ないということが分かります。また、最上地域には新庄市立図書館以外に図書館がありません。そのため、最上にたった一つの図書館である新庄市立図書館の重要性は、最上の人々に浸透していないということが考えられます。以上の結果から、利便性やほかの図書館との差異化がない限り、新庄市立図書館の利用者減少が懸念されるということが課題だと考えられます。この図書館の利用者減少という課題の解決策として、私たちは新庄市立図書館の強み・良さを生かす方法を考えました。

私たちは、フィールドワークの活動を通して、新庄市立図書館の職員の方々の図書館に対する熱い思いや、人柄の良さを強く感じました。例として挙げるならば、赤ちゃんタイムという、赤ちゃんや小さな子どもさんが泣いたり騒いだりしても、気兼ねなく図書館を利用できる時間を設けるなど、利用者のことを考えた活動を行っていたり、私たちに対しても親切に接して下さったりしました。このような点から、人柄の良い職員の方々と利用者がかかわる機会を設けることが、図書館の利用者増加につながるのでは

ないかと考えました。

具体的な例として、図書館職員の方々のネームプレートに、あだ名や似顔絵などを載せてもらう。利用者が本や図書館に対して自由に感想などを書くことができる、一言ノートなどを設置するという取組が考えられます。最上地域に一つしかない図書館として、地域に向けさまざまな取組を行っている新庄市立図書館の多くの魅力をたくさんの人々に知っていただきたいと考えています。この提案が新庄市立図書館の手助けになれば幸いです。私たちは、フィールドワークの活動が終わったあとに、新たな取組を行うことが今までできていません。しかし、私たちにはまだまだ新庄市立図書館や新庄の方々とかかわっていききたいという熱意があります。今年はその活動の場がなかったのですが、来年からはまた続けていきたいと考えています。最後になりましたが、お世話になった関係者の皆様にお礼申し上げます。御清聴ありがとうございました。

○司会

はい、発表ありがとうございました。ただ今の出前図書館の発表をお聞きいただきまして、何か御質問・御意見等ございましたら、この場でお受けしたいと思えます。いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、先ほどの舟形町のプログラムと同様に、このあとの第二部グループ討論のほうでもごさいますので、そちらでお話くださいますようお願いいたします。では改めて発表いただきましたお二人の学生さん、ありがとうございました。

ではこれで、第一部フィールドワークの報告会を終了させていただきます。

■ 第2部 グループ討論と発表記録

○司会 小田先生より概要の説明をさせていただきたいと思えます。小田先生、よろしくお願ひします。

○小田 早速ですけれども、今回の第二部のグループ討論の発表についての内容についてお話しさせていただきます。討論のテーマは、昨年と同じで、2030年のもがみを創造するという形です。ということはどういうことかと思うと、この2030年を聞いて何かをイメージしてください。2030年というのは、今から12年後です。ということは、今二十歳（はたち）の人は32歳になるんだと。70の人はウン歳になるんだという形のものというものが、恐らく自分が思考するときのリアリティを持ってくるでしょう。恐らく、そして2030年のもがみ、先ほどですね、最上町の人口推移とかありましたけれども、人口減っている。恐らく2030年というのは統計的にある程度出てきているはずで。かなり厳しい状況になっているんだけれども、その中で、もがみを創造する。創造するという言葉はやっぱりいいような形で創造していただきたい。それは決して人口が飛躍的に増えることではなくて、やっぱりだけでも自分がその中で幸せになることだろうと思っております。

またここでいろいろと議論しますけれども、何ですかね、それぞれここでは立場、職業もいろいろと違ったり、年齢差もたくさん違いがあります。そこにおいて、決して学生さんたち、ひるまないでくださいね。個人個人が違うんだということのベースです。生まれたところも違えば、経験したことも違うんです。自分の中のプールしたものから出さない限り、グループの討論というのは成り立ちません。自分の言ったことが正しいなんて思わないでください。それは小学校・中学校・高校までのただの答案用紙を作るときだけです。世の中、十個言ったときに、もしかしたら一つだけ話題にのぼったらいいや、その程度に考えてください。その一つが出ない限りにおいては、話は進まないんです。小学生みたいに正解を求めないでください。

自由に言って恥かかから。恥はかいてください。十のうちの一つぐらい引っかければいいんだと。そして自分のプールの中の経験とか知識とかいろんなものから出していくんですけれども、経験やプールの中から出しているときに、出し方というものは、自分が小学生のとき、幼稚園のとき、ああ、あの場のこととかいろんなことを思い出して、とっさに出していただければいいです。そうしたときに、一つずつのことは同じ事象であっても解釈がいろいろと違いますので、人がその素材をうまく料理してくれるかもしれません。ニンジン一つが、ニンジンのサラダに変わったり、カレーライスに変わったり、煮付けものに変わったり、いろんな形があります。素材のニンジンというものは、出されないと料理ができません。ですので、皆さんいろんな形で出していただければと思います。

先ほど金山町の「道草ぶんこう」の説明のときに、樋口先生が、「人生の道草だ」という話が出ました。まさに、今日我々が豊かな資産を作って、いろんな、何ていうかな、物ではなくていろんな形で、感性とか思考の豊かさ、まさに我々はその豊かさを作るためには、思考の道草が必要なんだろうと思っています。考えることの道草をしていくことが、どれだけ道草をしていくことが、豊かになっていくかであって、パンパンと答えが出るような、小学生・中学生・高校生までのあれはA Iに任せたいほうがいいです。A Iにできないことをやっていく。そのためには、我々は道草をしていくんだと。そこにおいて、一人一つの思考、考えることは豊かになっていくんだらうと私は思っております。

じゃあ実際に「2030年のもがみを創造する」ということですが、具体的に言いますと、まず皆さんの前に、何か紙が1枚置いてあって、A4にこういう感じでまさに書いてあります。キャッチフレーズと書いてありますけれども、基本は、まずは2030年というものに、こういうところに行き着きたいなという目標、100メートル競走とかマラソンだったら最後のテープのところ。山に登るなら山のピーク、エベレストならエベレストね。ここで言ったら、神室だったら神室の頂上、富士山だったら富士山、いろんな頂上があります。月山なら月山。目標のあり方と

いうのはいろいろと違うはずですが。この目標というものをどういう目標に行きたいか。すごく身近なところなのかもしれません。非常に具体的なことかもしれない。そういう目標というものを挙げてもらって、じゃあそのときのもがみというものは、こういうふうな目標を達成したら魅力が出てきますよと。その魅力を誰にでも伝えられるようにキャッチフレーズを作ってくださいということです。いいですね。よろしいですね。皆さんに伝えるときに、すごく魅力的だなと。私のように長々と話したらなかなか魅力的にはならない。人に伝えるのは短い言葉ですね。小学生・中学生に話しても魅力的なそのキャッチフレーズを作ってくださいということです。

ですからまずは、目標というものをグループの仲間と共有しましょう。いろんな素材を出して、こういうふうなところに到達しようじゃないか。2030年のもがみ、こうあったらいいよねと。スケールの大きさは問いません。ただ具体的なものから抽象的なものになるでしょうけれども、目標をやってください。そのためには、これから12年要しますので、あと2年したら東京オリンピックもあります。東京オリンピック終わったら世の中不景気になると言われています。誰もそのように言っています。しかし、いまそういうことの紆余曲折が12年という年月にあるでしょうけれども、12年間の上に、この目標に到達するためにはどうしていったらいいんだらうと。富士山に登るためにはどうしたらいいかと。1年目はどうしたらいいんだし、5年目はどうしたらいいんだし、10年目はどうしたらよくて、12年目に登れるように考えてみてください。今の小学生に対して、12年後、小学校1年だったら、12年後18歳で大学とか入る年だよとか、イメージできるじゃないですか。まあ、小学生からきちんとやったらいいのにといい形から考えていただければと思います。そういうところでスケジュールをやっていただければ、目標というものは途中で変換するかもしれません。変わっていただけて構いません。意地でも初めに出した目標が、もうガチガチにやる必要はない。もっと柔軟に往復しながら、スケジュールとかいろんなことを話し合ったり、目標をもうちょっと変えたほうがいいよねという形でやられてもいいと思います。

あとはですね、やっぱり何ですかね、途中で言われたように、こういうこと、エリアキャンパスもがみのフィールドワーク、フィールドラーニングやしているときに、やっぱり先ほどのお話の中にあるように、ちょっとした学生さんたちが楽しむような工夫、面白さをやっていく。まさに12年間、顔をひきつけて12年間過ごしたくない。面白いような形で工夫を入れてください。ああ、こういうのは市民や住民が楽しめるよねという形のものを入れていただければと思います。決してステレオタイプな考え方に陥らずに、自分なりに、この場が出したプロダクト、目標とかスケジュールが楽しいものではなくて、話し合い自体が楽しいことを願っております。柔軟に楽しくお話していただければと思います。

じゃあ時間についてお話ししますけれども、15時

30分からA班から順番に発表していただきます。もう時間はそれほどないですけれども、発表時間は3分です。3分間話してください。その紙を使って発表してもいいですし、動き回って発表してもらってもいいですし、ご自由です。3分間話してください。そして質疑応答、A班からいきますので、A班のときには、一番最後のE班の誰かが質問してください。ほかの質問もいいです。そして次にB班が発表になりますけれども、B班のときにはA班が発表してください。C班の発表のときにはB班の誰かが質問します。そのような形で必ず質問を一つぐらい受け付けてみたいと思います。じゃあ楽しい話し合いができることを楽しみにしています。また今回は、去年などと違うところは、JR東日本さんがいらっしやっていて、まさにこの地域の発展のことを考えたいというところで、すごく話が豊かになる素材だと思っておりますので、ぜひとも皆さん楽しくやっていただければと思います。私の説明は以上でございます。

○司会

ありがとうございました。それでは今お話があったとおり、15時30分まで討論というような形で進めさせていただきますと思います。1時間10分ございますので、適宜休憩を取りながら、議論が煮詰まったら歩いてみたりして、頭をリフレッシュさせながらぜひやってみてください。それでは時間を計っていききたいと思いますので、よろしくお願ひします。

～討論～

○司会

それでは発表の説明をさせていただきたいと思ひます。発表なんですけれども、一班3分でお願ひしたいと思ひます。2分30秒で1回ベルが鳴ります。そして3分で2回鳴りますので、目安にしてください。それではA班の皆さん、準備をお願いいたします。

【以下、発表資料】

[A班]

A班
 もがみ **最上**
 ・最上を最上に
 ・高齢者が元気に
 ・行くぞ最上!!
 ・帰りに最上。
 ・地域ネットの拡充

(フィールドワークで)
 生きていく為の工夫
 ↓
 ・生活に必要なものを
 買う
 ・考えや工夫は経験から
 得られない
 共に生き、共に立つことで
 1つひとつの最上地域
 1つの最上を目指す。

[B班]

**みんなが
 地域貢献隊**

2030年のもがみ活性化
もがみ資産
 ・(兼)在庫あり 2020.10.26 → 2021.10.26
 ・野菜 (伝承野菜) 火田(火田)
 ・春会(伝承) → 何となくし身に覚えがある。 → ひとりでやるには難い。 → 2020年10月26日(19日) → 野菜を消費する(19日) → 2021年10月26日(19日)

特色あまやでい → どの地域も通じてい
 10-20年経過後 → 火田(火田)
 ↓
 ・30代の人がい
 ・40代の人がい
 ・50代の人がい
 ・60代の人がい
 ・70代の人がい
 ・80代の人がい
 ・90代の人がい
 ・100代の人がい
 ・110代の人がい
 ・120代の人がい
 ・130代の人がい
 ・140代の人がい
 ・150代の人がい
 ・160代の人がい
 ・170代の人がい
 ・180代の人がい
 ・190代の人がい
 ・200代の人がい
 ・210代の人がい
 ・220代の人がい
 ・230代の人がい
 ・240代の人がい
 ・250代の人がい
 ・260代の人がい
 ・270代の人がい
 ・280代の人がい
 ・290代の人がい
 ・300代の人がい
 ・310代の人がい
 ・320代の人がい
 ・330代の人がい
 ・340代の人がい
 ・350代の人がい
 ・360代の人がい
 ・370代の人がい
 ・380代の人がい
 ・390代の人がい
 ・400代の人がい
 ・410代の人がい
 ・420代の人がい
 ・430代の人がい
 ・440代の人がい
 ・450代の人がい
 ・460代の人がい
 ・470代の人がい
 ・480代の人がい
 ・490代の人がい
 ・500代の人がい
 ・510代の人がい
 ・520代の人がい
 ・530代の人がい
 ・540代の人がい
 ・550代の人がい
 ・560代の人がい
 ・570代の人がい
 ・580代の人がい
 ・590代の人がい
 ・600代の人がい
 ・610代の人がい
 ・620代の人がい
 ・630代の人がい
 ・640代の人がい
 ・650代の人がい
 ・660代の人がい
 ・670代の人がい
 ・680代の人がい
 ・690代の人がい
 ・700代の人がい
 ・710代の人がい
 ・720代の人がい
 ・730代の人がい
 ・740代の人がい
 ・750代の人がい
 ・760代の人がい
 ・770代の人がい
 ・780代の人がい
 ・790代の人がい
 ・800代の人がい
 ・810代の人がい
 ・820代の人がい
 ・830代の人がい
 ・840代の人がい
 ・850代の人がい
 ・860代の人がい
 ・870代の人がい
 ・880代の人がい
 ・890代の人がい
 ・900代の人がい
 ・910代の人がい
 ・920代の人がい
 ・930代の人がい
 ・940代の人がい
 ・950代の人がい
 ・960代の人がい
 ・970代の人がい
 ・980代の人がい
 ・990代の人がい
 ・1000代の人がい

もがみがま
 20元の人 → 30元の人 → 40元の人 → 50元の人 → 60元の人 → 70元の人 → 80元の人 → 90元の人 → 100元の人

[C班]

C班
 2030年 FW 受け入れ
 日本一!
 ・最上+世帯での教育活動
 例) 農作業、ホームステイ
 ・自然、文化、技術の保存
 例) 伝承野菜、食手
 ・普及促進(い)と気がつかない
 町の魅力を、外の人が見

◎冬の取り組み
 例) 雪むき、雪の下野菜、
 雪まつり、加工品
 ◎地域めぐり
 (例) サイクルトレイン
 ⇒ 学生が企画・運営
 に携わる。
 最上+次産業
 の創設。
 +
 最上の魅力を知ってもらい
リポーターをつくる!

[D班]

D班
**スマホで
 できる
 もうかる
 農業**

★ IT化 機械による労力の
 削減から産出される最上の生産
 による農業を発展させる
 ・生産性向上による最上の生産
 ↓
 少人数でもできる農業
 高収入・高利益・高付加価値
 高収入・高利益・高付加価値

[E班]

最上田・カル線を
 満員列車に!
 特殊体験 → ニンゲン
 #77広報 → SNS

○司会

それでは発表ありがとうございました。大きな拍手をお願いいたします。以上で発表すべて終了いたしました。それでは最後に、講評と閉会のあいさつ、山形大学教育開発連携支援センター長・小田隆治よりごあいさつ申し上げます。

○小田氏

はい、どうも皆さん、御苦労さまでした。発表会、大変楽しんで聞かせていただきました。発表を聞きますと、それぞれのグループ、かなり豊かな話し合いをしたんだろうなと、楽しく豊かな話し合いをしたんだろうなということが、聞いていて思いました。聞いていて思うこと、まあ各班のことではないですけども、それぞれ全体的に思うことはですね、B班が言った「みんなが地域貢献隊」、まさにこれはお金をかけるとかどうかじゃなくてソフトの問題ですね。

「みんなが」ということだから、まさに「みんな」という部分の言葉の重要性を踏まえつつ、地域貢献隊というものは、要はいろんな国の制度や何から出来ています。けれどもそうではなくて、「みんなが」というところのこのイメージというのは、すごくこの地域の豊かさは出来ていくんだなと思っております。恐らくそういうところは、限られたある集落、世帯数が限られた集落はあるのかもしれないけれども、このことが最上全体に広がって行って、意識の中で、自分の生活だけではなくて地域に貢献しようじゃないか、そしてしているという姿があるならばそれはすごい、現代において、その最上全体の特色になるだろうというふうに思っておりました。

あとはですね、「2030年フィールドワーク受け入れ日本一」ということを聞いていて、仙台の中学生だった人がこうやって大学生に、山形大学の学生さんになってくれた、そして実際にこのエリアキャンパスをやってくれた。これも十何年の歴史があるからだと思います。当時ですね、十数年前にこのフィールドワークとか、そういうエリアキャンパスもがみ、この八市町村をバーチャルなキャンパスに見立てるなんて発想、イメージする人は全然いませんでした。どんな説明しても何のことか分からない。この事業が何の意味を持つのかも分からない。これが、大学だけではなくて、中学生やいろんなものと連携していったというところが、この十数年の我々の歴史なんだろうと思っております。そうしたときに、フィールドワークの受け入れ日本一というのはけっこう面白くて、私にとっては、何が面白いのかというと、日本一になるためには、例えば大阪とか東京がフィールドワークやったら、元の人口が多くなければ、大きいところは絶対負けるんです、明らかに。これは分かる所ですよ、数の問題で。じゃあその日本一をどのように、人口比に対するとか何とかやっていけば、日本一という数字は、ギネスブックに載るような数字になり得るんだろうと思っております。

そうしたときに、このエリアキャンパスを作ったときに考えたのは、このフィールドワークをやったときにですね、最上の人たちと話し合っ

たのは、「最上は自然やら文化やら人間がいいんです」と言われました。「だから観光客が東京からいっぱい来るようになってくれたらいいです」と言ったときに、私は何と言ったかといったら、私は冷たいもので、「じゃあ東京から最上まで来る間に、最上よりすばらしい観光地はないのか」と。日光があります。那須があったりします。いろんなところがあるんだと。そうしたときに、じゃあそれに立つと、常にコンペティター、競争者がいる中でどうやっていくかと言ったら、やっぱりソフトの問題なんだと。そうしたときに、ホスピタリティ、人が来たときにきちんと対応できる、それは日本人だけではなくて、外国人に対しても対応できる能力がどれだけ身につけているのか、それが今は問われています。

世の中、観光地もいろいろと、近場で言えば銀山温泉がすばらしいですけども、結局はグリーンツーリズムというものが、いま世界的に展開されております。これはソフトの力ですよ、はっきり言えば。そこに富士山がなくても、人はですね、きちんと観光客をおもてなす、いろんなもののノウハウを身につけていけばやっていけるんです。そういうところでは、この学生を招き入れて、フィールドワークをやってくれる人たちは、例えば今までだったらイスラム圏内の学生たちもいました。そのときの食事とやら自然にできるようになります。なっています。そういうことが大きな財産になっていくんだろうなと。非常に高い世界的なグリーンツーリズムの基地になってもおかしくないと思っております。

そして、伝承野菜が出てきました。いくつも、必ず最上だったら伝承野菜が出てきます。伝承野菜がありますと、最近あれです。最上地区と山形大学の懇親会があって、毎年やっているんですけども、最上で今年はやらせていただきました。そのときに、昼食にサトイモ、何ですかね、甚五右エ門芋ですね。こういうふうな何回も言うのは難しいですね。甚五右エ門芋は、これ食べたら、これ名前は聞いていました。聞いていたけど、食べたら、こんなにおいしいイモを食べたのは、恐らく初めてぐらいの記憶です。子どものときからサトイモ好きでしたけれども、すばらしい。恐らく日本全国で伝承野菜というのはいっぱいあるけれども、競争力のあるものを山形に、伝統的なだけでは、標語だけではどうしようもないです。食べたら全然違う、はっきり言えば。これが牛肉と同じぐらいの値段ですと言われたって、私はまた食べたいというぐらいのすごさを感じました。

あとはですね、スマホでできる農家業や農業、面白いですね。ここの班ですね。はい。スマホでできる農業、それを聞いて私は何を発想したかと言ったら、農業はだんだん、やっぱり追いやられてきています、いろんな状況で。ということはどういうことかと言ったら、日本全体が、所得が、同じ面積を耕していても、所得はサラリーマンやっていたほうが多いからですよ、はっきり言って。昔だったら、農業で十分食べていた額を、ほかの人たちがいっぱい稼ぐようになったと。そして物を買うようになったからです。だけでも農業は、新たに問うと、その点、日本はまた世界も

いろんな形で競争力をつけて大規模農業になっていますけど、だけでもふっと振り返ったら、農業をやっていた人が、例えば大学の職員さんなんかでも、農業の家で育った人たちけっこういるんです。そうしたときに、土・日は農業で稲刈り、自分の稲刈りをやると。この仕事は、我々の高度経済成長のときは、仕事の一つの会社の全部でした。

しかしそうではなくて、今は兼業もできるようになってくるだろうし、若い人たちの時代は違ってきますよ。そうしたときに、農業というものは、本当はすばらしい職の文化だと思います。一年を通してですね、自分の専門の仕事があって、一緒に農業をやっていく。このシステムというのは、本当はすばらしかったと。意外と山形の年収は少ないと思います。統計データは出ていますが、本当は農業に占める割合とか、いろんな個人が占めている割合は、あの数字以上に絶対に大きいんです、はっきり言えば。だからでかい家建っているじゃないですか。僕はびっくりしますよ。山形のこの家のでかさ。これは隠れた資産がかなりあって、それは農業のですね、やっぱりそれは農業だけでは食えないけれども、農業というものの占めている豊かさ、農業という肉体的なものの楽しさというのはあると思います。

特に私なんかはもうあと一年ちょっとで定年ですけども、恐らく農業は高齢化の人たちで健全な肉体を保ったり、健全ないろんな考え方とか感性を保っているのは、農業というのが一番いいと思います。それはお金もうけですね、1000万円もうけるとかそんな話は全然、体を動かしてやれるところで、農業というものは、そういうふうには、ただアメリカとの競争だけでなく、我々のライフスタイルを取り直すことにもなってくるだろうと。昔はそうしていたんだなというものを思わされます。専業で食べるのは確かに難しいです。

あとは、最上ローカル線を満員電車というのは、ほんとにですね、うちの班になっていますけど、面白かったのは何だと言いますと、まさに今回JR東日本の方々がいっぱい参加されてきた。そうしたときに、線路に占める、地域をこうやって結び付けたと言いますか、地域を作ってきたところに、国鉄JRという力はすごく大きいですから。想像以上にでかいんだと。それが今ある種、縮小して、もしかしたらなくなるかもしれない。利用客採算には合っていないですから。しかしそれで日本という国はいいのか。だけど乗らないものを、と言いますか、利用頻度のないものを、そのままですね、みんなの税金で残せるわけではない。そういうところでは、やっぱりダイナミックにものを考えることが必要なんだろうと私は思っています。

この日本の中の地図の中から、線路をピッピッと面白く消していくことではこれからはないだろうと。残るか残らないか、残る・残らないんです。消えていくんです。消えていくけれども、予定調和で、我々の能力を使うことではないと。我々は、難しいことにチャレンジしていくことが、これからの創造なんだろうと私思っています。私はですね、自

然にこうなっていく当たり前の、当たり前のことにエネルギー使うのでも、自分の一生を捧げることで何でもないです。難しいことに自分のエネルギーを使って、若い人たちがやっているかと。思考とかですね、自分のエネルギーを使っていたらいいと思います。「こうなっちゃうよね、こうなっちゃうよね」というのに、抗っていただきたいと思います。

今日はですね、本当に皆さんいろいろ楽しんでいただいて考えて、実を結ぶのは百発百中ではありません。百発百中そんな楽な世界ではない。十の一つ実のなればいいでしょうし、いや、百の一つでもいい。でも出ないことには、やっぱり花は開かない。種をまかない限りは出ない。百個の種をまいたときに、全部の実がなるわけではない。しかし百個の種をまかない限りには、一つの花も咲かないだろうと思います。そういう意味で、今日は皆さんと時間を過ごして、有意義な時間を過ごせたなと思っています。どうもありがとうございました。

第5章 今後の展望

「エリアキャンパスもがみ」とインバウンドによる地域活性化を考える一

山形大学 教育開発連携支援センター
小田隆治

まえがき

平成17年に「エリアキャンパスもがみ」を設立した際に、大学と最上地域の双方に利益があるように理論立てた。大学の利益はフィールドと地域人材を活用した大学生の教育にあり、それはフィールドワークそしてフィールドラーニングの授業を通して結実している。一方、地域の利益は何か、これは設立時そしてそれ以後も市町村の方々から何度も発せられる問いであり、それは私自身も常に問い続けてきたことである。

地域の利益は、単純にお金だけではない。大学生と交流することによって、地域住民の意識の活性化、若返りが地域の利益としては大きい。実際、これは地域住民を対象としたアンケートやインタビューにおいても明らかであり、フィールドラーニングを通して地域の人たちが学生たちと触れ合うことでかなり達成されている。平成17年当時新庄市の市長であった故・高橋栄一郎氏は「大学生が最上地域に来てくれるだけで地域の活性化につながります」と私に語った言葉は、今でも「エリアキャンパスもがみ」においての地域の利益の本質をついていると思える。

学生たちの肉体労働を通じた地域への貢献もある。農業の田植え、野菜などの収穫の補助もしているが、これらは地域の人たちが学生たちに教育の場を提供しているに過ぎないことが多い。学生たちに作業の説明し、手際の悪い手つきで手伝ってもらいよりも、自分たちで行った方が効率的であるのだ。フィールドラーニングのすべてのプログラムが教育と地域貢献の比率が半々になるわけではないので、特定の教育プログラムが教育に偏重してもなんら不思議ではないし、悪いことではない。

銀を採掘したトンネル跡の整備としてのコウ

モリの糞のかき出し、炭焼き小屋の再建、湿原の木道の整備、こうした産業に結びつかないプログラムへの学生たちの労働奉仕に地元の関係者の寄せる期待は大きい。また、炭焼き小屋の再建にみるように、地元の80歳以上の高齢者たちのやる気を引き出して、再建のプログラムそのものが立てられることになったものもある。それは先に述べたように、高齢者たちの奮起、意識の若返りを促すことにもつながっているのである。

この他にも、フィールドラーニングを通して地元の子供たちと学生が交流することによって、子供たちの積極性を引き出しているとの評価も耳にする。また、大学生というロールモデルを子供たちが身近に見ることによって、大学進学というキャリアイメージの形成にも役立っている。さらに、中学生を対象として夏休みに行っているボランティアの学習支援活動は、子供たちの学力の向上にも貢献していると評価されている。

以上述べてきたように、教育機関としての「エリアキャンパスもがみ」は十分に地域活性化に寄与し、地元にも利益をもたらしていると総括できる。

一方で、利益という言葉は普通にはどうしてもお金を想起させる。「エリアキャンパスもがみ」によって最上地域にどのくらいのお金が入るようになったのか、という直球の質問が飛んでくることがある。「エリアキャンパスもがみ」のフィールドワークを通して、最上地域に年間200人以上の学生が1泊2日を2回、合計4日滞在しているので、宿泊費や食費などでそれ相応のお金を地元にも落としていることになる。しかし、地域産業を活性化するようなことにはなっていないし、雇用を促進するような産業の創出にも至っていない。

最上地域の少子高齢化・人口減少のスピードは早い。産業の発展なくしては定住人口の維持・増加を望めない。それゆえ現在でも工場の誘致を掲げる人がいることはうなずけるが、たとえ工場を誘致したとしてもその労働力を確保するのは難しくなっている。これが日本全体の置かれた状況なのである。北海道のオホーツクの水産加工工場

の労働力も、その多くを東南アジアの人々に頼っているのが現状である。

「エリアキャンパスもがみ」が設立された平成17年当時には、すでに定住人口を増やすことは難しいことを日本の一部の人は気づき、観光によって流動人口を増やそうという考えが真剣に論じられるようになっていた。最上地域においても、観光による流動人口の増加による地域の活性化が話題に上るようになっていた。私は「エリアキャンパスもがみ」のフィールドラーニングを通して地域のもてなし（ホスピタリティ）が向上することが、観光のソフト面の充実につながる、と様々なところで繰り返し主張してきた。

全国から入学してきた学生たちも、フィールドラーニングの体験を通して地域の観光資源を再発見し、それを若い視点で SNS を使って全国に情報発信することで集客に効果があると提案し、一部は実行に移された。実際に学生たちの発信がどの程度観光客を呼ぶのに効果があったのかは検証されていないのでわからないが、着眼点としては間違っていないだろう。最上地域には若者の層がとても薄いので大学生の意見を聞くことはできないし、聞くためにはコンサルタント会社に委託して高い料金をとられることになる。いずれにしても、多くの人々は、フィールドラーニングの開始当初は、最上地域への観光客は国内の人々を想定し、海外からの観光客を考慮してはいなかったようである。

中国の爆発的な経済発展により一時の爆買いに象徴されるように日本への外国人観光客が急増している。日本も観光立国を打ち上げて様々な方策を打っている。日本全体の盛り上がりとは別に、東北地方は平成23年（2011年）の東日本大震災と福島原発事故によって、外国人観光客の数はしばらく減少していた。しかしながら、近年になってようやく増加する傾向にある。

近年、私のもとに外国人観光客を呼び寄せるために日本人学生や留学生の意見を聞きたい、という申し出がいくつか寄せられるようになってきた。そのためにも地域を見て欲しいというのであ

る。まさにこれは「エリアキャンパスもがみ」のフィールドラーニングの拡大版である。

最近、我々が企画し実施した短期留学生のインターンシップの成果報告を聴くために酒田市に出張し旅館に泊まったのであるが、そこで西洋人の旅行客の一団に出会った。イギリス、オーストラリア、アメリカ出身の初老の人たち10人の集団で、ある旅行会社が主催する山形のスノートレッキングツアーの参加者たちであった。このツアー客の中には日本に観光として10回以上訪れたという人も何人かいた。そうした日本通の人たちに東北の体験型のツアーは、非常に人気が高いことがわかった。

本稿では、このツアーを企画した旅行会社「Walk Japan」と「Tohoku Hot Spring Snow Tour」について、「エリアキャンパスもがみ」との関連について述べていくことにする。

「Walk Japan」と「Tohoku Hot Spring Snow Tour」の概要

「Walk Japan」それ自体は香港の旅行会社である。1992年に設立され、外国旅行客を対象とし、その名が示すように日本を歩くというディープな観光に特化した個性的なツアーを組む会社である。

今年のガイド付きのツアーは21あり、その他にもガイドがつかないものもいくつか用意されている。「Walk Japan」とツアーの詳細な内容については「Walk Japan」のホームページ^注を参照していただきたい。ここでは私が出会った「Tohoku Hot Spring Snow Tour」について簡単に説明する。

ツアー期間は8泊9日で、初日の集合場所は東京で、最終日の解散場所は山形県の酒田市となっている。このツアーに母国と日本の間の飛行機代は含まれておらず、ツアー料金はおおよそ500,000円、飛行機代が含まれていないわりには高い設定となっているように思える。比較的高額な旅行代金もあってか、私が出会った参加者は比較的高齢な人たちばかりで、経済的に余裕のあるセミリタ

イアした人たちであった。募集要項で6段階に示された体力と技術のレベルは、それぞれ3であった。普通の体力があれば十分なのである。このツアーの最大携行人数は12人とされ、最小人数は示されていない。実際に私が会ったグループは10人であった。かなり人気のあるツアーであると、参加者やガイドの人たちが言っていた。

日本の旅館に泊まり温泉に入り、雪深い東北を体験するツアーとなっていた。ツアーのスケジュールは、初日：東京－山形県・飯豊（中津川）、2日目：飯豊（中津川）－上山温泉、3日目：上山温泉－蔵王－上山温泉、4日目：上山温泉－山寺－銀山温泉、5日目：銀山温泉－山刀伐峠－鳴子温泉、6日目：鳴子温泉－湯沼－鳴子温泉、7日目：鳴子温泉－肘折温泉、8日目：肘折温泉－酒田、9日目：酒田であり、実際に何事もなく無事にこのスケジュール通りに進んだようだ。都市間の移動は電車やバスである。かれらが一日に歩く距離はあらかじめホームページに示されており、一日2～4kmの範囲で高齢者にも無理のない行程が設定されていた。東北の自然ばかりでなく、宿泊した日本旅館や温泉も気に入り、特に上山温泉の豪華な旅館を気に入った人が多いようだった。

かれらはツアー最終日の酒田の旅館で、次（来年）に「Walk Japan」の何のツアーに参加するか、話を花を咲かせていた。参加者にはリピーターが多いという。

「Walk Japan」のツアーから最上地域のインバウンドを考える

酒田で「Walk Japan」の「Tohoku Hot Spring Snow Tour」に出会って私が感激したのは、東北それも山形県を中心にツアーが生まれ、そのツアーに世界中の人たちが参加し、非常に満足していたことだった。このツアーをデザインした人は、「Walk Japan」の会社の日本におけるツアーの予約代行を専属で行っている「ザ・ジャパントラベルカンパニー」の人たちである。この会社の人がかれらツアーコースを歩いて設計していたという。

「Walk Japan」の21あるガイド付きのツアーの中には日本観光の定番である京都や東京、北海道のツアーが含まれているが、それ以外にも瀬戸内海、四国巡礼、中山道、国東半島のトレッキングなど、かなりマニアックとも思えるものもある。山形関連のものとしては、「芭蕉ツアー」があり、日光や松島、平泉に立ち寄りながら、山形県に入って赤倉温泉と羽黒山に泊まっている。羽黒山の次は金沢で、そこで解散となる。興味深いことは羽黒山では宿坊に宿泊していることである。こちら8泊9日のツアーとなっている。

10回以上観光で日本を訪れた外国人観光客にとって山形県は魅力溢れる観光地であることが、ツアーの参加者とガイドの話を聞いて再認識させられた。最上地域も海外旅行客を呼び込む観光地になりうることに自信を持っていいのだと確信した。

フィールドラーニングとインバウンドを考える

「Walk Japan」のツアーをデザインする人の立場に立って考えてみよう。ツアーのタイトルが必要になってくる。ツアーの統一性である。ツアーの日数は8泊9日を想定するのが妥当なところであろう。海外から日本に観光で来るのに、2・3日という少ない日数はありえないし、10日以上長期の滞在型を想定することはここでは話のフォーカスがぼけてくると思える。長期滞在型はそれはそれで魅力的であるが、別のところで考えればいいことである。

8泊9日の観光は、「Walk Japan」のツアーをモデルにすると、移動を伴ったものとなり、一つのホテルに滞在するのも飽きが来ないように2泊までとなっている。このことを考えると、最上地域の各市町村が実施しているフィールドラーニングをうまく連結しなければツアーは成立しないことがわかる。一つのプログラムでは8泊9日をこなせないのである。

そこで問題となるのは縦割り行政である。「エリアキャンパスもがみ」の活動を通してわかったことは、最上、最上と言っても他の市町村との結

びつきが薄く、多くの人たちは他地域で行われていることを知らないし、そもそも関心がないようにも見て取れる。だが、縦割り行政や、住民が他地域に関心を持たないのは何も最上に限ったことではない。どこの地域でもありえるのだ。

最上地域に存在する広域性のインフラ産業の一つに JR 東日本がある。本年度の「エリアキャンパスもがみ」のタウンミーティングやフィールドラーニングの活動報告会に、JR 東日本新庄駅の駅長、助役を始めとして駅員の方々が多数参加してくれた。かれらが「エリアキャンパスもがみ」の活動に興味を持ったのは、近年の陸羽西線などの鉄道の乗降客の少なさをなんとか回復したいと考えたからである。かれらは日本人観光客のみならず外国人観光客を呼び込みたいと考えたのだ。そのために留学生を含めた学生たちのフレッシュなアイデアを聞きたいと思っている。最上地域全体でのインバウンドを実現するためには、JR 東日本のポジションは非常に面白い位置にあると言えるのではなからうか。JR 東日本はある意味自治体の縦割りを越えているし、インバウンドを含めた観光客の増加というかれらの目標が、観光に特化して明確だからだ。かれらが運輸業から観光業へと視点を拡大していけば、最上地域を連結した魅力的なツアーが組めるのかもしれない。いずれにしても、「エリアキャンパスもがみ」のフィールドラーニングが積み上げてきたノウハウと JR 東日本仙台支社新庄運転区が連携することによって、全国にこれまでなかったような新しい地域活性化とインバウンドが展開されることが期待される。

最上地域内に限ったプログラムでは、ツアーのダイナミックスさにかけるのかもしれない。最上地域を中心に据えるとしても、「Tohoku Hot Spring Snow Tour」のように、山形県内の他の地域、さらには秋田県南部や宮城県北部を射程に入れてもいいのかもしれない。こうした他地域を結ぶことは観光業者ができることで、我々の力が及ぶ範囲外なのかもしれない。だが、我々が最上地域だけに固執したならば、すべてを失うことにな

るかもしれない。排他的ではない、柔軟な姿勢を持たなければならない。

8泊9日で参加者の満足度を考えなければならない。そのためには、外国人観光客がどのようなことに満足するのかわ、豊富な経験を有するガイドに聞いてみなければならない。ガイドにはツアーガイドと現地ガイドがいるが、双方に聞く必要があるだろう。

最上地域の観光素材は、すでに活用されている最上川の船下りを筆頭に、巨木、幻想の森など様々なものをあげることができる。フィールドラーニングにからめると、田植え、稲刈り、そば打ち、雪下ろしなどの様々な体験型の活動を組み込むことができる。この体験型ツアーこそが、フィールドラーニングで培ってきた観光素材ではなからうか。

観光客の年齢設定を行わなければならないが、これは私が酒田で会った高齢者たちと仮定するならば、それほど肉体的にハードな活動を取り入れることはできない。授業とは違って観光であるので、飽きるような時間の長さを設定することもできない。

たくさんの観光客に来て欲しいが、ただ一時的に人間が増えることを望んでいるのではない。経済効果を求めているのだ。そのためには、以前の中国人観光客による爆買いとはいかなくても、宿泊旅館やホテル以外でも飲食や土産物の購入でお金を落として欲しいのである。各々の体験型のプログラムで入場料や参加費などのお金をとるとしても、それだけでは十分ではない。かれらはその場その場でパンやソフトクリーム、そしてお土産を買いたいのだ。ところが、ガイドに聞くと、山形の観光地には土産を買う場所が意外と少ないそうなのだ。ここに外国人観光客の不満があるそうだ。言われてみると、博物館を見学した後で何か買おうにも周辺に店屋はないことが往々にしてある。観光客が増えていけば、観光地に店屋はできていくのであろうが、一方で店屋がなければ観光客は増えていかないのかもしれない。

買い物も旅行の楽しみの一つである。きちんと

した定住型の店屋でなくてもいいのかもしれない。旅行客が来た時にだけ開く、ワゴン車を利用した移動式の店屋であってもいいのかもしれない。田舎にはこうしたワゴン車の土産物屋が似合っているのではなからうか。ワゴン車の限られたスペースを有効活用するために、旅行客が求めるものをあらかじめ旅行業者に聞いて調査すればいいだろう。

さらに私の妄想を進めると、JR 東日本の無人駅構内あるいは無人駅の前の広場に、定期的に地元の野菜や沿線の魚などを売ると、列車の利用者数は増加するのかもしれない。別に駅ではなくとも、車両の中に市場が開かれればそれはすごく魅力的なことであると思える。フラワー長井線では、車両内でプロレスが行われるくらいだから、市場を定期的に開くのはそれほど難しいことではないように思うのだが、それは素人の浅はかさであろうか。もし、規制があるとすれば、その規制を取り除けばいいだけだと思うのだが、これも無茶な話であろうか。

ガイドから聞いた話では、安いツアーの客はコスパ（費用対効果）を求めて様々な注文とクレームをつけるらしいが、豪華な「Walk Japan」のツアーの客はかなり鷹揚で、あまり手がかからないらしい。言われてみればうなずけることである。最上地域の観光客のキャパシティを考えると、そんなにたくさんの観光客が来ることを望まなくてもいいだろう。そもそも宿泊施設が少ないからだ。自立性の高い、比較的ラグジュアリーな上客をもてなした方が楽なのではないだろうか。

おわりに

酒田の旅館で出会った海外の旅行者のグループが私をインスパイアして、今回の文章を書くことに誘った。観光やインバウンドによる地域活性化の話は、様々な本や雑誌、新聞で目に触れていたし、テレビ番組などでも見てきたはずである。しかし、実際に観光客やガイドと話すことによって、気持ちと頭が活性化されたのである。それは、最近、最上地域だけでなくいろいろなところで、

様々な人たちから観光やインバウンドによる地域活性化の相談を持ち掛けられることが多くなってきたが、まさにそのタイミングが合ったことにもよるのだろう。

「エリアキャンパスもがみ」のフィールドラーニングの報告会を聞くと、学生たちの体験発表は非常に限られた地域の話で終わっている。これは致し方のないことだ。だが観光ツアーを考えると、かれらの発表を最上地域全体として結びつける必要がある。それをするのは、いったい誰だろう。誰かがいないと各々の集落や市町村では難しいだろう。山形県の最上支庁のような自治体かもしれないし、JR 東日本の新庄運転区のようなインフラ産業かもしれない。さらには、民間の観光業者が結びつけてくれるのかもしれない。多様な試みがあってしかるべきである。しかし、誰かがしてくれると他力本願では、いつまで待っても誰もしてくれないのかもしれない。当事者である最上地域のやる気に溢れた人が、失敗を恐れずにチャレンジする必要があるのだろう。

観光客、特に海外からの観光客を受け入れると、良いことばかりではなく、様々な軋轢が生まれてくるであろう。それも活性化のうちだと覚悟しなければならぬ。内に籠る論理では、何も打開することはできない。好むと好まざるとにかかわらず、最上地域は山形県の他地域に開かれ、山形県は日本の他の都道府県とつながり、日本は世界と交流している。内なる論理で居直ることはできない。

ここで私が書いてきたことは、私自身のフィールドラーニングの成果報告の一部である。

注 「Walk Japan」についてはホームページ（<https://walkjapan.com/who-we-are>）を参照。

第二部 授業記録

○前期「フィールドワーカー共生の森もがみ」プログラム

1. 「新庄まつりとオレ」～日本一の山車行列～	46
2. 「作陶に挑戦！」新庄東山焼の世界	53
3. 地域の資源を活かし山屋の魅力を探る	60
4. マルシェ“本活プロジェクト”～本と人をつなげる出前図書館～	67
5. 山間地の宝物を探そう	73
6. 森と人との共存を考えるⅠ～山間地の歴史を探り地域振興へ～	79
7. 最上町の人・自然・文化に触れよう①	85
8. 里地里山の再生Ⅰ	92
9. 田舎体験で考える～豊かな暮らしをつくる生き方働き方～	99
10. 子どもの自然体験活動支援講座1	105
11. 大蔵村の生活と伝統の継承	113
12. 鮭川の歴史・文化探訪	122
13. 戸沢村の超元気印！幸齢者集団の生きざまに学ぶ	127
14. 里山保全と山菜料理	136
15. 創作太鼓と伝承野菜栽培	143

「新庄まつりとオレ」～日本一の山車行列～

活動状況

○実施市町村：新庄市

○講師：新庄まつりサポーター‘S

○訪問日：平成30年6月23日(土)～24日(日)、7月7日(土)～8日(日)

○受講者：人文社会科学部2名、工学部7名、農学部2名

以上11名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p>【1日目】6月23日(土)</p> <p>08:00 山形大学発</p> <p>09:30 ふるさと歴史センター着</p> <p>09:40 開講式</p> <p>1) オリエンテーション</p> <p>2) プログラム説明</p> <p>10:00 新庄まつりを知る①</p> <p>◆展示山車見学</p> <p>◆お祭りホールの映像視聴</p> <p>◆山車の説明</p> <p>◆法被、囃子の説明</p> <p>11:30 ふるさと歴史センター見学</p> <p>12:00 昼食(各自)</p> <p>13:00 新庄まつりを知る②</p> <p>◆新庄まつりの人形制作現場見学</p> <p>14:30 新庄まつりを知る③</p> <p>◆新庄まつりの起源・神輿渡御行列についての講義</p> <p>16:00 指導者との振り返り</p> <p>16:30 宿泊先へ</p>	<p>【1日目】7月7日(土)</p> <p>08:00 山形大学発</p> <p>09:30 新庄駅着</p> <p>09:40 企画立案・提案準備</p> <p>◆「新庄まつりファンを増やすために私たちができること」をテーマに企画立案</p> <p>◆提案資料の作成</p> <p>◆山車製作見学</p> <p>12:00 昼食(各自)</p> <p>13:00 企画立案・提案準備</p> <p>◆「新庄まつりファンを増やすために私たちができること」をテーマに企画立案</p> <p>◆提案資料の作成</p> <p>◆山車製作見学</p> <p>15:00 会場準備・リハーサル</p> <p>16:30 振り返り</p> <p>17:00 宿泊先へ</p>
<p>【2日目】6月24日(日)</p> <p>09:00 企画立案・提案準備</p> <p>◆昨年プログラム受講者を交えたディスカッション</p> <p>◆「新庄まつりファンを増やすために私たちができること」をテーマに企画立案</p> <p>12:00 昼食(各自)</p> <p>13:00 企画立案・提案準備</p> <p>◆「新庄まつりファンを増やすために私たちができること」をテーマに企画立案</p> <p>◆提案資料の作成</p> <p>15:30 指導者との振り返り</p> <p>16:30 新庄駅発</p> <p>18:00 山形大学着</p>	<p>【2日目】7月8日(日)</p> <p>09:00 会場準備・リハーサル</p> <p>10:00 企画の提案発表</p> <p>想定：新庄市長、商工観光課・山車連盟・囃子連盟・神輿渡御行列へ</p> <p>企画の提案</p> <p>12:30 昼食(各自)</p> <p>14:00 提案発表のまとめ・振り返り</p> <p>15:00 活動総括・全体の振り返り</p> <p>16:30 新庄駅発</p> <p>18:00 山形大学着</p>

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Sさん

新庄祭りは260年以上もの歴史があり、2017年にはユネスコ無形文化遺産にも登録された祭りである。3日間で55万人の人が訪れるなど、大きな盛り上がりを見せているが、課題も存在する。例えば、「山車・囃子の担い手不足」「運営費の不足」「宿泊施設のキャパ不足」「開催期間の問題」があげられる。加えて、新庄市外、県外での知名度の不足もあげられる。私たちは計2回のフィールドワークで学んだことを活かして「新庄祭りの知名度を上げて、新庄祭りのファンを増やすこと」をテーマに、どうすれば来た人に喜んでもらえるか、また来たいと思ってもらえるかを考えながら、4つの企画を立案した。

一つ目は、「From Yamagata university to Shinjo festival」である。この企画は山形大学内のラジオサークルさんとフリーペーパーサークルさんに協力していただいて、新庄祭りとお私たちの企画の宣伝をしてもらうものである。この企画の目的としては、祭りに対する認知の輪を大学内から広げていき、多くの人に祭りを知ってもらい当日祭りに来てもらうことである。

二つ目は「隈取りわっしょい♪」である。この企画は、新庄祭りに来た人に歌舞伎の隈取りメイクをするというものである。先日のW杯で顔に国旗などのフェイスペイントをしている人が多く見られたが、それと同じように顔にメイクを施すことで、ただ山車を見ているだけでなく、来てくれた人に実際に参加している気分になってもらい、より祭りを楽しんでもらいたいという思いがある。

三つ目は「ゴミ拾い渡御!!!」である。新庄祭りと深い関わりのある神輿渡御にちなんで、神輿渡御で用いられていた籠をモチーフにした移動式のゴミ箱を作成し、それを持ちながら祭り中に移動しながらゴミ回収を行うというものである。祭りにはどうしてもゴミの問題はつきもので、祭りの景観を壊さないようなゴミ箱を用い、回収を行うことで、祭りに来た人に新庄祭りがクリーンな祭りだというイメージを与える狙いがある。

四つ目は「第二回新庄祭りイケメングランプリin囃子若連」である。SNSを利用して囃子若連のカッコイイ男性、女性のグランプリを行うものである。しかし、グランプリを決めることが本当の目的ではなく、SNSを利用して行うことで、若い世代の観光客や、当日参加できない人にも参加しやすい環境を作ること、認知度の向上、祭りのファンになってもらうという狙いがある。

フィールドワーク全体を通して、自分たちで企画を

立案し、運営にも携わるという経験ができることはとても貴重なものだと感じ、絶対に企画を成功させたいと思っている。加えて、自分たちの企画を新庄市長、教育委員会の委員長といった方々の前で発表し、一緒によりよい企画になるように考えるという経験は、通常、大学生活を送る中では絶対に経験できないものと感じ、このフィールドワークに参加してよかったと思う。今回の経験を今後の人生に活かしていきたい。



人文社会科学部 Tさん

「新庄まつりファンを増やすために私たちができること」をテーマに、学生の視点から祭りの企画を考えてきた。新庄まつりは2017年12月1日にユネスコ無形文化遺産に登録され、観光客も55万人と大幅に増え、市民の誇りへとつながっている。しかし、現状課題として「山車・囃子の担い手不足」「開催期間の問題」「宿泊客のキャパ」「運営費不足」などが考えられ、これから先も祭りを盛り上げていくためにはこれらの課題と向き合わなければならない。第一回目のフィールドワークの際に新庄市の歴史を学び、本物の山車を間近で見学し、囃子の太鼓や鉦を体験することができた。新庄について知れば知るほどこの祭りのために貢献したいという気持ちが強くなると同時に、これほど大きな祭りの企画に参加できるという貴重な機会に感謝したいと思った。

私たちが考えた企画は4つある。

一つ目は『From Yamagata university to Shinjo festival』である。これは山形大学のラジオサークルとフリーペーパーサークルに協力を依頼し、情報発信によって認知度を向上させるねらいがある。

二つ目は『隈取わっしょい♪』である。新庄まつりの山車といえば人形が欠かせない。歌舞伎部門の人形は隈取をしており、とてもインパクトがあった。私たちはそこに目をつけ、体験型の企画を設けることにより、祭りに参加しているという気分を上げ一体感を出

そうと考えた。

三つ目は『ゴミ拾い渡御!!!』である。祭りの大きな問題の一つである「ゴミの回収」に着目し、観光客の方々に「クリーンな祭り」と印象付け、また来たいと思ってもらえるような環境づくりを目指す。

四つ目は『第2回新庄まつりイケメンランプリ in 囃子若連』である。昨年に引き続きTwitterを利用して周知し、若い世代の観光客や実際に足を運ぶことが難しい方にも参加しやすい企画を考えた。

今回の活動を通して、いかに企画を立案・提案・実行することが難しいことか痛感した。現在に至るまでの歴史を学び、現状課題を把握し、課題解決に必要なことは何か熟考しなければならない。このような活動において最も重要なことは、「現場を見る」ことであると思う。祭り会場となる道を歩いたり、作業現場を見学したり、実際に自分の目で確認することで見えるもの・感じるものがある。何もわからない状態から始まり、たくさんの方々に協力してもらった。地元の方と会話をし、普段話すことがない目上の人の意見を聞くことも、とても貴重な経験となった。このように現場から学ぶことができる機会が「フィールドワーク」である。この経験を今後の大学生活、そして将来にわたって活かしていきたい。

工学部 Sさん

2回のフィールドワークを通して、新庄まつりは伝統のあるまつりでありユネスコにも登録された名誉あるおまつりだとわかりました。そして、実際に企画・立案・実行を定められた予算内ですることの大変さがわかりました。議題は新庄まつりのファンを増やすことでした。現在の新庄まつりには4つの課題があり、祭りの開催期間の検討・宿泊客のキャパシティ・運営費不足・山車囃子の担い手不足だと聞きました。また、実際に山車の制作している方のお話を聞くと、作り手が不足していることや作る時の苦労などを伺うことができました。しかし、これらの課題を定められた予算で解決することは難しく、学生という立場で新庄まつりのファンを増やすために自分たちが出来ることを考えました。1回目のフィールドワークでは、3つのグループに分かれてブレインストーミングを行いました。その結果自分たちの班での意見では、事前体験と人形マネGPを行いたいと考えました。その後、グループでのそれぞれの考えた企画の共有に入りました。他のグループからは思い付かなかった意見や考えがでずすごいと思いました。また、市役所や教育課の方々に意見をもらい実現可能かどうかを判断してもらいました。厳しい意見を頂くことで、社会での企画も実際は大変だとわずかながら感じました。そして、2回目のフィールドワーク前に集まってミーティングをしましたが、予算の関係のため事前体験の企画

はなくなりました。自分たちの進めていた企画がなくなるのは残念でしたが納得できたので、次からはこの経験を活かしたいと考えました。そして、山大学生×サークル、隈取メイク、ゴミ拾い、イケメンGPの4つの企画を立案するための活動が行われました。それぞれの企画では5W2Hを意識して企画が考えられました。それぞれの企画が考えられ、赤入れをしました。そして、新庄市長への提案が行われました。これらを通して、立場が上の方々に対して何かを提案する時の会場準備の大変さや納得してもらえるように事前に準備をしてそれからプレゼンテーションすることの大変さを発表者を見て感じました。また、自分たちよりも経験や知識のある大人の質問や提案は想像を超えるものもあり、改めて企画を立案することの大変さがわかりました。そのなかでも、隈取メイクが好感触をえていたのすごいい感じました。2回のフィールドワークを通して、決められた予算内で現状をより良くするための企画・立案は難しいと感じました。また、現地の方々と関わることで新庄まつりをよくしたい、そのために自分たちが出来ることを本気で考えていることが伝わり良い経験になりました。自分の課題では、ブレインストーミングでグループではできるが全体となると苦手であることがわかりました。

工学部 Sさん

僕たちは初日に新庄まつりについて学びました。新庄まつりは2016年にUNESCOの無形文化遺産に登録された古くからの伝統があるまつりです。しかしそんなまつりも人手、担い手不足、運営費不足、開催日の固定、宿泊客のキャパオーバーなど様々な問題があることがわかりました。どの問題も僕たち大学生にどうなる問題ではありません。そこで「新庄まつりファンを増やすために私たちが出来ること」というテーマのもと企画を考えることでまつりに貢献しようと思いついた企画が4つあります。

1つ目は「From Yamagata university to Sinjo festival」です。どのような企画かというまずは山形大学サークルを利用して新庄まつりの認知度向上を図ろうというものです。ラジオサークルとフリーペーパーサークルのY-aiに協力を依頼しました。具体的にはラジオに実際に出演して新庄まつりの宣伝を行う予定です。Y-aの方々には僕たちの活動をツイッターやフェイスブックに載せていただく予定です。次にオープンキャンパスにきた高校生を対象に本フィールドワークと新庄まつりの魅力について紹介して集客の一部にしようというものです。(こちらは予定)

2つ目が「隈取りわっしょい」です。これは歌舞伎の象徴である隈取りをおまつりに来た方に実際に体験してもらおうという企画です。また同時にトイレマップの配布も行う予定です。

3つ目は「ゴミ拾い渡御!!!」です。これは神輿渡御になぞらえて作った「籠」をゴミ箱として僕たちが担ぎゴミ拾い、回収をするものです。

4つ目は「第2回新庄まつりイケメンランプリin囃子若連」です。これは前年の先輩がたから受け継いだ企画で、ツイッターを利用して囃子のイケメンを決定しようというものです。これはツイッターを利用してファン拡大を目的としています。このアカウントを使って他の企画の様子や宣伝も行っていくつもりです。

これらの企画は最終日に実際に新庄市長や新庄市教育委員会教育長をはじめとした方々に企画を提案し評価をいただいたものです。ものすごく緊張しましたがこのプログラムならではの貴重な体験だったと思います。

今まで企画をはじめから作るという機会が無く、とても不安でしたが実際にやってみるととても面白くもっとやってみたいと思いました。本当にこのプログラムをとってよかったと思いました。



工学部 Sさん

「新庄祭り」は毎年8月24日から26日までの三日間にわたって開催され平成28年には、ユネスコ無形文化遺産に登録された260年を超えるまつりです。今回の活動では新庄祭りのファンを増やすために私たちが出来ることを考え4つの企画を立案しました。

1. 「From Yamagata university to Sinjo festival」

ターゲットを山形大学生にし、ラジオサークルとフリーペーパーサークルに協力して貰い新庄祭りのファンになってもらえるようにします。ラジオサークルは実際にラジオに出演し宣伝を行い、フリーペーパーサークルは祭り当日に来てもらい活動取材してもらいます。

2. 「隈取りわっしょい♪」

新庄祭りは豪華絢爛な山車を鑑賞できますが観光客が山車の人形がやっている隈取りメイクを体験してもらうことで満足度が増すと考えました。当日は場所を

貸してもらい3種類の隈取りメイクを体験していただけます。またトイレマップを配布してトイレ問題の解消もします。

3. 「ゴミ拾い渡御!!!」

新庄祭りに観光にいらっしゃった観光客の方々に「クリーンな祭り」と思ってもらうため、山大生がゴミ拾い・回収を行います。当日は山大生とわかるように「山形大学」と書かれた法被もしくはTシャツを着用し山大生がやっているとわかるようにします。

4. 「第2回新庄祭りイケメンランプリin囃子若連」

前回一定の盛り上がりがあったイケメンランプリを今年も実施しようと考えました。この企画は当日祭りに来られない方でも参加出来るので新庄祭りを知ってもらうきっかけになると考えました。前回出た改善点を解消し今年は囃子若連にスポットを当てます。また新庄祭りには女性も参加していることをわかってもらうために女性参加OKにします。

今回の活動で実際に企画を立案しそれを実現するのはとても大変だと実感しました。でもこの伝統ある新庄祭りの企画立案に参加できたことは普段では絶対に出来ない体験だし、仲間と助け合いながらタウンミーティングまで準備を進め、成功し達成感と喜びを味わうことが出来ました。今回の活動で得たことを大学生活や社会に出たときに活かせるようにしたいです。

工学部 0さん

今回のフィールドワークを通じて、新庄祭りの伝統や新庄祭りとはどういうお祭りであるのかということをとくさん学んだ。一回目のワークでは、歴史センターで山車を実際に見て、一つ一つの人形の表情の違いや山車に乗っている山や松や桜などがどのような意味を表しているかなどを学んだ。山車の題名の前には「風流」が付き、その言葉は、時空を超越するという意味を表していて、この言葉がつくことで、時代考証に捉われず、季節や空間、事実を超えて、新庄祭り独特の特色ある山車が作られる。神に供える山車であるため、季節を問わない最も美しいものを並べている。並べられている美しいものには、山、滝、館、波・波しぶき、人形、松、桜、紅葉、牡丹、動物がある。また、新庄祭りについて学んだ時に、四つの課題があることを学んだ。一つ目は、山車、囃子の担い手不足、二つ目は、開催期間、三つ目は、宿泊客のキャパシティ、四つ目は、運営費の不足だ。これらのことを学び私たちは、四つの企画を実行することに至った。一つ目の企画は、「From Yamagata university to Sinjo festival」という企画だ。この企画は、新庄祭りを知らない山形大学生、山形大学のオープンキャンパスに来ている学生をターゲットにした企画だ。協力してもらったサークルは、ラジオペーパーサークル、フリーペーパーサークルの二つのサークルである。これらの二

つのサークルに協力してもらうことで、認知度向上を目指すための企画実施を行う。二つ目の企画は、「隈取りわっしょい♪」という企画だ。この企画は、新庄祭りの来場者に、山車の作品で印象深い人形の中の三種類の歌舞伎のメイクを行うという企画だ。この企画を行いながら、トイレマップの配布も行うことで、トイレが見つからないなどの問題の解消も目指す。三つ目の企画は、「ゴミ拾い渡御!!!」という企画だ。この企画は、新庄祭りに観光にいらっしゃった観光客の方々に「クリーンな祭り」と思ってもらうため、山形大学生がゴミ拾い・回収を実施するという企画だ。四つ目は、「第2回新庄祭りイケメングランプリin囃子若連」という企画だ。この企画は、昨年のフィールドワークで先輩方が実際に行った企画であり、今回はその企画をもう一度行うことになった。昨年との変更点としては、男性だけの参加ではなく、女性も参加可能になった。この企画は、ツイッターを利用することで認知度の向上を目指すために行う。これらの四つの企画が今回の新庄祭りで行う企画である。新庄祭り当日までに準備することや新庄祭りを宣伝すること、また隈取りのメイクの練習や当日のブースの図案などをしっかり考え、新庄祭りの認知度を上げるために自分にできることを精一杯したい。

工学部 Kさん

私は今回のフィールドワークで全体企画の管理と指示出しを担当しました。

合計4つの企画管理をして実際に新庄市長などに企画紹介をして意見をもらいました。

今回の会議を開くにあたって気を付けたことは、マイナスの意見つまり改善点だけを出す形式ではなく、プラスの意見が出やすい座談会形式にして大学生側が意見しやすいようにしました。

結果的にはたくさんの意見を引き出すことができ成功といっても過言ではない結果でした。具体的には、隈取メイクはとても斬新で面白い案なのでぜひやってほしいということでした。ただゴミ拾いに関しては去年から市のほうから露店に対して共通のゴミ袋を配布してどこのお店のゴミでもどこでも捨てられるようにしたそうなので、違うアプローチを進める方針になりました。今回のこの会議を開催できたのはいい経験でした。このフィールドワークはほかのフィールドワークとは違い新庄まつり当日にも行って実際に企画を実行してくるためここでは今までの活動を書いていきます。まず自分が担当しているサークルを使った宣伝活動に関してはラジオサークルに生放送で出ることになりかつ新庄市の記者コンに出席することになったので当日のチラシつくりと発表原稿作成をしていました。これで気づいたことは、隈取メイクが今回の企画内容的には一番うける企画課と思いました。というのもサ

ッカーワールドカップなどで顔に国旗をペイントするのがひとつの文化になりつつあるのでたくさんの人に受け入れてもらえると思うからです。ほかの企画に関しては担当者があるため任せるとして、今回全体のリーダーシップをとったことはすごく僕の人生においてもすごく大変な役割でしたが、スケジューリングこれであっているか、やるべきことに穴がないか、うまく担当が振れているかなどたくさんのことを考えました。今でも考えています。しかし今は最初のころよりグループのみんなが自分のやるべきことをしっかりと理解し、自主的に行動してくれているのでいい感じで来ています。この調子で、まだまだ解決すべき課題は山のようにありますが協力してやっていけたらすごくスピード感のある感じで企画が進むので、当日楽しむ余裕ができると思うので頑張ります。



工学部 Tさん

新庄まつりは2017年にユネスコ無形文化遺産に認定された、260年以上の歴史を持った祭りである。しかし、新庄まつりにも、山車・お囃子の担い手の不足や宿泊客のキャンパシティーの不足など課題点がある。私たちは今回の活動で「新庄まつりファンを増やすために、自分たちができること」をテーマに新庄まつりに少しでも貢献できるよう4つの企画を立案した。

1つ目は「From Yamagata university to shinjo festival」である。ラジオサークルやフリーペーパーサークルなどサークルと連携し、大学生の新庄まつりの認知度を上げることを目的とした企画である。

2つ目は「ゴミ拾い渡行」である。まつり来場者の方々に「クリーンな祭り」と思ってもらうために、神輿渡御の籠に見立てたゴミ箱を作製し、ゴミ拾い・回収をしてまわる。

3つ目は「第2回新庄まつりイケメングランプリin囃子若連」である。新庄まつりファンになるきっかけづくりとして、昨年に続きSNSで若連のイケメングランプリの投票を行う。今年は囃子若連の方にエントリーしてもらう。

4つ目は私たちが企画した「隈取りわっしょい♪」である。毎年多くの観光客が訪れる新庄まつりだが、課題点にもあるようにキャパシティの不足など大勢の観光客への対応も大変である。そこで、新規の観光客を増やすことよりリピーターを重視して企画を考えた。具体的にリピーターを増やすには、まつりの来場者の満足度を上げる必要がある。今までの新庄まつりは、町中を練り歩く豪華絢爛な山車や古式ゆかしい神輿渡御を鑑賞し楽しむことができる祭りである。しかし、まつり来場者が「体験」できる場所があれば、より満足度が増すと考えた。新庄まつりの山車には歌舞伎の隈取りをした人形が飾られている。迫力ある隈取りのメイクを、希望する来場者に行い、まつりをより楽しんでもらおうと企画した。

今回の活動で、企画を立案しそれを実現までもっていくことの大変さを知った。しかし、この伝統あるまつりに関わることができたこと、自分たちの企画をプレゼンし認められた時の達成感といった普段は決してできない体験をすることができた。これらの企画を通しまつりを成功させるには、それまでの努力はもちろんのこと、私たちが新庄まつりを楽しむことが大切である。



工学部 Sさん

今回、このフィールドワークを通して新庄まつりの歴史や現在抱えている問題について知ることができた。そのうえで、私たち学生ができることを考え、新庄まつりのファンを増やすために企画をした。祭り当日にも私たちが企画を実行することで実際に企画を製作し、実行するという貴重な経験をすることができた。

私たちが作った企画は、班員それぞれの案をブラッシュアップし完成させたものであり、一人では決して出なかった意見がいくつも重なり合うことで完成形にすることができた。今回ともにフィールドワークを経験した班員たちは自分にはない発想と行動力で何度も助けてもらった。第二回目のフィールドワークも終わり一区切りがついたが、祭り当日に向けてこれからも

活動があるのでこれからも力を合わせて活動する。

合計四つの企画があり各班員が企画の運営を担当しているため、このレポートでは私が担当している企画がどのような経緯で作られていったかを書いていきたいと思う。私は、どの祭りでも問題になっているゴミ問題について解決できないだろうかと思い、私たちがゴミ拾いをするという企画を作った。しかし、ただゴミ拾いをするのではなく、新庄まつりの神輿渡御という行事で使われている駕籠をモチーフにしたゴミ箱でゴミ拾いをするという企画をした。このゴミ箱は、燃えるゴミ、燃えないゴミ、缶、ビン、ペットボトルの分別が可能になっている。このゴミ箱は人目を引くことができると考えているため、ゴミの分別の呼びかけやゴミのポイ捨ての予防をするという目的がある。

祭り本番までに改善しなくてはいけないこととしては、人ごみの中で安全に移動できるように駕籠の脚部にキャスターをつけることで押して移動可能にすること。また、駕籠を担ぐところが人に当たると危険なので移動しないときは取り外しが可能にするという安全面での配慮が足りない部分を改善していく必要がある。

今回製作する駕籠は、設計と模型製作と必要になる材料の調査をすべて担当させてもらった。建築・デザイン学科に所属している身としては、人が担ぐのに適した重さや形状、ごみが捨てられた状態での重さに耐えられる構造を考えるという条件付きでのモノづくりを担当することはいい経験になった。

今回の集中講義は、様々な人に支えられて行うことができた。その、恩返しができるように祭り当日に行う企画を成功させることができるように、準備を徹底的に行いたいと思う。

農学部 Tさん

「新庄まつりとオレ」というフィールドワークの活動を通して、「新庄まつりファンを増やすために自分たちにできること」というテーマのもと、新庄まつりをより活性化するために私たちは企画を考えた。新庄まつりとは宝暦6年、藩主戸沢正誥が、飢饉によってうちひしがれている領民に活気と希望を持たせるために、戸沢氏の氏神である城内天満宮の「新祭」を領民あげて行ったのが起源である。今年で262年目を迎える歴史ある祭りだが、現在の新庄まつりは、山車、囃子の人手不足、祭りの開催日の検討、宿泊先のキャパシティ、運営費不足、担い手不足という課題がある。

私たちが考えた企画は「From Yamagata university to Shinjo festival」、「隈取りわっしょい♪」、「ゴミ拾い渡御!!!」、「第2回新庄まつりイケメングランプリ in 囃子若連」の4つがでた。

一つ目の企画は、山形大学のラジオサークルとフリーペーパーサークルに協力してもらい、新庄まつりに

についての情報を発信する企画、2つ目の企画は、祭りにきた観光客に私たち山大生が隈取メイクをしてお祭りを楽しんでもらう企画、3つ目の企画は、山大生がゴミ拾いと回収をして回る企画。4つ目の企画は、昨年引き続きかっこいい囃子の人をTwitterで投票してもらい、グランプリを決める企画である。

私が企画を担当したのは、「隈取わっしょい♪」で、この企画は3つの種類「むきみ隈」、「筋隈」、「目張り」の隈取を希望者に選んでもらい、私たち山大生がメイクをする企画で、これをしようと思ったきっかけは、山車の人形を作っている野川北山さんの作業場にお邪魔したとき歌舞伎の隈取メイクをした人形のインパクトがとても強かったからである。この企画を通して、新庄まつりに印象付け、少しでも多くの人にまつりについて知ってもらいたい。そして、自分も隈取をすることにより、観光客が祭りに参加している、より祭りに密着して参加してもらいたいと思う。

この活動を通して、はじめ、このフィールドワークをするまで新庄まつりについて何も知らなかった私がこの祭りについて企画を考え実際に活動することはとても不安で難しいと思った。しかし、このように企画を作り上げフィールドワークの最終日には新庄市長や山車連盟の人達に企画を提案し、面白いやこうしたらもっといいのではないかと意見をもらえ、とてもうれしかったしやりがいを感じた。今回のように実際に企画を提案実行につなげることはとても難しく大変であるが、自分を成長させる貴重な経験ができた。

農学部 Tさん

私たちのグループは一回目のフィールドワークでは、一日目、新庄まつりについて地元の人たちから話を聞き、実際に山車を見たり、山車や人形の作成現場の見学を行ったりした。そして、新庄まつりが抱える問題をきいて、私たちのグループでは、新庄まつりのファンを増やすために私たちに何か出来ることはないだろうか、と考えて新庄まつりで企画を考えることになった。そして二日目は実際に企画の制作に取りかかった。企画の原案を作成して一日目のフィールドワークは終了した。

二回目のフィールドワークでは、一回目のグループワークで出した企画をさらに具体的にしていく作業と、二日目のタウンミーティングで発表出来るようなプレゼンの作成を行った。そして、二日目のタウンミーティングでは、新庄市の市長やまつり関係者のお偉いさんに向かって私たちが考えた企画のプレゼンテーションを行った。

普段の生活ではこんなに多くの年上の方や、市長を始めとする偉い人たちに直接、学生が意見を言える機会はないので、私にとってとてもいい経験になったと思う。また、自分たちの企画した提案が市長たちに認

可された時は、一回目のフィールドワークから始まり、ずっと苦勞して考え抜いた企画が通ったときはとてもうれしかった。さらに、プレゼンテーション資料の作成や、プレゼンテーションの仕方、プレゼンテーションで相手の心をつかむ方法などを普段から企画を作っている新庄市の役員の人から、またグループ活動や個人ワークを通じて学ぶことが出来た。この経験は、今後の大学生活や、その先の社会に出てからも必ず生きてくるスキルを私はこのフィールドワークを通じて学ぶことが出来た。

「作陶に挑戦！」新庄東山焼の世界

活動状況

○実施市町村：新庄市

○講師：新庄東山焼弥瓶窯 涌井正和

○訪問日：平成30年5月26日(土)～27日(日)、6月23日(土)～24日(日)

○受講者：人文社会科学部4名、地域教育文化学部1名、理学部1名、工学部3名、農学部2名
以上11名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p>【1日目】5月26日(土)</p> <p>08:00 山形大学発 09:30 新庄東山焼着 10:00 オリエンテーション 10:30 講義Ⅰ 東山焼の概要 「歴史、特長、講師経歴、その他」 11:30 昼食(調理、食事) 13:00 講義Ⅱ 焼き物作り工程 14:45 実技 ①粘土採り、加工作業 ②様々な技法 ③自分の作品 17:00 宿泊先へ</p>	<p>【1日目】6月23日(土)</p> <p>08:00 山形大学発 09:30 新庄東山焼着 10:00 講義Ⅰ 焼き物の化学① 11:30 昼食(調理、食事) 13:00 実技 ①釉薬づくり ②釉薬塗 ③釉薬塗 16:40 宿泊先へ</p>
<p>【2日目】5月27日(日)</p> <p>09:00 講義Ⅲ 山形県内の焼き物 10:45 実技 自分の作品仕上げ① 11:30 昼食(調理、食事) 13:00 実技 自分の作品仕上げ② 15:30 後片付け 16:00 振り返り、活動記録 16:30 新庄東山焼発 18:00 山形大学着</p>	<p>【2日目】6月24日(日)</p> <p>09:00 講義Ⅱ 焼き物の化学② 11:30 昼食(調理、食事) 13:00 実技 窯焚き 15:50 振り返り、活動記録 16:30 新庄東山焼発 18:00 山形大学着</p>

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Aさん

正直、私は初めて、このプログラムを選ぶつもりではなかった。ところが、説明会で担当者の説明を聞いていただきいた後、新庄市の歴史や東山焼に対する関心が沸き上がって作陶に挑戦したくなった。四日間の活動を通して日本の焼き物文化について色々学んで人生初の目新しい体験（粘土・釉薬作り、窯焚きなど）をすることができ、当時の決断がよかったと思った。

それに、一緒に参加してくれた日本人大学生は皆優秀で誠実な人で、嬉しくてありがたい。恥ずかしくて認めたくないが、日本に来る前、日本人は外国人とあまり交流しないと何度も聞いた。なので、少し緊張感を抱いたまま活動に臨んだ。でも、皆さんは私ともう一人の外国人学部生に接して自由に話し合った。日本人に対するイメージの見直しのきっかけとなり、自分の成長にも少し繋がったように感じた。おかげさまで、あまり心配せずに活動を楽しむことができた。

講師の涌井さんから、失敗しても諦めずに経験を積み重ねて行くことの大切さを学んだ。涌井さんは全く作陶を知らないまま新庄市に来て、五代目の弥瓶さんのご指導の下に作陶を始めたが、その物作りに対するパッションに感動された。涌井さんは最初、焼きあがった300作品のうち2個しか使えなかったくらい失敗率が非常に高かったという。しかし、落ち込まずに間違い一つずつ訂正して、段々上手になっていった。このような百折不撓の精神は東山焼の歴代の陶芸家が共通して持っており、東山焼が存続し得る重要な理由なのではないだろうかと考えた。自分は今様々な悩みに付き纏われているが、涌井さんのポジティブな考え方を見習うべきだ。それを以てこれからの人生を生きてみたい。

一つの課題として、東山焼の知名度はほとんどない。手先が全く不器用な自分でも、物作りがもたらす満足感を味わった。作陶の体験の重要なポイントというのは、作品自体ではなくそのプロセスだと思う。寛いだ雰囲気の中で涌井さんの人生経験を聞きながら活動に取り組み、楽しくて有意義な時間を過ごすことができた。知名度はともかく、せめて身の周りの人々に自分が新庄市で体験したことを教えてほしい。涌井さんから頂いたお土産を母国へ持ち帰り、家族や友達に見せながら東山焼の世界や自分がそこで触れたことを紹介したい。恐らく東山焼の知名度を上げるのに何の役にも立たないかもしれないが、少しでも東山焼の名を海外に広めることができただけで十分だと思う。

人文社会科学部 Cさん

今回のフィールドワーク、最初は本当に軽い気持ちで参加していた、釉薬作りとか粘土採取とかの内容は説明の時もう知っていたけれども。やはり自分は陶芸教室に参加するような気持ちで山形大学から出発するのである。しかし、新庄に着いて、涌井弥兵衛さんの話を聞いて、私は今回の体験はどの位大切なことかをようやく知っていた。

今回の事前学習に東山焼の歴史について調べたが、実際に涌井さんの語った歴史を聞いて、それはまた一層深く東山焼について理解できていた。東山焼を支えるのは素晴らしい技術はもちろん、そして、代々の弥兵衛さんの革新的な考え方と時代に沿って進める技術は東山焼の一番のところだと思う。

一回目のフィールドワークで、粘土は現地で取るところを聞いて。決して隣のやまとか、川辺みたいなところだと思い、それはすぐ隣でとれると知って、本当に驚いていた。何百年、何千年前からそこに眠っていた粘土は、私たちの手より蘇って、お皿とか、置物とかになった。それを考えて、今でもワクワクの感じが止まらない。みんなが自分で取って作った粘土を使って、動物とか、小皿など遊び半分で作っていた、焼き立てたらどんな感じになるだろう。割れるかな、色々な気持ち持って期待していた。

二回目のフィールドワークの内容は主に釉薬にめぐっていた、釉薬の作りはどれほど難しいことなのかはこの二回目のフィールドワークに確実に実感していた。僅かな成分の違いも大きい違いとなるかもしれない。そしてその違いは実際に焼かないとわからない、つまり大切な材料は小さなミスで無駄になる可能性は思いのほか高いのである。しかし、涌井さんの話によると、ミスから出来た素晴らしい色もある。けどそれはミスで出来上がったものなので、何回繰り返して、ようやく正しい成分を把握していたらしい。

この二回のフィールドワークは自分の焼き物に対しての考え方を一転していた。陶器の良さ悪さはまだ分からないが、職人たちはどれくらいの気持ちを込めているのかは、涌井さんの言動を見て何となくわかるよ



うな気がする。私たちは出来ることは有限だが、できる範囲内で東山焼、涌井弥兵衛に応援したいである。

人文社会科学部 Sさん

今回のフィールドワークで私は滅多になく貴重な経験と知識を学ぶことができた。

まず実際に作陶してみてわかったことをあげていく。一つは陶芸品とは私達の生活の身近に存在しているということだ。このプログラムに参加する以前は陶芸とは芸術品の一種で私のような美術に教養のない者にはやや格式高いもののように感じていた。しかし、涌井氏の講義を受けて陶芸とは日常生活に浸透しているのだと学んだ。

また、陶芸に決まった形はなく時代とともに変容していくものだと学びました。涌井氏に「とくとくとっくり」という酒の小瓶を見せていただいたが、あの幻想的な音の響きは今でも忘れられない。見た目だけでなく酒の魅力を一層際立たせる工夫が凝らされた陶芸に驚くばかりだった。また、質の良い急須は取っ手の部分に負担がかからないようになっていたり注ぎ口から水がこぼれない構造をしていたりと実用的な面でも優れていることを学んだ。これらを通して私の陶芸に対するイメージは全く変わった。

さらに作陶の難しさ、奥深さを学んだ。涌井氏によると自分の要望した色を作ったところ希望通りの色にならなかったがそれより優れた色が偶然作られたことがあったそうだ。失敗から良いものが生まれるというのはなんとも奇妙で面白いと感じた。また、私が実際に作品を作った際自分の思い通りにうまく作れなかったことが今でも印象強く残っている。それを踏まえると、涌井氏が如何に鍛錬を積んで技を磨いてきたのかがうかがえる。人の手であるような精密で繊細な陶芸を作れることに大変感動している。

以上の活動を通し私は東山焼きの課題を考えた。東山焼きの課題は認知度の低さと陶芸に対する意識だ。東山焼きは山形県内の認知度がそれほど高くなく、特に若年層にその傾向がみられる。まずは県内の認知度を高めることが優先事項と考える。まずは情報発信が解決策の一つとしてあげられる。その際に陶芸全般についての説明を加えるとよい。陶芸品が私達と親しい関係であることを伝えるのが効果的と考える。そうすることで一部の若年層を陶芸の魅力に近づけることができ知名度の向上にもつながる。

人文社会科学部 Hさん

私がこのフィールドワークに参加したのは、涌井弥平さんが、現代ではなじみの少ない陶芸家という道を選んだ理由や覚悟を学びたいと思ったからだ。その学びによって、将来のことが全く見えていない自身に何らかの刺激を与えたいと考えていた。計二回のフィー

ルドワークは想像以上にたくさんの学びであふれており、大変充実した有意義な時間となった。

第一回目で印象に残った活動は、陶芸の歴史を学んだこと、ろくろ体験だ。陶芸の歴史を学ぶ過程では、様々な陶器・磁器などに触れることができ、一つ一つの異なる表情に魅せられた。このときから、私の中で陶芸がポジティブなイメージに傾きかけ、次のろくろ体験で”陶芸＝楽しい”と完全に決定づけられたと思う。ろくろでの作陶は見た目以上に難しい。手先は器用な方であると自負していたが、なかなかうまくいかない。繊細かつ豪快さが求められ、ここに陶芸の大きな魅力の一つが詰まっていると感じた。弥平さんは、今のレベルに到達するまで日々目標を設定しながら努力を積み重ねてきたそうだ。

第二回目では、釉薬作り、窯焼きが印象的だった。釉薬作りの大部分は、水に溶かした灰を何度も何度もこしていき地道な作業の積み重ねだった。自作した釉薬の他にもいくつか見せていただいたが、どれも色の変化が見られない。弥平さんでも色だけでの識別はできないそうだ。焼くことによって色が現れるのは、興味深く面白いと感じた。最後の体験活動は、窯焼き、今回は野焼きだ。屋外の小さな窯で、粘土を手で成形した作品を焼いた。窯の温度、焼き時間など細かな配慮が必要で、あまりの高温に溶けだすものやしっかり焼きあがらないものもあった。うまく焼けたときの感動はひとしおであった。最初、弥平さんも窯焼きには苦勞し、工夫を凝らしながら少しづつ成功数を増やしていったそうだ。ここにも積み重ねの跡があった。

私にとって今回のプログラムの一番の学びは、”積み重ねの大切さ”だと考える。弥平さんの作陶の技術、その作品を支えるのは、地道な努力や作業の積み重ねであった。日々、一つ一つの小さな目標をこなし、最終的に大きな目標を達成する。この学びを自身にしっかり生かしていきたいと強く思う。

全二回を通じ、東山焼だけでなく、涌井弥平さん自身が大変魅力的だと感じた。正直なところ、活動が始まる以前は陶芸家：涌井弥平と聞き、陶芸の道一筋、堅苦しく親しみにくいというイメージを抱いていた。しかし、弥平さんは正反対の人だった。親しみやすい優しい人柄で、陶芸以外にバイクや料理など様々なことに興味があるようだった。また、東山焼が時代に適したものであるために昔の形に固執することなく、これからも変化し続けることが重要であると考えていた。加えて、今後お孫さんやその後の子供たちが、東山焼を継ぎたいと思わないならそれで構わないという。かつて東京での仕事を辞め、涌井家に嫁いってから陶芸の道に進んだ人生からも分かるように、非常に柔軟な考えを持った方だと思う。その人生から感じること、学ぶことは多かった。

私たちのグループは、東山焼の課題を”知名度”と考えた。この課題を解決するため、私たちが体験したような陶芸の世界の奥深さをのぞくことができ、涌井



弥平さんの魅力を感じられる体験企画を立案している。さらに、東山焼を紹介するため、より具体的かつ魅力的なパンフレット作りも進めている。私たちの活動によって、少しでも新庄東山焼の”輪”が広がったら良いなと思っている。

地域教育文化学部 Sさん

私はこのフィールドワークに参加し、心から物事に打ち込むことの魅力を学びました。

フィールドワーク一回目では、焼き物の歴史を様々な焼き物を手に取りながら教えていただきました。講義の中で最も印象に残っているのは、一代目から五代目そして現在の六代目後継者である涌井さんについてのエピソードです。材料を自ら歩いて調達したり、独学で窯の開発をしたり、作ることができるようになるまで神社に願掛けを続けたりというお話をお聞きしました。言葉で聞くだけでは一つのエピソードとして終わってしまうかもしれませんが、自分で焼き物の形を作り大きな窯の姿を見たりすることで、どれほどの労力が必要なのか圧倒され想像できないほどでした。また、涌井さんのお話の中で、「がむしゃらに頑張るだけではなく、小さな目標を毎日立てる」という言葉があり、結果を急いで折れてしまう私の背中を押してくださいました。そして、伝統工芸品と聞くと昔の時代から受け継いできたものを守り続けるというイメージがありますが涌井さんは、「その時代に合ったものづくりをする」ということが重要であるとおっしゃっていました。そのような、利用する方のためを思い日々工夫に励む柔軟さが、時代が変わっても東山焼が求め続けられている理由なのだと感じました。

フィールドワーク二日目には、一日目に作り終えた作品に色を付ける作業を行いました。一回目に苦戦して作成した作品でしたので愛しさを覚えずにはいられませんでした。しかし、釉薬を作るために行わなけれ

ばならない工程のなんと地道なことか…。何度も何度も作ることができる灰がとて少ないのだということにとても驚きました。さらに、涌井さんは一日かけてその作業を行うというお話には気の遠くなるような気持ちがしました。

この四日間にわたる作成を通し、東山焼を陶芸品としてだけではなく、人の心が作り出す伝統工芸品としてたくさんの人に知ってほしいと思いました。自分たちにもできることを考えていきたいです。そして、社会人への階段を上り始めた今、涌井さんのものづくりに対する心、人に対する感謝の気持ちを肌で感じさせていただいた経験を大切にして自分自身も実行していけるようになりたいと思います。



理学部 Yさん

私の実家のそばには遺跡があり、縄文から弥生時代にかけての土器がよく出土していたため、焼き物は私にとってなじみ深いものだった。しかし、実家周辺に陶磁器店がなく、これまで現代の焼き物には触れ合う機会がなかった。また、新しいものが流行し古いものが淘汰されていく現代で、伝統がどのように引き継がれているのか興味があった。そのため今回、このプログラムに参加させていただくことになった。

今回、講師をしてくださった涌井さんからは様々なことを教わった。日本・世界の様々な焼き物を見せていただき、焼き物の歴史や釉薬の作り方も教えていただいた。不純物を除いたきれいな粘土でろくろ体験もさせていただいた。涌井さんの菊練りは壮観だった。挑戦させていただいたが到底真似できるものではなかった。「菊練り三年ろくろ十年」といわれる理由を肌で感じる事ができた。また、釉薬を材料から作らせていただいた。材料の一つである灰を濾していくと、大部分が無駄なもので、使えるものがほんの一握りであることを知り愕然とした。野焼きの体験もさせていただいた。何回かやらせていただいているうちに、適切な時間管理ができるようになり、良い焼き物を作り上げることができた。焼き物や釉薬の材料だけでなく、

窯の温度や風の通り、気圧配置などのささいな環境の変化によって、焼き物の出来上がりが大きく左右されることを、身をもって学ばせていただいた。

また、焼き物の技術だけでなくこれからの人生の考え方で、講師の涌井さんからは学んだ。涌井さん自身や東山焼、その周辺に関する問題に対し、自分なりの答えを確固たるものとして持っていることが、言葉の端々から感じさせられた。涌井さんは人として非常に尊敬できる人であった。

さて、私が考える東山焼の問題点は「知名度」であると感じた。私たちは二回の体験を通して東山焼の魅力を存分に知ることができたが、その魅力を日本人、山形県民にさえ十分に伝わっていないのではないかと感じた。伝統工芸品、特に陶磁器事業の衰退は山形県のみならず日本全体の問題だ。経済産業省ではその原因として需要の低迷、量産化の難しさ、人材不足、生産基盤の減衰、そして産地の知名度不足を挙げている。私たちはこれらのうち産地の知名度不足に焦点を当て、活動していくことを決めた。私たちは東山焼の品質や特性を強くPRしていくことで、その問題の解決を図りたいと思っている。

工学部 Oさん

今回、新庄市にある新庄東山焼きのフィールドワークを通して最上地区の課題点の発見と改善方法の提案を行った。

私たち2班は、東山焼きの歴史から始まり、実際に手びねり、ろくろ体験で陶器の形を作った後に釉薬作りまで行った。東山焼きの課題としてあげられたのが需要の低迷、量産化ができない、人材不足、生産基盤の衰退、産地の知名度不足の5つである。これは東山だけではなく全国の伝統工芸品の課題でもある。そこで今回わたしたちは、一番わたしたちが企画、実現できそうな産地の知名度向上を今回の目標とした。知名度向上の活動として、体験型プログラムの企画とパンフレット作製を提案する。第一に、わたしたち自身が体験したフィールドワークの内容が、ほかの陶芸体験と大きく異なっていることに着目し、それをポイントとして新しい宿泊体験プログラムを考えた。

このフィールドワークもがみのプログラムが他の陶芸体験と一番大きく異なる点は、自分で釉薬を作るところと自分の作品を焼くところである。一般的な陶芸の体験プログラムは1日単位で行われ、手びねりもしくはろくろで作品を作った後、釉薬付けや作品を実際に焼く行程は全て体験元にお任せというスタンスが大半を占める。しかしこのプログラムは一泊二日×2という長時間の体験学習であるため通常では割愛されてしまう部分まで体験できる。

二つ目のパンフレット作製は、山形駅にある地域ごとの特色紹介のコーナーに設置されている最上地方の

ものが新庄焼をほとんど取り扱ってないことが発端となった。そこで新庄焼に関するパンフレットを作成し、山形駅に設置してもらうことを考えた。ここでわたしたちが考えたのが、新庄焼についてのみのパンフレットではなく、私たちの講師である涌井さんについても内容に盛り込むことで特殊性を出すことである。4日間で体験した内容を取り入れることで涌井さんの人柄や面白さがより伝わりやすくなると思った。

最上地域の課題点を見つけ、改善するのが今回のフィールドワークの最終目標であるが実際に最上地域を訪れてわかったことは、当事者である涌井さんや新庄市の職員の方々はもうすでに課題を明確に把握しており、それに応じた活動をしているということである。正直4日間だけのわたしたちから提案することも限界があるようにも感じたが、なにか現状に少しでも変化をもたらすことができればよいと考える。



工学部 Mさん

このフィールドワークでは、東山焼の作り方、そこから見えてくる歴史や歴代当主の考え方やコミュニケーションの重要性を学んだ。

焼き物は陶器・磁器に分かれ、そこから分岐して様々なものが各地に存在する。焼き方は酸化か還元するかで完成が異なる。窯にも様々な種類がある。電気釜・薪釜・石油釜・重油窯・登り窯・穴窯が涌井さんの工房にあった。それぞれ使用用途が異なり電気釜は大量生産用、薪釜は出展用、重油釜は大きい作品用と分かれている。東山焼は釉薬を使用しており、代表的なもので「海鼠釉」がある。鮮やかな青色で「出羽の雪かげり」と呼ばれている。また、一から配合を考えて作る釉薬、偶然からできる釉薬もある。釉薬は土灰と長石が根幹を成し、色を出すためのズミ石灰やコバルト、酸化銅によってできている。実際作ってみたが、大量の灰から作られる釉薬の量は想像より少なく、手間のかかるものだった。同じく、色の研究も幾度の試行錯誤を重ねる必要がある。よって、代々伝わる色の配合や自分で作った配合が門外不出というの

納得できた。

東山焼はその時代・その当主によって形を変えている。初代・二代目は陶器と磁器、三代目は土鍋・片口などの日用品、四代目は土管などの工業製品、今代の六代目に関しても日用品や企業や国から依頼を受けるなど多種多様に変化している。実際に見たもので醤油差し・金魚鉢・苔の鉢・レンガがあった。時代に合った形に姿を変え次世代に技術・知識を残していくことはとても美しいと感じた。また、涌井さんがおっしゃっていた「焼き物を作ることは楽しい」という純粋な気持ちも美しいと感じた一端だろう。

このフィールドワークでは東山焼だけでなく、人との関わりの重要性・楽しさを学んだ。陶器作りや料理作りを通じて、分業することにより効率よく物事を進めたり、協力することで信頼関係が強固になることを感じたり、社会的動物として成長できた。涌井さんの人生談や料理談など陶芸だけでなく話を聞いて、何気ない会話から人は繋がり、その繋がりを大切にすること・何事も楽しむことが人生を豊かにする最も良い行動だと学んだ。

東山焼きの問題点として知名度だと考える。実際体験してみると興味深く楽しくなるが、知らないまま終わってしまう。知るための切掛けを提供することが重要だと考える。しかし、涌井さんは伝統が無理に続いて欲しい訳ではなく、後継者の自由意志に任せるのが一番良いそうだ。そのための方法として私達はパンフレットの製作を考えた。私達がこのフィールドワークで学んだ魅力を載せて、東山焼を知るトリガーにしたいと考える。

工学部 Hさん

私はこのプログラムに参加する以前から陶芸に興味があったが、それは形状についてのみだった。また、これまでの私にとっては、陶芸とは手の届かない場所にある芸術であり、常用からは離れたものであるという印象だった。しかし、今回実際に陶芸を体験し、土練り、釉薬、窯焼き等の様々工程を知った。それにより、実用の範囲内にある焼き物の深さを一部ではあるが理解し、陶芸に対する印象が変わった。

私は今回のワークの中ではろくろ体験が最も印象に残っている。特に何も考えなければすぐにある程度の形にすることができたものの、少しこだわりを入れると途端に形が崩れてしまい、非常に集中力のいる作業であった。二つを形にした後は、30分以上かけてろくろを回しながらも、集中力に限界を感じ、台から切り取ることなく製作を諦めてしまった。ここで涌井さんの「湯呑を1000個作るという目標を決め、1日20個、それができたら次は50個…」という言葉の重みを実感し、技術は一朝一夕には身につかないものであることを理解した。また、小山さんや小野寺さんが生徒と

同様に、あるいはそれ以上にろくろに対し真剣に向き合っていた姿勢から、陶芸の魅力が最もよく伝えることができるのはろくろ体験なのではないかと考えた。

東山焼きの課題について私たちは「知名度」という観点に焦点を当てた。涌井さんのスタンスを「無理に宣伝をする必要はない」と解釈した結果、班としては、県内に向けて東山焼きを紹介するパンフレットを作成すること、陶芸の魅力をより深く知ってもらうことを目的として陶芸教室で行うワークの拡大という二つのことがあげられた。私個人もこのスタンスおよびアイデアには賛成である。涌井さんがリピーターもいるとおっしゃっていたことから、一度東山焼きの良さを知った人は長期に渡り東山焼きの製品を利用すると考えられ、その人物からの口コミで周囲の人物へと東山焼きの情報が伝わって行くことで、一定あるいは徐々に知名度は高くなるだろうと考えているからである。ただ、班内での話し合いの時点で「どれだけ品質・機能の良いものであっても、(プラスチック製に比べて)高価なのであれば、絶対に購入しない」という意見も上がっており、否定的な考えを持つ人物がいることも認めざるを得なかった。

東山焼きを通して、安価なものが多量に出回る時代に高品質なものを使う意味を考え、さらにそこでの考察結果を東山焼きに再び戻すことで課題解決に少しでも



も貢献したい。

農学部 Kさん

私がこのフィールドワークに参加しようと思ったのは、土から焼き物をつくり、焼き物に色をつける過程も体験できると書いてあったからでした。焼き物自体は小さい頃に「平清水焼」を作ったことがあったのですが、そこでは自分の好きな形に変えて後の過程は何もしなかったため、どのように色をつけるのか気になり参加しました。

フィールドワークでは東山焼の歴史、東山焼の特徴についても学びました。山形県で江戸時代からずっと続けている焼き物は東山焼と平清水焼の二カ所である

ことを知り驚きました。東山焼は色や形を自由につくることができるため、涌井さんの時代にあわせたアイデアがつまっています。青い「なまこ釉」をはじめ多くの色があり、切れの良い醤油差しや、東山焼の水槽などありました。

一回目は土をとり、粘土にかえる作業、その粘土で小物作り、ろくろ体験を行いました。土を山から削ってとって、機械に水と土を少しずつ入れてまぜて、ちょうど良い固さにする作業をし、粘土を完成させました。ここまでの作業だけでも時間がかかり大変な作業でした。ろくろは周りで見ていると簡単そうに見えるのですが、自分でやってみると、足でろくろを回すためのペダルを押しながら、手で力を加えていくのがとても大変でした。

二回目は釉薬作り、焼き物を実際に焼くことを体験しました。釉薬はたくさん木の灰を用いて作るのですがそこから作られる釉薬の量が少ないことに驚きました。実際に焼いてみて、本当の窯とは違う窯で焼いたのですがしっかり焼ける作品は少なく難しいと思いました。涌井さんの経験、技術が素晴らしいことを肌で感じました。

また、技術だけでなく、涌井さんからは多くの考え方も教わりました。その一つは涌井さんが考える伝統というものには時代に合わせて変化しつつ、つながっていくという考えです。前に述べたように皿だけでは無く、醤油差しや、音の鳴る徳利があります。また、現在息子さんが継いでいらっしゃるようですがお孫さんが継がない、となれば仕方ない、という考えでした。そのまま伝統を無理矢理引き継ぐ形でないことが魅力的に感じました。

涌井さんも体験した私たちも課題と感じているのは知名度についてでした。そこで私たちは東山焼に関するパンフレットを制作できないかと考えました。山形県に住んでいる人たちも知っている人が多いわけではありません。地元の人たちに今回の体験を通して感じた東山焼について伝えられれば良いと考えます。また、現在、涌井さんは新庄で陶芸体験教室を開かれています。私たちが行なった体験は行なっていません。様々な体験をし、話を聞いたことで私たちはより面白さを感じたので、同じような体験ができるプログラムがあれば良いのではないかと考えます。

農学部 Uさん

陶器と言われて何を思うだろうか？日本には多くの焼き物が存在し、現代まで受け継がれてきた歴史を持つ。姿形が違えば材料も行程も異なる。それにより歩んできた歴史も異なる。今回のフィールドワークで焼き物の奥深さや繊細さを実感し、さらに東山焼だけでなく、陶芸家である涌井さんの生き方から学ぶこともあった。私達は東山焼の素晴らしさを実際に体験した

ことで感じたので、体験なしでも魅力を伝えることはできないだろうか？また東山焼の未来のために私たちができることはないだろうか？

今回私たちは、東山焼を粘土から作らせてもらった。中でも釉薬作りと窯についてはさらに興味を湧かせるものであった。東山焼は材料の細かな組み合わせによって作られる釉薬により鮮やかな色を表現できる。例として、灰と長石に酸化鉄で赤色、酸化銅では緑色、酸化チタンでは白色のように他にも何十種類もの色が存在し、色ごとに材料の分量が細かく規定されている。そのレシピは東山焼を作る職人さんでしか分からない内容となっている。色を作り出すこともまた困難で、失敗することもあるが、むしろそれがいい色となって今の東山焼に活かされていることもある。焼くときは用途を使い分けて、灯油、電気、重油、ガス、薪などを使用する。焼き方によって色合いが変化することもあり、1つの陶器に2種類の色を表すことも可能である。また、使用する窯により個性や味も異なってくるため、工程ひとつひとつで表現の仕方が変わってくるのである。

東山焼の魅力を知ることができただけでなく、涌井さんの生き方に感化された4日間でもあった。職人という立場で多くの苦労があった中、自分らしく生きている涌井さんの姿を見て、こういう人生もあるんだと実感し、将来を考えさせてくれるきっかけにもなった。

4日間の体験を通して学ぶ機会や感動が多くあり、今後も生き続けてほしいと願う陶器の1つだと強く思った。涌井さんによると、東山焼の知名度はそれほど高いわけではないそうだ。体験した私たちにできることは、多くの人に東山焼を知ってもらうことである。そのためにパンフレット作りの提案を出した。涌井さん側に負担をかけず、手軽に身近な人から広めていこうという趣旨である。東山焼の魅力を今度は私たちがプレゼンやその後の活動によって発信していく立場となるのである。伝統は受け継ぐものでもあるが、現代にあった形で進化することも重要である。私たち若者の力で東山焼の活性化に繋げ、伝統を守っていきたいと考える。



授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Kさん

私はこの4日間でもとても貴重な体験をした。1日目は山菜取りをした。山菜を採ったことがないだけでなく、竹藪の中へ入ったり車で山に登ったりすることも初めてだったため、すべてが新鮮でもとても記憶に残っている。2日目は壁の清掃と白塗りをした。ここで初めて自分たちが塗る壁を間近で見たのだが、その大きさに不安になったことを覚えている。3日目は壁に絵を描いた。私は下書きの制作にやや深く関わったのだが、時間と壁の大きさの関係で、当日塗り終えるまで絵にあまり自信が持てなかった。しかし、全員が協力し、天候にも恵まれたことで、幅約17メートルもある壁に下書きよりも良いものを描くことができた。この経験は今後様々なところで生きると思う。4日目は専業農家の方のお話を聞いたり、山屋の歴史的な建物を説明していただいたりしたあと、地域の方々とはバーベキューをしながらいろいろなことをお話しした。面白い話や楽しい話に交じって、少し暗い話もしていただいた。山屋小学校が廃校になった経緯や、少子高齢化に対する今後の不安などについての話が印象に残っている。この4日間は、新しいことの連続で、この授業に参加しなければ絶対にできなかったことを経験でき、忘れられない思い出になった。

私は母校の小学校が数年前に廃校になったということもあり、山屋セミナーハウスとはどんなものなのかと興味を持ってこのフィールドワークに参加した。課題を見つけ、解決策を探し出すことがこの授業の大きい目的のひとつだが、地域の方々に大切に思われ、現在も比較的活発に利用されている山屋セミナーハウスは、現段階でも廃校活用の手本に十分なり得るものだと感じた。ただ、目標のひとつにしている利用者の増加を達成するには、より多くの情報発信が必須だと考えられる。その方法には、たとえばSNSの利用やホームページの情報の充実が挙げられると思うが、まずは今あるものを使って存在を知ってもらうために、私は特にホームページの充実が重要だと感じる。しかし、この問題は何かひとつのことをしたからといって簡単に解決できるものではないため、さらに考え続ける必要があると思った。

人文社会科学部 Kさん

私は今回のレポートで、この4日間で自分自身が体験したことやフィールドワークを通して感じた山屋セミナーハウスの課題について整理し、私なりに感じた山屋の課題をまとめていきたい。

今回のフィールドワークでは農業や枯れ木の整備、ペ

ンキ塗りなど、今まで経験したことのないことを経験した。このフィールドワークのメインである壁に絵を描くという作業はとても大変な作業であったが、学生側でデザインを考えることでグループの親睦が深まり、スムーズに作業を行うことに繋がった。実際に壁にイラストを描いた時に、イラストの発案者だけでなく他の学生もデザインをより良くするために自分の考えを発言していた。そのためイラストは更に良いものが出来上がったと思う。フィールドワークの3日目の夜と4日目のBBQで講師の方と直接交流する機会があった。1日目の夜には、これまでに山屋セミナーハウスをどのような年齢層の人が、どのような目的で利用してきたのか質問した。定期的な利用者には高校の運動部が多く、合宿所として利用することが多いと聞いた。運動部以外では、農業の会社の研修などに利用されているとのことだった。他には山屋の人が感じる課題を聞くことができた。大学進学のために山屋から上京して行った人が帰って来ない場合が多く、若者や子供が少ないことが気になると言っていた。4日目のBBQでも同様に、他の山屋の方も上京した若者が戻って来ないことを気にしているようだった。BBQの片づけが終わり、閉校式が始まるまでの間、私たち学生と講師の方たちとで意見交換が行われた。そこで講師の方から、今回のフィールドワークでは楽しいことも多かったが20年後、30年後には山屋がなくなってしまうという闇の部分にも目を向けてほしいと言われた。私たちはまだ学生であるため、できることは限られているが、2回のフィールドワークを通して感じたことなどを元に、もう一度自分たちで話し合い、山屋(セミナーハウス)の課題を考え直すことにした。

私が考えた山屋(セミナーハウス)の課題は、利用者数が少ないということだ。山屋の方は山屋セミナーハウスの利用者が増えることを願っているということが意見交流をした際に分かった。利用者を増やすためには知名度を上げる必要がある。私たちは知名度を上げる手段として3つの案を考えた。1つ目は新庄市のホームページに多くの山屋セミナーハウスの情報を載せてもらい、運動施設として認識してもらおう案。2つ目は山屋セミナーハウスを利用してくれた人たちの協力を仰ぎ、ツイッターやインスタグラムのSNSを用いて山屋セミナーハウスを拡散してもらおうという案である。3つ目は山屋セミナーハウス近隣のお店に協力を求め、宣伝用のフリーペーパーなどを作成して店内に置いていただき、合宿所を選ぶ人の手に山屋セミナーの情報が行き渡る仕組みを作るという案だ。2つ目の案は利用者である私たちにもできることであるため、実行するようにしたい。



地域教育文化学部 Sさん

四日間の新庄、山屋での経験は自分にとっての大きな成長となった。一回目のフィールドワークでは主に自然を体験することがメインで、山登りをしながらタケノコや山菜採りをした。二回目のフィールドワークでは自分たちで考えた案を用いて壁に絵を描いた。そこでは班員と協力して最高の作品を残すことが出来た。また、午後から地域の歴史について学ぶ探検ツアーに出かけ、実際にその空気を肌で感じながら新庄の歴史について考えた。

これらの体験を通して感じた山屋地域の課題はやはりその認知度の低さと高齢化の進んだ現状ではないかと思う。事前学習等で山屋のホームページを確認したが、情報量が少なく、どのように使われているのかわかりにくいようなところがあった。また、山屋のセミナーハウスは学校をリニューアルした宿泊施設とのことであったが、それは高齢化で子供の数が減り、苦肉の策だったという事実を聞いた。その話を聞いた時、過疎化が進む新庄の厳しさや、地域の方々の心の痛みを見た気がした。

これらを踏まえて班員とどのような解決策が考えられるか話し合った。そこで考えられた解決策が大きく分けて二つある。一つ目はインターネットを使って多くの人に山屋について知ってもらうこと。二つ目は他県の中高生にセミナーハウスを合宿所として利用してもらうことだ。

一つ目のインターネットを活用するについては、現状を把握したところホームページは存在するが情報量が少ないという課題が浮かんた。そこで、そのホームページに山屋の魅力や特色、セミナーハウスの詳細を載せるなどして情報量を増やしたらよいのではないかということだ。それによって少しでも多くの人に山屋について知ってもらえたらよいと思う。

二つ目のセミナーハウスを合宿所として使ってもらうというのは、年間のセミナーハウスの利用者があまり多くないという課題が浮かんたからだ。具体的な方法とし

ては、一つ目の解決策として挙げたインターネットの情報に合宿所としても十分利用できる施設だということアピールしていこうというものだ。学校をリニューアルしたところのため練習に適した環境であるのは間違いない。加えて宿泊するところも非常に広く、選手同士の中が深まるような環境でもあると思う。また、SNS世代である今の中高生を多く呼び込めれば、そこからインスタグラムやツイッター等を通してもどんどん口コミが広がることが考えられる。

以上二つを山屋地区活性化のための方法として提案したい。

地域教育文化学部 Kさん

まず、四日間のフィールドワークを通して、活動に対しての自分の気持ちが大きく変化したこと気づいた。一回目の訪問の際は、緊張や不安があり、あまり活動を楽しむことができなかった。加えて、山屋のことや新庄のことを教えてもらってばかりで、自分から積極的に地域の人に話に行くということができなかった。そこを反省点とし、二回目の訪問に臨んだ。今回は壁に絵を描くという自主的な活動があり、前日まで準備し山屋の象徴となるようデザインを試案した。地域の方にコンセプトが伝わるか、実際に描いてどうなるか懸念していたが、デザインに新庄の山車の部分が含まれていることを理解してくださり、学生が描いたということを残したいと、日付と名前、山形大学の文字を加える提案をいただいたときは、描いてよかったとうれしく思った。

前回よりも班の人達とも打ち解けることができ、活動を楽しむことで、山屋の魅力や課題を考える余裕ができた。そこで思った山屋の魅力は、地域の人々である。山屋の方達はみんな、山屋の魅力を伝えるために空蔵山の竹の子や、蛍を見に行くことなど四日間のプランを考えてくださり、おいしいごはんの用意などのサポートもしてくれた。互いの山屋を思う気持ちと、地域の結びつきが強くなればできないことだと思う。薬師堂などの歴史遺産を紹介して下さった阿部さんが、「調べなおして資料を作ることは大変だったが楽しかった。」とおっしゃっていたことを思い出した。山屋を知ってもらうことが嬉しく、もっと紹介したいと思う気持ちがあるから、みんな生き活きと活動に参加してくれているのだとわかった。

そこで、自分の中にも、山屋をもっと知りたい、知らせたいという気持ちがわいてきていると気づいた。そうして地域の方に質問や魅力を聞いてみると、課題やこうしたい、こうなってほしいという気持ちをたくさん聞くことができた。山屋のホームページがなく、情報が広げられないこと、アスレチックや歴史のことも口伝えでしか広められないこと、山屋の利用時間の偏りや、若年層の減少で、地元の農業や山屋の後継者がいないことなど、

直接聞かなければわからなかったことが多くあった。話を聞き、山屋の課題として、知名度を上げるということが一番の課題であると思った。後継者のことも、山屋や周辺の魅力も、まず知ってもらって利用してもらうことが大事だと考えた。

そのために、市のホームページに、山屋のことを詳しく載せてもらう等の対策をする必要があると感じた。



工学部 Yさん

今回最上地方の山屋という初めて聞く地に訪れ、四日間を過ごしたことで様々な考えが生まれた。

まず、このフィールドワークを通じて考えたことは山屋にはありのままの人が手を加えていない自然を活かしたものがあふれているということだ。まず1日目に行った杣蔵山が挙げられる。杣蔵山では山菜をとったり、竹の子を取るという今までやったことがない初めての体験をした。私のイメージの竹の子取りは、整備された山で大きいたけのこを見つけて取るイメージだったが、山屋で体験した竹の子取りは蛇でもでてきそうな茂みに潜るように入っていく、周りの植物のような緑色をしている竹の子を取るといったような採取で、茂みの中を進んでいくことが足を取られたりして難しかった。だが、そういった体験をすることができる機会が身近にはあまりないので、難しく大変なことではあるが、貴重な体験をできたと思う。杣蔵山以外にも虫を見に行ったり、薬師堂に参拝に行くのに山を少し登ったりという常に自然に密接した生活ができるのでそこに山屋の魅力が感じられると考えた。

また、山屋セミナーハウスに宿泊してみて、バレーボールで地域の人と遊んだり、休憩時間にグラウンドで遊んだりしたことでセミナーハウスは運動する場所としてとても適していることがわかった。そして、夜にはバトミントンの練習をしたり、昼間に新庄のお祭りの練習をしていたり、地域の方々に多く使われていて、地域の方々に愛されていることを感じ取ることができた。

以上の自然が関与するといういいところ、地域の人に

愛されていて、運動をする場所としてとても適しているというところから、合宿をする人や自然と触れ合いたい人には山屋は適しているのではないかと考える。

合宿するにあたり、中学・高校の顧問の先生はあえて宿泊所を競技場やテニスコートなどから遠いところを選んで生徒を走ってそこまでいかせたりすることが多いことがメンバーと話してわかった。そういったこともふくめて考えると、山屋セミナーハウスは近くにテニスコートがあったり、駅から遠くはなかったり、近くの道路も一本道で見通しが良かったりすることから体育館を使用する部活も走ることができるので、走り込みをしたい合宿にはもってこいなのではないかと考えた。そういった理由から合宿などに使用する人が増えたら廃校してしまった小学校も報われるのではないかと考える。また、都会の疲れを癒すために田舎を訪れることが流行っているのでそれで山屋セミナーハウスを使ってもらえると山屋セミナーハウスが平日などにも活用されると思うので、山屋の地域が全般的に活性化されるのではないかと考える。

こういった形で私がもがみで考えたのは、もっと廃校してしまった学校を山屋の魅力を活かして使用していただけるのではないかとということである。

工学部 Kさん

二回に分けた計四日のフィールドワークを終えて、選んだ目的である自然体験とセミナーハウスの再利用方法はもちろん、地域の人達のつながりの強さや地区の歴史なども実際の体験として学ぶことが出来た。

1日目ではまず山でタケノコ、森で「みず」と呼ばれる山菜をとった。夢中になって落としものをしているときさえ気づかないくらいに楽しかった。タケノコは少しえぐみがあるのであまり好きではなかったが、こちらのたけのこはよく食べていた孟宗竹ではなく、「姫竹」と呼ばれる細いタケノコでとてもおいしかった。4日を通してご飯を作っていたいただいたお母さま方には感謝である。

2日目と3日目は山屋の象徴となると言っていた、壁画づくりを行った。私にデザインのセンスはなかったが、指示を出してくれた仲間のおかげで少しは力になれたと思う。壁画の内容も新庄祭りをテーマとしてきれいにまとめられていて、いい出来になったと思う。4日目は農家へ訪問や山屋歴史めぐりと地域のことをより知れる内容となっていた。1日目もそうだったが山屋地区の人たちは地区全員の顔と名前を憶えているらしく、車ですれ違うたびに挨拶したり、車を止めて話したりと強いつながりを見ることが出来た。農家に行った時も載せて頂いた車の運転手が「親戚なんだ」と言って南蛮をお裾分けされていて暖かい何かを感じた。お昼はパーベキューをして自分の考えを口に出し、そのあと地域

の人と語り合った。今までも話すことはあったが、最後ということと酒の力でかなりフレンドリーにいろいろなことを聞いた。山屋と全く関係ないサッカーや現代の恋愛の話などもしたが、地域の人が考えている山屋の課題やいいところなどを直接教えて頂いた。うまく生かしていこうと思う。

最後に私たちが4日間過ごしたセミナーハウスだが、部屋は広く運動スペースもある、大浴場もついていて料理するところもあると、いいところがたくさんあった。整備も行き届いていて良い施設だったので、もっと多くの人に利用してもらえるようにするための方法を探求していこうと思う。

全体を通してとても楽しく貴重な体験となった。



工学部 Yさん

今回の四日目のフィールドワークを通して、山屋の魅力を知るとともに、少子化社会における地域の現状とそれに抗う地域の方々の熱い思いを感じた。

山屋には多くの魅力がある。まず、最初に発見した魅力は田園風景である。辺り一面の田園風景に目を奪われた。地域の人によると、その美しさに惹かれ、映画クルーが撮影していったこともあるという。次に私たちが登山し、竹の子を採った杳蔵山である。頂上からの景色は絶景だ。私たちが登った日も数人の登山客がおり、観光スポットとして多くの人に知られてほしい場所だと思った。登山の帰りに、湧き水を見せてもらった。地域の人も生活水として利用するくらいきれいな水である。この湧き水のきれいさは付近に生息する生物にも表れおり、付近にはサンショウウオが生息していた。私は初めて生きたサンショウウオを見ることができ、山屋は自然が非常に豊かであることを実感した。そして、同時にこの自然が壊されず、続いて欲しいと思った。山屋の魅力はこの他にもたくさんあるが、最後に最大の魅力として、地域の人々の山屋に対する熱い思いを挙げたい。それは整備された薬師堂や明性院を見てもわかる。大切に扱っていないとあの

ようにきれいな堂内を長い間保つことはできないと思う。特に地域の方々の思いを感じることができたのはフィールドワーク四日目のバーベキューやその後での山屋の今後の事業に関する会議のときである。「山屋小学校をなくしたくてなくしたわけじゃない。山屋小学校は山屋の人が力を合わせて作ったんだ」「山屋小学校が廃校になった後もこの建物を残したいという思いで宿泊施設にした」地域の方々の実際の声突き刺さった。少子化の影響を直に受け、外部からの移住者や居住者の増加は難しい、厳しい現状の中でどうにかしてこの魅力ある山屋を保持していこうとする地域の人々の山屋への思いを感じた。

私たちは今後の課題として、山屋セミナーハウスの利用者の増加を提示する。なぜならば、山屋セミナーハウスの活性化が地域に活力をもたらし、山屋セミナーハウスの利用をきっかけに山屋の魅力をより多くの人に知られてもらえると考えるからである。さらに、山屋セミナーハウスという宿泊施設は体育館やグラウンド、テニスコートなどの体育施設、浴場や調理場、食堂などの宿泊施設があり、合宿所に適している。そこで、利用者増加のためにホームページの充実をはかるのはどうだろうか。調べてみたところ、主要な情報は掲載されているが、新庄駅から山屋セミナーハウスまでの車での所要など詳しい情報が載っていない。もう少し、ホームページを見た人に山屋セミナーハウスを具体的に想起させる工夫が必要である。



工学部 Yさん

私は新庄市の山屋地区にある、山屋セミナーハウスで協力員の農家の方や、セミナーハウスの事務の方とともに、グラウンドのバックネットの下のコンクリート部分にイラストを描いたり、バーベキューをしたり、山へ登って山菜採りなどをして楽しんだ。

私がこのプロジェクトを選んだ理由は、イラストを描くということに惹かれたのもあるが、山屋セミナーハウスの作られた経緯を知ったからだ。私は将来建築士になりたいと考えている。そのため、建築にかかわる様々な

ことに触れたいと考えている。私はこのセミナーハウスに来るまで、このセミナーハウスは建築に関する負のものだと思っていた。なぜなら、勝手に私は廃校になってしまったところに目玉のイラストを書いて、人を呼ぶためのイラストにするのではないかと考えていた。しかし、実際にセミナーハウスに着いてみると、考え方は180度変わった。そのセミナーハウスの体育館は子供の活気に満ちあふれていた。人数はそこまで多くはないが、バトミントンスクールが行われており、廃校とは思えない活気であった。廃校は負の社会現象だが、その廃校を利用した運動施設は他の廃校になった施設の見本になるべきだと考えたほどだ。このセミナーハウスに来る子供たちを驚かせて、楽しく利用してもらえるように覚悟をきめた。

一日目と二日目は、農家の方たちとのふれあいを兼ねて山菜採りを行った。初めて採って食べたこの味噌汁はとても美味しかった。どの農家の人たちも優しく取り方や、皮の剥き方を教えていただいた。山屋地区のみなさんの心の温かさに触れることができた。二日目では、壁にイラストを描くための準備に入った。農家の方たちから借りた道具で、教えてもらいながら高压洗浄機を使って綺麗にした。そのあとに白に塗り上げ、真っ白の壁にした。農家の方と力を合わせた白い壁は、一つの私たちの作品だった。

三日目と四日目は、いよいよ準備していたイラストを描き始めた。順調に描き始めて、無事完成した。セミナーハウスを訪れた人がこんなところだとわかってもらえるように願って描いた力作だ。このプロジェクトのメインだったので、一生思い出になる出来事だった。四日目はバーベキューをして、農家のみなさんと本音で話ることができた。山屋の良いところはもちろん、闇も聞くこともできた。いいことは山屋の外にもっと発信していくべきだと感じ、悪いところは私たちに考えて少しでも協力員さんの力になればよいと考えている。

この四日間は大変貴重になった。建築士のたまごの初仕事として、ひとつの自身をもってこれからの勉強していきたい。

農学部 Iさん

私は新庄市の山屋地域に位置する山屋セミナーハウスでフィールドワークを行った。山屋セミナーハウスは元々、山屋小学校として成り立っていたが、通う生徒が減ってしまい廃校となってしまった。そこで、新庄市役所の方々や地域の方々の努力によって、宿泊やスポーツ設備を整えたセミナーハウスへと生まれ変わった。

フィールドワークでは地域の方々の協力のもと、様々な体験をさせていただいた。1日目は近くの空蔵山に登り山菜である「根曲がりたけ」や「ミズ」を収穫

し、セミナーハウスに戻って、地域の方々と一緒に料理をした。2日目はセミナーハウスの整備と二回目のフィールドワークで壁に絵を描くために壁を清掃した後、全面ペンキで白に塗った。このフィールドワークの最大のイベントは前に述べた「壁に絵を描く」ことである。前記の通り、山屋セミナーハウスは元々小学校であった。廃校になる前、当時の生徒たちが壁に思い思いの絵を描いた。その絵が、長い年月が経ち、かすれて来てしまった為、私たちが新しく絵を描くというプログラムになった。大切な絵を消して自分たちの絵を残すわけだから、中途半端には描けないし、地域の皆さんが喜ぶような絵を描かなければいけないので、緊張が走った。そして3日目、まる1日かけて全員で絵を描いた。出来は思っていたものよりもとても良く、地域の皆さんにもとても喜んでいただけた。最後の4日目は地域の農家さんを訪問して最上地域の農業について学び、そのあと地域の文化財を訪れ歴史を学んだ。お昼からは今までお世話になった地域の皆さんと一緒にバーベキューをしてたくさんお話しした。

4日目のバーベキューの時に山屋の課題について地域の方々とお話をさせていただいた。山屋セミナーハウスの最大の課題は後継者問題であった。山屋セミナーハウスは地域の皆様が兼業農家となって運営されている。しかし、その約6割は50~70代の方である。現在は、県内の小学生たちのスポーツチームの練習や大会で使われていたり、県外からの合宿、山形大学のフィールドワークなどでの利用者がいるが、管理人の方はより利用者を増やしたいとおっしゃっていた。しかし、「利用者を増やす以前に後継者がいなければ山屋セミナーハウスの存在そのものがなくなってしまうだろう」と地域の皆さんはおっしゃっていた。そのため管理人の方は「無くなってしまうのは避けることが出来ないので、1分1秒でも長くここを残すために少しでも利用者を増やしたい」とおっしゃっていた。利用者を増やしたいが、まず山屋セミナーハウスは認知度が低



い。これが課題だと思う。したがって、ホームページを改善し、山屋を調べた人に強い印象を与えることが

必要だと思う。

農学部 Mさん

今回、私は新庄市の廃校となった小学校でフィールドワークを行った。この4日間の体験を通して、私の心に残ったこと、山屋の課題を中心にまとめようと思う。

まず、1回目の1日目は「根曲がり竹」「ミズ」という山菜を採りに行った。今までに筍掘りに行ったことはあったが、そのときに採った筍はスーパーマーケットで売っている大きなサイズの筍で、くわで掘り起こした。しかし、新庄で採った根曲がり竹は、2mほどの竹の下に生えていて、手だけで収穫することができた。考えていたよりも、とてもサイズが小さかったので、「本当にこれが筍?」「こんなに小さくて食べるところあるの?」と思ったが、おいしくいただくことができた。また、ミズは、手で茎をおれば簡単に収穫することができ、調理して食べたものもおいしかった。

2日目は、元々絵が描いてあった壁と、机と椅子の清掃、壁を白くペイントすることを行った。壁は、一度小学生による絵が描かれていたので、ペイントするときに次に描く絵のデザインはどうか、と考えさせられた。私たちは、山屋の人たちが喜んでくれ、かつ山屋の魅力を山屋のことをあまり知らない人でも知ってくれるようなデザインにしようと話し合った。

2回目の1日目には、班員全員で話し合った案を掛け合わせ、1つの案を山屋の壁に描いた。私たちが体験した筍掘りをモチーフとした鷹ノ子や、新庄市の花であるあじさいや新庄市の生き物であるサンショウウオなどをデザインに盛り込んだ。また、それぞれが役割分担を決め、スムーズに作業できたことにより、最後に手直しをする時間がとれた。結果として、私が思い描いていたよりもよい絵が描け、時間内に終わらないと思っていたにもかかわらず絵が描けた。地域の人たちにも絵は好評だったので、一番のメインである壁へのペイントは大成功に終わった。

2日目は、BBQのもと、地域の人と交流会を行った。私は、調理員さんたちに「山屋のよいところ」「山屋の悪いところ」「これからの山屋の課題」について話を伺った。山屋のよいところは、災害が少ない、ほとんど起こらない、そして、住みやすいというところだった。山屋の悪いところは、冬、雪が多く降るというところだった。それに伴い、課題は、若い世代が一度街に憧れて山屋を出ると、もう山屋に戻ってくることは無い、ということであった。若い世代が山屋に戻ってこなくなると、その子供世代も山屋に住むことはなくなるので、山屋の人口はどんどん減っていくことになる。この現状を打開するために、山屋の魅力を少しでも多くの人に知ってもらうことが必要だと思う。

私は実際山屋に行って、よいところはたくさんあり、魅力がいっぱいなのに違う地域の人々に魅力をあ

まり知られていないな、と感じた。実際に、私たちが宿泊した「山屋セミナーハウス」について調べても、ホームページに詳しいことが書いてなかった。ホームページを見た人が、泊まってみたい、と思えるようにホームページを編集することや、SNSで山屋の魅力を広めることなど、小さなことでも山屋の魅力を世間にアピールすることはできると思った。

マルシェ“本活プロジェクト”～本と人をつなげる出前図書館～ 活 動 状 況

○実施市町村：新庄市

○講 師：新庄市立図書館 館長 高橋一枝
図書館ボランティアサークル かやのみ会 代表 須藤敏枝

○訪 問 日：平成30年5月19日(土)～20日(日)、6月16日(土)～6月17日(日)

○受 講 者：人文社会科学部1名、地域教育文化学部4名、理学部1名、医学部1名、工学部1名、
農学部1名 以上9名

○スケジュール：

1 回 目	2 回 目
【1日目】5月19日(土)	【1日目】6月16日(土)
08:00 山形大学発 09:30 図書館着 開講式 オリエンテーション 10:00 語り&読み聞かせで育む豊かな心 (講話&実技指導) 12:00 昼食〔各自〕 13:00 kitokito マルシェ 概要説明 “本活プロジェクト”など 14:00 エコロジーガーデン移動視察見学 kitokito 前日準備など 15:30 図書館移動 活動計画立案 17:00 講師懇親会・食事会 18:30 宿泊先へ	08:00 山形大学発 09:30 図書館着 kitokito マルシェ本活プロジェクト準備 ■計画立案に基づく準備作業 ワークショップ・読み聞かせ練習など 12:00 昼食〔各自〕 13:00 ワークショップ準備 kitokito マルシェ本活プロジェクト準備 ■計画立案に基づく準備作業 ■ワークショップ・読み聞かせ練習 ■活動計画立案など 15:30 各自準備 当日スケジュール調整 17:00 宿泊先へ
【2日目】5月20日(日)	【2日目】6月17日(日)
08:30 kitokito マルシェ kitokito マルシェ ブース準備 ■お話し会協力参加 ■ワークショップ協力参加 ■移動図書館見学協力参加 ■kitokito BOOKS 協力参加 12:00 昼食〔各自〕 ■お話し会協力参加 ■ワークショップ協力参加 ■移動図書館見学協力参加 ■kitokito BOOKS 協力参加 15:00 kitokito マルシェ終了片づけ 15:30 図書館移動 ミーティング 16:30 図書館発 18:00 山形大学着	08:30 kitokito マルシェ kitokito マルシェ ブース準備 本活プロジェクト ■計画立案に基づく展開 ■移動図書館 協力参加(お話し会) ■kitokito BOOKS 協力参加 12:00 昼食〔各自〕 本活プロジェクト ■計画立案に基づく展開 ■移動図書館 協力参加(お話し会) ■kitokito BOOKS 協力参加 15:00 kitokito マルシェ終了片づけ 15:30 図書館移動 振り返り感想交流 16:30 図書館発 18:00 山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Tさん

私たちは、新庄市に行き出前図書館の取り組みとして読み聞かせとワークショップの手伝い、実際の企画運営を行った。

一回目のフィールドワークでは、一日目に読み聞かせのポイントを教えていただき、kito kito marche のワークショップの準備を行った。二日目には、kito kito marche に行き、紙芝居の読み聞かせやワークショップの手伝いをした。その後二回目のフィールドワークに向け、何を目的に、どんなことをするのか話し合いを重ね、企画を進めていった。そして、二回目のフィールドワークでは、一日目にワークショップとゲームの準備、読み聞かせ練習を行った。二日目には、実際に自分たちでワークショップの運営や読み聞かせを行った。ワークショップの内容は、フォトフレームづくりで、父の日ということもあり、お父さんにプレゼントを作る子もいた。この活動を通し、多くの人と関わることができた。その中で、読み聞かせもワークショップも相手の表情を見ながら、反応を楽しむことが大事だと感じた。この4日間で読み聞かせの難しさを学び、人を呼ぶには何をしたらいいのか、本と人がどのようにつながるのか、ということを考えさせられた。

そして新庄市の課題、図書館の課題について考えた。図書館は静かにしなければならず堅苦しいイメージがある。人口減少とともに、図書館の利用者、本の貸し出し数が減っていることが課題として挙げられる。

この課題の解決策としては、図書館をもっと知ってもらう必要があると考える。私たちは、このフィールドワークを通して図書館の方々は図書館に対して熱い思いを持っており、そして、魅力的な人が数多くいると感じた。その人柄を生かして図書館に人を呼び込む方法を考えた。例えば、小中高生向けに一日司書体験を設ける、ネームプレートにあだ名も記載して親しみやすくする、図書館のPVを作成するなどである。これらの取り組みを行うことで、図書館の利用者増加につながると考えられる。

このフィールドワークの授業を通し、様々な視点から考えることを学んだ。そして、新庄には地域をよくしたいと考えている人、図書館の良さを伝えたいと活動をしている人が多くいるということがわかった。

地域教育文化学部 Oさん

私たちは新庄市立図書館の一員としてkitokito marcheという、地域活性化を目的としたイベントに参加し、課題や課題の解決策について考えてきた。

一回目のフィールドワークでは、図書館の方々のお手伝いという形で参加した。絵本の読み聞かせやワークショップ、kitokito booksの企画がありそれぞれ図書館の方々の読み聞かせ団体の「かやのみ会」のみなさんに教わりながら活動した。絵本の読み聞かせは、実際にやってみると想像していた以上に難しく、奥が深いと感じた。読み終わったときの余韻の残し方や表紙だけでなく裏表紙もしっかり見せることなど、絵本の魅力を最大限に引き出すように読むことが大切だと思った。ワークショップでは読み聞かせの時以上にお客さんとの距離が近く交流も図ることができた。Booksでは分かりにくい場所にあるからか、なかなか利用してくれる人がいなかった。一回目の活動をふまえて、新庄市立図書館に足を運んでもらうためにはどうしたらよいかをテーマに次回活動の計画を立てていった。

二回目のフィールドワークでは一回目の経験をもとに多くの人に来てもらうための取り組みをおこなった。一日目の活動では、事前準備をしていたにも関わらず、実際に行動してみると思い通りにならなかったり、どうしたらよいか分からなくなったりした時もあったが、二日目のkitokito marche本番ではその場に合わせて臨機応変に動くことができた。読み聞かせでは、まず前回の改善点でもあった呼び込みも自分たちから行くことができた。絵本を一人で読むのではなく分担しながら読むなどの工夫もできた。ワークショップでは、フォトフレーム作りをした。ただ一緒に作るだけではなく来てくれた方々に新庄市立図書館の利用の有無や図書館に対する要望などのインタビューもおこなった。また、前回とは異なって、ゲームをすることで性別を問わず多くの子供たちに参加してもらうことにつながった。Booksでは多くの人たちの目にとまりそうな場所にブースを移動してその存在やコンセプトを知ってもらうきっかけを作った。

全体の活動の中で、新庄市立図書館の周りに大きな図書館ができたりにするために利用者が減少しているということが分かった。この解決策として、今までよりも親しみやすい図書館をつくっていくというものが挙げられた。新庄市立図書館では様々な取り組みを実施している。その中で、より新庄市立図書館の良さを知ってもらうために、図書館スタッフが似顔絵やニックネームなどをかいたオリジナルのネームプレートを身につけて、接しやすい雰囲気を作りだすことが、本を借りるだけでなく人に会いに行くという目的を見だし、新たな魅力を発見する手助けになるのではないだろうか。これをおこなうことが、図書館と人をつなぐことになると考える。

地域教育文化学部 Fさん

私が今回の活動を通して学んだのは、人と人との交流の大切さである。一回目の活動では、図書館の職員の方やかやのみ会の方に読み聞かせに関するご指導をたくさん頂いた。人前で読み聞かせをすることはやはり緊張したが、温かいご指導のおかげで、当日はお客さんに楽しんでもらうだけでなく、自分自身も楽しむことができた。二回目の活動では、自分たちが主体となって企画を運営するという意識のもと、お客さんとの会話を大事にして取り組んだ。特にワークショップではお客さんと会話する機会が多く、その中で新庄市や図書館の課題を考える良い材料を得ることができた。読み聞かせやゲームでも、どうすればお客さんに楽しんでもらえるかを一人一人が考えて行動することで、地域の方々との密度の濃い時間を過ごすことができ、大変実りある活動になったと思う。

二回目の活動では各自がワークショップに来てくださった方にどこから来たのか、図書館をよく利用するか、図書館の使い心地はどうか、などと調査を行った。その中で、新庄市から来てくださった方はよく新庄市立図書館を利用する傾向にあった。しかし、その一方で、東根市や米沢市から来てくださった方は、自分の市にある図書館を利用する傾向が強いと分かった。また、kitokito マルシェや学校に来る出前図書館で本を借りたが、図書館に本を返却する手間があるという意見もあった。その原因としては、図書館の駐車場が小さく遠方から来る場合に適さないことが挙げられる。更に、中には図書館ではなく学校の図書室を利用する子供も多くいるということが分かった。以上のことから、利便性や他の図書館との差異化が無い限り、図書館の利用者数の減少化が進んでしまうことが課題だと考える。

ワークショップで得た情報から考える解決策は、図書館職員の人材を活かすことで利用者の方により図書館を身近な存在に感じてもらうという方法である。立地の点を今すぐ改善することは難しくても、図書館には個性豊かな職員の方々という貴重な存在があると考えからである。具体的な策としては、三つある。一つ目は、写真または似顔絵とあだ名を書いたネームプレートを職員の方々が生に着けることで、子供たちが親しみやすい雰囲気を作る方法である。二つ目は司書体験のイベントを設けることで、図書館の仕事の様子を身近に感じてもらう方法である。三つ目は、職員の方々がおすすめる本のポップにネームプレートと同じ写真や似顔絵を示すことで、本の魅力と職員の方々を同時によく認識してもらう方法である。以上の方法で課題の解決を目指すとともに、本と人を繋げるというこのプログラムのテーマを達成することができるのではないかと考える。



地域教育文化学部 Oさん

4日間の活動を通して、「楽しむ」ことには大きな力があるということ強く感じた。例の一つとして、読み聞かせが挙げられる。第1回目の初日、図書館ボランティアサークルかやのみ会の方々より、読み聞かせにおいて大切なことを教わった。その中の一つに、「想像を膨らませること。つまり、自分自身が楽しみながら読むこと。」とあった。そう教えていただいた後、実際に自分たちで読み聞かせに挑戦するのだが、それがまた難しい。技術的な点は勿論、恥を捨て切れず、心から楽しむことができなかったのだ。しかし次の日、実際に来てくれた子ども達を見たときに、「みんなに楽しんでもほしい」という想いが湧き上がった。すると前日と一転し、自分自身が楽しみながら読み聞かせを行うことができた。そのことにより、「楽しい」という感情には、自分を開く大きな力があるということ、強く感じるようになった。そして、教えていただいた「Listen, Open, Voice, Enjoy」から成る LOVE のルールは、これからの活動を行う上でも、大切にしていきたいと思う。また、第2回目では自分たちで考えた企画のもと、読み聞かせ・kitokito books・ワークショップ・ゲームの活動を行った。読み聞かせにおいては、6月のkitokitoMARCHE が肉を中心とした出店を行っていたため、主に食べ物関係の絵本を揃えた。更に、班員と話し合い、台詞の声を揃えたり、聞き手への呼び掛けをしたり、キャラクターによって読み手を変えたりと、聞き手に楽しんでもらえるような工夫を施した。kitokito books に関しては、認知度や関心を高めるために、ミニ kitokito books のスペースを設けた。更に、声掛けをしたことで、より多くの方にその存在を知っていただけたと思う。ワークショップにおいては、回転率や難易度などをグループで考え、制作するものや、必要となるものの配置や個数を話し合った。ゲームに関

しては、来場者に楽しんでいただけるよう、企画のもとに仲間と様々な準備を行った。当日は、多くの笑顔に出会うことができ、とても嬉しく思う。

また、この活動を通して、新庄市図書館の利用者数減少が問題となっていることが分かった。私達はその解決策として、「図書館職員の人柄を活かす」ことを考えている。そして、2つのことを提案したい。1つ目は、図書館職員が個々のオリジナルネームプレートを作成することだ。職員一人ひとりがそれにニックネームや似顔絵、装飾を施し、来館者と接することで、親近感の醸成へ繋がると考えた。2つ目は、図書館職員による本の紹介コーナーを作ることだ。そこに職員のコメント・似顔絵が添えられたPOPを設置することで、より多くの人に本や職員に対しての関心を持ってもらえると思う。これらの取り組みを通して、来館する目的が本・空間のみでなく、職員にも広がっていくことで、新庄市図書館の課題解決に繋がる、と考えている。

そして、現地の方々、サポーターの先輩、教授、グループメンバーなど、本当に多くの方々の支えが、このフィールドワークの活動に繋がっている、と感じる。そのことへの感謝の想いを胸に、今後の活動に取り組んでいきたいと思う。



地域教育文化学部 Iさん

私は全4日間の活動を通して、新庄市立図書館が本と人だけでなく、人と人をつなぐ役割を果たしているのではないかと考えた。それは kitokito marche の中で図書館のブースに足を運んでくださった方どうし、また図書館のスタッフとの会話が自然とあふれていたように感じたからだ。

私たちは新庄市で行われている kitokito marche で、絵本の読み聞かせや、ワークショップや kitokito books などの活動を行った。絵本の読み聞かせでは、役になりきったり、子供たちの反応を見て、呼びかけ

たりすると、子供たちの真剣な顔や楽しそうな顔を見ることができた。私は読み聞かせ経験がなかったため、失敗することもあったが、読み聞かせの面白さを感じることができた。

また、kitokito books の取り組みは人と人のつながりを『書く』ことで創り出していると感じた。Kitokito books では持ってきてもらった本にメッセージを書いてもらう。メッセージを読んで本を手取ることで、人と人のつながりが生まれていく。本が媒介となって人と人をつないでいくのだと思った。

私たちは活動の中で、周囲の市町村で大きな図書館やショッピングモールが新設されるなどして人が流れているために、新庄市立図書館の利用者が減少していることがわかった。この課題を解決するために「図書館について知ってもらい、一度足を運んでもらうこと」と「一度足を運んでくれた人がまた利用したいと思えるようにすること」の2点に分けて考えた。まず1つめに関しては kitokito marche での活動を通して図書館をPRすることが可能だと思う。実際に2回目のフィールドワークでは、私たち学生が企画・運営を主として行い、その中で図書館のアピールをした。フェイス等フェイスのやりとりによって、単にポスターを貼るだけでは伝わらない図書館のスタッフの方の雰囲気なども伝えられ、より印象が強くなるのではないだろうか。2つめの「利用したいと思える図書館」にするために、私は「新庄市立図書館のスタッフの方々の人柄の良さ」を活かした取り組みを提案する。今回の活動を通して、図書館の方々の優しさや温かさに触れた。また、新庄市立図書館で実施されている『赤ちゃんタイム』からも図書館の良さが伝わる。私は図書館に本や勉強だけでなく、この人に会いたいという理由で訪れてくれる人が増えるような魅力が新庄市立図書館にはある。そこで、スタッフの方の良さをアピールするために、それぞれにニックネームや好きなものなどオリジナルのネームプレートを掲げてもらうこと、そのニックネームで呼び合うことを提案する。小さいことではあるが、金銭的解決にはできない課題解決への第一歩になるのではないだろうか。

理学部 Wさん

2回のフィールドワークを通して様々な人と出会い、新庄市で多くの経験をしてまず思ったこととして「とても新庄市には温かい人が多い」ということが挙げられる。特に2回目の活動の際には私達の提案を快く受けていただき、とても充実した活動内容となった。

その中で新庄市内の商店街に出向く機会がありそこでは「100円商店街」が行われていた。そのときに会った人の話で「いつもは人通りが少ないんだよね」というものがあつた。最上地域でも人口減少や過疎が問題とな

っているという話は耳にはしていたが、実際に新庄市を訪れて改めて再認識した。新庄市の現在の課題というのはいよいよそこに帰着するように思われた。そこで新庄市という規模の大きいものではなく今回お世話になった

「新庄市立図書館」に焦点を当てることで私達でも何かしらの力になれるのではないかと考えた。

新庄市立図書館の課題は班で話し合った結果「利用者の減少」が挙げられた。その原因・理由を探るべく2回目の活動では出前図書館に来てくださった方に聞き込みを実施した。その結果、「学校の図書室を利用する」、「本の返却に手間がかかり面倒くさい」、「図書館の駐車場などが小さい等の理由で利用しにくい」といった意見を入手することが出来た。一方で、『赤ちゃんタイム』というサービスがママ世代にはありがたい」といった新庄市立図書館の利用者の声も聞かれた。これらの聞き込みや自分達が活動を通して感じたことを踏まえて、「どのようなことをしたら課題は改善の方向に向かうのか」を議論した。議論の末、『新庄市立図書館の強み・良さ』を出していくことが「利用者の減少」を少しでも改善の方向に持って行けるのではないかとという結論が出た。また、私達は新庄市立図書館の強み・良さは「図書館員の方がトの人柄の良さ」だと考え、その具体的な活動として、POPの設置（→POP作成イベント）、PV作成、ひとことノートの設置、ほかとは違った図書館員のネームプレート等を提案したいと思っている。これらの活動は図書館に来てくれる人と交流でき、図書館員の方々の人柄の良さをより多くの人に言ってもらえる機会にもなると思う。

最後に、今回の活動を通して新庄市、最上地域、山形県に貢献していきたいという気持ちは今まで以上に高まったように感じ、そして言葉では表現しきれない人の温かみを改めて知れた。この気持ちを忘れず、今後の学生生活を送っていききたいと思う。

医学部 Mさん

私たちは本プログラムで新庄市立図書館の一員として企画運営に携わった。新庄市立図書館は毎月第三日曜日に、新庄エコロジーガーデンで行われる「kitokitoマルシェ」に参加している。マルシェでは様々な野菜や食べ物、雑貨などが出品され、作る人と買う人が出会う人々のふれあいの場となっている。

人々が多く集まるマルシェで市立図書館も本と人とを結びつける大きく三つの活動を行う。一つ目は読み聞かせで、子供たちに大型絵本や紙芝居を使って本の面白さを伝える。二つ目はワークショップで、子供たちやお母さんお父さん方と簡単な小物を作る。三つ目はkitokitoBooksで、古本を二冊持ってきてその本についての紹介カードを書き一冊の欲しい本と交換する、というルールによってコミュニティを作る。

第一回目の訪問では一日目に「kitokitoマルシェ」の

会場視察を行った後、図書館ボランティアサークルの「かやのみ会」の皆さんから読み聞かせのご指導をいただいた。二日目には実際に「kitokitoマルシェ」への図書館の参加の運営に携わり、「かやのみ会」の皆さんにサポートしていただきながら、子どもたちに向けて読み聞かせを行い、ワークショップではコーヒーフィルターを作った。この訪問を通して、私たちはマルシェを新庄市立図書館に足を運ぶきっかけにするという課題を設定した。

第二回目の訪問では一回目の訪問での反省や見つけた課題をもとに、企画から自分たちで考案した。読み聞かせでは読みたい本をあらかじめ選び、班のメンバーでナレーターや役柄で読む箇所を分担することでより聞きごたえのある作品になるように計画した。ワークショップでは前回の聞き込み調査での結果をもとにフォトフレームを作り、宣伝効果を期待して、完成したフレームには小さなサイズの市立図書館の広告をはさんだ。また子どもたちに楽しんでもらい、かつ集客をねらうという目的で簡単なボール投げゲームも用意した。さらにBooksでは前回のマルシェで設置した場所が建物の二階だったため、あまり多くの人に利用してもらえなかったという反省をふまえ、外に古本の一部を移動し来場者を建物まで誘導することで集客した。

計二回の訪問を通して、聞き込み調査の結果、新庄市立図書館は様々な新しい企画に取り組んでいるのにもかかわらず、堅苦しく古いイメージがぬぐいきれていないことがわかった。そのため新たな宣伝方法を確立することは今後必要不可欠である。また利用者数を増加させるための解決策としては、図書館のスタッフの方々をより親しみやすい存在にして気軽に足を運ぶことができる新しい図書館のイメージをつくることがあげられる。



工学部 Yさん

私は、二回のフィールドワークを通して、普段の大学生活ではできない体験や経験をすることができた。今回の活動を通して、班員や図書館の方々、kitokitoマルシェや新庄市の方々の優しさを強く実感した。二回のフィ

ールドワークで何度もやった話し合いにおいては、お互いの意見を尊重して、連絡を密に交わして素晴らしい協力ができた班員たちには特に感謝している。

一回目のフィールドワークの一日目では、kitokitoマルシェやkitokitoBooksについての説明、新庄市立図書館の現状や一回目のフィールドワークでの企画についての説明を受け、読み聞かせの方法についての指導を受けた。二日目は図書館の方々が用意してくださった企画の一員として参加した。その中で、二回目の参加において企画を考える上での問題点や条件について。また、移動図書館としてマルシェに参加する上での課題を実際に見たり聞いたりした内容、またワークショップへの来場者の方々への聞き込みをもとに考えた。その結果、kitokitoマルシェに来て、移動図書館の企画に来場しても、図書館への来場につながりにくい点、Kitokitoマルシェの中心地から離れており、誘導も来場もしづらい立地にある点、ワークショップは独創性を出しやすく、安全・簡単・素早く作れる必要があることが挙げられた。また、kitokitoBooksについては、二階の奥にあるため、知られづらい、心理的に入りづらい点が挙げられた。

一回目のフィールドワークで見つけた課題解決に向け、二回目のフィールドワークでのkitokitoマルシェ・kitokitoBooksの企画を任された。班内で何度か企画会議を行い、ワークショップでは厚紙を使ったフォトフレーム作りを行うことにした。また、ワークショップで席が不足し、待ち時間が生じていたことを踏まえて、待ち時間解消の目的でボールを投げて箱に入れるゲームを企画した。kitokitoBooksでは、立地の悪さを補う方法が主に話し合われた。解決策として、本の一部を休憩室として利用されていた二階入り口付近・また、kitokitoマルシェの間、人の目に触れる屋外に持ち出して誘導するという方法があがった。

二回目のフィールドワークにおいては、ワークショップの席の数を増やすことで満席になることがなかったため、kitokitoマルシェが始まってからしばらくして、ゲームをより人目に付く所に動かし、人を集めたうえでワークショップや読み聞かせに誘導するようにした。また、一回目のフィールドワークと同様に来場者の方々への聞き込みを行い、新庄市立図書館の来館者数減少の原因を探った。

二回目のフィールドワークでの聞き込みで、来館者数減少の原因として、書店や学校の図書室との差別化ができていないことが課題としてあげられた。

この問題を解決するために、私たちの企画に協力的に参加して下さり、終始フレンドリーに接して下さった、図書館の方々を活かすことが対策として挙げられた。具体的な方法としてPVの作成やネームプレートを作って話しかけやすい雰囲気づくりをするといった方法が出た。

今回のフィールドワークを通して、様々な人の協力を

得て一つのことを作り上げる体験ができた。



農学部 Sさん

私たちは、このフィールドワークで新庄市立図書館の職員の一員として企画や運営をした。kitokitoマルシェという毎月第三日曜日に行われるイベントの手伝いをした。

このフィールドワークを通して、私は人とのかかわり方や仲間と何かに向かって頑張ることの楽しさを学んだ。一回目の活動では、新庄市立図書館の職員の方が考えてくださった企画を自分たちの力でこなすというものだった。読み聞かせは初めてで最初は人前で役を演じることにに対して恥ずかしさがあった。だが、職員の方々のおかげで成功をおさめることができたし、何よりも自分が楽しんでできた。二回目の活動では、読み聞かせの本もワークショップも何をやるか自分たちで一から考えなければならなく、とても大変だった。少ない時間の中で何度も話し合いを重ね、お客さんに来てもらうためにより良いものができたと思う。

自分たちでワークショップに来てくださった方にお話を聞いたり、図書館の利用データなどから、新庄市立図書館の利用者の減少が課題にあげられた。来てくれた小学生の中には、学校の図書室には行くという人もいた。また、親からは駐車場が狭くて利用しづらいという声も聞こえた。さらに、返す手間がかかるから面倒くさいという声もあった。また、最上地区には大学などがいないため人口の流出が激しいという声も聞き、そ何か策を取らない限り、利用者はさらに減少していくと考えた。

自分たちがお話を聞いた意見などから、利用者の減少を少しでも止めるために、新庄市立図書館の職員のいい人柄を活かして図書館をより身近に感じてもらうことが大事なのではないかと思った。職員のニックネームを書いたネームプレートなどを毎日してもらうことでより親しみやすくなり、あの人がいるから図書館に行こう！と思ってもらうことが目標だ。私たちにできることは本当に少ないし小さいものかもしれないが、今私たちにできることでこれが一番いい案だと思った。この案で少しでも利用者が増えたりしたらうれしい。

山間地の宝物を探そう

活動状況

○実施市町村：金山町

○講師：須藤功、石井芳五郎、斎藤正昭、中野光雄、岸末吾、須藤幸一、岸浩樹、岸吉三郎、柿崎喜一、樋口勝也、小野花子、岸ミツ子

○訪問日：平成30年6月9日(土)～10日(日)、7月7日(土)～8日(日)

○受講者：短期留学生1名、人文社会科学部2名、工学部2名、農学部5名 以上10名

○スケジュール：

1回目	2回目
【1日目】6月9日(土)	【1日目】7月7日(土)
08:00 山形大学発 10:00 道草ぶんこう着 10:10 開講式 講話「山里の今と昔」 オリエンテーション 11:30 昼食準備 12:00 昼食 13:00 畑の体験(植え付け) 15:00 田・畑・川の生き物調査 17:00 入浴 18:00 ホームステイ 19:00 蛍の観察	08:00 山形大学発 10:00 道草ぶんこう着 10:10 オリエンテーション 10:30 笹巻づくり体験 笹の採集、笹巻をつくる 11:30 昼食準備 12:00 昼食 13:00 リースづくり 17:00 入浴 18:00 ホームステイ 20:00 山間地の夜を体験
【2日目】6月10日(日)	【2日目】7月8日(日)
06:00 朝仕事に挑戦 07:00 朝食 09:00 畑の体験収穫 11:30 昼食準備 12:00 昼食 13:30 ライブコンサート 14:00 世代交流 (または街並み見学) 16:00 道草ぶんこう発 18:00 山形大学着	06:00 朝仕事に挑戦 07:00 朝食 09:00 畑の体験収穫 11:30 昼食準備 12:00 昼食 13:30 ライブコンサート 14:00 世代交流 (または街並み見学) 16:00 道草ぶんこう発 18:00 山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

短期留学生 0さん

二回目のフィールドワークはもう終わった。もがみで色々勉強になって、考えた。第一回行く時、まずぶんこうに行く時は先生とあいさつして、本日のプログラムの内容について説明してくれた。美味しいカレーライスを食べた後、畑に行った。みんな一緒に大根を植えた。中国でずっと都市で育てられているので、農業をすることはなかなかない。最初は簡単だと思うけど、鋤で字を書くのは大変だ！力が少なくて、何が書くのは全然わからない。その後、先生と一緒に川の生き物を調査して行った。金山町の川がきれいし、空気も美味しい。残念ながら何も捉えないけど、楽しかった。第二日は山菜を摘み、縄ない体験した。日本の伝統的な文化を体験するのはほんとに面白かった。第二回行く時に、笹取りと植え付け体験の様子を観察した。大根はもともと「道草」のように植え付けたけど、今はただ「くさ」がわかる。それはたぶん人生だ。自分の努力をしたけど、円満じゃないことは時々だ。午後みんなと一緒に縄を使って「リース」を作った。自分の願いを込めてリース作って、飾っているとき、本当に面白いと思う。第二日、そばを作った。実は中国でそばを見たことがあるけど、日本との全然違うと思う。斎藤先生がプロだから、作り様子を見ると、すごいと思う。みんなと一緒にすごく楽しかった一日を経た。

二回のフィールドワークした後、みんなとなかよくなって、楽しかった。私は外国人だから、日本語はあんまり上手ではないけど、皆が優しいで、いろいろお世話を焼いてくれた。先生と地元の人とも親切で、最終回で帰りたくない。金山でいい思い出をできた。

実は私は金山町に行ったことがありました。金山町で観光して、森の遊学館に行きました。山の中で自然を体験するのは快いと感じる。今回はもっと体験した。違う金山の魅力を見つけた。私の留学生活はもういよいよ終わった。幸いで最後の三か月で金山の人たちと一緒に日本の自然を体験して、一年生たちと一緒に遊び、話してきた。帰国したら、きっと懐かしくなるだろうと思う。

金山で勉強しているときに、人が少ないと思う。確かに、今の日本は高齢少子かになった。しかし、東京の青梅や北海道の小樽のような田舎もたくさん観光客があった。金山で宝物を探すときや、街並みしているときなど、金山町は本当に美しいところだと思う。しかし、その町と自然の魅力を伝えなければ、そんなに美しいところは無駄になるだろう。だから、私たちの課題はその自然と町の魅力を伝えることだ。豊富な自然がある日本だから、東北地方の特別な魅力を外国人に伝えるなら、観光客を引き付けることができ、地域振興するのはでき

る。そして、いろいろな観光プログラムを作成して、自然を体験したい観光客を引きつけたほうもいいと思う。



人文社会科学部 Sさん

今回のフィールドワークを通じて、様々な体験をすることができた。自分は今まで金山町のような自然がいっぱいの町に行ったことが無く、むしろ自然が少ないところで育ってきたぶんどの体験もとても新鮮に感じた。特に縄ない制作や笹巻、そしてそば打ちはこのプログラムに参加しない限り、自分の人生の中で経験すること無かったと感じた。また、直接現地に行き自分の目で見ることで分かることも多いと感じた。実際に、事前学習で金山町について調査し、写真でどのような町か調べたが、実際見てみると違っていたという点がいくつかあったのもそう考えたうちの一つに理由である。そして、6月と7月の計2回にわたって金山町を訪れて、自分自身が感じた金山町の課題は、とても良い町なのにも関わらずその魅力を他の町に伝えきれていない、また実際に金山町を訪れるまで町の魅力や伝統が分からないという点だと思った。

金山町の魅力は自然と伝統の2つに分けられると考える。まず自然に関しては、山菜が豊富にありどれもが美味しいこと、また、山に生えている草木の色が豊富で緑は緑でも様々な緑があることだと思った。山菜取り体験で山に入ると沢山の種類の山菜が生えていて、金山町の方がたくさん紹介してくださった。自分はフキとワラビしか聞いたことが無かったので山菜の種類の多さに驚いた。また、それらを使った山菜料理も食べたが、どの料理もおいしくまさに金山町の素晴らしい点の一つだと思った。だが、これらのことは自分が実際に金山町を訪れないとわからない点の一つにも含まれる。加えて、山菜料理の味などは実際に行って現地の方と作らないとわからないとも考えた。山菜のおいしさをもっと他の地域に伝えるべきだと思った。

次に伝統に関してだが、自分が体験した金山町の伝統は縄ないと笹巻体験だった。どちらも金山町に行くまで聞いたこともなかった伝統だった。だが実際に体験してみると難しいながらも縄ないでリースを制作したり笹

巻を昼食にしたりなど伝統文化を通じて現地の暮らしまで体験することができた。さらに、2つの伝統文化を自分のものにすることができた。

以上の2つの金山町の魅力を他の町や地域に知ってもらうために実際に泊りがけで金山町の暮らしを体験するプログラムを企画してみてもどうかと考えた。インターネットを利用し世界中にネットワークが広がった今だからこそ日本だけでなく海外にもプログラムを宣伝することができる。そうすることで金山町の素晴らしい山菜や伝統を広められることができるのではないかと私は考えた。



人文社会科学部 Aさん

このものがみで、金山町の魅力がたくさんあることが、実際に行き、見たり聞いたりして体験することで、よくわかった。しかしこれらの魅力に似合ったほど、この町以外の人に伝わっていないことが、この地域の課題ではないかと思った。

課題に対する提案

何の関連のない土地に、突然魅力を感じる人は、それほど多くはないと思う。また田舎での人口減少について、金山町と同様、わたしの地元でも問題としてあげられているが、わたしの地元では震災からの復興をかねて、ある方針がある。人口減少は仕方がないと考え、観光客でまちを活性化させようという考えだ。これらを参考にいくつかの考えを提案する。

1つは学生が金山町に訪れ、そこならではの農業や川、山菜などの体験ができるプログラムをもっと促進させることだ。なぜなら実際わたしは、この授業のおかげで、金山町のことを知ったからだ。何かしらのきっかけがないと、魅力を感じるには少し難しいはずだ。またこれは大学生に限るわけではないが、わたしのような県外から山形に来た大学生は特に魅力を感じやすいと思う。次に日本に関心がある外国人に、金山町のことも知ってもらうことだ。日本にあまり興味もっていない外国人は、おそらく日本のまちについてもそこまで興味を持たないだろうということで、あえて日本に関心のある人に絞った。金山町の魅力をYouTubeやその広告にあげる、

このとき大切だと思うのが、視聴者が飽きないよういかに短時間で、彼らの目を引くかということだ。また実際に山形県に来た人に、ポスターやチラシを用いて山形駅で宣伝するのも、県内のため訪れやすく、効果的ではないかと考える。

わたしは今まで経験したことのない、ホテル観察とホームステイに惹かれて参加した。暗闇で光る小さなホテルの光景は、今後もずっと目に焼きついているだろう。優しいお父さんと明るくて元気なお母さんのホームステイではBBQをしていただいたり、自炊のコツなども教わったりした。

またホームステイを含め用意していただいた食事思い出だ。普段食べない、ゼンマイ、ミズ、フキなどの山菜はとてもおいしかった。縄ないや笹巻きづくり、そば打ちなど、すべてが貴重な体験となり、充実できたのは、グループのメンバーやサポーターさん、金山町の方々のみんなのおかげなのでしっかりと感謝したい。

工学部 Tさん

私は、初めて広大な自然に触れることができた。初めての広大な自然は自分が思っていた以上に綺麗で、言葉では言い表すことができないほどの魅力を感じさせてくれた。川の生き物調査や畑仕事にチャレンジすること、その町の郷土料理の勉強や実習はどれも新鮮で常にワクワクしながら取り組めた。この町に来ることができて本当に良かったと思う。

私が感じたこの地域の課題は、自然や人の温かさなど多くの魅力を抱えているのにそれに対してその魅力を発信する手段が少ないということだ。この町に訪れた人で感動し再び訪れることもしばしばあるという話を何度か聞かされた。この町は実際に現地を訪れてみれば、その魅力に圧倒され感動し「また来てみたい」と思わせるほどのものがあると感じた。現地の人々の目標は、この地に来た人たちが何十年後か何年後かにふとまた来てくれるような町を目指しているということをおっしゃっていった。

私が考える多くの魅力を抱えているのにそれを発信する手段に乏しいという課題に対する解決策は、サマーキャンプとお祭りだと思う。なぜこの二つを考えたのかというと、現地の人がおっしゃっていたように実際にこの町に来てみて何十年後か何年後にまた訪れてくれるような町にしたいということが目的なので、まずは実際に訪れる機会を増やさないといけないと考えたからだ。サマーキャンプは、小さな子供たちが現地に訪れて普段関わる機会が薄い自然と触れ合うことによって記憶にも残るし、何十年後かに思い出して訪れる可能性が増えると考えたからだ。それ以外にも小さな子供たちは、自分の思ったことを正直に言うことが多いので、実際に訪れた子供たちから周りの子どもたちや保護者の方々にまで楽しかった感想を伝えてもらえればより多くの人

に訪れてもらえると考えたからだ。

お祭りは、実際のこの地域を写真に写してその写真をポスターにすれば、この地域がどんな所か一目でなんとなく理解することができ、お祭りに興味がある人はお祭りに来るように宣伝でき現地に来る人を増やせるとかんがえた。しかし、この町は山形からまたほかの町からは少しばかり離れたところにあるため訪れにくいという人もいると思う。そこで、このお祭りの日だけ、臨時のシャトルバスを出せばよいと考えた。また学生が多く訪れるように前々から、どのような屋台やイベントがお祭りに必要ななどのアンケートなどをとるなどすればより多くの人を訪れてこの町の魅力に触れてくれると思う。

工学部 Sさん

フィールドワークの計四日間でたくさんのことを体験しました。一回目の活動では農業体験や山菜採り、縄ない体験などの初めての体験ばかりでした。特に縄ない体験では最初のコツのつかみづらさはかなり苦労しました。しかし、だんだん途中からコツをつかみ始めると楽しくなって、黙々と縄をない続けることができました。終わった時には自分はこんなにもなったのかという気持ちになるほど長い縄ができていて驚きました。二回目の活動では、一回目に作った縄を用いてリースづくりをしました。その作ったリースでは自分の中の想像力をフルに活用して自分だけの逸品を作ることができたと思います。ほかにもそば打ち体験やライブコンサート、金山町の街並み見学などをしました。そば打ち体験ではうまくいかなかったことのほうが多くなった気がしましたが、みんなで協力して楽しく作り上げることができました。味もおいしくできたので良かったです。

フィールドワークを終えて金山町が抱える課題の中で、私が最も課題であると感じたことは金山町の景観100年計画を推進している最中ではあるものの、すでにかなり景観がきれいだとみて感じました。特に荘内銀行付近の公園の鯉のいるところや、喫茶店などのしゃれた店などもあるにもかかわらずその魅力を我々に発信できていないことが挙げられます。街並みの景観は見に行くまで全く知らなかったのが初めて見たときには、かなり驚きました。山形県内にこんな街並みがあったのか、と。鶴岡出身の私には城下町であった過去があるといえども、私が想像する鶴岡の城下町といえばシャッター街のイメージしかありませんでした。しかし、この金山町は、景観を保全するだけでなく、それを広めようとしていて、そういった点でかなり金山町の景観に魅かれています。

金山町の魅力を不特定多数の人々に伝えるとしたら、やはりSNSが挙げられます。しかし、ツイッターなどすでにある公式の金山町のアカウントの認知度は低いです。それならば、無理に公式アカウントの認知度を上げ

るのではなく、伝えたい金山の魅力を訪れた人たちに発信してもらえばよいのです。そうすることによって、うまく発信できれば、金山町の魅力である景観を見るために観光客が増え、地域の活性化につながると考えます。



農学部 Tさん

今回のフィールドワークを通して、金山町の魅力や人々の温かさや大自然を感じることができた。1回目の1日目ではこの先どうなるのこんな田舎でとかあんまり優しく出迎えてくれないのではないかと心配だった。しかし、そんな不安は消し去り、いろんな体験をしてもっと一緒にいたいと思えるほど金山町が大好きになった。自然に関して言えば、子供のころに経験したような森に入って遊んだり、川に入ったり、工作をしたり、懐かしさも込みでいい体験だった。金山町の人々はほんとにいい人ばかりで進んで話しかけてくださったり、おいしい料理をごちそうしてくれたりと地元民でもない私たちに優しく接してくれた。本当に貴重な体験ができて、一生思い出に残る体験となった。

今回のフィールドワークを通して金山町に対して感じたことは、こんなにいい街いいところであるのに金山町のよさを全くもって発信していないことだ。フィールドワークで金山町の中心部を見に行っただけですが、金山町の日本家屋や整備された公園、おしゃれなカフェなど今話題のインスタ映えしそうなスポットばかりだった。もっと発信する方法があれば若者も集まり町が活性化。そうするといろいろな問題が解決されていくと思う。また、今回縄ないと呼ばれる手作業でわらを使い縄をつくる体験をした。その時にとっても年配の先生（80歳代）が来て縄ないを教えてくれたが、その次の世代である60歳代の方々には縄ないの文化が伝わっていなかった。集落内でも文化が伝わっていないことにとっても不思議に感じたし、とても悲しくなった。集落内でも知らない人がいるのは文化が消えていく寸前だと思った。

金山町魅力を発信する方法として、若者に発信したいのでSNSで魅力を伝えていくのがいいと思う。金山町のきれいな風景を写真でとってSNSにあげ、こんなにも綺麗な場所が金山町にあることを伝えたり、金山町なら

ではの食材を使った見た目が特異的で、味がおいしいものを開発して、SNSに挙げたりすることが重要だ。若者の間で火が付けば、この町に住みたいと思ってくれる人まで出て来たりすることがあると思う。また、金山町内での文化の継承が行われていない問題については、金山町で文化継承会を開き、文化をつないでいく活動をすればいいと思う。なぜなら、金山町が好きな人が金山町に残っていると思うからそういう方々は地元を誇っているから進んで文化を学ぼうと思う。

農学部 Kさん

私は山形出身ですが18年間金山町を訪れたことがありませんでした。そこで、金山町にはどんな文化・資源があり、どんな人々が住んでいるのかを知りたいと思いこのプログラムへの参加を決めました。

1回目の活動で印象に残っているのは、川の生き物調査と縄ないです。川の生き物調査で最初に思ったのは川が綺麗だということです。いつも目にする川とは透明度が全く違ったので驚きました。魚を見ることは出来ませんでしたが、水中昆虫やカエル、トンボを見ることが出来て良かったです。縄ないは私が小学生の時に地域の運動会で競技として扱われており、どのように縄をなっているのか気になっていました。その当時は、おじいさん達があまりにも早いスピードで縄をなうので意外と簡単なのではないかと思っていました。しかし、実際にやってみると上手いかわず苦戦しましたが、最終的には「もう人に教えられるな」と言われるほど上達できたので嬉しかったです。

2回目の活動で印象に残っているのは、蛍の観察と街並み散策です。この日は気温が低く蛍は出ないだろうと言われていましたが、ホームステイ先での夕食後に道路を歩いてみました。そうすると、予想以上の蛍が飛び交っており感動しました。街並み散策では、金山杉造られたきごころ橋や鯉がたくさんいる大堰など心が安らぐ場所がたくさんあるとわかりました。

課題としては訪問者に警戒心を抱いてしまうということだと思います。今回のフィールドワークでも運営委員会の方やホームステイ先の方以外との接触がありませんでした。しかし、金山町の方々はとてもいい人ばかりです。会えば挨拶をしてくれたり、「どこから来たの?」と話しかけてくれたり、ホームステイ先で家族のように招き入れてくれました。確かに警戒心はあるかもしれませんが、こんな人がいるんだとわかるのは訪問者の安心にもつながると思います。なので、行事への参加や歩いているとのコミュニケーションを図ることで人柄の良さも伝わり訪問者が増えることに繋がるのではないかと思います。

今回のフィールドワークを通して得るものはたくさんありましたが、金山町に対して思うことは「また行きたい」ということです。金山町の人々は優しく、自然もた

くさんあり、普段得られないものがたくさんありました。この経験を忘れず、また、この経験をたくさんの人に伝え、金山町を訪れる人を少しでも増やせる力になりたいと思います。



農学部 Aさん

私は、今回のフィールドワークに自然が好きで、「蛍が見てみたい」という他の人に比べて、安易な考えで参加したが予想以上にいい体験ができた。町に住んでいたら見ることでできない山、川などの自然や、普段味わうことのできない山菜、なわな、そば打ち、どれも大学生時代の今回のフィールドワークの時くらいでしか体験できない貴重な体験だった。

今回のフィールドワークで、私が思う金山町の課題はやはり、人口の少なさと少子高齢化だと思う。私たちの班は、主に道草分校という小さな児童教育機関で活動したが、そこであった子供たちは、全員あわせて8人ほどで小学校のすべての学年が存在しないような少なさだった。二日目の街並み見学で金山の街を歩いて、一通り散策したが、人にあまり会わず、あっても高齢者だけしかいないイメージであった。

このような課題を解決するために、私が考える解決策は、もっと金山町のことを他の地域へアピールすることだと思う。前述で、街並み見学をしたときに人にあまり会わなかったと記述したが、街並みの方は、町の条例で、白塗りの壁や漆喰の屋根など景観整備されたものであり、京都の町を彷彿させるようなよい街並みだった。これらのことを、他の地域へアピールすることができれば、自然と人口増加に繋がると思う。

では、どのようにしてアピールしていくのか。小さなアピールではさほど影響力がありません。従って、今回のフィールドワークのように実際に普段できないことを体験させて、魅力を伝えていく、そういったやり方が、一番ダイレクトでいいと思う。具体的な方策としては、やはり次世代を担う若者人口の不足が深刻だと思うので、若者を対象とした農業体験の実施や、住民増加を目的としたホームステイ、家の貸し出しなどがより効果が期待できると思う。私自身もホームステイをさせていた

だいたが、自然に囲まれたロケーション、おいしい空気と旬の食べ物、ホームステイの方々との世代を超えたお話などが体験できて、とてもアットホームで田舎の良さを実感できた。

今回のフィールドワークを通して、金山町の良さや田舎ならではの暮らしを体験することができた。自分自身が体験したい町だったからこそ、金山町のさらなる発展に少しでも助力できたらいいと思った。

農学部 Kさん

初めに、私がこのプログラムを選んだのは、川の生き物調査と蛍観察に惹かれたというのが大きな理由だ。また、私の出身が福島県の平野部だったということもあり、山間部の暮らしがどういったものなのかが気になったというのも大きい。そんな理由から、選んだプログラムであったが、実際に金山町で四日ほど過ごしてみて、一番印象に残ったのはやはり緑が多いということだ。バスで移動しているときも思ったが、山の緑に加えて、田んぼの緑といった、辺り一面緑の景色にすごく衝撃を受けた。さらに、体験やホームステイを通して町の人と関わったり、山間部ならではの山菜料理を提供してもらったり、たくさんの昔話をしていただいたりとかかなり充実した四日間だったと思っている。プログラム自体はゆったりとしていたが、それも含めて田舎の良さを知りたい時間だったのではないかと考えている。

自然と共に暮らしてきた人々の生活の歴史そのものが、金山町という町の宝物なのではないかと私は考える。

体験プログラムにあった、そば打ちや蛍観察はとても新鮮だった。そば打ちは初めて行ったし、粉の混ぜ方・練り方のコツも初めて知ることが多かった。蛍は、テレビで見たことはあったが、実際に自分の目で見たのは初めてで、暗闇の中でひっそりと点滅する光がきれいだった。

また、ホームステイ先の方々や、地元の方々から金山町の歴史を聞いてきた。その中で、昔とは環境が変化していて動物も山菜も少なくなっている、町の人にはよそから来た人と関わりを持たずとしない、子供が少なくなっているということを知った。こういったものが金山町の課題だと思った。そしてこれらの話を聞いて、思ったのは町の魅力を伝え、地域活性化を進めることで解決できるのではないかと考えた。町の魅力が伝われば、観光客が増え、金山町に住みたいと考える人も少なからず増えるだろう。

では、どうすれば観光客が増えるのだろうか。私が思うのは、まず外国観光客数を増やしてみることだ。外国観光客は意外と行動範囲が広く興味があるところには足を運ぶ傾向がある。外国観光客が増えるとそれだけで話題になり、日本人も興味がわく人が増える。こういったサイクルにより観光客の増加が見込めるのではないだろうか。また、町の魅力発信のために海外向けの

ホームページの作成や、空港でポスターによる宣伝を取り入れるなどを行ってみるのもよいと思った。

さらに、外国観光客の翻訳には山大生が関わっていけば大学生の国際性も高められ、町の活性化にもつながると私は思った。

農学部 Sさん

私はこの最上フィールドワークを通して田舎である良さを改めて感じる事ができた。それは都会ではなかなか見ることができない鮮やかな緑がたくさんある森、絶滅危惧種に指定されている生き物などが数多く生息していることや、私達を快く向かい入れてくれた金山町の人々に触れやはり田舎には都会では体験できないことがたくさんできると感じる事ができたからである。

またこのフィールドワークのテーマでもある山間地の宝物を探そうということも十分にできたのではないかとおもう。

金山町での体験、なわなや山菜採りなどの伝統あるものや、その地域でよくとれる山菜を収穫し調理して食べるということであったり、川での生き物調査のようなそこでしかできないものなどを通して私はとても多くの金山町の魅力というものを知ることができたが、これは体験した人にしかわからないものでもある。

今回の実習場所である金山町は人口5000人程度の小さな町であり、やはり山間地でもあり交通の便も悪いいためどんどんと人口は減っていつている。そのためかつての活気ある金山町に戻すためには人口を増やしていかなければならないと思ったが、この町の魅力は実際に体験しなければ、伝わりづらいものであるため、この町の魅力をどう伝えるかが、これからの課題ではないかと私は思う。

そこでこの金山町にきてもらうためには金山町という名前を知ってもらい興味を持ってもらう必要がある。そのためには金山町の特産品などをブランド化するなどして全国各地に売り出していくことも一つの手段ではないだろうかと思ふ。そのあとで金山町の魅力を目で見て感させ、また食べることで感じてもらうプログラムなどを組むことができれば魅力が伝わるのではないかと思ふ。またその時に農家の家などに民泊をするというような形をとることができれば、より濃縮した体験をさせることができると思ふ。

このようにとても多くの魅力がある地域でもその魅力を伝えることが出来なければ金山町のように人口が減っていつてしまひ後継者などがいなくなり伝統を守ることも難しくなってしまう。ただ今回フィールドワークでお世話になった金山町の魅力はとても奥が深いものであり、私達自身がこの魅力を発信できるように尽力していきたい。

森と人との共存を考えるⅠ～山間地の歴史を探り地域振興へ～

活 動 状 況

○実施市町村：金山町

○講 師：遊学の森案内人会 会長 星川隆弘

○訪 問 日：平成30年5月12日(土)～13日(日)、6月9日(土)～10日(日)

○受 講 者：人文社会科学部1名、医学部1名、工学部3名、農学部4名 以上9名

○スケジュール：

1 回 目	2 回 目
【1日目】5月12日(土)	【1日目】6月9日(土)
08:00 山形大学発	08:00 山形大学発
10:00 遊学の森着	10:00 遊学の森着
10:15 オリエンテーリング	10:30 巨木めぐり
森を楽しむ講座Ⅰ	12:00 昼食
12:00 昼食	15:00 水辺フォーラム(ビオトープ観察会)
13:00 森を楽しむ講座Ⅱ	16:00 終了(荷物分け 運搬)
16:00 夕食準備	16:00 夕食準備
18:00 入浴	18:00 有屋少年番楽 学校へ出発
19:00 夕食、地域交流会	19:00 地域児童交流会～20:30
就寝	21:00 入浴
	22:00 ミーティング
	就寝
【2日目】5月13日(日)	【2日目】6月10日(日)
06:30 起床、朝食準備、部屋の片付け	06:00 起床、朝食準備、部屋片付け
07:30 朝食、片付け	07:00 朝食、片付け
09:00 森の恵みを味わう講座	08:30 地域交流(下向地区まつり)
12:30 昼食	昼食(各自)
13:00 スポーツ GOMI 拾い	13:30 遊学の森へ移動
15:00 ミーティング	14:30 プログラム発表会
15:50 解散	15:50 解散
16:00 遊学の森発	16:00 遊学の森発

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 0さん

今回のフィールドワークでは、様々な実体験を通して中山間地域の魅力や現状、課題について深く考えさせられました。また、知らない土地・人との関わりが多かったので自分自身も一回り成長できたと感じています。一回目のフィールドワークでは、遊学の森の方々の案内により他では見ることのできないブナ林や、宮地区の壮大な崖のある竜馬山など豊かな自然の中を歩きました。活動を通して、森林資源と住民の方との強いつながりを感じたと同時に現代の過疎地域の問題に直面しました。町の名所の看板は景観重視のため設備されてなく、観光スポットとして活用されている様子が見受けられませんでした。二回目のフィールドワークでは有屋の名所を地区長の方々と交流しながら見て回り、人工の湿原であり絶滅危惧種も生息しているビオトープや、有屋小学校の生徒による有屋少年番楽の鑑賞などを行いました。さらに、下向地区のお祭りに企画、運営に携わることが出来ました。二回目のほうでは住民の方と交流させていただく機会が一回目より多かったため、町の声・想いを聞くことができました。フィールドワークを通し、地域の課題として住民が町の魅力に対し積極的でないということに気づきました。有屋の魅力は豊かな自然と古文書にも載るほどの深い歴史、文化、さらに地域の方々のつながりの温かさなど、定住したくなる理由はたくさんあります。しかし、住民の方に定住の理由を尋ねてもこれといって特になかった様子で、魅力に気づいてないということがわかりました。

今回私たちは住民の方に有屋のマップ作りを依頼されていました。私たちは上手く住民の方の「定住してもらいたい」という想いをくみ取ることができず、観光目的のマップを作成してしまいました。しかし、どうにかして住民の方々の想いにお応えしたいという気持ちとマップも未完成であるということから、もう一度いちからマップ作りをすることにしました。自分の足で学んだことを、何かの形に残すという作業はとても大変ですが、フィールドワークの授業としてやりがいを感じています。地域の方がマップを見た際に魅力に気づき、「自分たちの住む有屋にはこんなに良いところがあったのか！」と誇りに思ってもらえるようなマップを作成したいです。

医学部 Sさん

4日間のフィールドワークを通して最も印象に残ったことは、どこを見回しても360度自然に囲まれているということと、地域の人々のつながりが深いということです。普段コンクリートジャングルの中で生活している私

にとってはとても新鮮な光景でした。

1回目のフィールドワークでは、主に有屋地域の自然について学びました。荘厳な佇まいで、四季折々の表情を見せる竜馬山をはじめ、林の中に入ると自然の力強さが伝わってくるブナ林、有屋地域でどこでも採れる新鮮な山菜、絶滅危惧種が生息しているビオトープなど、有屋地域にしか無い自然を感じることができました。

2回目のフィールドワークでは、主に有屋地域の文化について学びました。歌と演奏と舞からなる有屋少年番楽を鑑賞し、その技術の高さから、伝統がしっかりと受け継がれているということが感じられました。また、下向まつりという地域の祭りにも運営側として参加させていただきました。手伝いを申し出るという小学生の自発的な行動や魚の内臓を取ってそのまま川に流せるということは、地域の人々のつながりが深く、人の暮らしと自然が密接だからこそ生まれたものだと思います。今回講師の方々から、有屋地域のマップを作成するという課題が出されました。テーマは「有屋地域の定住」です。「遊学の森」という施設では、森と人との共生をテーマに、地域活用資源の掘り起こしから地域振興へ・生物多様性から地域振興へ・地域の衣食住の伝承から地域振興への3本柱で地域振興に取り組んでいるそうです。しかし、大都市に出て行き、そのまま戻ってこなくなる若者も多いそうで、実際フィールドワーク中に私と同世代の人を見かけることはなく、過疎化が進んでいるように感じられました。そこで、有屋地域の定住を促すには、地域の住民が当たり前だと思っている有屋の魅力を再認識してもらうことが一番であると考えています。4日間という短い期間でしたが、上述したように、有屋地域にしか無い多くの魅力を学ぶことができました。これらのことを一目でわかるマップで表現して、私たち大学生から見た有屋地域には多くの魅力があるということをお伝えられたら良いと考えています。

4日間のフィールドワークでは、今までに体験したことのない様々なことを経験させていただき、心身ともに成長することができたと感じています。大変お世話になりました。ありがとうございました。



工学部 Sさん

今回のフィールドワークでは、金山町有屋地域の名所である「竜馬山」や「大美輪の大杉」や「ブナ林」などを見学させていただいただけではなく、有屋地域の人たちからお話を聞くことでこれらの場所の有屋地域の人々とのかかわりや伝承や歴史についてを教えてくださいることができました。これらのことは、実際に金山町有屋地域を訪れ有屋地域の人々からお話を聞くことができるフィールドワークならではのものだと思います。また、有屋地域では有屋地域の若い人たちが伝統的な文化や行事である「有屋少年番楽」や「下向地区の祭り」をこれからも残していこうと企画や運営を行っているということに感心しました。

実際に「有屋少年番楽」を見たり、「下向地区の祭り」に参加させていただくと、小さい頃から地域の伝統芸能に触れることができたり、地区の人どうしのつながりがとても強いように感じました。

そして、このフィールドワークを通して、私は金山町有屋地域の課題は二つあると考えました。

一つ目は、有屋地域の人々自身が有屋地域の魅力に気が付いていないということです。

有屋地域では年々若い人たちが有屋地域から出て行ってしまっ地域社会の形成が難しくなっているそうです。そこで、遊学の森の職員の方々と私たちが初めて有屋を訪れた私たちの視点から有屋地域の魅力を見つけ、それらをマップとして有屋地域の人々などに発信していこうと考えました。ですので、この課題を解決していくには私たちの作るマップがどれだけ有屋地域の人々に有屋地域の魅力を再発見してもらうことができるかが重要であると思います。そして、そのマップを完成させるために日々協力し活動しています。

二つ目は、有屋地域の観光地化ということです。有屋地域には最初に説明していたような観光資源となるものが数多く存在しています。しかし、それらを観光地としてしまうと、信仰の対象でもあるものが人が訪れ荒らされてしまう可能性があります。この課題はとても難しく、有屋地域の中でも観光で収入を得たいという人と観光地化するのに反対の人がいるようです。ですので、フィールドワークとして有屋地域を訪れた私たちの視点からこの課題についても考えて、発表する場面で自分たちの考えを示していきたいと思っています。

今回のフィールドワークでは、今まで自分が経験したことのないことを経験させていただきました。今後は私たちが経験したことをもとにディスカッションしてマップや発表をより良いものを作っていきたいです。

工学部 Aさん

この4日間にわたるフィールドワークで、普段の日常ではなかなか経験できないことを、たくさん経験することができました。山菜採集体験、山形県に来てから初

山登り、カレーとお好み焼きの調理、有屋少年番楽、下向まつりなど、刺激的で初体験のことばかりでした。また、フィールドワークのメンバーは全員初対面でしたが、この4日間でさまざまことを協力して行うことで、絆が深まり友情が生まれたと思います。

今回のフィールドワークのテーマは地域振興でしたが、町の良さを人々が再認識し、外部にそれを積極的に発信していくことで地域振興につながるのではないかと実感しました。私たちのグループでは町のスポットやイベントなどさまざまなことを実際に体験して町の良さを実感することが多々ありましたが、やはり地元の地域住民のからすると当たり前であり、そもそもそれらのスポットに行ったりイベントに参加しない人も少なくないとのことでした。ことわざにも「灯台もと暗し」という言葉があるように、地元の人には町の魅力が当たり前のことです。しっかりと良さに気付いていないと、地元のガイドさんの方もおっしゃっていました。東京や仙台といった大都市に若者が出ていってしまうことも多く、戻ってくる人もいますが大半はそのまま金山町に戻ってこないそうです。特に有力者は地元に残る傾向にあるようですが、そうでない人は都会の高所得などを求めて出ていってしまうそうです。金山町に実際に訪れると、確かに立派で大きく綺麗な屋敷ばかりでした。

こういった背景もあり地域振興は全国の地方自治体で課題になっていますが、やはり都会にはないものが金山町にはあると思います。伝統番楽やまつりでの魚取りなど、お年寄りや子どもまで幅広い年代の人びとが、一緒になって一つのことを楽しめるというのは、今日の日本ではほとんど失われている光景です。都会では核家族世帯が多く、近所関係がほとんどない地域ばかりです。これこそが都会にはない金山町の魅力ではないでしょうか。また自然にふれ合い、自然の恵みを感じて生活できることが、金山町の魅力です。これらの学んだことをマップにし表現して、たくさんの人々に金山町の魅力を伝えられるように頑張りたいと思います。サークルなどで最上地方にうかがう機会がありましたら、ぜひまた今度もよろしくお願ひします。4日間のフィールドワークでたくさんの貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

工学部 Iさん

今回、フィールドワークを通して感じたことの中で特に身になったと感じたことは、「他人」についてです。これまで他人の考えをまじまじと考え、共感しようということがありませんでしたが今回の話し合いの中で他人がどう考えどのような知識、経験をもとに思考するのかなど実際の話し合いの中でしか分からないことを多く学びました。また、先方の要求を全部理解しそれをものとして完成させるには自分から疑問点や意見の確認など相手側との相違をできるだけ減らすことも大切だ

と感じました。自分が思ったものと相手が欲しい物の違いを、ものを作る過程でなくしていきながら作ることでお互いにとってより良い物を作ることが出来ると感じました。これらの考えを生かしこれからはグループで話し合いをするにあたり両者の理想のものを作っていました。

実際にフィールドワークを行い、頭の中だけでなく現実を目で見てそこから情報を得て、頭で理解することが発表物もしくは成果物を製作するにあたりとても重要だと感じました。今までは取り敢えず頭で結論を出してから行動に移してなるべく効率的に、誰にでも伝えられるようにしていました。なぜなら、そうすることで思考を整理してからものの作成を進めるので早く進み、より良い物ができると思っていたからです。しかし、実際の経験を考慮することで相手を知り相手の望みを知ることによってそれに沿って物を作るのでまず経験することとても有意義であると分かりました。

さらにこれまであまり縁がなかった自然、歴史的な建物、地域特有の人間関係など今回の金山町でのフィールドワークでしか分からないことも知ることが出来ました。イメージしかしていなかった田舎の集落でしたが今回の経験を通してそれらの現状や課題、普段の生活、それらから人間性を育てる学びをどのように得ているのかなど貴重な経験を通してそれらを学ぶことが出来ました。今回のフィールドワークで得たものはこれまでとは違う領域の知識や経験でした。なので、これまでとは違い広い教養を身に着けることにもつながりました。以上のことから、これからの人生で何かを思考するにあたりこのフィールドワークだけではなくいろいろな知識、経験を使い広い視野を使っていきたいです。

農学部 0さん

私はこのものがみのFWを、自然が好き、また将来は地域活性化に携わることのできる仕事をしたいと考えていたので興味があり参加しました。今回の活動では、地域散策や地元の子供らご高齢の方々との交流、地元のお祭りなどを体験することができました。また、課題として地域の魅力を地元の方に伝えるためのマップの作成に挑戦させてもらっています。

FWを通して感じたことは、私が今まで住んでいた都市部にはない、この地域にしかない自然の魅力がたくさんありうらやましく思いました。中でも、竜馬山はそびえたつ岩壁が壮大で、さらに60年に一度竜馬が現れるという伝承があり、町のシンボリックな存在で素敵でした。また、山菜取りをし、それを地元の方が料理してくださり、人生で初めて山菜料理を食べました。今まで、山菜はくせが強そうで、苦みがあると思っていましたが、全くの偏見でした。とても美味しく、料理の種類も多くて驚きました。地元の方とは下向祭りや有屋少年番楽で交流することができました。番楽は、想像していたよりも小さ

い子供たち披露してくれて驚きましたが、獅子舞や三人の子供が複雑に舞う姿はとても迫力がありました。お祭りでは、地元の子供たちと遊んだり、魚つかみ、お神輿を担がせてもらいました。その中で、地元の方と話し、地域のことや生活のことなど聞くこともできました。地元の方と交流して第一に感じたことは、人のつながりが強いことだと思います。子供らご高齢の方々が一つのイベントを一緒に楽しむ、これはこの地域だからできる魅力の一つだと思います。また、有屋地域には伝承していかなければならない文化がたくさんあると感じました。

マップ作成は、現在も作成途中ではありますが、地元の方々に地域の魅力を再認識してもらうことを目的としています。私もそうではありますが、意外と地域の魅力を理解することは当たり前とってしまっているため難しいです。難しいですが、大学生である我々の視点から感じた魅力や発見をマップにし、発信できるものにしたいです。難しい課題ですが、FWを支援してくださった方々の期待に応えられるものにしたいと思います。たった4日間ではありますが、初めて金山の有屋地域を訪れ、貴重な体験をすることができました。今後も、より良いマップ作成のために力を入れていき、さらに今回のFWで学んだことを発揮できるように努力していきたいです。



農学部 Yさん

今回のフィールドワークでは、私の知らない自然の体験、まるで桃源郷のような美しい景観、何より竜馬山の迫力には度肝を抜かれました。このフィールドワークでは題名のとおり、山間地の文化を探り地域振興を目的としたフィールドワークなので私は事前に地域活性化についての参考資料や高校の頃探求していた田舎の6次化や地域活性化、地産地消についての知識を生かし、有屋の宝を調べました。

まず一回目では有屋の自然や魅力を知ってもらうためにバスで移動しながらの探求でした。特に印象深いのは竜馬山と杉林です。杉林に関してはあんなにも大きな

杉を見たことのなかったのが驚きでした。またどこよりも景観が良く「自然」が地域振興のキーワードになるのではと考えました。また、有屋地域の人と自然のつながりにも注目しました。

また有屋の人に定住してもらうためにはこの素晴らしい自然や景観、歴史や行事など“あたりまえ”思っている事をもう一度見て貰うことが重要だと考えました。定住している人はなぜ定住しているかの理由はないと言うことにも大きな課題があると考えました。私たちは有屋の人たちに定住して貰うためにマップ作りを依頼されました。私も含めみんな最初の作業には困りました。地図に注目してほしい場所をどのように書くかが一番難しい壁です。私は主に、有屋地区の他との差別化をし、定住するメリットや理由を見つけて貰うために、新しいイベントや企画を提案、マスコットキャラクターの作成を担当しました。マスコットキャラクターは私が何気なく書いた一つの絵が私の班の人を含め三上さんにも賞賛の声があったことにとっても感謝しています。マスコットキャラクターには竜馬山の伝説獣「竜馬」をイメージし、POPに描きどの年齢層でも理解しやすい絵にしました。またマスコットキャラクターの角は有屋の山の幸、山菜を描くことで最大限に魅力を引き出す作戦です。しかし自分の力でしっかりと形を残していく事は難しい事です。しかしこの授業を通して自分の知識を存分に発揮しこれまでの探求とは比べものにならないくらいしっかりとできていることにやりがいを感じています。しっかりとマップを完成させ目標の地域振興と定住を達成します。



農学部 Mさん

僕はこのフィールドワークを通して金山町の自然についての秘密や江戸時代よりも前の時代から続く伝統に触れることができた。

僕はこのフィールドワークの事前学習では金山町の自然について焦点を当て、一回目のフィールドワークで気づいた、金山町の自然の豊かさから「なぜ民家が近いにもかかわらず、このような豊かな生態系が存在するの

か」について疑問を持ち続けていた。今回の事前学習ではブナ林の貯水能力が豊かな自然を生み出すということまでは知っていた。しかし、実際に金山町を訪れ、現地の方々の話を聞くと、その貯水能力を持つことが清流を生み出す要因ではなく、貯水能力によって水を貯え、その水を夏でも絶えず川に水を供給していることこそが、清流を生み出す本当の要因となっていることが分かった。また、金山町では風呂に入るときに髪は一回しか洗ってはいけないという決まりがあり、これは川に流れる込む生活排水の量を少しでも減らし、川を汚さないようにしようという思いからこのようなことが伝えられたのだそうだ。

これらのことから、金山町の豊かな自然はブナ林のおかげだけでなく、金山町に住む人々がこの豊かな自然を守ろうと日々の生活に配慮していることもこの豊かな自然を生み出す要因となっていたことに気づかされた。

また、金山町の様々な場所にかけてられた橋や地名には、昔起こった出来事や昔存在した建物の名前をもとに名づけられたものが多く存在する。これは、昔の伝統や歴史を時代の流れとともに風化してしまうことがないように、かつての面影を橋や地名に残しているのだということに気づいた。

金山町には多くの自然が存在し、町の様々な場所に神様を祭った祠や神社が存在している。これは、金山町の人々が、自然と共存するために日頃の生活に配慮したり、このようなフィールドワークを行ったり小学生に有屋番楽を教えることで、時代とともに忘れ去られる歴史や風習を残していこうという取り組みを行っており、それによって金山町が多くの生命の住む自然豊かな場所として、古くからの歴史や風習の多く残る場所として今も存在し続けているのだということがこのフィールドワークを通して分かった。

農学部 Fさん

今回の四日間のフィールドワークを通しグループワークと地域振興について学ぶ事ができました。今回のプログラムでは地域振興、特に地元の良さを再認識することにより地元で定住してもらうことを目標に活動しました。その手段として地元のマップを作ることになりました。さらにその材料を集めるために有屋地域の寺院、石碑を巡ったり、小学生による有屋番楽を見たり、山菜を採ったり、祭りに参加したりしました。祭りに関しては神輿を担がせていただき、カラオケや魚のつかみ取り、運営をやらせていただきました。今回の活動を通して初対面のメンバーとお互いを知ることができ後半の2日に参加した祭りでは自分の得意なことでお互いをカバーし合い祭りを成功させ、さらに地域の人と交流する事ができたと思っています。

マップ作りについては前半の2日間で課題の意図を汲み取る事ができず有屋地域の方々が満足する物を作

れませんでした。地元の話だと金山町から若者が都会に出て行ってしまう事が多く戻って来ないそうです。そのような若者を減らす事このプログラムの地域振興だと気がつけなかったのです。後半の2日間では観光マップに地元の良さを描くことを決め、有屋地域の魅力を見つけることにしました。しかし私たちの訪れた寺院や自然豊かな山などは地元の人たちにとっては当たり前のものでマップに描くには適さないと考えました。そこで私たちはこの自然豊かで人と人とのつながりが強い地域である事が魅力なのではないかと考えました。

4日間で有屋地域の方々に満足してもらえる物を完成させることはできませんでしたが得たものは大きいと感じています。グループワークに関してはこれからの大学生活、卒業後にも通じる体験ができました。地域振興に関してはマップが作成途中ですが地元の方々がよいと思うものを完成させこれから有屋地域の地域振興に貢献したいと思います。最後に今回のフィールドワークと一緒に活動したグループの皆様方、地元の方々、サポーターの方、先生方本当にありがとうございました。

最上町の人・自然・文化に触れよう①

活動状況

○実施市町村：最上町

○講 師：放課後こども教室事業ワイルドエドベンチャースクール（コーディネーター大場満郎）
その他地域の方々

○訪 問 日：平成30年5月19日（土）～20日（日）、6月16日（土）～17日（日）

○受 講 者：人文社会科学部3名、地域教育文化学部3名、理学部1名、工学部1名、農学部2名
以上10名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p>【1日目】5月12日（土）</p> <p>08:00 山形大学発 10:00 大堀地区公民館着 オリエンテーション後大堀保育所に移動 わんぱく学校田植え体験にスタッフ参加 11:30 田植え終了 12:00 昼食後、新倉見に移動 13:00 炭焼き体験 その1 ・炭材集め ・炭材の詰め込み ・口焚き、点火 15:00 炭焼き体験終了 17:00 宿泊先到着 夕食自炊</p>	<p>【1日目】6月9日（土）</p> <p>08:00 山形大学発 10:00 最上町立中央公民館着 オリエンテーション後移動 ワイルドエドベンチャースクールにスタッフ参加 槍ヶ先峠ハイキング 12:00 昼食 13:00 引き続きワイルドエドベンチャースクールに参加 16:00 中央公民館着 スクール終了 17:00 宿泊先到着 夕食自炊</p>
<p>【2日目】5月13日（日）</p> <p>朝食自炊 08:30 大堀地区公民館着 09:00 ピザ焼き体験 11:30 昼食後、新倉見に移動 13:00 炭焼き体験 その2 ・炭出し 15:00 炭焼き体験終了 16:00 大堀地区公民館発 18:00 山形大学着</p>	<p>【2日目】6月10日（日）</p> <p>朝食自炊 9:00 前森高原でのスタッフ体験 もしくは、冒険家大場満郎氏との交流を予定 12:00 昼食 13:00 前森高原でのスタッフ体験 もしくは、冒険家大場満郎氏との交流を予定 16:00 前森高原発 18:00 山形大学着</p>

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Tさん

私は今回のプログラムで多くの貴重な体験をしました。都会に住んでいた私にとって、全てのことが新鮮で勉強になることばかりでした。しかし、その一方で最上町が直面している課題もあり、多くのことを考えさせられる良い機会にもなりました。

4日間を過ごして感じた最上町の課題は、せつかくある魅力を外に伝えられていないことだと思います。今回実際に現地に行って体験してみて、最上町は本当にいいところだと感じました。しかし、現実的な問題として若者の人口流出が進んでいます。最上町に残りたいと思わせるにはどうしたらいいのか、また、行ってみたいと思わせるにはどうしたらいいのか、魅力を発信していくことが大切になってくると思います。今回スタッフとして参加したワイルドエドベンチャースクールの活動もその一つになってくると思います。最上町の魅力の一つである豊かな自然に触れ、親しみをもってもらうことで、良さを伝えているのだと思います。しかし、そんなに良い活動をしているのにも関わらず、それを十分に生かされていないのではないかと感じました。例えば、自然の良さや最上町の良さを伝えるのが目的のはずなのに、子供たちはスタッフの説明をあまり聞いてはいませんでした。確かに小学生には難しい説明だったかもしれませんが、私たちがしっかりと聞かせるべきだったと反省しています。ただ遊んで楽しいで終わらせるのではなく、どれだけ最上町に残りたいと思わせるかどうかが大切になってくると思います。もちろん楽しむことが一番大事でもあるので、最初は最上町に興味をもってもらうところからでも良いと思います。

また、定住させるのではなく、観光地として再度訪れたいと思わせるような町作りも大切になってくると思います。そのために魅力を外に発信していくことが必要になってきます。2回目に訪れた前森高原では、多くの体験ができるようになっていて子供がいる家庭でも楽しめるようになっていました。こういったお客さんに楽しんでもらうための多くの工夫があったので、これらを伝えていくことも大切なのではないかと思いました。

4日間を振り返ると、本当に貴重な体験をさせていただいたし、楽しく過ごすことができました。それは、最上町の皆さんが温かく迎えてくださったからだと思います。私は将来公務員になりたいと考えているので、今回学んだことを少しでも生かされるようにしていきたいと思います。



人文社会科学部 Iさん

私は今回のフィールドワークでの経験を通して、最上町の課題やその解決策を考えるとともに、自分自身の今後の意識づけを考えることができたと感じている。以下はその振り返りである。

まず私の印象に残っているのが、1回目にNPO法人で、2回目に冒険型スクールで触れ合った最上町の子どもたちだ。ピザ焼きや田植えなどの体験作業で感性や好奇心が養われるだろうし、日常的に自然の中での活動に参加していることで、その中で培った動植物への知識が豊富であると感じた。私の地元にはあまり広大な自然もこのような取り組みもなかったので、身につけられる知識は大きいと感じた。

次に私が特に印象付けられたのが、前森高原でのスタッフ体験前に行った朝礼である。人数が少ないながらも、経営理念の暗唱や目標売上、笑顔トレーニングといったことを行い、お客さんに満足してもらうための意識づけがされていた。その効果もあってか、二度目の来訪だというお客さんが私が乗馬体験スタッフとして対応した中にいた。少人数での運営だからこそ、お客さん一人一人と笑顔で接するよう意識されているのだろうかと思った。

合計2回の活動を通して、私の地元では身につけなかった自然への知識と、最上町には自然を活かした取り組みがあり、その中で来訪者に楽しんでもらうための工夫がされているのだということを私は学んだ。そして、その上で最上町の課題を考えた結果、既存の観光施設の魅力を活かされていないということだと感じた。わくわくファーム前森高原を例に挙げると、HPがしっかり作られていたり、InstagramやTwitterといったSNSでの発信や県内のイベントでの出店があったりと、思っていた以上にPR活動が行われていることが後日調査でわかったものの、オープンしてから年数が浅いことや、「売り」になるであろうイベントや体験を詳しく伝えきれていないことが考えられ、まだまだ魅力を伸ばすための要素があると思った。今後はその部分をもっと取り上げて発信していくことが必要ではないかと考える。また、コテ

ージ代とその他の体験（乗馬や釣り堀など）にかかるお金は別になっているため、宿泊客が一日客よりお得に楽しめるよう、コテージ宿泊客を対象とした他の体験用の割引券を作ると、一日客との差別化・お得感を出すことができるため、集客に繋がるのではないかと思った。

最後に、自分にもできることを考えた結果、まずは家族や友人に発信することだと感じた。自分が山形の大学に来ているという理由から、今後遊びに来るような機会もあると思うので、今回知った最上町の魅力を伝え、実際に赴くことで個人的にPRしていきたいと思う。



人文社会科学部 Yさん

二回のフィールドワークで私が一番考えさせられたことは、地元に戻るかどうかということである。私自身、県外出身者として山形大学に通っているため、将来地元に戻るのかどうかということも就職探しの際に視野に入れて決めなくてはならない。最上町は、中学校、高校と一校しかないため、早いうちから進路選択として、地元を離れる人もいるのが現実である。また、大学がないため、より学びたいと考える人は必然的にふるさとから離れなくてはならない。今回、進学のために一度は最上町から離れたが、地元に戻ろうと思ったきっかけについて現地の方から教えていただくことができた。「一番は、地元という環境が落ち着くから」「地元の友達がいたから」といった外界や内面的どちらにも影響を受け、Uターンすることを決意したということを実際に知ることができた。

最上町は現在5つの小学校、1つの中学校、高校しかない。そこで、最上町役場の高橋さんに子供たちがどのように学校へ通っているのかを伺った。高橋さんは、「学校が閉校する度に、スクールバスを利用する子供が増えている。そうすると、バスにかかる人件費、維持費、路線について話し合う必要がある」と言っていた。このようなことは、最上町だけに関わらず、全国の過疎地域において当てはまることである。スクールバスの利用によって、子供たちは歩かなくなり、運動不足となることが問題となっている。また、スクールバスの時間に合わせ

て帰宅しなければならないため、友達という時間や遊ぶ時間が少なくなる。結果として、家の中で遊ぶことが増えている。私は実際に、登山で関わった地元の小学生に何をして遊んでいるかを聞いたが、家の中でゲームやスマートフォンで遊んでると聞いた。身近に自然があることが当たり前になっているからこそ、最上町の自然に対して興味がない様子であった。町役場の方が、「今の小学生が大人になった時に、戻ってきたいと思えるようなまちづくりをしたい」と言っていたのが一番印象に残った。

最上町の課題は全国各地で起こっている。課題はわかっても予算やできることにはやはり限界がある。今ある自然や文化、人をどのようにうまく活かしていくかを将来まちづくりに携わりたい私は今回の最上町での取り組みや成果を参考にすることで、これからの専門科目で分析できるように取り組んでいきたいと考えた。

地域教育文化学部 Kさん

今回私は縁あって最上町に行かせていただき、普段の座学の授業では得難い体験を授業という形でさせていただくことができました。この企画をしてくださったエリアキャンパスもがみの方たちや快く受け入れてくださったの活動を留意してくださった最上町の方たちに、まずは感謝の気持ちでいっぱいです。

このプログラムでは、木の伐採、ピザづくり、木炭づくり、ワイルドエドベンチャースクール、バーベキュー、前森高原でのスタッフ手伝いなどを体験できましたが、どれにおいても私が強く心に残ったのは、最上町の課題や魅力以上に最上町に住む「人」との関わり一つひとつでした。反対に、関わりのなかで最上町の魅力・課題に気づかされたと言えらと思います。

印象に残っているエピソードが多々あります。例えば、槍ヶ岳先峠登山の道中に小学生と話をしたときには発見がたくさんありました。私は子どもたちが学校について思っていること知りたくていくつか質問をしたのですが、一番覚えていることが「学校楽しい？」と訊ねたときに「大変。疲れる。」と返ってきたことです。よくよく話を聞いてみると学校までの距離が遠い上に50分かけて徒歩なので、通うだけでも大変なのだそう。ほかのメンバーの話によれば、スクールバスがあるところもあるそうなのですが、徒歩50分レベルでもバスを利用できないのが気になりました。

また、ほかの子に将来の夢を聞いたところ、具体的な職種は答えとして返ってこなかったのですが「高校に行きたい」と答えてきました。最上町にも高校はあるのですがほとんどの子は町外の高校に通うそうなので、子どもたちに最終的にこの町へ戻ってきたいと思わせるためには中学生までのうちに、町の魅力を伝えるないし何かしらの手を打たなければならないのだなあと考えさせられました。プログラム名が指すように他にもたくさん

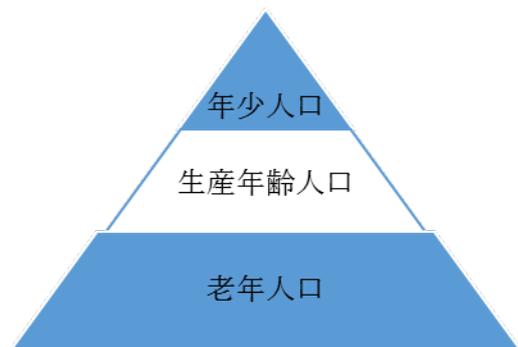
の最上町の人と触れ合えました。

また、自然・文化に触れようともありましたが、それについても色々と学べる事がありました。一番驚いて、印象に残っていることは、炭焼き体験をするにあたり木の伐採作業中に、担当者の方から「カーボンニュートラル」という言葉を教わったことです。草木は二酸化炭素を吸収しながら生長するため、ある程度生長した木は切って炭にし燃やしても二酸化炭素は増加しないということなのだそう。私は短絡的に、木を切ることは良くないことのできるだけ切らない方がいいと思っていたのですが、カーボンニュートラルは一理ある理論だなあと納得させられました。

合計4日間で体験したことがただ楽しかったで終わらないよう、最終活動報告に生かすために考察を深めていきたいと思います。

地域教育文化学部 0さん

最上町での活動を通して感じたことは、体験型学習が出来る素材はたくさんある一方で生かしきれていないということだ。炭焼き、山登りや、乗馬、ピザ焼き、田植えなどの体験をすることができる。ただ、それらを発信する手段が不十分だ。例えば、2回目のフィールドワークで参加したワイルドエドベンチャースクール(最上の自然について体験型学習を通して学ぶ企画)の参加者は、大学生10人に対して小学生は8人であった。最上郡には、合計5つの小学校が設置されており、この点をふまえる、より参加者が少数であることがわかる。企画と運営を担当している大場満郎氏によれば、宣伝方法は地域の学校にチラシを配ることのみだという。子どもたちは、学校から配布されるチラシをみて参加を決めるそうだが見逃してしまう可能性や、活動内容や魅力が十分に伝わらない可能性も少なくない。また、参加者の小学生の話聞いてみると、複数回参加している子どもが多く、参加者が固定化しつつある現状が見て取れた。他にも、このワイルドエドベンチャースクールは開始からそこまでの年数を経ている訳ではなく、親世代への認知度が低い。その上、一般的に親世代とみなされる生産年齢人口には地域について考える機会が不足している。



「最上について考える・触れる機会の多寡」を軸にすると、上のような図ができる。ワイルドエドベンチャースクールのような企画を運営する老年人口(高齢者)とその企画に参加する年少人口(子ども)には地域性を知ったり関わったりする機会があるが、生産年齢人口(親世代)はその機会が欠如している。それにより、中間層に空白が生まれる。

今後最上が発展していくためには、今最上に住んでいる生産年齢人口が最上の地域の良さを理解し、次世代へと引き継ぐことが不可欠だ。例えば、SNSを活用したイベント告知が挙げられる。チラシだけではなく、SNS上で宣伝をすれば端末を持っていない子どもでも、親を介して詳細に活動を知れる。その他にも、従来の子どものみに向けたイベントを親子で参加できる内容に変更することも解決策だ。最上に行ってみて人々との距離が近いように感じた。そのため、例え年齢の差があったとしても上手く活動できると思う。

現在の最上の課題は、中間層の空白だ。その改善のために、中間層をターゲットにしたイベント内容を提案して意識改善に取り組んでいくことがこれからの最上に必要だ。

地域教育文化学部 Kさん

1回目のフィールドワークでは子供たちと交流、炭焼き体験、ピザ作りとキノコの植種をしました。

場所：公民館、新倉見 協力：NPO山と川、町役場の方
①子供たちとの交流

最初、最上町に入った時、学校などの建物を見なかったから少子化が進んでいると不安に思いました。公民館に行くと子供たちがたくさんいて安心しました。彼らは元気で私が小さい頃と変わらないと感じました。子供たちの先生は子供たちを楽しませる紙芝居を見せていました。その内容は健康習慣に関するものでした。また、私は子供たちのダンスを見ました。

②炭焼き体験(白炭←雪国ならでわ、密閉しても一酸化炭素がたまらない。)

私たちが行ったことは木を倒し、1メートル間隔に輪切りする。そして、窯に入れて1日焼く。

最後に取り出し、砂で炭を挟んで冷ます(酸素を遮断する。)。最後に石と炭を篩にかけて分けて回収する。

私は炭焼きの歴史を聴きました。炭焼きには石の性質や種類や空気の穴の調整の仕方などの知識が必要です。私はこの体験を通してこれらのことを考えました。それは木を1本切るだけでも重労働であり、これをお歳おりの方が行っているから若い人に技術を伝授して交代すべきだと私は感じました。また、彼らには定年という考えがあるのか私は心配になりました。

③ピザづくり

準備するもの：薄力粉、強力粉、トマトケチャップ、オレガノ、チーズ、ベーコン、ピーマン、玉ねぎ。

レシピ：薄力粉と強力粉と水500mlを水気がなくなるまで混ぜる。均等に円状に広げる。空気を抜くためにフォークで穴を全体に作る。トマトケチャップ：オレガノ＝8：2の割合で合わせる。生地に塗る。上記などの好みの食材をのっける。30分程度焼く。（ピザの香りで取り出すタイミングを判断する。）

地産地消に基づいて料理をするととても楽しいことになりました。

④キノコの植種

1メートルの丸太にドリルで10～15cm間隔で穴を開けていく。木くずとキノコの菌を混ぜて固めたものをトンカチで穴に入れていく。

1回目では今まで何気なく使っていたものがどのように作られたかを知りました。私はものができるまでの労力を知り、ものを大切に扱うべきだと改めて感じました。さらに湧き水の美味しさに感動し、初めてミズやヨモギ（あく抜き必要）を食べました。このふたつは麺つゆでつけて食べました。

2回目では登山でのスタッフ、ビアハウススタッフと乗馬体験。

場所：新倉見、前森高原 協力：ワイルドエドベンチャーの方、ビアハウスの方、町役場の方。

①登山でのスタッフ（ワイルドエドベンチャー）

まず、1年生～6年生と交流しました。彼らはとても元気でした。登山では1年生の男の子を担当しました。私は登山が初めてでした。だから、自分のことで精一杯で1年生の男の子の安全に注意することが大変でした。特に斜面の角度が急なところをロープでつたって通ること大変でした。なぜなら、足場はすべりやすくまた1年生の男の子は自分の体を支える力はないためサポートが必要だからです。私はもっと安全に配慮してイベントをコーディネートすべきだと考えました。例えば、対象学年の見直し、安全なルートを選択。私の推測ですが、コーディネーターの意図は「怖い体験をして学ぶ」だと感じました。私はこの考え方は今の時代通用しないと思いました。しかし、私は登山を通してたくさん学びました。1つは山の中の空気はとてもキレイで気持ちがいいということ。2つ目は登山をすると普段は得られない落ち着きを得ることです。最後に大場さんという方が森の大切さを教えてくれました。ブナは森のダムとよく言われます。ブナの葉は厚くて硬いです。ブナの葉は秋になると落葉して積もります。虫や微生物が分解しますが、ブナの葉の特徴により分解するための時間が多かかります。そして、水分をため、葉が腐ると同時に徐々に水分を流していく。この仕組みのおかげで土砂崩れを防止しています。

②ビアハウススタッフ

私がビアハウスで体験したことは接客です。私は接客を

通して最上町の住人や観光客と交流しました。最上町の住人の方々は互いが知り合いました。私はこのことは町の安全を守ることにつながると思いました。また、ツーリングに来ている人と交流しました。彼らはスタッフさんの話によると毎年来ていただいているとのことでした。彼らはとても親しみやすく接してくれました。私は他のカテゴリーの人が来れば最上町はより賑わうと思いました。しかし、前森高原はお店が少ないので価格競争がないのでビアハウスでの価格が高かったです。これは他県からの観光客に悪い印象を与えます。さらにリピーターの減少にも繋がると思いました。

③乗馬体験

私は初めて乗馬しました。馬に乗ると視線が高くなり、風を切るようでとても気持ちよかったです。

馬は前森高原の売りの1つであるから馬を用いたイベント（馬術スクールなど）を行うべきだと思います。また、ワイルドエドベンチャーでは馬との活動をしていないから、乗馬などの体験を子供たちにさせるべきだと考えました。これは馬に興味をもち、子供たちに酪農などに志してもらうことにも繋がると思います。そして、農家の世代交代や最上町の人口減少抑制になると思います。

最後に…

私は都会で育った者であるから、このような自然と触れ合う機会があまりありませんでした。だから、今回のフィールドワークで新しい経験をして新たな視点や物事の考え方を得られて良かったです。今回、フィールドワークに協力してくださった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。まだまだ、最上町には知らない事がたくさんあると思うので長期休暇などに行きたいです。そして、得たことを別の形（問題解決の提案など）で地域の方々に還元したいです。



地域教育文化学部 Kさん

私はこの「最上町の人・自然・文化に触れよう①」の講義を通して数々の貴重な体験をするとともに最上町

が今現在抱えている課題の一端に触れることができ、今の最上町が置かれている状況を把握することができたと感じます。

1回目のフィールドワークではスタッフの方々が用意して下さったイベントに参加する形、2回目のフィールドワークでは我々もスタッフの一員としてイベントに参加する形をとりました。こういった活動を企画するうえで、まず第一に参加者全員の安全を考慮することや、天候不良などで計画していた活動ができなくなった場合の裏メニューなどもしっかりと計画しておくことの重要性などを理解することができたので、スタッフとして参加できたことはいい経験になりました。

フィールドワークの内容としては普段体験することのできない、炭焼き体験、キノコの植菌、ピザ窯でのピザ作り、槍ヶ先峠ハイキングなどの貴重な体験をすることができました。特に槍ヶ先峠ハイキングでは自分が小学生の時には感じることはできなかったスタッフの仕事の重要性や、農学部生や大場さんによる今の日本の山についての話など、いままで知らなかった数々の新しい情報を得ることができてよかったと思います。フィールドワーク全体を通して1回目の食事の時や2回目のバーベキューの時にアスパラガスが頻出していて、最上町はアスパラガスが有名だということを知り、具体的な活動以外の面でも最上の特徴を知ることができました。

一方で今、最上町が抱えている課題を現地の方々に聞くこともできました。やはり日本全国どの過疎地域でもいえることですが少子高齢化が一番の課題だと思いました。そして、それに伴ってか自己PR力が低いと感じました。一回目のフィールドワークで訪れた親倉見では、炭焼き体験、キノコの植菌などの貴重な体験をしましたが、実際フィールドワークでこういった場を設けてもらって初めてできたことだと思います。具体的な解決策としては、農業に興味のある若者に向けて農地を貸し出したり、今回のフィールドワークのような自然に触れて楽しみながら最上の現状をしっかりと理解できるようなイベントを催したりすることだと思います。

今回のフィールドワークを通して最上町は自然豊かで数々の貴重な体験ができる場ではあるが、それを生かしてきていないのではないかと思います。もっと最上の特色をアピールすることが重要だと感じました。

工学部 Kさん

私は、今回の4日間の最上町の活動を通して多くの自然に触れ貴重な体験をたくさんさせていただきました。1回目のフィールドワークでは炭焼きの体験やピザ焼き体験、2回目では子供達のハイキングのスタッフ参加と乗馬体験スタッフといった慣れないことばかりでしたが学ぶことは多くありました。これらの体験を含め最上町にはいい経験ができることがたくさんあります。しかし、それに対して大きな課題があるなと感じました。

まず、感じたこととして最上町の自然にふれたり、最上町のような地域でしかできない炭焼き体験をやってみて自分は貴重な体験とは感じるもののその先があまり見えないような気がしました。その先というのは、学生にとって今回のような体験は貴重ではあるがこの経験によってその地域の暮らしに深入りせず、今後の生活に意識して活用していけるかどうかと考えた時にあまり有効ではないのではないかと感じました。もちろん今回の体験は自分にとって大きな経験となりましたが、最上町にとっての変化は何も与えられていないというのが現状です。つまり、私が思う課題というのは最上町が抱える人口減少という問題に対する効果的な対策があまりなされていないということです。貴重な体験をただ行うだけではなく、多くの人が最上町のような地域に不便に感じているコンビニなどのものがないということに対する自然の良さをしっかりと感じれるように実際に二週間程度の生活を体験できるような機会があってもいいのではないかと考えました。実際に暮らしてみることで生活中的食事や農作業から生活していくことの実感があると思います。買って食べる野菜よりも自分たちで作る野菜の方が達成感もあって美味しいと感じることや住まないといけないような便利さが見つけられたりすると思います。他にも方法はあると思いますが「貴重な体験」というので終わらせるのではなく、最上町の良さを感じ、問題解決にも繋がる体験を多くしていくことが大事だと感じました。

私は、今回の体験を通して、個人としては本当に良い経験になったと思うし興味を持つことが多くありました。自分は工学部でありこのような問題に対する意識が低かったが今回の経験で痛感することが多かったので新たな分野での考えを深めて経験を生かし、より良いものにして生きたいです。



農学部 Kさん

今回の最上町でのフィールドワークを通じて、まず最上町に行っただけの感想として、森や川など自然がとても近くにある印象を覚えました。自然が近くにあることは良

いことも悪いこともどちらも同じくらいにあると思いますが、野生動物による被害や土砂崩れなど命にかかわるようなことがある一方、山に入り山菜やきのこを採ることや、木を伐りバイオマス発電等のために使うなど、自然に根差した生き方は自分の中で豊かに生きる生き方の一つだと思います。日本中の林業の多くは、戦後の日々の燃料の変化で山が薪炭林(薪や炭を得るために使われている山、林)として使われなくなったのと同時に衰退していきました。林業が衰退すれば中途半端に育った森は荒れ、衰退していきませんが、最上町の林業はバイオマス発電を取り入れ木を伐ることで、上手に森を更新しているのだなと感じました。

二回目に大場満郎さんが開いているワイルドエドベンチャースクールにスタッフとして参加しましたが、価値観を作っているような時期の子供たちが森に入り、自分で歩き、自分で感じることはとても大切だと思います。とてもいい機会だと思います。この先この経験が、何らかのきっかけになったらと思います。しかし、課題を感じたのは、参加スタッフの年齢層です。高齢者の方がとても多く、今の小さい子の親世代のスタッフの方は一名しかいませんでした。そして大場さんの次にエドベンチャースクールを引き継ごうとしている方がおらず、エドベンチャースクールの存続に危機感を感じました。これから先このエドベンチャースクールを続けていくためには今の親世代の人たちが必要になると思います。その解決方法として、子供だけでなくその親の参加や、最上町以外の人を呼び込むなどの対策を講じていくことが必要になってくると思います。

最後のプログラムで、前森高原のスタッフとして参加しましたが、前森高原は観光資源としてとてもよく、乗馬やバギーなど前森高原に来たらとても楽しめると思いました。しかし、外でのアトラクションが多いことから、とても天候に左右されやすく、客数が安定しないと思いました。そこで、室内で行えるトランポリンなど室内でも楽しめるアトラクションを作ったらいいのではないかと思います。

最後に、最上町に合計四日間行き、また来たいと思う町でした。最上町には全国共通の課題などありますが、今の自分が確実にできることは、今まで最上町に行ったことのない人に最上町の魅力を伝えることと、最上町に行ったことのない人と一緒に最上町に行き、体で最上町の魅力を感じてもらおうことだと思うので、自分の周りの人が、最上町に行くきっかけになればいいなと思います。

農学部 Tさん

今回、最上町でのフィールドワークを通して多くのことを学んだ。最上町の多様な自然と独特の文化、人ふれることで感じるものが大半であった。まずは最上町の過疎ならびに少子高齢社会の現状から学ぶものである。最

上町の現状を事前学習や現地の方々とのふれあいで日本の地域社会は例外なく同じ状況にあるということである。幼年人口の減少による小中学校の廃校及び合併で地区外への進学や就職などを機に故郷を離れてしまう。その結果、外部に若い人口が減ってしまいます。次世代を担う若い世代がいなくなり、その人々が親世代になり帰ってきたとしても20代の人口がいなくなる中抜けの状態に陥ってしまう。私の地元は山形県鶴岡市であるが例外なくこの状況に陥っている。ただし、若い人口が少ないということが問題ではない。私が最も重要である問題は外部との人の流れがなくなることであると考えている。人の流れとは帰省や観光、保養での来訪などのことである。流れが止まると、外部との接触がなくなる。その結果、地域外への情報発信ができなくなり魅力を伝えることができなくなるからだ。現地に住む人の話を聞いて、最も印象に残ったのは「移住してくれなくてもいいからまた最上町に遊びに来てほしい」という言葉だ。最上町をいいところだと感じまた来たいと思わせるプログラムだった。観光で最上町をもう一度訪れることで最上町が活気づくのだ、ということだった。その話で移住を促進させることだけが地方を生き残らせる方法ではないと感じた。よって、最上町の課題は魅力を発信することだと考える。しかし、不特定多数の観光客を呼び込むにはよほどのテーマパークではない限り不可能である。そこで、集客層を絞ってアピールイベントなどを企画して行くべきである。最上町の前森高原ではバイクのツーリング客や家族連れの客層が多かった。さらに、前森高原の施設や企画がファミリー向けのものが多かった。そう考えると前森高原の戦略は的中していると感じた。2回のプログラムを通じて地方の現状を知ることができた。私は地元の鶴岡に戻り鶴岡を活性化したいと考えている。数々の体験がそれにつながるいい経験になった。

里地里山の再生 I

活動状況

○実施市町村：舟形町

○講師：堀内ファーム事務局 大山邦博

○訪問日：平成30年5月26日(土)～27日(日)、6月9日(土)～10日(日)

○受講者：人文社会科学部1名、理学部1名、工学部2名、農学部6名 以上10名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p>【1日目】5月12日(土)</p> <p>08:00 山形大学発</p> <p>09:15 舟形町役場着</p> <p>10:00～ 開講式(農村環境改善センター) 活動説明</p> <p>11:00～ 手倉森・湿地の保全活動</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:30～ 手倉森・湿地の保全活動</p> <p>18:30～ 夕食</p> <p>体験実習館 宿泊</p>	<p>【1日目】6月9日(土)</p> <p>08:00 山形大学発</p> <p>09:15 舟形町役場着</p> <p>10:00～ 畑の管理活動</p> <p>12:00～ 昼食</p> <p>13:00～ 畑の管理活動</p> <p>18:30～ 夕食</p> <p>体験実習館 宿泊</p>
<p>【2日目】5月13日(日)</p> <p>7:00 起床</p> <p>7:30 朝食</p> <p>9:00～ 畑の管理活動</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:30～ 畑の管理活動</p> <p>16:00 農村環境改善センター発</p> <p>16:45 舟形町役場発</p> <p>18:00 山形大学着</p>	<p>【2日目】6月10日(日)</p> <p>7:00 起床</p> <p>7:30 朝食</p> <p>8:00 体験実習館 出発</p> <p>9:00～ 畑の管理活動</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:30～ 畑の管理活動</p> <p>16:45 舟形町役場発</p> <p>18:00 山形大学着</p>

授業記録

○活動レポート「私はがみで考えた！」

人文社会科学部 Sさん

1. フィールドワークを通しての感想

今回農作業を中心に作業し、あらためて農業の大変さを実感した。私たちよりも年上の方々がこのような重労働をしているのだと思うと、申し訳ないような気持ちにもなった。また、私は山形県出身だが、山形市に住んでいるので小さな町や農村には今までなじみがなかった。今回初めて舟形町に行って、人や店の少なさに驚いた。車で町内を走っていても、ほとんど人を見かけることはなかった。店もコンビニが1店あるだけで、ほとんどなく、ご飯を食べに行くときは隣の町にまでいかなければいけなかった。夜には公道を走っていても街灯が少なく、町を見渡せる場所から見たときは、町の光の少なさがよく分かった。しかし建物が少ない分、とても自然が豊かで景色が良く、2回目に宿泊したコテージも緑に囲まれているからこそその良さがあつた。自分の故郷ではなくても、そう思わせてくれるようなあたたかい雰囲気があつた。このような場所は大切にしていけるべきで、これ以上小さくなってしまつてはもったいないと感じた。

2. 舟形町の課題

今回お世話になつた堀内ファームの方に、舟形町の現状や課題、その解決のために行っている活動のお話を伺つた。大きな問題は、人口減少と少子高齢化、農業離れである。舟形町の人口は、約50年前に比べ、半分以下となっている。また、若者の流出が多く、農業を継ぐ人が減つたことにより耕作放棄地が増えている。若者の流出が多く農業を継ぐ人が少ない原因としては、農業は気候に左右されやすく、収入が安定しないことや、生産者と消費者の間の中間業者がいることで生産者に還元される収入が少ないことがあげられる。このようなことを受け舟形町を発展させるために、堀内ファームの方々は耕作放棄地を借りて契約栽培を行つたり、県内外の学校と都市交流サービスを行つたりしている。私たちはこの契約栽培の野菜を定植する手伝いをした。

3. 課題解決のために

1回目のフィールドワークの際に、現地で主に担当して下さつた方から、私たちが舟形町の野菜を売る場所を設けるのはどうかと提案があつた。その後話を進め、八峰祭で舟形町の野菜を販売することになった。直接生産者と消費者をつなぐことになるため、舟形町にほとんどの収入を還元することができる。また、舟形町や農業について知ってもらい、興味を持ってもらうということも目的としている。課題の根本的な解決にはならないが、解決の第一歩になれるようにこれから詳細を検討していきたい。そして、八峰祭が終わつた後どのように行動してさらなる解決につなげていくかも考えながら行動

していきたい。



理学部 Aさん

今回のフィールドワークで私たちの班では、農家の方々の野菜の定植作業をお手伝いし、その合間に舟形町の現在の課題やその対策についてのお話を伺つた。この活動を通し私は、舟形町が抱える、大きく分けて二つの課題を見つけることができた。

一つ目は、著しく進む少子高齢化と人口減少だ。舟形町の人口は現在、昭和30年代のピーク時に比べ、半数以下となっている。さらにその35.9%は65歳以上という、典型的な少子高齢社会である。その原因として考えられることは、舟形町の主産業である農林業の衰退に伴い、ますます若者が地域を離れていきやすくなつたことだ。このことにより、第一次産業が主産業でありながらその就業人口割合は18.2%という低さになっており、さらに農林業を衰退させる結果となつてしまつている。また、その就業者の多くは高齢者であり、今回私たちが体験してわかつたが、高齢者の方たちだけで農作業をすることはかなりの時間と労力を使い、きつというこゝろがわかつた。そのため、土地を所有していてもすべてを使うことができず、自家用栽培のみを行い、耕作放棄地が増えてきていることも事実である。

ここで、二つ目の課題であり、一つ目の課題の解決策でもあると私が考えるのは、農村への若者の誘致である。これから先舟形町の農業が発展していくためには、より多くの作物を生産し、販売していくことは必要不可欠である。しかし、一つ目の課題でも述べたように、現在の高齢者が多い状態ではなかなか難しいため、若者の力を借りるしかない。舟形町では若者を誘致するため、若者のためのシェアハウス設備やUターン・Iターンの積極的な受け入れなどの対策は行っているものの、あまり成果は上げていない。その理由として、町が対策をしていてもそもそもそのことに若者が気づけていないのではないかと私は考えた。実際、私もこの活動に参加して初めて舟形町の現状とその改善に向けた活動を知つた。また、そのことを知つたとしても、見ず知らずの土地に足を踏

み入れることは勇気がいるのではないかというお話も現地の方から聞いた。これから先、より若者にこの町に来てもらうためには我々にとってももっとこの町が身近に感じられるようになる工夫が必要であると考える。



工学部 Sさん

今回のフィールドワークで舟形町を訪れて、私はこの町が抱える問題を2つ考えることができた。

まず1つ目に人口減少と少子高齢化に関する問題だ。昭和30年代12,000人であった人口が今では半分の5,484人となり、さらに65歳以上の高齢化率も35.9%という現状だ。それをもたらした原因として挙げられるのは若者の農村離れた。舟形町の産業別就業人口の割合によると第三次産業が半分の50.7%を占め、舟形町の主産業である農業や水稲といった第一次産業は最下位の18.2%となっている。これを解消するためにもやはり若者の農業に対する意識改革を進めなければならないと考える。そもそも農業に魅力を感じておらず農業だけでは生活できないと思っている若者が大勢いることも事実だが、彼らの身近で農業に従事する環境がなく農村での生活を想像できないことも事実である。このような現状を打破するために現在舟形町では農業で生計を立てていこうとしている若者に対してサポートを行っている。具体的には農業経営の方法を教えたり、シェアハウスを設備したりと若者に向けた取り組みである。このことを多くの人に知ってもらう機会を作っていかなければならないと感じた。

2つ目にJAを介した農業経営の問題だ。通常生産者はJAなどいくつかの仲介業者を介して消費者に野菜を売するため、生産者の収入は仲介業者の取り分を差し引いた額になってしまう。例えば、消費者が100円のキャベツを買ったときそれぞれの仲介業者から10円ずつ差し引かれた場合、6つの仲介業者に頼んでいたら生産者は40円の利益しか入らなくなってしまう。この問題の解決法として2点ほどフィールドワークの座学を通じて学んだことがある。1点目にCSA (Community Supported Agriculture) の導入だ。CSAとは直訳すると地域で支え

る農業のことだ。これの導入によって生産者と消費者がつながり、対面での野菜の売買が可能になるため地域内での経済循環を促すことができる。さらに仲介業者を介さないため消費者が一定の値段で野菜を買うことができるのも魅力の一つである。2点目に舟形町の産地化だ。舟形町にはコシヒカリやつや姫といったブランド化している農産物がないのが現状だ。これを解決するためにも全国的に認識されるような農産物を生産しコツコツと産地化を進めなければならない。舟形町では冬場の大雪を資源として使い、雪むろ冷蔵と呼ばれる貯蔵プロジェクトを行っている。これによって生じる雪氷熱エネルギーにより野菜が寒さから自分の身を守ろうと糖度を出し、より新鮮で甘熟した野菜を出荷することができる。この雪むろ野菜が全国的に有名になれば、舟形町の経済がより循環し若者を受け入れやすくなるのではないかと考える。

今回フィールドワークに参加して、農村に来てみないとわからない様々な課題を発見することができた。これからはこの活動を通して学んだ舟形町のことを知ってもらうためにも、八峰祭といった多くの人々で集まるイベントに参加し舟形町の魅力を知ってもらうよう活動していきたい。

工学部 Mさん

私たちの班は、山形県最上郡舟形町の堀内地域においてフィールドワークを行った。そして野菜の定植活動や堀内ファームの方のお話を通して、現地の現状や課題を学んだ。

【舟形町が抱える課題】

1. 少子高齢化

舟形町は平成27年時点で65歳以上の高齢者割合が55%、かつ0~14歳の人口減少が他地区よりも著しい。ゆえに農作業や除雪作業をはじめとした高齢者の身体的負担の増加、人口減少や後継者不足による耕作放棄地増加、しいては集落消滅の危機を抱えている。

2. 経済・経営

舟形町では、前述のことから、将来町の経済を支えている農業従事者の減少による経済活動の低迷が予想される。また高額な農作機械を購入するためにも、舟形に若者を呼び込むためにも、ある程度安定して収入源を確保する方法やより活発な経済活動が必要である。

【現在行われている対策】

1. 少子高齢化

- ・高齢者への生活支援
- ・耕作放棄地の再利用

2. 経済・経営

- ・農作機械の共同購入、共同使用による金銭的負担軽減
- ・種の直播きなどによる農作業の労力軽減
- ・契約販売による安定した収入の確保
- ・CSR (Community supported Agriculture:生産者によ

る消費者への直接対面販売)の導入による生産者と消費者の信頼関係構築及び農作物の価格の理解促進

→通常の農産物販売とは異なりJAをはじめとした仲介業者を介さないため、生産者の利益を増やし、消費者もよりリーズナブルな価格で商品を購入することができる。

・交流都市にて開催されるマルシェへの参加や、行事での特産品販売

【個人としての課題への提言・解決策】

1. 少子高齢化

・今回のフィールドワークのような外部の人が実際に舟形町での生活や農作業を体験することで町の良さ現状を知り課題の対策案を提言するツアーの開催

→「外部から見た舟形の特徴、良さ」「舟形の課題解決に向けた新たな意見」「より多くの人に舟形について知ってもらえる機会」「新たに舟形に興味や理解を持つ人を増やす」機会となる

・魚沼産コシヒカリなどのように、舟形の特産品の産地化やブランド化を進める

・SNS・インターネット・マスメディアを利用して、舟形町や特産品、農業への理解を世間に広める

・今行われている都市交流、対面販売、マルシェの継続

・今までのような堀内ファームによる売り込みやSNS・インターネット・マスメディアを利用した新たな都市との交流、対面販売やマルシェを行う機会の増加

【グループとしての課題への解決策】

八峰祭において舟形町産の農作物や、農作物を利用した料理を提供する。また、舟形町や今回のフィールドワークで学んだことについてをまとめたピラを配布する。

農学部 0さん

今回のフィールドワークを終えて、農家への負担がとても大きいものであると感じた。また、様々な複雑な問題が相互に絡んでいるように思った。そして、2つの課題を見つけた。

1. 経営面

農家から消費者に届くまでにはJAや仲卸などだいたい6段階の過程があるため、利益が分散してしまい、農家への収入が減ってしまう。そのため、労働力の軽減のために機械を買おうと思っても、買うまでに時間がかかってしまう。また、舟形町の方々はそれの対策として直接売り場へ行き、経営を結んでいると言っていた。しかし、僕はそのことを聞いて、農業をすることでさえ大変な肉体労働であるというのに、さらに仕事が増えるのかと驚いた。

2. 耕作放棄地

耕作放棄地とは、農家で高齢化が進み、後継者がいないことで農業が持続せず、耕作地が放棄された状態のことである。そのため、耕作放棄地を再生するためにマシ

ュールーム退避をもいいて、耕すことで再生していた。2回目のフィールドワークの2日目ではこの耕作放棄地が再生された畑で苗を植える作業をした。そこでも、ほかの農家の人が放棄してできた耕作放棄地を他の農家の人がその耕作地を再生し、新たに野菜を作るとすると、さらに負担が増えることになる。

【これらの課題から考えたこと】

これらの課題から農業就業人口がだんだんと減少し、経営や耕作放棄地の問題が生じることで、農家の1人あたりの労働の負担も増えているのだと考えた。この負担を軽減させるためには、農業就業人口を増やさなければならない。しかし、ほかの地域から就農者を集めることは難しいことだと思う。多くの方は地元が一番好きであるし、わざわざよその地域で農業をしたいと考える人はなかなかいないからだ。だからこそ僕が重要だと思うことは、若い人たちを舟形町から出さないような努力をすることだと思う。フィールドワークを行っている最中にも子供を見かけた。多くの人に地元愛があるように彼らにも地元愛があるはずだし、町が廃れてほしくないという気持ちは僕らより強いはずだ。そのためには地域行事として農作業の体験をしたりするなどして地域内での繋がりを強める必要があると考える。



農学部 Tさん

私たち10人とサポーター合わせて11人は、山形県最上郡舟形町で1泊2日のフィールドワークを二回行った。そこで学んだことを皆さんに伝えていきたいと思います。活動内容

今回のフィールドワークの主な活動は定植であった。一回目、一日目のフィールドワークではなすとキャベツの定植を行った。なすはおよそ390株、キャベツはおよそ280株を植えた。また二日目もキャベツの定植を行った。一日目のフィールドワークでは、ただ単純作業を行い何も考えずに定植を行っており、その夜のミーティングでは、どのようにして舟形町の野菜を多くの消費者に知ってもらうかを、二日目のワークへとつなげていった。また一回目のフィールドワークを終えた後にスーパー

へ行き何気なく野菜コーナーを眺めていたが、山形県産の野菜がほとんどなかった。私は北海道出身だが、大学生になった今でも北海道産のものを食べたいと思う。しかし山形に住んでいる人が山形県産のものを食べる回数が少ないことは悲しいことだと感じた。そこで二回目のフィールドワークで対策方法を考えながら作業を行うようにしようと思った。二回目のフィールドワークも同様に定植を行った。二回目は、唐辛子、キュウリ、カボチャを合わせて2800株程度を植えた。1000株程度の栽培は今回が初めての試みであった。また今回の定植はほとんどが契約栽培であり、契約栽培は土地生産性が高まるそうだ。

二回の舟形町でのフィールドワークでは様々な課題を発見することができ、私たちがこの課題を解決に向けて動かなければならないと強く感じた。

課題発見

課題① 農業事業者の減少

今回、私たちのフィールドワークを担当なさってくれたのは舟形町に拠点を置いている堀内ファームの皆さんである。堀内ファームは主に4人で活動しており、舟形町の農業の発展を図っている。今回私たちが行った定植の場所のほとんどが、その土地で農業を行うことができなくなり誰も農業を行っていなかった耕作放棄地であった。堀内ファームではそのような耕作放棄地での農業を多くの場所で行っている。舟形町では農業事業者の減少と少子高齢化の影響もあり耕作放棄地が増え続けている。

課題② 仲介手数料

日本全国のどの地域でもあるのがJA(農業協同組合)である。JAの利点としては、日本のそこら中に流通の道を持っており、山形の野菜でも全国各地に届けることができる。また大手スーパーとも契約している場合が多く、県内でも野菜を扱ってもらえる。しかしその反面悪い点としては生産者から消費者に野菜などを届ける際に、卸売や小売りなど様々な業者を通さなければならないため仲介手数料がとられる。その場合生産者に入ってくるお金はおよそ3割程度である。

解決

今回のフィールドワークを通して私たちが考えた解決策としては、生産者と消費者を直接つなぐということである。直接つなぐことで生産者と消費者の両方にとって良い面がある。まず生産者は仲介手数料のお金が浮き入ってくるお金が増えることである。また消費者は、生産者が仲介手数料でお金が浮いたため今までよりも低価格で野菜などを販売することができる。

そこでこれらのメリットを実現させるために私たちは、今回定植した野菜を八峰祭で販売することにした。販売することで山形大学の学生のみならず、小白川町付近に住んでいる人々にも舟形町の野菜を知ってもらうことができスーパーなどよりも低価格で購入すること

ができる。

八峰祭が終わったとたんこの活動を終わるのでなく、新たな案を考え舟形町の農業の発展に貢献していきたいと思う。

農学部 Kさん

《課題1：若者の参入体制》

舟形町は若者の参入を増やすために、様々な取り組みを試みようとしている。作業の多い農業に対して、果たして若者は地域に来るのだろうか。参入しやすい、取り組みやすい行いがあれば若者も関わりやすくなるようになると思うが、重労働というイメージがついている以上中々困難な事だと思う。農業に興味や関心がある若者ならば、進んで地域に向かうだろう。しかし現実はそのもいかない。外部から新たに見ず知らずの町へ足を踏み込むのは相当の勇気と決断がいると考えられる。そんな中で、若者を増やす取り組みは難しいのだと感じる。

《課題2：耕作放棄地の利用》

高齢化により、農業を継続するのが困難になった農家は、今まで利用していた農地を放棄する以外何も対処することが出来ない。継承者がいれば、そのまま農地を継続することが出来ると思うが、若者が舟形町から出ていることから、継承することは非常に難しい事になる。また、高齢化が進む中、若者が参入していない現状が挙げられるので、継承者となる人物がまず必要になる。また、耕作放棄地をどのような形で利用するか、計画性が問われると思う。ただやたや無闇に農作物を作ればいいという訳ではない。消費者のニーズはともかく、生産者側がいかに利益をもって野菜を提供することが出来るかが問題だ。

《改善策として》

若者の参入に関しては、いかに参入したいと思わせるかが重要になると思う。また舟形町のどのような取り組みや活動を知ってもらいたいかを挙げ、外部に発信していくべきだと考える。そのために、我々は八峰祭を用いて外部に発信していく。体験したから伝えられるので、体験していない人にどのように伝えるかが必要である。このような体制をとることで、身近なところから徐々に伝わってくると思う。

耕作放棄地に関しては、計画性を持って栽培を行うことが良いと考える。今現在、企業(地元の漬物屋や居酒屋)に依頼された作物を契約栽培という形で耕作放棄地を活用しているが、まだその数は少ない。耕作放棄地をどう利用するかが舟形町のみならず、全国的に問題とされている。よって、放棄地を利用するために、若者を中心にした耕作が必要になる。しかし前文にも述べたように、若者やその他一般の方の参入傾向は変化しない。舟形町の魅力やそこにしかない何かを周りに認知してもらうことが、参入するために必要な過程であるので、今後も導入していくべきだと思う。

農学部 Sさん

私がフィールドワークで訪れたのは、舟形町の西南端にある人口700人の堀内地区だ。その小さな村の堀内ファームという団体の方に主にお世話になりながら、野菜の定植体験や舟形町についてのお話を聞いた。

【舟形町について考える】

堀内ファームとは、少子高齢化や若者の農業離れ等によって失われつつある集落の運営を持続、発展させるために結成した組織である。彼らは農業生産サービスとして、近隣や都市部の町内会、加工業者、産直等とJAを介さず直接契約して作物を栽培する手法をとっている。このことによりJAを介したときにかかるコストが抑えられ、生産者にとっても消費者にとっても良い条件で商品をやりとりできるようになる。また、雪室冷蔵、貯蔵プロジェクトも行っている。これは、野菜を低温環境にさらし、雪氷熱エネルギーにより甘熟にして「旨み」をつけて地域特産品作りを目指すプロジェクトである。

私はこれらの話を伺ったとき、インターネットに掲載するなどでもっと広く舟形町でやっているプロジェクトについて知ってもらえばいいのではないかと思った。そこで、全国の一般家庭と契約栽培をできるようにはしないのですかと聞いてみた。すると、堀内ファームはまだ始まったばかりでネット上でのクレーム対応等ができる状態ではないし、人と人のつながりを大切にできる「対面販売」をしたいという返答をいただいた。私はこの話から、ただ利益のためだけに闇雲に野菜を売って町を発展させるのではなく舟形にすんでいる人、舟形を知っている人と作物を通じてやりとりをするという、地域作りをしていく上で大切なことに少し気付けたと感じた。

【農業体験とそこで見えた課題】

メンバー10人で作業しても1日で終わらなかつたり、私たちの年齢でも体に負担がかかったりと農業をすることの大変さが身にしみてわかった。高齢化や若者の農業離れによる耕作放棄地が増えるのも仕方ないことなのかなと思った。しかし堀内ファームの方達は、それを阻止するために耕作放棄地を再利用し、前向きに補助活動を行っているのだという。これを聞いて、舟形の人々は私が思っているよりずっと農村を持続させるために必死で活動しているのだと感じた。それと同時に補助する側の人数が少なかつたり、彼ら自身の高齢化が進むことが予想されたりと、課題も感じた。

【舟形町を知ってもらうためにできること】

私たちの班は、活動を通して何かしたいと思い、話し合った結果大学の文化祭で舟形の作物を売りたいということになった。今回の体験では、私たちが「外側」から考えていた持続可能な農業を行うことの難しさ、その中で人と関わり合いながら農村を守ることの大切さを学んだ。文化祭ではこれらの学んだ内容を踏まえて、舟

形町の農村を持続させることの大切さについて伝えたいと思っている。



農学部 Tさん

私たちは山形県最上地方の南端に位置する舟形町でフィールドワークを行ってきた。今回お世話になったのは2年半前から舟形町の堀内地区で活動されている堀内ファームの方々だ。私たちは野菜の定植活動や町内の見学、さらにメンバーの方とお話を通して、舟形町を含む多くの農村が抱える問題を間近に感じることができた。そこから見えてきた課題とその解決策を紹介したいと思う。

■課題1：人手不足と高齢化

堀内ファームでは、「農業生産サービス」「都市交流サービス」「農作業・農地整備サービス」など『地域貢献型集落営農システム』を基盤とした活動をされていると伺った。しかし、現在メンバーは4名で全員60歳以上であるため、思うように活動が進んでいないのが現状だ。

→農作業はどれも重労働で、これらを高齢者の方が少人数で行うとなると相当な体力がいるため、若者の力が必要だと感じた。現在高齢化率が35.9%で、20年後には半数が高齢者になるとされている舟形町は、一刻も早い問題解決が求められている。そこで若者のUターンだけでなく、財務省の取り組みの一つである「地域おこし協力隊」の受け入れや、町内での起業を目指す若者に農業の生産技術や経営方法のノウハウを教えて定住化を図るための取り組みなどにより、Iターンを実現させることが重要になってくると考えた。

■課題2：産地化

舟形町には鮎やマッシュルーム、ラズベリーなどの特産品があるが、お米や野菜の産地化は進んでいないのが現状だ。堀内ファームでは生産者と消費者が直接取引する「直接販売」を行っているが、それをPRする際のアピールポイントが弱いことが課題として挙げられる。

→舟形町は豪雪地帯であるため、雪室と呼ばれる自然の冷蔵・貯蔵設備によって野菜の甘熟化を図り、付加価値をつけて販売するプロジェクトを立ち上げている。ま

た、比較的小規模な農地での栽培となるため、個人への契約栽培の際には「農薬をできる限り使用しない」「ある特定の品種を栽培する」など、取引先のニーズに柔軟に応えるような販売の仕方を実現できれば良いと思う。

■課題3：経営

現在どの地域の農家でも経営が十分安定しているところは少ない。なぜなら、天候不順や市場動向によって収入が不安定になりやすいからだ。そうすると安定した職を求めて町の外に出て働こうとする人が増え、農村の人口流出に歯止めがかからない状況に陥ってしまう。

→CSA(Community Supported Agriculture)の導入は安定した農業経営につながると思う。これは農家と消費者が前払いによる農作物の契約を通して経営リスクを共有し、生産者は不作でも安定した収入を得ることができ、消費者は安全でおいしい農作物を食べることができる仕組みである。しかし、これは互いの信頼関係が非常に大切であるため、むやみに宣伝するというより特定の地域に直接出向き、顔が見える形で取引する必要がある。

これらを踏まえ、舟形町に行った私たちだからこそ伝えることができる農村の現状を、八峰祭での野菜の販売を通して伝えていきたいと思う。

農学部 Iさん

舟形町でのフィールドワークで私たちの班は農家の方々と共に野菜の定植を行った。四日間行った定植作業とその間に聞いた現在の舟形の農業の問題点と改善策について考えた。

課題1 農家の高齢化と耕作放棄地の増加

今回私たちが定植を行った農地は農家が高齢化などの理由で手放した土地だ。実際に定植作業を行ってみて分かったが若い私でもひたすら苗を植える作業は足腰に大きな負担がかかった。今回は十数名で行ったため一つの畑につき一日二日程度しかかからなかったがこの作業を高齢の農家が一人ですべて行くと考えると体力的にも時間的にもとても厳しいのだと身をもってわかった。

新たに農業を始める若者が少ない今、農業を引退する高齢者ばかりが増えていき舟形町の主産業である第一次産業従事者は人20%にも満たない状況下にある。

課題2 農業の経営的不安定さ

農業は収穫量はその年ごとの天候によって大きく左右される。それによって収入も不安定なものとなってしまふ。また天候に恵まれ適量収穫できたとしても消費者にわたるまでに流通や卸業者などをいくつも仲介するため生産者にわたるお金は苦勞の割には少ない。

この問題により新たに農業を始める若者は少なく、定植などの重労働を軽減する農業用機械を買う余裕もできないため高齢者が農業をやめざるを得なくなっているという話を聞いた。

改善策

課題1、2を解決するためにはまず第一に農業で得られる収入がもっと多くなる仕組みが必要だ。生産者から消費者へ直通で作物を集荷することが出来れば卸業者などの仲介でかかる余計な費用を削減することが出来る。山地直送販売所などは増えつつあるが、一番消費の多い都会まではその仕組みが出来上がっていない。そのためこの仕組みをより多く広めていく必要があると考えた。

また、現代の農業がいかにか大変な危機的状況にあるかとその対策が行われれば改善されることを多くの人に知ってもらい産地直送作物の重要性に気づいてもらう・農業を行うことに興味を持ってもらうなどを促せるのではないかな。

私たちの班では作った野菜を学校祭で直接売り込みそれと同時に農業の課題点をまとめたチラシを配ることと課題解決の役に立てたいと考えが現在企画している。

田舎体験で考える～豊かな暮らしをつくる生き方働き方～ 活 動 状 況

○実施市町村：真室川町

○講 師：農事組合法人ひまわり農場 代表 高橋清一 ほか

○訪 問 日：平成30年5月26日(土)～27日(日)、6月9日(土)～10日(日)

○受 講 者：人文社会科学部3名、工学部3名、農学部4名 以上10名

○スケジュール：

1 回 目	2 回 目
【1日目】5月12日(土)	【1日目】6月9日(土)
08:00 山形大学発	08:00 山形大学発
09:30 新庄駅着	09:30 新庄駅着
10:20 開講式・オリエンテーション	10:10 中央公民館着
11:00 里山の自然と農業を知る(座学)	10:30 農業体験(野菜の収穫)
12:00 昼食・休憩	11:00 料理体験(地元産の野菜を使って)
13:30 里山散策と農業体験	12:30 昼食・休憩
15:30 森林鉄道(トロッコ列車)乗車体験	13:30 農業体験(農産加工・わら細工体験)
16:00 温泉体験(地元の温泉「梅里苑」入浴)	16:00 ふりかえり
17:30 宿舎(農家民宿)へ移動	17:30 夕食買い出し・休憩
18:30 夕食・休憩	19:30 入浴
19:30 入浴	20:30 ふりかえり
20:30 ふりかえり	
【2日目】5月13日(日)	【2日目】6月10日(日)
07:30 朝食	07:30 朝食
09:00 宿舎出発	09:00 宿舎出発
10:00 農業体験(ひまわり農場)	09:30 発表会準備
12:00 昼食・休憩(塩根川公民館)	12:00 昼食・休憩
13:00 農業の現状について知る	13:30 発表会会場準備
14:00 ふりかえり	14:00 発表会
15:00 移動	15:20 閉講式
16:30 新庄駅発	16:30 新庄駅発
18:00 山形大学着	18:00 山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Sさん

最上地区について、私はその存続を憂慮してきた。山形県で最北に位置し、豪雪地帯でもある最上地区。また、庄内なら農業、村山ならサービス・観光業、米沢なら工業といった地域ごとに発達した産業が最上にはなく、他地方とのアクセスもよいとは言えない。山形県の中でも、特に今後に不安を抱える地区であると思う。

真室川町でのフィールドワークで考えさせられたのは、最上地区や真室川町のような市町村が生き残っていくことの難しさである。「自然が豊か」「空気がきれい」「食べ物がおいしい」といったその町の「売り」は、日本のどこにでも存在しているし、陳腐である。ところが「田舎の魅力」を考えると、都市部の人のみならず、農村部に住む人々も、このような画一化された田舎像に飲み込まれてしまう。それはフィールドワークにおいて真室川町の今後の提言発表した我々も例外ではなかった。

真室川町が、今後人口増加に転じたり、観光客が押しかけたりする場所になることはないだろう。かといって、完全になくなってしまっても私はないと思う。真室川町の主要産業である農業は、最も原始的な第一次産業であるがゆえに軽視されがちであるが、人間の生活に欠かすことのできない食料を生産しており、国にとって礎であるからだ。したがって、真室川町が生き残っていくには、今回のフィールドワークのような少数の顧客を相手にする「体験型」の観光が有効であると思う。さらに、里山における農業、畜産業、林業などに少しでも関心のある人を対象にすることで、ゆくゆくは町への移住につながるような、いわば「職業体験」の場にするとうまいだろう。この方法なら、観光客によって町の環境が変化することもない。

このように考えたのは、私が真室川町において「町の人が困っていない」という意外な印象を受けたからだ。フィールドワーク前は、過疎、高齢、社会的サービスからの孤立……と、悪いイメージが先行してしまっていた。しかし実際のところ、町の人は自分たちの町に誇りをもっていたし、幸せに暮らしている。先行きに不安を抱えてはいるが、なんとかこのままの形で残していきたいと思った。そういう風に思わせる魅力が、この町にはあるのである。

最後に、真室川町は「豊さ」や「人生」を考える場所でもあったと感じた。モノにあふれていないこの町では「自分」が自然の中で生かされ、またそれ以上に「生きていること」を実感させられる。フィールドワークを通して数多くの気づきに会うことができた。案内して下さった真室川町の職員さん、町人のみなさんに感謝の意を表したい。



人文社会科学部 Mさん

今回のフィールドワークでは真室川町で様々な体験をし、講義を受けて、真室川町をよりよくするためにはどうすればよいか、ということと、本当の豊かさとは何かということについて考えた。

まず、真室川で感じた課題は、PR不足である。例えば、真室川には伝承野菜という古くから真室川で作られ受け継がれてきた野菜がある。今回のフィールドワークでたくさん食べることができたが、市販されている種類とは全く異なりとてもおいしかった。特に勘次郎きゅうりは甘みが強く、青臭さがなく、とてもおいしくてびっくりした。しかしこのフィールドワークに来るまで、私たちの班に伝承野菜があることを知っている人はいなかった。真室川の外にはあまり知られていないということである。伝承野菜はスーパーなどで売られている品種改良された野菜と比べ、栽培するのが難しくコストがかかるためどうしても値段が高くなってしまふ。しかしむやみに生産量を増やし、安く売ろうとすると、真室川の伝承野菜としてのブランドが保持できず、ほかの比較的生産しやすい野菜に淘汰されてしまう。そのため伝統野菜は、種取りを交雑が起らないように細心の注意をはらって行われ、栽培できるのは真室川町に限り、販売するときも一般のスーパーには置かず、取り寄せによって販売するようにしている。そのおかげで伝承野菜のブランドは守られているが、知名度が低くなってしまっている。伝承野菜についてはホームページやSNSなどで紹介されているが、ホームページもSNSも伝承野菜の存在を知った人しか調べることができない。ホームページやSNSはとても効果的なPR手段だが、それだけでは十分ではない。普段の生活で目に入るような形でのPRに力をいれるべきだと思う。例えば、一般のスーパーに置くのは難しいにしても、野菜コーナーにチラシをおいたり、イベントを行い販売したりすることでその存在をより多くの人に知ってもらえることができる。それによって伝承野菜に興味を持つ人が増え、より多くの人が伝承野菜を買ったり、実際に真室川町を訪れる人が増えたりすると思う。

次に本当の豊かさについて考えた。豊かさとは金や名声だけではないということは前から感じていたが、今回のフィールドワークでそのことを確信した。真室川で暮らす人々はおそらく相対的に見て金銭的に裕福なくらしをしているわけではない。しかしみんなとても幸せそうに見えた。真室川にはきれいな水、空気、おいしい食べ物があり、とても気持ちのよい環境で、何より人々がお互いを信頼しており深い絆で結ばれていると感じた。このような暮らしこそ本当の豊かな暮らしだと思った。これから先いろいろな大きな決断をする機会があると思う。その時には今回感じた豊かさを考えて豊かな生き方をしたいと思った。



人文社会科学部 Fさん

今回のフィールドワークでは「伝承野菜」「ひまわり農場」「地域の文化」「高橋伸一さんの生き方」の四つを中心に学ぶことができた

まず伝承野菜は、一つの農家が細々と自分達が食べるために受け継いできていたものが山形県や真室川町に伝承野菜と認定されて保護されたものが多いことが分かった。保護された野菜には交雑が進み安定した栽培が可能になるまでお金も時間もかかったものもある。現代主流な野菜とは違い、お金も手間もかかる伝承野菜であるが、それを守ってきたことでお金儲けでは得られない真室川の財産になっていると考えられる。

次に、ひまわり農場は農業法人として運営されている農場だ。ひまわり農場は地域の高齢化で使われなくなった農場や減反で田んぼとして使えなくなった場所を買い取り、畑にして運営している。また、会社として経営しているため正社員としてではなくパートとして働く人もいそう。この経営の仕方は、高齢化や就労人数が減る農業に対してとても効果的で現代的な方法であると感じた。

地域の文化としては、わら細工づくりやホワイトアスロンなどのお祭りがあることが分かった。ホワイトアスロンは真室川町で近年行われている雪を題材としたお祭りだ。地域としては問題であった雪の多さを逆手にと

って地域で昔使われていた踏み俵を使って競技を行うもので、地域の厄介な問題でも見方を変えればよい長所に変わることを学んだ。

最後に高橋伸一さんから聞いたお話からは多くのことを学んだ。特に高橋伸一さんの「ないものねだりよりあるもの探し」という言葉が印象に残っている。真室川町は確かに都会とは違いお店や娯楽施設が少なく田舎といえる。しかし都会と同じものを探すのではなく真室川町にしかないものを探すということが豊かな暮らしや真室川町の新たな価値の発見につながるのだと思う。

以上の4つを中心に真室川町の良い点を学んだが、その一方で真室川町にはPRが足りないという課題が発見できた。真室川町には伝承野菜のようにほかの地域には見られないような魅力があるが、その存在を知る人はあまりいない。例えば、駅などの公共施設にポスターを張って真室川町について興味を持ってもらうようにしたり、SNSを使って若い世代に真室川町を知ってもらったりすることで、真室川町の魅力を多くの人に知ってもらえるだろう。

今回の活動を通して、本当の豊かさとは自分の考えにそってほかの人に左右されないで生きることによって生まれるのだと私は考えた。都会で生きるにも田舎で生きるにも、自分の意志を持って生活することで便利さやお金などに関係なく自分の納得のできる生活ができるだろう。自分の感じたこの豊かさを忘れないよう生活していきたい。

工学部 Hさん

1. フィールドワークでの感想

私は、真室川町での4回のフィールドワークを通して、「豊かな暮らし」について考えを深めることができた。フィールドワークをする以前の私は「豊かな暮らし」とは、お金がたくさんあり、便利なものを用いて楽をし、欲しいものが手に入ることだと考えていた。しかし、真室川ではそうではなかった。真室川町では、自分の利益を考えず、地域と密接に関わり、お互いに助け合う生活をしてきた。実際に私達が地元の食材を使って料理体験をしているときも地域の方にニラ、キャベツ、米、ニンニクを無償でいただいた。そこで私は人の温かさを感じ、自分の利益ばかりを考えている自分の生き方が恥ずかしくなった。また真室川町に住む高橋伸一さんの生き方からも学ぶことがたくさんあった。高橋伸一さんは、給料が安定した公務員を辞め、農業で生きていくこと決意をし、地域のために一生懸命働いていた。安定した職を捨て、自分のやりたいことをする決断は、私には到底まねできないものであると感じた。さらに自分の時間、労力を地域のために当然のように使おうとする利他的な生き方は、地域社会に生きる人間の理想像だと感じた。

真室川町では普段経験できないような農業体験、わら細工体験、トロッコ乗車体験をすることができた。また

生き方や働き方についてたくさんのことを学ぶことができた。魅力がたくさんあり、人の温かさを感じることができると真室川町がもっと世の中を知ってもらえるように大学生の視点から課題を提言していきたいと思った。

2. 真室川の課題

- ・後継者不足（伝承野菜など）
- ・若い世代の人口が少ない
- ・PR不足

3. 課題の解決策

- ・後継者不足、若い世代の人口がすくないことに対する解決策

この2つは共通して人が少ないことが問題であるから、移住をしたくなるような制度を作ることが大切だと考えた。（例えば、10年住めば家がただでもらえるなど）

- ・PR不足に対する解決策
- Instagramやアプリ、観光用のウェブサイトを用いて真室川町の魅力を発信していくべきだと考えた。

工学部 Sさん

私は真室川町の4日間にわたるフィールドワークを通して様々なことを体験し多くのことを学ぶことができた。現在の社会での一般的な豊かさと言ったら多くの人が、お金、娯楽などと答えるかもしれない、しかし真室川町ではフィールドワークを通してたくさんのお金や娯楽などでは感じることができた。第一に自然の豊かさである。真室川町にはイバラトミオという準絶滅危惧種である魚が生息しており、そのような生物が生育できるのはこの町ならではの豊かな自然のおかげで、ほかにも肥沃な土地を生かした農業や林業が盛んで豊かな自然を上手に活用した生活が営まれていた。次に感じた豊かさは伝統を受け継ぐ地域のつながりである。真室川町には多くの伝統があり、その一つに伝承野菜というものがある、伝承野菜とは真室川地域の中の家々でそれぞれ古くから受け継がれてきた野菜のことで、現在高齢化による農家減少のため町を挙げて伝承野菜の栽培の継続、商業化に取り組んでおり、伝承野菜は現在ブランド化され関東圏を中心に販売経路を拡大している。さらに、真室川町にはわら細工の伝統もあり、その技術を知ってもらうため、高橋伸一さんという方がその伝統を引き継ぎ後世に伝える役割を受けている。そしてこの高橋伸一さんという方は、他にも農業や街の活性化につながる活動を行っており、町おこしにおいて重要な役割を担っていた。

真室川町には現代社会の生活ではあまり感じることでできない自然や地域のつながりというものを感ずることができた、しかしながらそれと同時に課題も見つかった。その課題とは、認知度不足という点である。上に挙げた通り真室川町には、伝承野菜、わら細工、豊かな自然など多くの魅力があるがあまり知られてい

ないというのが現状だ。これらの課題を解決するために私たちは、Instagramの開設や農業を生かして移住者を呼び込むというものを提案した。しかしながら真室川町は冬のイベントや街としての活動を多く行っており、現在は課題も多くあるが継続していきさらに宣伝に力を入れれば多くの人が目を向けてくれると考えられる。

私がこのフィールドワークを選んだ理由は、田舎の暮らし、農業体験から私の地元で生かせることを学ぶということだった。そして今回のフィールドワークを通して、真室川の取り組み、そして田舎ならではの暮らしの良さをかんじることができ、目標としていたことを学ぶことができたのでこれらの経験を今後を生かしていきたい。

工学部 Iさん

真室川町は最上地区の中でも、秋田県との県境に位置している地域で、アクセスもあまりよくなく、観光地としても有名ではない場所ですが、今回のフィールドワークで私たちは、真室川の豊かな資源を発見することができました。

私が真室川町をフィールドワークの舞台として選んだ理由は、自分の生まれ育った町の人口や大きさ、環境などが似ていて、私の地元には海がありますが、真室川は山に囲まれているので、どのように生活して、どのような方法で町おこしを頑張っているのか、またどのようところが私の地元と違っているのかについて知るために真室川町を選びました。

フィールドワーク全体を通して、真室川の一番の売りは伝承野菜ではないかと考えました。伝承野菜は最近個人の農家さんが細々と作り続けてきたものが発見され、県や町に認められたものです。

中には、嫁入り道具として各家庭に伝わっていったものもあります。実際に食べてみて、今スーパーで売られている野菜とは、見た目も味も違って、食べやすいものが多く、日本人の味覚に合っているから残っているものなのかもしれないと思いました。伝承野菜や伝統野菜の中でも、まだまだ新興勢力な真室川伝承野菜がどうすればより多くの人に知られて、知名度を上げていくことができるかを考えると、まず、広告の方法がインターネット上のホームページでしか見ることができないということがよくないと考えました。私たちの提言としては、意識しなくても真室川伝承野菜について知ることができる広告が必要だと考えました。したがって、駅やスーパーなど人の目に触れる場所にポスター等を張るのはもちろんですが、YouTubeの広告やInstagram等のSNSを利用したプロモーションが有効ではないかと考えました。やはり自発的に真室川伝承野菜について調べることはなかなか機会がないと自分たちが調べ学習をしていて思ったので、多くの目に触れるような仕組みの広告を出すことは有効ではないかと考えま

した。

真室川は立地的に人や文化の流れが止まりやすいような場所にあるので、いままで昔ながらの文化が変わることなく留まってきました。文化を守り継いでいる地域はほかにもたくさんあると思いますが、真室川はその文化の種類がたくさんあり、その中で生きている真室川の人たちは、田舎でも、お金をたくさん持っていないくても、豊かな暮らしをしていると思いました。



農学部 Yさん

私は真室川町の人々やその伝統に触れて、真室川町の様々な魅力に気づきました。また、その中でこれからの真室川町の課題も見えてきました。

私が真室川町で考えさせられたのが「ないものねだりよりあるもの探し」という精神です。この考え方は真室川町のいたるところで見かけられます。例えば、真室川町特有の伝承野菜についてもこの考え方が見受けられます。伝承野菜は、病気などにかかりやすいため育て方が大変難しく、大量生産もできず、食べられる期間も限られてしまうので、高価になってしまうというとても気難しい野菜です。このように一見やっかいで面倒な野菜、普通だったらこれ以上生産せず、別の、もっと利益の出る野菜にシフトチェンジするところですが、真室川の人たちは違いました。この伝承野菜のおいしさとその野菜一つ一つにある独特の歴史に注目し、地道にPRを重ねることによって、真室川町の活性化につなげようというのです。ここに私は「もっと良い今持っていないものよりも、今あるものの良いところに注目していこう」という、「ないものねだりよりもあるもの探し」の精神を感じました。また、伝統文化に注目しても「ないものねだりよりもあるもの探し」の精神を見出すことができます。真室川の人々は農作業をすると大量に出るワラや、大量に積もると厄介な雪などの、普段はマイナスな部分ばかりが目に見えるものを、プラスにとらえることにより地域の伝統に仕立て上げたのです。ワラはわら細工として、職人の手で魅力的な作品に生まれ変わり、雪は雪まつりとして、大人から子供まで楽しめるイベントに生まれ変わら

した。私はそんなあらゆるものをプラスにとらえて生まれ変わらせる真室川の人たちも、やはり真室川町の魅力の一つなのだと感じるようになりました。

しかし、真室川町の魅力に築いていくのと同時に、真室川の課題も少しずつ見えてきました。その課題とは、ズバリ人手不足です。農業をやるのにも、伝統を受け継ぐのにも、イベントを行うためにも、人手はあってはならないものです。しかし、今真室川町のほとんどを占める農業を営む人口が減少しつつあります。その裏には、農業の臭い、汚い、辛いなどのマイナスなイメージが新規就農者を遠ざけている現状があると考えました。そこで、農業は時間もお金も自分次第で自由自在である夢のある職業であるということや、女性も農業に参加しやすくなる体制が整っていることなどのプラスのイメージを前面に押し出してPRすれば、農業をやりたいという人も増え、人手不足も解消し、地域の活性化につながるのではないかと考えました。

農学部 Tさん

私がこの活動を終えてで感じたことがいくつかあります。まずいちばんといていいのが、真室川町で会った人たちはみんな真室川町を誇りに思っていたということです。そしてまた、そこでの伝統や営みをまもり、次の世代へつないでいきたいという思いも感じられました。

私たちに伝承野菜についてお話をしていただき、さらにわら細工も教えていただいた高橋伸一さん。彼は真室川町の伝承野菜をどのように広めたらよいか、どのようにして後世に伝えていけばよいかの課題について教えてくれました。

トマトの定植体験をさせていただいたひまわり農園さん。ひまわり農園では、高齢になり農業ができなくなった人の農地を借りて作物を育て、得た利益の一部をその土地の持ち主に返すというシステムをとっています。これによって、農地が放っておかれる心配もなく、その地域の農業が衰退することを防ぐことができます。このように工夫を凝らして地域に貢献していることがわかりました。

二回のフィールドワークにかけて、私たちに朝、昼、晩ご飯をつくっていただき、ピクルス作りを体験させていただいた果菜里庵さん。果菜里庵は農業と民宿が連携した農家民宿で、宿の隣にある畑からとれた野菜や、真室川町の伝承野菜を使ったおいしい料理を提供しています。観光地が少ないため宿泊してくれる人が少ないという問題を、真室川町自慢の食材で解消しているということに感心しました。

伝承野菜は現在後継者不足が問題となっています。高橋さんの話によると、伝承野菜は、真室川町で作られるというブランドの保持のために町外ではつくってはいけないという決まりになっています。また、その希少度

によって利益を得ているため、大量生産することができない決まりになっているそうです。私たちはこのことが伝承野菜の知名度の低さの原因であると考えました。解決策として、伝承野菜の知名度を上げ消費量を上げることと、後継者となる可能性がある新規就農者の呼び込みが挙げられました。具体例として、インスタグラムに真室川町の行事や野菜の写真を載せて興味を引く、スマートフォンアプリなどで伝承野菜や真室川の行事が伝わるようなRPGをつくる、農業に興味がある人を対象に真室川町で長期間の農業体験を催し、果菜里庵などの農家民宿で地元の食材のおいしさを実感してもらうなどが考えられました。

真室川町に限らず、農家民宿はその地域の農業の活性化に役立つと思います。農家民宿で地元の農業の魅力を伝えることはとても大切なことだと感じました。ひまわり農園の賢い方策も、ほかの地域が見習うべきものだと思います。

農学部 Hさん

私が一番印象に残っているのは、伝承野菜です。初めは見たこともない野菜だったので、正直そんなに乗り気ではありませんでした。しかし、食べてみると苦みがほとんどなく、とても食べやすく美味しかったです。また、高橋伸一さんのお話で伝承野菜の歴史を知り、とても興味を持ちました。ですから、もっとたくさんの人に知ってもらいたいです。インターネットでの発信はありますが、そもそも伝承野菜を知らなければ検索もしないので、ポスターやCMで存在を知らせることが大切だと考えます。そして、実際に食べてほしいです。それが、地域の活気づけにもつながると考えます。

また、地域の絆も強いと感じました。地域の人のほとんどが知り合いで、会えば立ち話をする姿を何度も見かけました。そして、野菜などを分け合い、支え合いながら生きていることを学びました。これは、都会ではなかなか見られない光景です。

次に高橋伸一さんについてです。伸一さんは、公務員という安定した職業をやめ、地域の伝統を守っています。わら細工の工房であるストロー工房を立ち上げ、畑では伝承野菜を作るなど様々な活動を行っています。これは簡単な決断ではなかったと思います。しかし、伸一さんのおかげで守られているものが確かにあると考えます。

最後にひまわり農場です。使われなくなった農地でも作物を作っています。高齢化が進む地域では、農業をやめる人が多いですが農地は荒れ果ててしまいます。私の実家の周りも荒れ果てた畑や田んぼがいくつもあります。そのような農地を会社として、作物を作ること、高齢者の収入にもなりますし、農地も荒れません。なので、とても良いことだと考えます。さらに、パートの方は女性もたくさんいるそうなので、女性が活躍する場にもなっていると言えます。

これらのことから、真室川町は豊かな町であると考えます。豊かさとは人それぞれの価値観があるので、一つとは言えません。しかし、私は自給自足ができ、豊かな自然に囲まれ、地域の絆が深いことが豊かさだと考えました。高橋伸一さんの生き方はまさに豊かさそのものだと感じました。今回の体験で真室川に行かなければわからないことを、たくさん知ることができました。改めて、フィールドワークの大切さを学びました。

農学部 Kさん

私は今回のフィールドワークを通して、田舎ならではの豊かさを感じる場面が多くあった。都会に比べるとお店や最先端のものはないかもしれない。しかし、きれいな自然や人の温かさ、伝承野菜など、都会に勝るような豊かさがたくさん見られた。イバラトミヨのような希少な魚が見られたり、自分たちで料理を作るために食材を調達しに行った時には、地元の人がお米や野菜などを譲ってくれたり、都会では食べられないような伝承野菜があったりと、私が今まで経験したことのない体験をすることが出来た。特に伝承野菜の雪割菜や勘次郎胡瓜を食べたときは、そのおいしさに衝撃を受けた。雪割菜はキャベツのような甘味があり、勘次郎胡瓜は臭みがなくとてもおいしく食べることが出来た。

しかし、これほど良いものが真室川町にはたくさんあるのに、そのことを知っている人は少ない。実際私もこのフィールドワークを行うまで、真室川町についてはほとんど知識がなかった。このように、知名度が低いということが真室川町の課題であると思う。

では、どのようにして知名度を上げていけばいいのだろうか。真室川町の伝承野菜は世の中になかなか出回らないため、直接真室川町に食べに来てもらうしかない。そのために、インターネットなどで宣伝するということが今の時代は必要になってくると思う。また、インスタグラムなどをはじめ、真室川町のきれいな景色や伝承野菜を広め、この町に来たいと思わせることが重要である。しかし、ネットだけでは厳しい現状があると思う。だから、このような体験をさせてもらった私たちや真室川町の良さを知っている人たちが、直接言葉で、顔を合わせながら町の良さを伝えることが最も効果的であると思う。

今回の体験は農学部である私にとって、とても参考になる体験ばかりだった。また、私たちに話をしてくれた高橋伸一さんや、ひまわり農園の方などの話は、今の農業の現状や農家を営むことのメリット、デメリットなどを教えていただき、いろいろ自分のなかで考えさせられる内容だった。真室川町という場所は、本当に魅力がある場所である。だから、私はもう一度真室川町に行きたいし、ぜひ皆さんにも真室川町に直接出向いて、豊かな自然や伝承野菜のおいしさ、人の温かさなどを自分の肌で感じてほしい。

子どもの自然体験活動支援講座1

活動状況

○実施市町村：真室川町

○講師：山形県神室少年自然の家職員

○訪問日：平成30年6月9日(土)～10日(日)、7月7日(土)～8日(日)

○受講者：人文社会科学部2名、地域教育文化学部2名、理学部2名、工学部2名、農学部4名
以上12名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p>【1日目】5月12日(土)</p> <p>08:00 山形大学発</p> <p>10:00 神室少年自然の家着・入所式 オリエンテーション シュラフ・テント設営</p> <p>12:00 昼食 自然体験活動①</p> <p>16:00 野外炊飯Ⅰ 自然体験活動②～夜～ リスクマネジメント研修・ふりかえり テント泊</p>	<p>【1日目】6月9日(土)</p> <p>08:00 山形大学発</p> <p>10:00 神室少年自然の家着・入所式 「わんぱく探検隊」であいのつどい シュラフ・テント設営</p> <p>12:00 昼食 自然体験活動①</p> <p>16:00 野外炊飯Ⅰ 自然体験活動②～夜～ スタッフミーティング・ふりかえり テント泊</p>
<p>【2日目】5月13日(日)</p> <p>06:00 起床 シュラフ・テント干し</p> <p>07:00 朝食</p> <p>08:00 シュラフ・テント撤収</p> <p>09:00 自然体験活動③</p> <p>10:00 野外炊飯Ⅱ</p> <p>12:00 昼食 後片付け ふりかえり</p> <p>16:00 神室少年自然の家発</p> <p>18:00 山形大学着</p>	<p>【2日目】6月10日(日)</p> <p>06:00 起床 シュラフ・テント干し</p> <p>07:00 朝食</p> <p>08:00 シュラフ・テント撤収</p> <p>09:00 自然体験活動③</p> <p>12:00 昼食 わかれのつどい 後片付け・ふりかえり</p> <p>16:00 神室少年自然の家発</p> <p>18:00 山形大学着</p>

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Tさん

私は、このプログラムを通して、子供とのかかわり方の難しさを痛感し、子供ならではの感性に感動した。このプログラムに参加した理由は、中学生の時に、ジュニアリーダーという地域の子供会の活動のボランティアのようなものやっていた、そこで子供たちをまとめたりしていた経験が、生かせると思ったからである。

1回目の活動は、大学生だけで2回目の子供たちを支援する活動と同じことを行うものだ。野外炊飯、キャンプファイヤー、川遊び、薪割り、テント張りを行った。そして、最後にはそれらの活動を皆で振り返り、実際にやってみて気づいた活動ごとのリスクなどを考えた。この時、活発に意見が飛び交い、大学生の思考力の目覚ましを感じた。また、2回目の活動で、小学生を楽しませるための企画を考えた。自分たちだけで企画をし、それを実行することは、皆初めてで、手探りのような状況だったが、とても良い経験となった。

2回目の活動は、小学生3、4年生6人前後の班に、1人ずつ大学生がついて活動をサポートするものだった。その活動には、1回目の活動において自分たちで考えたものも入っている。自分たちで企画したものは実行でき、楽しんでもらえた。リスクのまとめは、小学生に伝えることで怪我などを防ぐことができたので、やっていたよかったと思った。これから自分で何かを企画する場面によく直面すると思うが、自発的にリスクを考えておくことは怠らないようにしたい。小学生3、4年生はギャングエイジと呼ばれ、自我が強くなる時期で、やんちゃな子が多いと聞いていたが、実際にかかわってみて、納得した。ジュニアリーダーでは、小学1年生から6年生までの子どもとかかわっていたのだが、集団から極端に外れる人はいなかった。だが、今回の活動では、一人でやりたい、と強く主張したり、絶対に先頭で歩かないと泣いてしまう子がいたりした。そのような子を集団の中に返すために説得することは、とても大変だったが、だんだん説得のコツがわかってきて、説得することにより集団に少しずつなじもうとしていく姿を見て、やりがいがあったと感じられた。ジュニアリーダーをしていた経験が生かせたと思う場面は、子供と一線を置いて接することなく、親しく話すことができたことだ。

子供とかかわり、協調性を身につけさせつつよい関係を結ぶことは、難関であるが、とてもやりがいがあることだと気づいた。自分で何かを1から企画することの楽しさも感じた。将来の職で、なにかを企画する仕事も視野に入れたと思った。



人文社会科学部 Uさん

今回のフィールドワークは2回に分けて行われた。1回目は小学3・4年生の子供たちの支援やリスクを考えながら、自分たちだけで自然体験活動を経験した。2回目は実際に子供たちと触れ合いながら、前回の反省や話し合ったことを意識しながら支援し、活動した。

シュラフ・テントづくりは、私たち大学生でも何も教えられない中で作るのは難しかった。そのため2回目は子供たちに少しずつヒントを教えながら、協力して作る過程を見守る形をとることを目標にした。実際に子供たちがテントづくりを始めると、最初は自分たちで考えようとせず、教えてもらおうとしていた。しかし、ヒントを与え、2個目のテントづくりになると、自分たちから進んで取り組んでいた。1回目の活動で企画したビンゴゲームは、子供たちに楽しんでもらえたため達成感があった。リーダーとなる子が進行しながら、どのマス目からクリアしていくかを考え、ゴールしていた。野外炊飯では、1回目の活動での反省で、子供たちに役割を決めたほうが良いという意見があった。それを参考にして子供たちに役割を与えた。そうすることで、自分の役割に責任を持ち、積極的に役割をこなそうとしていた。2回目の活動は2日間とも雨であったため、予定されていたキャンプファイヤーや川遊びはできなかった。これは自然の中で過ごす上では、私たちは自然に逆らうことができないので仕方のないことである。しかし、子供たちからは不満の声が聞こえた。このことから天候のことを考え、雨の日の企画を増やしたいと思った。

今回のフィールドワークを通して、今まで知らなかった子供の一面を知り、教育と支援の違いを考えることができた。私が想像していた小学3・4年生は、自分勝手にうるさいイメージだったが、お互いに協力し合い、決められたことを積極的にやる姿をみて感心した。たしかに自分勝手な場面もあったが、思っていたよりも手がかからなかった。また、男女で精神年齢に差があると感じた。私の班では、女子が男子に落ち着くように注意する場面が何度かあり、精神面での成長が女子の方が早いと

いわれていることに納得した。それも新たな発見であり、面白いと感じた。今回の自然体験活動は、子供たちが自主的に活動することを目的としているため、教育ではなく、支援するという形で私たちは子供たちと関わった。教育と支援の違いに悪戦苦闘しながらも、みんなで話し合い意見を出し合った。これから今回のような機会があれば、フィールドワークで経験したことや、考えたことを次に活かしていきたいと思う。



地域教育文化学部 Nさん

私が今回このプログラムに参加した目的は、関わる機会が少ない年代の子供たちと接し、子供たちがどう考え、行動するかを知ることだった。しかし今回のプログラムは以上に大きなものを得ることができたと考える。

1回目のフィールドワークではまず大学生自身が、子供たちが行うプログラムを体験した。テント・シュラフ作り、カレー作り、川遊び、キャンプファイヤー、星空観察、ハイキングなどである。特に印象に残ったことは、テント・シュラフ作りの際、最初は自分たちだけで考えながら組み立てるという作業がかなり難しく感じたことだ。大学生でさえ戸惑うのに小学生たちだけで組み立てさせるという困難さがうかがえた。また、骨組みが予想以上に長く危険で、周りに注意を向けさせながら取り組ませる必要があると強く感じた。そのため、「子供たちだったらこんな行動に出してしまうかもしれない」と危険を予測しながら、自分たちはどう声かけをしていくかを考えるというリスク・マネジメントを行った。これは、川遊びや調理をするときも同じで、岩場はかなり滑りやすいから走らせてはならない、眼鏡をかけている子は流されないように気をつけさせる、刃物の扱いには目を光らせる、など自分たちが体験して初めて気づくリスクも多かった。このことから、リスク・マネジメントの方法を学んだと同時に、自ら実際に経験することの重要性を学ぶことができた。

2回目のフィールドワークでは、6人の子供たちを大学生2人で引率した。はじめは子供たちの幼さに驚くばかりであったが、テント作りや大学生企画を通して、1人1

人の特徴、課題が見えるようになった。具体的に言えば、ありがとうを言えない子、遊びとして暴力を振るう子、大学生の手伝いを懸命にしてくれる子、甘えん坊な子、周りに合わせられない子など、本当に様々なケースがあった。課題が見つかった子に対しては積極的に指導を入れるよう心がけたが、1泊2日で何も変わらない子もいるように感じた。このことから、限りある活動の中でいかに子供たちを成長させられるか、日常生活に戻っても経験を生かし続けられるかが神室少年自然の家の課題であると考えた。

そのために提示する解決策は、子供たちにプログラムの目的を理解してもらえるようなプログラムに改善することである。今回、荒天時プログラムということでレインハイクやマシュマロを焼いたりしたが、歩いて終わり、食べて終わり、という感じがした。だから、その荒天時プログラムに焦点を当て、雨の日でも子供たちが協力して何かをやり遂げられるような、意味のあるゲームやレクを考えていく必要があると思う。そして、「楽しんで終わり」だけではもったいないと言うことを子供たちに伝えたいと考える。

地域教育文化学部 Iさん

私が、数あるフィールドワークの活動の中から今回「子どもの自然活動支援講座1」を選択したのは、将来小学校教員になりたいという思いがあるからだった。高校時代から、子どもと自然の中で活動するボランティア等に積極的に参加してきたが、大学生となり本気で小学校教員を目指す立場として臨んだ今回のフィールドワークは、高校時代と得たこと、感じたことが大きく違った。

4月に初めて今回一緒にフィールドワークを行ったメンバーと対面したが、何一つ共通点のないメンバーに戸惑いがちになり、なかなか自分から積極的にコミュニケーションを取れずにいた。1回目の活動の時から徐々にメンバーと打ち解けてきたが、本音で何でも言い合える関係とは言えないその場だけの関係のような気がした。そこは私が、自分から積極的にメンバーとコミュニケーションを取ろうとしなかったためである。今思えば大きな反省点となる。1回目は実際に神室少年自然の家で1泊2日のキャンプを行ったわけだが、ここには初めて経験することがたくさんあった。まず、テント泊。今までキャンプをしたことがあったがテント泊は初めて出会った。1からテントを組み立て、テントを完成させたが、ここで終わりではなく子どもの立場となって、子どもにどうしたらわかりやすくテントの組み立て方を教えられるか、どのようなリスクが考えられるかを考えた。1泊2日の中で、テント組み立て・シュラフづくり、野外炊飯、川遊び、キャンプファイヤーが大きな活動だったが、それぞれ子どもたちの中で起こりうるリスクをメンバーで考え用紙にまとめた。

2回目のフィールドワークでは、1回目に自分たちが体験したことを子どもたちに楽しんでもらい、自然の中で思い切り活動し何かを感じてほしいという思いから、気を引き締めて臨んだ。初めに所長さんからお話をいただき、小学3、4年生は「ギャングエイジ」と呼ばれ一番手のかかる大変な時期ということを知った。しかし、私が想像していた以上に良い意味でも悪い意味でも彼らはとてつもないパワーを持っていて、とても体力を奪われたような気がした。だが、私自身彼らのサポートをしたわけだが、逆に彼らから学んだことも多くあったため、今後の大学生活に生かしていけると実感している。また、これまで一緒に活動してきたメンバーに感謝の気持ちでいっぱいである。

最後に「自然と親しみ自然を好きになってもらえる教育をする」ことが新たな目標になったのは、今回もがみでフィールドワークを行ったからである。

理学部 Yさん

1回目のFWで私達は、子供と関わる上で必要なリスクマネジメントを、「研修」という形で学んだ。主な活動として、シュラフ・テント設営、川遊び、野外炊飯を行った。設営する際に、テントのポールへの跳ね返り、金槌で指を打つ可能性があることに危険性があることを学んだ。私は、今まで川で遊んだことがなく、泳いだことも無かったので、川遊びが不安だった。しかし、この体験を通して、もし子供にも泳ぐことが苦手な子がいれば、私達が後ろに付いたり、一緒にゆっくり泳いであげることで、子供達も安心して活動できるのではないかと考えるようになった。野外炊飯では、なたで木を割ったり、火を扱うときに忘れずに軍手をするとといった注意点が考えられた。2回目のFWでは、1回目で学んだことを基に子供達と共に活動をした。狙いとしては、子供達が協調性や自主性をはぐくむきっかけを作るといったものだ。主な活動として、FW生企画のゲーム、野外炊飯、ハイキング（天候により）だった。FW生企画のゲームは、施設の周りの自然の中を歩いてビンゴをし、ビンゴ数が多い班が勝つ、というものだった。この目標を与えたことで、少しずつ班の子供達の間で、協調性が芽生えてきたように思えた。また、友達同士のコミュニケーションは曖昧だが、積極的にビンゴを進めようとするような自主性も見られた。野外炊飯では、班の中で仕事をしている子もいれば、指示を出さなければずっと座っていたり、ウロウロしている子もいた。「どうしたら、子供達に考えさせ、協力して作れるか」を考えて上手く指示を出そうと考えたが、実際に子供達が思ったように動いてくれないと、時間を気にしてすぐ指示を出してしまうことが多かったと感じた。ハイキングでは、1日目の活動で緊張がほぐれたのか、自主的に前に出て歩く子が出てきた。しかし、何も考えずに進んで、ぬかるんだ道で滑って転ぶ子も見受けられた。

1・2回目のFWを通して、地域の課題は、天候に対応した活動ができないということだと考える。今回のハイキングと、FW生企画のゲームで通った場所は、実はほとんど同じ道だった。天候が崩れても、室内で、何か自然の物を使って活動し、かつそれが子供達の手元に残るものであれば、より自然と積極的に向き合えるきっかけを作ることができるのではないかと提案する。



理学部 Hさん

今回のフィールドワークでは神室少年自然の家での野外活動を、第一回では自分たちが体験し、第二回では子供たちに体験してもらうという構成で行われた。

第一回では主にシュラフ・テント作り、川遊び、野外炊飯、キャンプファイヤー、大学生企画作りをした。実際に体験することで体験するまでわからなかった危険な点が分かった。シュラフ・テント作りでは骨組みを組み立てるときにほかの人の目などにあたりそうになることがあった。川遊びでは急に深くなる場所があったり、流れが早いところだとくるぶし程度しか水深がなくても立っているのも大変だったりした。野外炊飯では通常の料理と同様に火や刃物が危険なのはもちろんだが、野外炊飯ならではの薪を使った調理なので薪を割るときに周りに気を付けないと危なかった。同様にキャンプファイヤーでも思った以上に火が大きくなるので危険だと感じた。これらを踏まえて第二回で子供たちに体験してもらう際に注意すべき点や大学生企画の内容について話し合った。

第二回では実際に子供たちと一緒に野外活動を行った。予定では第一回と同じくシュラフ・テント作り、川遊び、野外炊飯、キャンプファイヤーをする予定だったが、天候がすぐれなかったため川遊びとキャンプファイヤーが中止になり代わりにレインハイクとガスコンロを使ったマシュマロ焼きが行われた。子供たちは想像をはるかに上回るエネルギーを持っていてこちらの体力まで吸い取られるような勢いだった。今回のコンセプトは子供たちに「教える」のではなくどうすればいいか「考えて」もらうことだったので私たちはできるだけ手助け

をせず、必要に応じて支援するといった形をとった。また、子供たちの適応力や吸収力はとても優れており最初はまとまりがなかったがフィールドワークが終わるころには自分たちで列になって並んだり、お互いに助け合ったりする姿勢が見られるようになっていた。

今回のフィールドワークを通して自分の学びになったことと神室少年自然の家の課題が見えてきた。まず自分の学びとなったことだが、それは子供たちの持つ力である。特に先述した適応力や吸収力は大学生である我々をはるかに超えており自分たちが学べることも多かった。また、教わるのではなくまず自分で考えることもこれからの大学での学びにおいて重要だと感じた。次に神室少年自然の家の課題だが第一に活動後の生活で自然に親しむ機会が少ないという点だ。現実には、活動中に子供たちからTVゲームがしたいという声も聴かれた。第二に雨天時にできるプログラムが限られてしまうという点だ。今回のフィールドワークでも川遊びとキャンプファイヤーが中止となってしまう子供たちからは残念がる声が聴かれた。よってこれらの課題を解決するためには室内で行うことのできる自然のものを使った工作などを行い、それらを家に持って帰ってもらうことで帰ってから自然に親しむことができるようにするのが良いのではないかという結論に至った。

工学部 Oさん

プログラムでは、神室少年自然の家でのフィールドワークを2回行った。1回目は大学生だけ、2回目は子ども達とだ。

1回目は2日間のキャンプを実際に体験して、子ども達がどうしたら安全に楽しめるかを考えるのが目的であった。私たちは活動後、シュラフ・テント作り、野外炊飯、川遊びの3点の支援とリスク・対策を考えた。まず始めに支援。シュラフ・テント作りでは、子どもたちが主体だからできないことがあったら、私たちがうまくサポートをして子ども達に解決させること。野外炊飯では、火起こしなど少し難しいことも子ども達が自分たちでできるようにサポートすること。川遊びでは、私たちも一緒に入って私たちが率先して楽しむことなどが挙げられた。次にリスク・対策。シュラフ・テント作りでは、支柱の跳ね返りなどで誰かに当たったりすることがないよう2人1組で作業し、常に私たちが監督すること。野外炊飯では、包丁でのけがや火によるやけど、薪割り用の鉋に注意すること。川遊びでは、滑りやすいところや流れが早いところ、底が深いところなど、子ども達がけがをしそうなところを注意することなどが挙げられた。2回目は子ども達が安全に楽しめるように促進することが目的であった。雨の影響で川遊びがウォークラリーに変更になったが、それ以外は上に書いた支援やリスク・対策を意識して行動したため全くではないが、けがすることなく安全に楽しめたと感じる。しかし、包丁による

けがや火によるやけどがあった。これらは、私たち大学生が自分のことだけで精一杯だったのが原因だと思うため、次はもうないが自分の班だけでなく他の班の子どもにも目を向けられるよう余裕をもって行動するべきだったと反省している。私たちが考えた企画のビンゴも好評で、子ども達や職員の方に褒めていただくことができた。

フィールドワークを通し自然と関わることの楽しさと、子ども達のエネルギーを感じる事ができた。私は今まで自然と関わる事がほとんどなく、自然と関わることを苦手としていたがただの関わりず嫌いだ。何が楽しかったかと言われるとうまく表現できないが、とにかく楽しかった。そして小学3、4年生の子ども達の意欲と元気さには、ただただ驚かされるばかりだった。子ども達と一緒にいると、物事にあまり興味を示さない自分つまらない人間に思えたため、子ども達と新しい発見などを探した。この感覚を忘れずにいけば、将来何か新しい物を創り出せる気がする。

子ども達が活動後もこの体験を何かに生かしてあげることが今回の課題だ。この貴重な体験を通して各自何かしら学べることはあったはずだが、それを生活に活かせるかどうかはわからない。したがってそれも私たちがサポートできたらと思う。もし次があるとしたら、この体験を生活に活かせるような何かをプログラムに取り入れたい。しかし、その何かがまだ見つからないのでこれからも考え続ける。

工学部 Kさん

1回目のフィールドワークでは自分たちが2回目のフィールドワークで子供たちとやる活動をやりその中でどのようなリスクが子供たちにあるのかを考えるのが主なものだった。自分もやったことがある活動もあったが深く大きい川で川遊びをすることなどは初めてだった。川のリスクは自分が思っていたよりとても多く、自分も何度も滑って転びそうになったり、深い川で体が動かしにくかったりした。また、大学生企画の内容についてもみんなで考えた。2回目の活動では1回目のリスクを元に子供たちの班付きスタッフとして活動した。最初子供たちに会った時子供たちが人見知りしなく、元気な姿に驚いた。いざ活動が始まり子供たち主体にやって貰おうとするがなかなか進まなかったり、「やってよ」と自分たち大学生に任せてきたりと思うようにいかないことが多かった。しかし、みんなでやる大学生企画、ハイキングなどは自分たちでリーダーを決めて休憩を取ったり、遅れる人が出るとしっかり待ってくれるなど班で協力するところはしっかり協力してやっていた。子供たちはやる気になったりいやなことはやらなかったりとやる気にさせるのが大変だった。班の中には意見が合わない泣き出してしまいうもいてそういうときにどうすれいいのか最初戸惑ってしまったが、1日目の夜の職

員さんの話で言うところはしっかり言わなければいけないということが分かったし、わがままややらないときに無視してみるのも手だということがわかり自分たちの接し方も受け身にならず言うところははっきり言わなければいけないのだなと思った。あいにくの雨で川遊びはできなかったができてハイキングになって子供たちは最初いやだと言っていたが最後には楽しかったと言ってくれたのでよかった。

2回のフィールドワークを通して雨などで1回目のリスクについて生かせることがないところもあったが、自分たちが思っている以上にリスクがあることに2回目のフィールドワークをやって分かった。なかなかうまくいかないことも多かったが楽しく過ごしてこと貰うができてよかったし、子供たちの好奇心旺盛な姿や誰とでも積極的にコミュニケーションを取る姿勢などは大切なものだなと改めて感じた。フィールドワークを通して課題と感じたのは雨の時大学生企画とハイキングがかぶるところがあり雨天時でももう少しいろいろできたらいいなと思ったのと、他の班で家に帰ったらゲームをするという子がいたという話を聞いて家に帰ってからも自然と親しむことができるように普段の生活の中でも自然でどのように遊べるかなどを教えられれば家に帰ってからも外で友達と遊んでくれるようになりいいのではないかと思った。

農学部 Aさん

私が参加したこのプログラムは、神室少年自然の家での「わんぱく探検隊」の活動をスタッフとしてのサポートするものだった。子供たちが安全にかつ自主性、協調性を育むという狙いを達成するために、どのようなリスクマネジメント・支援ができるか、というところに活動の重心が置かれた。

一回目のFWでは、まず私たちが自然活動を実際に体験し、どのような危険が考えられ、どのような支援ができるのかを考えた。まず、職員さんからのヒントをもとに自分たちで考えて立てた。テントの支柱やペグを打つトンカチなどは、気を抜くと自分や周囲の人がけがをする危険性があり、子供であればなおさら気を付けなければならないと思った。川遊びやカレー作りについても同様に、考えられるリスクについて話し合った。活動してみると、日常生活ではできない、広い場所で体をたくさん動かす活動ばかりを、私自身が純粋に楽しめた。また、FW企画として、ビンゴを考えた。自然の家周辺を回ってスタンプを集め、ビンゴの数を班ごとに競うというもので、FW終了後もメンバーと集まり、狙いを実現できるようなビンゴを目指して話し合った。

二回目のフィールドワークは、わんぱく体験隊の本番だ。1日目は、子供たちの有り余るエネルギーに圧倒された。自分のことに精一杯で、自分の気持ちに素直な子供たちばかりだったが、その中にも個性があった。子供

たち一人一人に合う支援とは何か、「指導」と「支援」の境目をどこに設定すれば自主性や協調性が育つのか、など、メンバーも苦戦していた。2日目に予定されていた川遊びは、雨でレインハイクに変更になり、子供たちも残念そうだった。しかし、一日目はあまり活発な様子が見られなかった子供が率先して一番前を歩いたり、始めは嫌々言いながら歩いていた子供が最後まで歩ききる姿を見られた。子供たちの力を信じつつ、まずは見守る、できないときには応援したりヒントを与える、度が過ぎるときは言葉や行動で示す、ということが大事だと思った。そして何より、自分自身が楽しむ姿を見せることが大事だと感じた。

そもそも、私は「指導者」の視点を得たいと思い、このフィールドワークに参加した。しかし、子供が自分自身で成長するためには、自分で考えたり、自分で挑戦してみたりする経験が必要なのであって、そのためには「支援者」の存在も必要だということ今回学ぶことができた。今回見つけた自身の課題として、「子供に苦手意識がある」というものがあげられる。自分ではもっとうまくできると思っていたのだが、実際に子供たちと触れ合ってみて、そんなに得意ではないことに気が付いた。今後は子供と関わる機会を増やし、支援と指導をうまく使い分けられるようになりたいと思う。



農学部 Sさん

今回のプログラムで、私たちは神室で一泊二日のキャンプを二度行った。一回目は自分たちだけで野外活動を行い、二回目は小学校3、4年生の子どもたちの班付きスタッフとしての活動となった。

一回目のフィールドワークはテント張りから始まった。ほとんどのメンバーが初めてテントを使うということだったが、教わりながらどうにか張ることができた。しかし、これが子どもたちにできるかどうか不安だった。キャンプファイヤーでは炎の揺らめきに安心感を覚え、川遊びでは童心にかえって自然に飛び込んだことで自然の中でおもいっきり遊ぶ楽しさを実感した。そのため、子どもたちとも、同じような感情を共有したいと思った。

二回目には前回考えたことを振り返って臨んだ。ギャングエイジと言われる小学校3、4年生だが、役割を与えることで、チームとして機能し始めた。心配していたテント張りも班のメンバーそれぞれが意見を出しながら進めていて、あっという間に張り終えてしまった。あいにく天候には恵まれなかったが、それでも子どもたちは全力で楽しんでいて、子どもたちの活発さにエネルギーが吸い取られて、活動に付いていくのが精一杯だった。

二回のフィールドワークを通して、自然の圧倒的な魅力と、子どもたちの素直さ、底なしの体力を実感した。時間をだらしく過ごすことがどれほどもったいないことなのか、よくわかった。常に価値のある時間を過ごしたい。



農学部 Aさん

1回目のフィールドワークでは、私達大学生のみで自然体験をした。テント設営では、骨となる部分は重たく、子供には注意をするべきだと感じた。川遊びでは、寒かったり、足元がおぼつかなくなったりしたので、私達が注意深く子供達を観察する必要があると感じた。野外炊飯では、刃物や火を使うので、それらを子供が使う際には必ず大学生が付いているべきだと考えた。オリエンテーションでは山の中にハイキングへ行った。結構斜面が急であったり、地面が滑るポイントがあったりと、気をつけるべき所は多くあった。私達はこれらのリスクとその対策を考え、2回目のフィールドワークに臨んだ。

2回目のフィールドワークでは、わんぱく探検隊と一緒に自然体験をした。初対面で感じたのは、元気がとてもあるということである。子供達同士も初対面であるのに多くのコミュニケーションを取っていて感心した。テント設営では、やはり骨の部分が重たいようで、危ない所もあった。しかし子供達もそれが危ないことは分かっていたようで、子供達同士で注意喚起をし合ってもいた。初めの自然体験活動は、大学生企画のオリエンテーションだった。前日に雨が降っていたので地面の状態は良くなく、より注意をしてハイキングに臨んだ。ぬかるみを警戒しながら歩く子供がいた一方で、自分の班の子供達

を後ろから走って抜かしてくる子供もいた。そこは決して広い道ではなかったので少し危ないと感じた。だから、班の隊列を大学生で挟むなどして歯止めをかけるべきだと感じた。野外炊飯では、手が空いた子供が遊び始めたりすることがあった。そう言ったことはあまり想定していなかったの、上手く対処することが出来なかった。調理場で遊ぶことは怪我に直結するので、どうやって待ってもらうか、どうやって仕事を与えるかについても考える必要が出てきた。他にも、大学生のペア同士のコミュニケーションも難しいと感じた。子供達だけでなく大学生のペアの役割分担もしっかり考えるべきだと思った。2日目の川遊びはあいにくの天候により出来なくなったので、ハイキングをすることになった。1日目の大学生企画と似ている所もあり、文句も出たが無事に終わることが出来た。

全体を通して私が思ったのは、小学3、4年生が想像よりも幼く、しかし積極性があったということである。もちろんそれぞれの子に個性があるので一括りには出来ないが、子供達が自ら注意を呼びかけたり意見交換をしたりと、感心する所が多くあった。

私個人は、子供との良い距離感を掴みかねていた。端的に言って甘かったのだと思う。子供達と仲良く活動できたのは良かったと思うが、ある程度ダメな所はダメと言ったり、自分でやる所は自分でやらせたりして、今回の目的、自主性と協調性を良く考えさせるべきだったと思う。また子供と一緒に活動する時があったら、その時は今回の学びを生かしてより良い支援をしたいと思う。

農学部 Mさん

今回、私はこのプログラムを通して、子供と接することの大変さを感じた。

一回目の活動では、子供たちが体験する活動を前もって知るために自分たちでテント作りや野外炊飯、川遊びを行った。また、そこで活動したことについてどういった支援ができるのか、リスクと対策について話し合った。そこでは、今回の活動のねらいである子供たちが自然の良さや仲間の大切さを感じ取り、自主性や協調性を育むきっかけを作るということについて改めて考えさせられる時間となった。また、大きな活動として、FW生の考える企画というものがあった。それはベースはあるものの自分たちが主体となって神室の自然を生かした活動していくというものだった。当日になって急に活動を考えてと言われたものの、各自活発に意見を交換し合っただけで小学生に楽しんでもらえるような活動にするために話し合いを進めていき、帰ってから昼休みなどを利用し内容を深めていった。たった一泊二日の活動の支援なのにこんなに準備することがあることはとても驚いた。

二回目の活動では、ついに子供たちと一緒に活動をして行った。自分の想像では、あまり口出ししなくても、

しっかりと活動できるのかなと思っていたが、班長を決めるだけで5分ぐらいかかっていたり、自分の意見を押しつけ合っていて、なかなか穏便に進められていなかったりと自分の想像とのギャップにただただ驚いた。一回目の活動で出た支援やリスクと対策も意識はしていたのだが、どう言えばしっかりと伝わるのかまで考えてなかったため、その部分で小学生の子に対して接することの大変さを痛感した。だが、少しずつ時間をかけて接していくうちに私たちが声をかけなくても自分たちで声を掛け合ってまっすぐ並んだり、静かにすることができていて、たった一泊二日の活動でも成長していくのだなと感じた。最後の別れの時には子供たちは笑顔で手を振って帰っていたのできっと楽しい活動になったのだと思った。これから今回の活動を少しでも家での生活や学校での生活に生かしてくれたら良いと思う。

大蔵村の生活と伝統の継承

活動状況

○実施市町村：大蔵村

○講師：地域住民の方々

○訪問日：平成30年5月26日(土)～27日(日)、6月2日(土)～3日(日)

○受講者：人文社会科学部4名、地域教育文化学部1名、理学部2名、工学部6名、農学部2名
以上15名

○スケジュール：

1回目		2回目	
【1日目】5月26日(土)		【1日目】6月2日(土)	
08:00	山形大学発	08:00	山形大学発
10:00	赤松生涯学習センター着	10:00	赤松生涯学習センター着
10:30～11:30	オリエンテーション (村の歴史と文化説明)	10:00～10:30	オリエンテーション
11:30～13:00	昼食・移動	10:30～11:30	笹採り
13:00～17:00	村の歴史と文化(合海～肘折)	11:30～13:00	昼食・休憩
17:00～17:30	赤松生涯学習センターへ移動	13:00～13:30	肘折へ移動
17:30～18:00	休憩	13:30～16:00	肘折温泉の学習
18:00～19:00	夕食	16:00～17:00	入浴
19:00～19:30	休憩	17:00～17:30	赤松生涯学習センターへ移動
19:30～21:00	合海田植え踊り体験	18:00～19:00	夕食
22:00	消灯	19:30～21:00	レポート記入
		22:00	消灯
【2日目】5月27日(日)		【2日目】6月3日(日)	
07:30～08:30	朝食	07:15～08:30	朝食
08:30～09:30	準備	08:30～10:00	笹巻き作り
09:30～10:00	四ヶ村の棚田へ移動	10:00～12:00	合海田植え踊り見学
10:00～12:00	ほう葉めし作り・棚田田植え体験	12:00～13:00	昼食
12:00～13:00	昼食	13:30～15:30	レポート記入・村レポート提出
13:00～13:30	赤松生涯学習センターへ移動	16:00～	赤松生涯学習センター発
13:30～14:00	休憩	18:00	山形大学着
14:00～15:30	レポート記入		
16:00～	赤松生涯学習センター発		
18:00	山形大学着		

授業記録

〇活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Wさん

私は生まれも育ちも山形県であり、地元のことについてはある程度は理解していると自負していた。しかし、フィールドワークもがみの講義説明会を受けた時に、自分は山形県のほんのわずかな地域しか認知していなかったことに気付かされた。大蔵村は幼い頃大雪を見に一度だけ訪れた所で、何も知らなかったあの頃とはまた違う視点から村について考えたいと思い、このプログラムに応募した。

研修では、肘折温泉について、また棚田や食文化、田植え踊りなどの表には出ない地域伝統の文化についても体感することができた。大蔵村は県内でも有数の歴史ある土地であり、温泉中心街に並ぶ旅館の玄関を覗くと、時間の流れがゆっくりとしている落ち着いた雰囲気が漂っていた。また、トマトやそばなどの村の食材を活かした商品や、今回は見学できなかったがほぼ毎朝一年中開かれる名物の朝市など、村を訪れてみたくなる魅力がたくさん発見した。

現在の大蔵村が抱えている問題として全体で話し合う中で、小中学校の統合に伴う人口流出が挙げられた。私は、村出身の人に限らず、県内外からより多くの人々に村を訪れてもらい、村の魅力を全身で感じてもらうことで、村の魅力を再発見し、大蔵村に関心を持つ人々を増やしていくことが必要だと考える。

その方法の一つとして、他地域の大蔵村のような秘境の温泉地、または山形県内の銀山温泉のような全国的に有名な温泉地と連携することを提案する。一連の温泉地を巡るツアー、他地域との商品共同開発、旅行雑誌での関連特集などで、観光客を流動的に大蔵村に訪れやすくすることで、大蔵村のことを知るきっかけが生まれると考えるからだ。近年インターネットの発達で、いわゆるネットサーフィンにより関連情報が簡単に手に入るようになった。そのような膨大な情報から大蔵村に興味を持ってもらうには、まず情報に触れる機会をもっと増やすことで「聞いたことがある」という段階まで認知度を高めること、そして実際に来てみたくなるような宣伝ポイントを明確にすることだと思う。今回村を訪れ、実際に来てみないとわからない雰囲気や人々の温かさがあつた。まずは一度でも訪問してみようとする機会づくりを充実していくことで、よりたくさんの大蔵村ファンを生み出せるのではないかと考えた。

人文社会科学部 Tさん

私は4日間山形県大蔵村というところに滞在した。ここでは多くの貴重な体験をさせていただいた。1日目は大蔵村を見て回った。この村には原敬、小磯国昭、松尾

芭蕉といった日本史に出てくる人物がにに関連のあるものが多いと感じた。まず、最上川に行った。ここは芭蕉がハイクを詠んだ地らしく、芭蕉と河合曾良の像があつた。似たようなものを山寺や松島でも見たことがあつた。小屋酒造では小磯国昭の手紙を見ることができた。彼は、大蔵村を理想の村とする計画を思案していたらしい。それは八幡神社にあつた石碑からも確認できた。八幡神社は旧街道の交差点となつていて舟形宿への道が示されていた。清水城跡では自然の堀に囲まれた地を見ることができた。最上川と山々に囲まれた清水城はまさに鉄壁の城だと思った。最後に肘折温泉に行った。多くの成分が含まれた良い温泉で観光地になるのも納得できた。

2日目は田植え体験をした。長時間のかがんだ状態での作業はつらいものだった。今回は大勢でやったから気にはならなかったがひとりでやると寂しさを感じるかもしれないとも思った。ほう葉めしもいただき働いた後の食事はいつもよりおいしく感じた。

3日目は肘折温泉街の散策をした。大蔵村は県内有数のトマトの生産地らしくトマトを使った商品が多く見受けられた。トマトソフトクリームは絶品だった。歴史を感じる街並みで多くのお店があり賑やかだと感じた。地域の人にあいさつをすると挨拶を返してくれる人が多く温かみを感じた。人力車を使って散策でき乗った時に受ける風は心地よかった。温泉街には肘折郵便局がありここは戦前から使われていたということだった。町の角々には灯籠が設置されていて夜になると放つその光はまるで異世界にタイムスリップしたようにみえるとのこと。散策の後に地藏倉へ向かった。山の中野岩肌のところに建っていて感動した。その後温泉に入浴し温かさが持続する効果と肌がすべすべになる効果を感じた。

4日目は田植え踊りを見学した。民家の中にお邪魔したのだが歓迎されて食べ物や飲み物をふるまっていた。地域の強いつながりを感じることができた。この村では高校を卒業したら完全に大人として扱われるらしい。その後笹巻を作った。自分たちでとってきた笹を使ってもち米をうまく巻いていくものだった。きな粉との相性は抜群だった。

このように多くの貴重な体験を通して見えてきた大蔵村の課題は人口減少だ。村民の方々もそのようにおっしゃっていた。小中の合併によって人口が急減したらしい。村としてはまず観光客が欲しいとのことだ。私は肘折温泉や地藏倉や清水城跡といった名所や笹巻やほう葉めし、トマトソフトクリームのようにおいしいものが多いこの村に観光客が来ないのは交通の便が悪いからだと思った。村は広がったが移動中に公共の交通機関を目にすることはなかった。こうなるとせっかく大蔵村に来て満喫できないのではないかと思う。また村に行く手段がないと感じた。電車やバスを大蔵村まで通せば観光客はぐっと増えると思う。

今回の体験や考えたことを通じて自分の地元につい

でも改めて見直してみようと思った。



人文社会科学部 Iさん

私は、事前学習を通して大蔵村は自然豊かで積雪量が多く、温泉街など様々な観光資源がある村ということを知った。そのような土地でどのように自然と人々が共生しているのかを実際に目で見て感じ、今まで以上に大蔵村の良さを伝えるにはどのような策があるのかを考えたいと思い本講義に臨んだ。

大蔵村での四日間の生活を通して、歴史と文化を学習し、伝統芸能を体験と見学し、山菜やほう葉飯、笹巻きなどの食文化に触れ、田植えや肘折温泉の学習などを行ったことで沢山のことを肌で感じることができた。また、体験をしていく中で大蔵村の人々の温かさにも気付かされ、初対面の私たちに対してのご好意や村の住民同士がまるで家族のようにお互いを大切にしている様子など、私の住んでいる山形市内や都会などでは見られない地域交流の深さに感動した。

体験を通して、大蔵村は実際に訪れることでより多くの良さが伝わる村だと感じた。しかし実際は観光客や移住者は多いとは言えず、急激な高齢化も進んでいる。その問題を解決するために、まずは観光客を増やしていくことが必要だと考えた。そのためには大蔵村主催でイベントを開催するよりも他の温泉街などと協力し、一つのツアーとして人を呼び込むことが重要だと思う。ツアーすることで大蔵村主催のイベントよりも費用が少なく、しかし確実に観光客を大蔵村に呼び込める。山形県内には銀山温泉など有名な温泉街があり、県外からの観光客も多いため、そのような地域と連携して観光客を呼び込むことでその中から移住者も増えていくのではないかなと思った。

大蔵村の良さは訪れた人を魅了するものがあり、言葉ではなく実際に訪れてみないと伝わらない良さがある。もちろんその裏側には良い歴史だけでなく悲しい歴史も多くあり、そのような時代を耐えたからこそ今の美しい大蔵村がある。だからこそ目でみる素晴らしい大蔵村と現在までの大蔵村の歴史とを照らし合わせて、時代の

流れを感じながら学習できたことで四日間という短い間で沢山のことを吸収できた。最後に村長さんとおっしゃった「自分たちの住んでいる所の良いところは探そうとしないと探せない。是非自分たちの住んでいる所の良さも見つけていって欲しい。」という言葉をおぼれずにまわりを大きく見渡し、大蔵村の沢山の魅力のように地元の魅力も再発見していきたいと感じた。

人文社会科学部 Eさん

今回のフィールドワークで大蔵村に訪れ、現地の人に直接話を聞くことでインターネットや本だけでは分からない多くの魅力や、逆に大きな課題などが実感出来た。

大蔵村には多くの伝統や文化があった。清水城跡や地蔵倉や肘折温泉など今回の学習でもたくさんの場所を訪れた。また、ほう葉めしや笹巻きや山菜などの食文化についても触れられた。個人的に一番印象的であったのは合海田植え踊りである。毎年6月の第一日曜日に地域内のすべての家々に訪れ踊るということで、人口が多くないからこそできる伝統であり、地域が一体となっているのがよく伝わった。私にとって人口が少ないということはデメリットでしかないと考えていたためとても驚かされた。また、実際に合海田植え踊りを見学してみると大方の人々はお互いに顔見知りであり、老若男女問わずとても仲良しに話しており人と人のつながりを強く感じた。それに加え、今回のフィールドワークに携わっていただいた大蔵村の方々全員がとてもフレンドリーで私たちに優しく接してくれ、人の温かさを実感できた。これらの魅力は実際に訪れなければ知ることが出来なかったことであり、また実際に肌で感じることで分かることもあるということを経験することが出来たとても貴重な経験だったと思う。

大蔵村は現在、過疎化という大きな問題に直面している。またその影響で、学校数の減少や交通機関の便数が減少しさらに過疎化を進行するという悪循環にあるのではないかと考えた。現地の方々には観光客を増やしたい様子であったが、そのためのPR等は不十分であると感じた。また、PR活動を十分に行ったとしても若い世代の人は積極的に大蔵村に足を運ぶとは考えづらい。そのため私は、対策として今回のフィールドワークのような活動をもっと山形県内の学校と連携して行うべきだと考える。大蔵村にとっては若い世代に伝統や魅力を伝える良い機会であり、学生にとっても貴重な体験になると思う。私自身、今回のフィールドワークを通じ、伝統や文化の保存や継承のための努力や自然を守っていくための創意工夫など多くのことを学び考えさせられた。私としても、なるべくたくさんの人にこのような経験をしてほしい。

今回、大蔵村の課題を見つけて解決策を考えることはできた。しかし、自分の力では課題を実際に目の当たりにしたにもかかわらず、何もできないのだと痛感した。

せいぜいこの後の活動報告会で山形大学の一部の生徒に大蔵村を紹介できる程度である。そのため、今後の大学での学習の中で大蔵村のような地域に対し自分ができることを検討し実践していきたい。

地域教育文化学部 0さん

私は日研生として、日本の伝統文化の伝承現状について調査している。調べた限り、大蔵村の伝統保存はよくできていると感じる。有形文化財について、詳しい紹介の書いてある看板が丁寧に設置されたり、解説してくれるボランティアがいたりして、ダムも橋も温泉のラーメンも、細かいところに至るまで大切に見守っている地元の努力が見える。また、無形文化財について、たとえば合海田植え踊り今の時代で珍しく強い生命力が見える。其の生命力の裏に、村人との繋がりがあからだ。実は、一回目の活動で、保存会の会員が踊りの意味を解説してくれたとき、統一した「正解」がないと気がした。伝統文化の精神面としての歴史や意味などちゃんと動作と一緒に伝わらないといつか「形」しか残されない可能性があるかと心配した。しかし、二回目のとき、踊り手たちの来訪でにぎやかになった一軒一軒の民家に入ってもらい、親切にご馳走を用意して踊り手を招待した地元住民、実家で踊るように自然に冗談を言いながら大笑って踊りを楽しんでいる踊り手、汗だらけでも太鼓や笛を演奏し続ける若い保存会員、踊り手の動作を真似する子どもたちを見て、心配する感情は少しずつ解消した。なぜかという、思わず住民達と田植え踊りを見ながら一緒に笑い出した時、保存会員から聞いた話を理解したからだ。一回目の活動の終わりに、自分の心配を会員さんに教えた。そして、「僕は地元とのつながりを深めるために、保存会に入った。別に歴史とかを伝承することではなく、保存会のみんなと一緒に楽しんで踊れば十分だと思う」という答えをもらった。二回目の活動を通じて、大蔵村の伝承態度を見直した。伝統文化を見守る主体は地元の人たちで、地元の独特な性格によって伝承のさまざまな「形」を形成する。そして、伝承の「形」は必ず唯一ではない。田植え踊りは地元の絆という役割がある限り、大蔵村が存在する限り、行事は生き続けられる。それは大蔵村の伝統文化の生き方だ。

ただ、現代社会はいつでも凄まじいスピードで進化していく。そして、いつか静な大蔵村はこの社会に合わせるためいろいろ変わらなければいけない日が来る。今の時点でも、少子高齢化や観光業振興により、村も文化も変化し続けている。そうすれば、小さな大蔵村と依存し合う伝統文化はどうすれば維持されるのかを考えなければならない。村の伝統保存と地域振興の共生は今後解決しないとならない課題だと思う。

理学部 Tさん

大蔵村を初めて訪れて、私は「自然」の2文字を漠然と

頭に思い浮かべた。しかしこの考えは今思うと間違いだったのだと感じる。大蔵村での2週間で、私の「自然」に対する考え方にどのような変化があったのかをまず記そうと思う。

昔、この地で戦があったと聞いた。一見、大蔵村には田んぼ、畑、森林。戦の面影はまるで感じられない。今私たちが見ている大蔵村の景色は紛れもなくこの地の先人たちが時間をかけて少しずつ作り上げてきたものなのである。恐らくは、私が見た大蔵村の景色のうち、半分は本当の意味での「自然」などというものではなかったのではないだろうか。大蔵村は、田んぼや畑がたくさんある。緑がたくさんある。しかしながらこれを私たちは自然と呼んで良かったのだろうか。大蔵村の、戦からの復興という歴史的背景を踏まえ私はそのように感じた。

さて、本講義の目的の一つである「課題発見」についてである。

大蔵村の方が言うには、「とにかく人が欲しい」とのことだった。知名度、地理的環境(アクセスが大変困難)を考えると、この発言も頷ける。上記の通り私はこの村には本当の意味での「自然」と、現地の人たちが作り上げてきたものがあると感じた。私は、後者について課題解決にむけて深く考えたいと思った。山形県大蔵村でできないことを実践したいと思うからである。何よりも村の人たちが「誇り」を感じるができるものでなくてはならないだろう。班のみんなのレポートにもあるようにそんな「誇り」を感じるができる課題解決案を私たちの班は全力で提示してきたことに加え、これからプレゼンも行うつもりだ。私たちの進言や発表が現地の方々のために少しでもなれば幸いである。

ここまで大蔵村の課題発見について各々熱く語ってきたわけだが、私は、本講義は実は「自分に対する課題発見」が裏のゴールなのではないかと勝手に考えている。自分に矢印を向けて考えてみた。

挨拶や、時間意識、仲間との協力意識など、親元を離れ、曖昧になっていた部分が今回再認識できたと感じる。

最後に、人と話すことは苦手ではなく寧ろ得意な方であると自負している私であるが、大学生デビューに華々しく失敗し、友達がいなかった私にとって、仲間と協力し村の課題について深く考えていく中で次第に仲良くなっていったという点においてもこのフィールドワークはとても有意義なものであった。班のみんなに感謝をしている。

理学部 Iさん

私は、自然、歴史、そして人とのつながりが大蔵村の魅力だと今回の講義を通して感じた。

まず大蔵村へ行って感じたことは、自然豊かであるということだ。周りを見渡せば緑が生い茂っており、すぐそばには最上川が流れていた。また実際に、ほう葉めし

や笹巻き作り、田植え、肘折温泉入浴などを体験してみると、自然をより身近に感じることができた。例えば、ほう葉や笹で包むことが殺菌になったり、肘折温泉は美肌効果や血流の活性化などの効果があったりなど、自然がもたらす恵みの有難さというものを認識できた。

大蔵村を散策してみると、歴史の重みを痛感した。最上川の水運で栄えた清水の国、本陣として有名だった小屋酒造、小磯国昭の思いがこもった石碑、月山登山の道として賑わった肘折温泉街、訪れたそれぞれの場所には、そこでしか感じることができない神秘さがあった。どれも語り継がれるべき重要なものであると実感できた。

合海田植え踊りを見学し体験して感じたことは、大蔵村の人々にある厚いつながりだ。合海田植え踊りを合海地区全区の家で踊ること、踊った後に笑顔で交流する姿は印象的であった。また見学の私達も家の中へ入れて下さり、食べ物まで頂いた。大蔵村の方々は温かい心を持っており、その中にあるつながりは今の世界に必要なものだと感じた。

このように多くの魅力を持っている大蔵村だが、人口減少という問題を抱えていることが分かった。特に、若者が減少して村内の小・中学校が統合したことからの問題がうかがえる。結果的に観光者も減少しているため、大蔵村へどのようにして人を呼び込むかが最大の課題であると私は思った。

解決策は、大蔵村に触れる活動を拡大することである。私は、人を呼び込むためにはまず、大蔵村の魅力を伝える機会を増やすべきだと思う。私は山形県出身であるが、講義を受講するまで大蔵村のことについては何も分からなかった。恐らく私のように大蔵村に触れる機会のない人は、その機会を作らない限り、大蔵村に訪れようとする人は少ないのではないだろうか。具体的には、今回私の行ったような活動を県内多くの小中高生にも体験してもらう授業を展開することである。

他方で、観光業を拡大することも考えられる。肘折温泉街を散策した時に、掲示板に観光ツアーのチラシが多くあった。しかし、前述した通り大蔵村のことを知らなければ踏み出せない人もいると思う。そこで、他の市町村と提携して観光ツアーを企画することは一つの手であると考え。そすることで、観光を考えている人は踏み出しやすくなり、大蔵村に触れる機会は多くなる。

このような活動は、新しい観光地を企画することよりも費用が抑えられるため、現実的に実現可能であると思う。是非多くの人に知ってもらうために検討していただきたい。

工学部 Mさん

私は今回のフィールドワークで4日間大蔵村で過ごし、大蔵村の歴史や文化について実際に見て、体験したことにより、大蔵村について詳しく知り、考えることができた。

大蔵村の歴史を学ぶために、大蔵村の様々な歴史ある場所に行った。鳥打湯古戦場や清水城跡などそれぞれの時代背景を知ると、どれも関係性があったりなどと興味をそそられるものであった。事前学習では、大蔵村で行われているイベントについて調べ、大蔵村の特徴でもある山菜に関する食祭りや積雪量が日本一ということを活かし、日本一の巨大雪だるまをつくるといった活動をしていると知った。今回は、その中でも合海田植え踊りを見学した。田植え踊りでは、村の家を一軒一軒訪ねて家の中で踊るといったものであった。村の人たちはそれぞれ田植え踊りを盛り上げており、大蔵村の雰囲気の良いを感じた。その他にも、大蔵村は自然が豊富であり、大蔵村の伝統的な食文化などから大蔵村の人たちは自然と共生しているように感じた。これら大蔵村の特徴や魅力は、大蔵村に実際に行かないと感じることができないと考える。

大蔵村では急激な人口減少が進んでいると聞いた。今回見学した四ヶ村の棚田では、広大な棚田を目の当たりにした。この棚田や伝統芸能を今後も残していくためにも、より多くの人たちが大蔵村を知る必要があると考える。そのため、現在の大蔵村の人口減少という問題は解決すべき課題だと考える。

課題解決としては、多くの人に大蔵村を認識してもらい、魅力を知ってもらうことだろう。実際に自分自身、大蔵村に行かないと魅力を感じ取れないと思えた。私は、今回参加したフィールドワークで大蔵村を意識した。それまで、大蔵村については聞いたことがあるといった程度しか知らなかった。具体的な解決策としては、私たちのような体験をしてもらうというものであり、大蔵村のイベントの一環として、大蔵村の多数の民家で学生をはじめ一般の方々に大蔵村をしってもらう機会を設けるというものである。それにより、大蔵村の魅力を十分に知ってもらい、より多くの人に大蔵村を認識してもらうことで、人口減少という問題の解決につながると考える。



工学部 Sさん

私は講義前の事前学習を通して大蔵村の歴史について

て調べたため、歴史的観点を中心に多角的に大蔵村を観察し、良いところや課題をひとつでも多く発見するという目的の本、本講義に取り組んだ。

講義では、まず大蔵村の人々が信仰している寺社仏閣を訪れた。そしてその管理状態のよさから、この地域では信仰を心の拠り所として日々の生活を送っているということがわかった。次に、肘折温泉郷を訪れた。実際に自分達もここを巡り、長い歴史を持つこの温泉ならではの心安らぐ独特の雰囲気を感じることができた。また、入浴することで炭酸質の肘折温泉の効能を体で実感することができた。最後に、田植え踊りを体験した。古くから豊作を祈るため行われ続けてきたこの行事に参加できたことで、現地の人達と深く関わりあうことができた。

今回の講義では様々な活動を通して地元の人達と深く関わりあうことができた。しかし、そのなかである課題を発見した。それは、小中学校の統合を機に急速に人口流出が進行したということだ。この課題を解決するため、私は2つの対策を考えた。1つ目は温泉郷に福祉施設を充実させるということだ。温泉は古くから湯治に用いられてきた経緯があるため、上記のことが実現すれば一大療養所として有名になると考えられる。そうすれば都会から、この大蔵村に病気の療養を希望する人達を多く呼び込むことができるようになる。この事は、大蔵村の収入を増やすことに大いに貢献すると考えた。2つ目は、モニュメントを作るということだ。山形は我が母校を中心に有機ELで有名である。そのため橋を有機ELで装飾することで、初の屋外実装の実験が可能となるというコンセプトのもとで全国に宣伝できるようになる。これらのような対策を実行すれば、メディアにとりあげられ知名度をあげることができる。そうすることで観光客を多く呼ぶことができるようになるだけでなく、有機EL屋外実装化のためのデータ収集を希望する企業の誘致もできるようになる可能性がある。企業を誘致することができれば村内雇用の拡充が可能となり、Uターン、Iターンを促進させることができるようになると思った。上述のような思いきったPR戦略に取り組み少しでも多く観光客を呼ぶことで、これから大蔵村は発展へと舵を



とることができるようになる」と結論付けた。

工学部 Fさん

私は二週間大蔵村のフィールドワークに行ってきた。大蔵村の歴史、伝統、食文化、生活などを知り、地域について考えることができた。

まず始めに訪れた神社や寺、歴史的な建造物では大蔵村の成り立ちの歴史を学んだ。また、棚田での田植え、合海田植え躍りの体験をして、地域に受け継がれている伝統文化を体で感じる事ができた。肘折温泉郷の学習では温泉郷を歩きながら昔の建造物など見たり肘折ダムから流れる川に沿って歩いてその地の説明を受けたりし、大蔵村のことについてさらに詳しく知った。また、ほう葉めし・笹巻き作り体験や食事の際に出た大蔵産の山菜などを食べて、自然の多く残るこの大蔵村の伝統的な食文化を知ることができた。その食文化は環境を汚さず、農業の盛んな大蔵村に適したものであった。

これらの学習、体験を通して大蔵村はとにかく自然が多く農業を中心とした生活をしている一方、温泉などの観光資源もあるという二つの印象が残った。もともとは人もいない山奥で、温泉が見つかり鉱業も盛んだったため、この地でできることをしてきた結果そのような文化が形成された。そのため大蔵村で鉱業が衰退した現在、急激な人口減少から始まった様々な課題が生まれた。

大蔵村の人口減少問題の原因として観光資源のPR不足が挙げられる。大蔵村には上で述べた事以外にも様々な魅力があるがそれをうまく伝えられていないと感じた。魅力がたくさんあってもその情報が広がらないと人は呼び込めないことは言うまでもないが、観光客が来ないことから大蔵村の観光業の経営難に伴い地元の人々の仕事が減り、若者が大蔵村を出るといった地域の内部からの人口減少にも繋がってしまうため、この問題をどう解決するかで大蔵村のこれからは大きく変わることだろう。

そこで私が考える解決策は、観光名所の明確化、観光名所同士をつなぐ交通の大幅な整備である。大蔵村の観光パンフレットを見ると観光スポットの説明、肘折温泉郷の詳しい歩き方などが書かれているが、実際観光スポットに行ったときに細い道を抜けて行かなければいけないところが多いにもかかわらず看板が小さくはっきりしないところもあったり、温泉郷以外の観光の仕方が分からなかったりした。具体的には、景観を壊さないで人の目につく看板を設置することや南北に長い大蔵村の名所をつなぐバスなどの交通の発達、またそのバスを使った観光名所の歩き方を紹介すると先に挙げた課題の解決につながるだろう。温泉地でのこのような取り組みは観光客が増えるだけでなくもう一度温泉に入りたいという観光客、すなわちリピーターの獲得も期待できると私は考えた。

工学部 Oさん

村の方から、大蔵村の文化や伝統を聞き、昔の人が戦

って神社や寺を残したのは、「自分がその時生きていたこと」や「自分のしたこと」を未来の人に知ってほしいからであると考えた。悪いことであつたら繰り返さないでほしい、良いことであつたら受け継いでほしいという昔の人の思いがあつたからだと考える。これが学校の授業で歴史を学ぶ理由の一つではないか。

合海田植え踊りを見学し、合海田植え踊り保存会の人には合海地区の家の人に食事を用意されたり、温かく迎えられたりと、合海田植え踊りによって強い結びつきがあると感じた。近所同士で結びつきがあれば、何か困った時にすぐに助け合うことができる。これはとても素敵なことだと私は考える。

また、肘折温泉学習では、温泉街について学んだほか、縁結び・商売繁盛、子宝のパワースポットとなる地藏倉がある山に登った。そこから眺める景色は絶景であつた。肘折温泉学習以外でも景色を見る機会があつたが、それもやはり絶景である。

4日間の授業で大蔵村で取れた野菜料理を食べたり、伝統料理(ほう葉飯、笹巻き)を自分たちで作って食べたり、多くの料理を食べた。そこで、大蔵村は料理も美味しいということに気がついた。

この授業の前までは大蔵村について、温泉と雪で有名、というくらいしか知らなかつた。しかし、授業を受けて、綺麗な景色も見ることができたし、美味しい料理も食べることができた。また、住む人の優しさも知ることができた。これは現地に来た人しか体験できない。

大蔵村は、人口減少という問題を抱えている。村の人の話によれば、村の人口を増やすにはまず観光客を増やす必要があるようだ。ただ、PR不足という問題があるため、観光客の数が伸び悩む。その中には、PRをしても大蔵村を知るきっかけがなかなかない、という問題がある。そこで、山形県の他の地域と連携してツアーを行うことにより、大蔵村を知ってもらう、という方法ではどうか。大蔵村は山形県一のトマトの生産量を誇る。山形県はさくらんぼやラフランスで全国的に有名であるので、山形県全域を使って果物・野菜狩りツアーを行い、その一つ・トマト狩り体験として、観光客を大蔵村に呼ぶ、という方法だ。トマト狩りのついでに温泉に入ってもらったり、料理を食べてもらったり、景色を見てもらうことにより、観光客は他の人々に大蔵村の魅力を語り、いつしか大蔵村は有名になるのではないかと考えた。他にも、交通面の問題があるので、私はこのアイデアを交通面の問題とともにもっと考えていきたい。

工学部 0さん

私は移動手段と人の少なさを大蔵村の問題として考える。まず、人の少なさについて、一つ目に人口の少なさがあげられる。大蔵村の人口の減少の特徴は、ここ最近小中学校が統合されて、急激に人口が減つたことだ。これは他の地域と違う点だろう。二つ目は、観光する人

の少なさだ。観光地は、実際に見学してみたくさんあると感じたが、観光客があまりいないことが分かつた。次に、移動手段について、これは観光客の少なさにも関係するが、山形市など県の中でも栄えている場所から大蔵村へ行く手段がほとんどないということだ。そして、もし大蔵村へ来たとしても、大蔵村をまわる手段がなく、大蔵村の観光地と観光地の距離がとてもあるため、途中で飽きてしまうと考える。このような問題がある中で、私は対策として、人の少なさに対して「村のPR」、「グリーン・ツーリズム」、移動手段に対して、「バスの導入」、「電車の導入」を考える。まず、「村のPR」は、山形で有名な有機ELを使って、例えば雪だるまの「大蔵くん」などのモニュメントを作ることや、空港や駅など人が集まる場所に広告などを貼ることによって、大蔵村へ興味を持たせることが第一に考えるべきことだと思う。次に、「グリーン・ツーリズム」は、大蔵村の農家が多いことを生かして実際に居候して農家体験をするということだ。これは、外国で多いが日本では少なく、個性的なイベントとなると思う。また、大蔵村で農家体験することによって、大蔵村のいろいろな特産品が分かるようになると思う。そして、「電車の導入」は、大蔵村から一番近い山形駅からの終点は新庄駅で、そこから駅をつなげられれば大蔵村を終点にすることができる。終点のメリットとして「名前が覚えられやすい」、「電車で居眠りしたらいつのまにか大蔵村にいる」など、大蔵村の情報が多くの場所に広まると考える。また、大蔵村の中でも電車をつなげられたら良いなとも考えている。それは観光地の名前を駅の名前にして観光地の名前を覚えてもらうという発想で、これも観光地の名前を知ってもらえてよい効果があると思った。最後に、「バスの導入」は、「電車の導入」とほとんど同じ考えだが、バスは電車よりもコストがかからないと思う。したがって、大蔵村内でいくつかのバスを循環させ、効率よく観光客が観光できたなら良いなと考える。職員の方が地形的に電車は難しいと言っていたが、大蔵村の広い土地を生かして考えてみてほしい。



工学部 Kさん

私は大蔵村の事前学習を通して、大蔵村が日本一の積雪量の記録を持っていることや四ヶ村が120ヘクタールもの面積を有する棚田地帯であることなど美しい自然にあふれる村であることがわかった。そこで私は、自然との共存を経て生まれた歴史ある文化や、伝統をこの身で体験してみたいと思い本講義に臨んだ。

4日間の講義では、文化財の見学、合海田植え踊り体験、ほう葉めし作り、田植え体験、笹巻き作りなど大蔵村でしか体験できないことを学ばせていただいた。私が特に印象に残っており且つ、これからの大蔵村の課題として重点を置いて考えてみたのが、四ヶ村の田植え体験と合海田植え踊りである。田植え体験では、機械を使わず手で田植えをする昔ながらのやり方で行った。田んぼに入ってみると、ぬるりとした足の感触がどこか気持ちよく、手で一つ一つ植えていくのはどこか達成感を感じた。合海田植え踊りでは、一軒一軒のお宅を訪問し、田植え踊りを見学させていただいた。私が感じたのは、村の方々のつながりと優しさだった。会話が絶えず、初対面の私達にも優しく話しかけてくださったことは本当にうれしかった。これらの体験や感情は実際に村に足を踏み入れないとわからないことなので、非常に貴重な経験をさせていただいたと思っている。

だが、この2つに共通して抱えている課題がある。その課題とは、近年小中学校の合併で急速に進む人口流出によるものだ。棚田ではこの人口流出で高齢化が進み、やむを得ず耕作を止めてしまうという問題が起きている。田植え踊りでは子供の人数が減ってしまったせいで、田植え踊りを続けるのが難しくなっている。

この課題を解決する対策として私が考えたことは、PR活動の強化である。私は正直言ってこのフィールドワークを行うまで大蔵村について何も知らなかった。恐らく全国にはまだ大蔵村の魅力を知らない人たちが大勢いるはずだ。よってまず総合テレビや読売新聞などを利用して全国的に知ってもらうのが必要なのではないかと思う。私の地元は長野県だが、長野県といえば軽井沢町が有名である。軽井沢も大蔵村のように自然が多いが、なぜ軽井沢が有名かといえば、やはり軽井沢は全国に向けたPR活動が充実しているからである。大蔵村もまず、全国に知ってもらうというのが優先である。それを見て大蔵村に魅力を感じた人たちが増えてくれれば、徐々に人口流出も問題が解決されるのではないかと考える。そしてほかの地域との連携へとつながることができれば、もっと大蔵村の発展につながるのではないかと私は考えた。

農学部 Tさん

事前学習を通して大蔵村について調べたところ、積雪量が日本一である、四ヶ村の棚田が日本棚田百選に登録されている、日本で最も美しい村のうちの一つである、

自然が豊かである、山菜が有名である、天然記念物や有形文化財がある…といったように、言い切れないほど多くの魅力を持った村であることがわかった。そこで私は身をもって体験し、それらの良さを伝えたい、もちろん良さだけではなく課題も発見し、より良い大蔵村となるために手助けしたいという思いで本講義に臨んだ。

村の歴史と文化に触れ、伝統芸能を体験し、田植え体験や温泉の学習、さらには山菜料理の堪能といった活動を通して、大蔵村での生活を過ごした。そしてその4日間の間で私が最も印象に残っているのは、四ヶ村の棚田の見学と田植え体験である。先ほどの棚田百選に登録されるためには、営農の取組が健全であること、棚田の維持管理が適切に行われていること、オーナー制度や特別栽培米の導入など地域活性化に熱心に取り組んでいることが必要となっており、急激な人口減少が進む中でそれを維持するのは厳しい状況であるといえる。四ヶ村の棚田は非常に広大で耕すのに大変な労力が必要となり、昔は手で一つ一つ直接植えていた大変さや維持の大変さを考えると、やはりこの広大で美しく、価値のある棚田を失わせるわけにはいかない。そして、聞いた話によると、夏にはお祭りの開催、他にも身近なところでは、保育園や幼稚園の子供たちに田植え体験を行っているようで、積極的に棚田文化の伝承をしている努力が見られた。

このように、大蔵村は自然と密接に結び付いた村であることが分かり、そしてその大蔵村をより良くするための課題を見つけた。それは大蔵村の宣伝があまり行き届いていないことである。なぜかというと、「大蔵村」として調べると見どころやイベントの紹介が載っている。だが、大蔵村を知るきっかけがない限り、調べるのは難しいだろう。なので、日本で最も美しい村連合としての活動を広げること、隣の新庄市で宣伝してもらうこと、特産品であるトマト等を使ったふるさと納税を行うことなどといった宣伝を行うことが重要であると考え。ただ宣伝をするだけでなく、自然を通して長い年月をかけてつくりあげられた美しい大蔵村を未来に残すためには地元住民たちもまた魅力を再確認し、「誇りの持てる村づくり」をしていくことも重要である。



農学部 Hさん

私は、大蔵村は日本一の積雪量を誇る村として認知していたが、積雪量以外についての大蔵村は全くといっていいほど知らなかった。

そこで、私は本講義を通して大蔵村の魅力について学んでいこうと思った。また、私は農学部であるため将来必ずといっていいほど農家の方とは接点を持つため、農家の苦労や、やりがいなどを経験しようと思った。

私が印象に残った体験は、四ヶ村の棚田での田植え体験だ。今回は田んぼに直接足を入れる伝統的な田植え方法だったが、現在では行われていない。機械化がすすみ効率よく栽培、収穫ができるがこういった伝統が少しずつ失われているという問題もできているのだと感じた。

また、私たちは温泉についても学習した。大蔵村には「肘折温泉」という1200年前に開湯した歴史ある温泉を有しており、古くから月山に上る登山者を癒す中継地として栄えた町であった。現在では、月山は8合目まで車で登れるようになってしまったため、年々観光客は減少している。しかしながら、肘折温泉は肘折ならではのトマトサイダーやトマトソフトクリームなどの商品も販売しているため、地域を生かした温泉街であることを認識した。

現在、大蔵村が抱えている問題は、小学校や中学校の統合による激しい人口流出である。人口が少なくなるために観光業もすたれていき、大蔵村の魅力に気付いてももらえないという負のスパイラルに陥ってしまっている事が現状である。これを改善するためには、多額の投資による観光の活性化が必要だが、大蔵村はそこまで余裕のある状況ではないことは明白である。

そこで私は、観光に来た方々に満足に帰ってもらい、リピーターを増やすという方法を提案する。その一つに肘折温泉街に足湯だけではなく手湯の設置をすべきだと考える。足湯と違い、手湯ならば手間もかからず冬場にかじかんだ手を癒すこともでき、さらには温泉街の交流の場にもなる。さらに、温泉が目に見える位置にあることで温泉を出し惜しみしないほどの量を持っているという印象を、観光客に与えることができる。

確かに、手湯の設置だけではパンフレットにも書けないほど小さな変化である。しかし、観光客が満足して帰ってもらうことでTwitterやFacebookなどで拡散され、多くの人々が大蔵村を認知できるという循環生まれる。こういった小さな変化が、観光客を満足させる第一歩なのではないかと私は考えた。

鮭川の歴史・文化探訪

活動状況

○実施市町村：鮭川村

○講師：鮭川歌舞伎保存会 会長 佐藤成一、鮭川歌舞伎保存会 座長 高橋眞一、
NPO法人ネイチャーアカデミーもがみ 代表理事 矢口末吉、
鮭川村自然保護委員会 会長 高橋満

○訪問日：平成30年6月9日(土)～10日(日)、6月16日(土)～17日(日)

○受講者：人文社会科学部2名、工学部3名、農学部2名 以上7名

○スケジュール：

1回目	2回目
【1日目】6月9日(土)	【1日目】6月16日(土)
08:00 山形大学発	08:00 山形大学発
09:50 鮭川村中央公民館着	09:50 米地区公民館到着
10:00 開講式	10:00 オリエンテーション
10:15 鮭川歌舞伎の成り立ちについて	10:30 鮭川村・米の自然について(講話)
10:45 鮭川歌舞伎定期公演準備(会場設営等)	12:00 昼食
12:00 昼食	13:00 米湿原まつり準備(湿原保全作業等)
13:00 定期公演準備、館内清掃、練習(見学)	16:00 村文化財見学(向居薬師堂)
16:00 村文化財見学 (庭月観音、曲川の大杉)	17:00 まつ乃
17:50 羽根沢温泉到着	
【2日目】6月10日(日)	【2日目】6月17日(日)
08:00 羽根沢温泉出発	08:30 まつ乃出発
08:30 鮭川村中央公民館到着	09:00 米湿原まつり(湿原保全作業)
08:45 七所明神(京塚)見学	12:00 昼食
10:00 歌舞伎化粧、着付け見学	14:00 オカリナコンサート
11:00 定期公演受付等手伝い	15:30 感想発表
12:00 昼食、鮭川歌舞伎定期公演見学	16:00 米地区公民館出発
16:00 鮭川村中央公民館出発	18:00 山形大学着
18:00 山形大学着	

授業記録

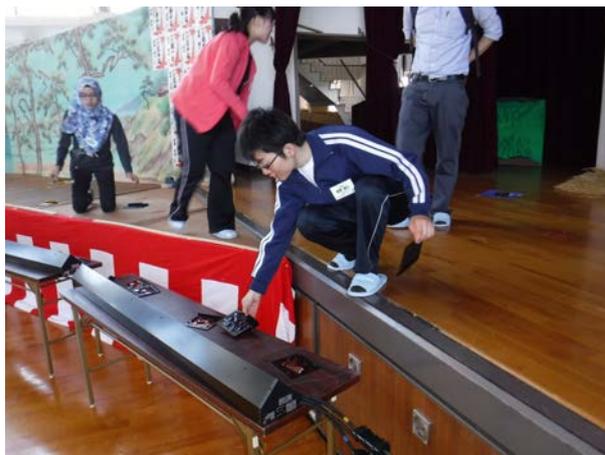
○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Sさん

初めてフィールドワークをやって、実際に地域へ行って学んで、インターネット上で調べたことより多くの情報が得られました。今回、特に中心になったのは歌舞伎と米湿原祭りです。歌舞伎という伝統的な文化を守るために、皆、鮭川村の人々が一生懸命協力して、努力したと感じました。米湿原祭りと同じくお互いに頑張っています。

気が付いたことは共通点がお金の問題、手不足の問題と負担の問題のことで、活動を続けるためのお金はどこから頂けるか、その活動もどうやって利益を保つことができるかという問題があります。村の人々や会社から頂いたお金はまだ足りなくて、伝統的な文化とか珍しい植物とかを守りながら苦労しています。手不足の問題だったら、歌舞伎の場合は手不足のため、一人の女性が演技して、男子しか演技しない歌舞伎の伝統的な文化が変わってしまいました。米湿原祭りの場合は年上のほうが仕事をやって、若者だったら、大学とかからの学生がボランティアをしていただけますが、農作業をやっている人々がなくなったら、次の時代、やってくれる人がいません。この問題を持って広げたら、鮭川村には小学校と中学校しかないから、高校や大学へ行くために、二つの選択があって、通うか移動するかという選択です。そこで、少子化問題と高齢化問題になって、手不足問題も発生します。そうだったら、高校を建てばいいのではないかと考えるでしょう。しかし、高校を建てるのにどこからお金をもらえるのだろうかと思いました。最後は負担の問題です。歌舞伎の場合は指導する人が全部座長で、湿原祭りの場合は、例えば、毎朝5時から6時半までミツガシワという植物を刈る村の人々の中に一人かやっているのは大変だと思いました。

そういう問題があるこそ、お互いに問題の解決し方を考え、皆の団結心は強いと思いました。私たちも色々なアイデアを考えて少しでも役に立ちたいと思っていました。鮭川村はとても自然に豊かで、珍しい植物があり、恵まれている自然の風景を使い、観光客に鮭川村の絵葉書売ればどうでしょうか。すごいアイデアではありませんが、少しでも役に立てば、嬉しいです。やはり鮭川村にはいい点がたくさんあると思います。実際に歌舞伎を見て、米湿原祭りをやったのは新鮮で、都会に住んでいる私にとって、楽しくて、とてもいい経験だと思いました。最後は最も話と関係がないですが、鮭川村の方言はとても可愛くて、素敵だと思いました。



人文社会科学部 Fさん

私は今回鮭川歌舞伎に出せていただいた。その中で感じた自分の課題について考えた。歌舞伎には、家来として参加した。家来は私を除いてほかに二人。家来は、合計三人だ。その中には、私と同じ女性の方がいたため、その方にいろいろご指導いただいた。だが、私から話しかけることはあまりなく相手が気を遣わせて話しかけることが多かった。私自身の課題は、問題発見とそれを相手に質問する力だ。

そのように感じたため、二回目では、積極的に質問しようと心がけた。米湿原のボランティア活動に参加している人にいろいろ聞いた。なぜ参加しているのか、何回参加しているのかなど質問した。しかし、観光に来ていた方の話やおカリナコンサートに来ていた方の話を聞くことは出来なかった。どうやって米湿原を知ったのかやどこから来ているのかなどいろいろ聞くことは出来たと思う。

一回目では、質問が出ず、尋ねることが出来なかった。出てきてもほかのメンバーと同じだったりした。このことから日頃から様々なことに対し、疑問を持ち、それを誰かに聞いたり、調べて解決する癖を持つことが重要だ。様々な知識があることで生まれる疑問もある。一回目の二日目、京塚の見学していた際、先生から「おなかま」に関する質問が出た。私は、「おなかま」という存在をそのとき知った。しかし、知識があれば、そのような部分でも疑問が生じ、より深く地域について知ることが出来、また場合によっては、多角的発展することが出来る。

鮭川歌舞伎と地元の郷土芸能の違いを探る場合でも、地元の郷土芸能の問題点などまだまだ知らないことが多い。鮭川歌舞伎は、子供歌舞伎を除き、子供の参加数は少なかった。私の地元の郷土芸能は、幼稚園児から参加する人は参加していた。しかし、鮭川歌舞伎は違った。子供の数は確かに違う。しかし、子供の役の歌舞伎もある。では、なぜ鮭川歌舞伎では、子供の数が少ないのか。学校との両立が難しいのか。だが、地元の郷土芸能もまた夕方から夜の九時十時まで練習する。小学生らからし

たら、どこが問題になるのか、また地元の郷土芸能では、そのことは問題になっているのかそれともなにか改善しているのか、そういった部分では、自分は知らず、また子供歌舞伎に参加していた子供たちに聞くことが出来なかった。

今回のフィールドワークでは、自分の課題が浮き彫りになり、それを改善するには日々の過ごし方だと感じている。ちょっとしたことでも問題を考え、それについて調べ、知識を蓄え、ほかのことへつなげる力を身につけたい。



工学部 Kさん

鮭川村は、山形県最上地方に位置する人口約4,300人の農村である。実際に訪れて感じたのはその自然の多さだ。今回活動をした米湿原の周辺はもちろん公民館近くでも自然を感じられる。灯籠流しや歌舞伎などの観光資源も充実しており、自然と伝統が色濃く残る村だ。しかし、これらの自然や伝統が失われつつある。その原因について考えていきたいと思う。

まず第1に村の人があげたのが人手不足である。少子高齢化の流れは例外なくこの村にも存在し、また、高校がないために村外への子供の流出が多く見られるようだ。村へ戻ってくる人もいるようだがその数は多くない。結果として歌舞伎の伝統を受け継ぐ人やボランティア活動をする労働力が減少している。

次にあげられたのが資金不足である。鮭川歌舞伎、米湿原保全はともに村からの補助が少なく、収入が安定していないようだ。歌舞伎ではお祝儀、米湿原では企業からの資金援助が主としてあり、米湿原に関しては入場も無料であるために自ら財源を確保する方法が存在していない。

これらの問題に対し、学生の方ではできることに限界があるのは事実である。だが、先人たちが受け継いできた自然と伝統は、この村の歴史を物語る大切な遺産であり、絶やしてはならないと強く感じた。そこで、実現可能かはわからないが改善案をあげていきたいと思う。

まず歌舞伎に関しては、小学校での子供歌舞伎の影響

で保存会に入るといいう人も多いが、中学以降で全く歌舞伎に触れられないというのが問題であるように感じる。中学の授業の一環として歌舞伎を考える時間を作るのも一つの手ではないだろうか。資金不足については、ツアーもあったことから、県内外での知名度を上げることでも入場者数を増やすことが望ましいだろう。

米湿原に関しては、資金不足が大きな問題なので、ポストカードなど関連商品の販売をして少しでも収益を増やすのはどうだろうか。また、写真コンテストに応募をして知名度を上げることで湿原を訪れる人を増やし、ボランティア活動を呼びかけることも可能であると思う。

鮭川村は人口の少ない村であるがために少子高齢化の影響が顕著に表れる。インターネットや電子機器の発達により減ってしまった人と自然との関わりが色濃く残るこの村の体験は、現代人に不足するものを補って余りある貴重なものであった。この伝統・自然を守るためにできることは何なのかを、今回の体験で終わらせずこれからも考えていきたいと思う。

工学部 Kさん

私は鮭川村へ行く前に事前に調べたことだが、東北地方で2位の水質を誇る鮭川、自然豊かであり、美しい景色の多い場所であるため、鮭川村では自然に触れながら、伝統文化を学べることはとても良い経験になると思い、この講義に臨んだ。

鮭川村での4日間の講義では、伝統ある鮭川歌舞伎や村文化財の見学、希少な植物や生物が生息する米湿原の保全作業といった他ではなかなか体験することが出来ないことをした。様々な鮭川村の文化に触れるにつれて、この伝統をこの先も続けて欲しいと考えたとき、やはり問題となるのは後継ぎがいない、つまり後継者不足である。

鮭川歌舞伎では、現時点では若い人が何人か鮭川歌舞伎保存会に入っているが、この先のことを考えると若い人が保存会に入る流れがないと存続が難しくなるであろう。鮭川子ども歌舞伎クラブがあり、子供歌舞伎として定期公演を行っているのに、中学、高校に進学するにつれて鮭川歌舞伎にふれる機会が少なくなっていくことは仕方のないことではあると思うが、やはりここが存続させることが難しくなっている要因ではないかと考えた。この問題は、中学、高校と進むにつれて、鮭川村から離れる人が多く、一回離れてしまうともう一度戻ってきづらいといったことがあるのではないかと考えた。せっかく、子供歌舞伎として舞台に立ち、鮭川歌舞伎について興味を持っているのに対し、これはとても残念なことである。そこで私はいつでも帰って来られる体制を立ててみてはどうかと考えた。保存会に入るのに年齢制限はないと聞いたので、子供のうちに加入だけし、いつでも気軽に戻って来られる体制を取ってみてはど

うかと私は考えた。若い人が入る流れができれば次第に後継者不足もなくなるであろう。

米湿原では、ボランティアによる活動が湿原の保全作業に大きく関わっていると考えている。年に2回、ボランティアの方々と一緒に保全作業をする機会はあるが、やはりそれだけでは湿原の維持は難しいと思った。朝早くから一人ではほぼ毎日湿原の保全作業をしていると話聞いた。これは負担が大きすぎると感じた。やはり後継者が不足していると考えてもいいであろう。自然保護委員会は村から委託事業として少しの補助金をもらっているときいたが、それはすべて活動の資金に充てていると聞いた。自然保護委員会自体がほぼボランティアであるため、新しく加入する人が少ないのではないかと考えた。この改善策として、補助金のほかに収入源を作るべきではないかと考えた。米湿原には絶滅危惧種のサギソウ、ミズチドリ、トキソウなどといった植物、生物が多く生息し、展望台からの景色はとても綺麗であった。これをポストカードやカレンダーにして販売してみてもどうかと私は考えた。少なからず、記念に欲しいといった人たちは必ずいるはずだ。役場の人に聞いたところ、そういったお土産などは存在しないと聞いていたので、これは米湿原を訪れた方々が記念に買っていただければ多少は収入源になるのではないかと考えた。

工学部 Hさん

今回のフィールドワークで現地の人々が口をそろえておっしゃっていたのは、「後継者不足」であった。そもそも後継者不足は全国的な問題でもあるが、なぜそのような事態になっているのか、このレポートでは鮭川歌舞伎の場合を考え、その原因が社会の変化にあることを指摘し、これからの課題と提案をしていく。

鮭川歌舞伎特有の問題点の1つに、仕事との両立が難しいということがあげられる。実際に現場の人の話を伺ってみると、「奥さんによく怒られる」「練習に没頭しすぎて離婚した」など、冗談にならないような話もあった。いったいなぜこのようなことが起きたのだろうか。鮭川歌舞伎が栄えていたころはどうだったのだろうか。この問題を考えるために、当時の鮭川村または山形県の資料が必要だと思い、できる限り古い資料を探した。山形県年鑑1957によると、最上地方の総人口に対する農家人口の割合は、およそ91.7%であった。(割合を調べるうえで必要な最上地方の総人口は、p108-111の各市町村の人口をもとに計算した)。最上地方の農家戸数は11039戸、そのうち専業戸数は6212、兼業戸数は第1,2種合わせて4827戸となっており、およそ半数の人が兼業農家であった。山形県全体では昭和30年下半期に入ると、鉱業、建設業、製造業などが活気を取り戻し、雇用状況が好転した一方、京浜、静岡方面への農業出稼ぎが増えつつあった。季節労働者総数4257人中県内の206人を除いては全部、(4051人) 県外就職した。一方、稲作収入を主とする

農家が圧倒的に多かったことがわかった

(61708/114568戸)。動力耕耘(うん)機は昭和23年には393台に過ぎなかったのが、29年には2146台に増加し、農業の機械化が進んだこともわかった。(※1) また、鮭川歌舞伎が衰退し始めたのは昭和30年代(※2)で、この参考資料は社会の変化が始まったころの資料と思われる。一方、現場の人の話では、現在では農家のほかにサラリーマンの人も多いという。以上より、鮭川歌舞伎が衰退する前は、職種は農業に偏っており、鮭川歌舞伎が衰退し、後継者不足となった原因が社会の変化である。また、以前は職種が偏っていたため、ほかのメンバーと都合が合わせやすかったとも考えられる。

これからの鮭川歌舞伎の課題として、仕事との両立のしにくさにある。自分は、この問題を解決する一例として、SNSを練習で活用するということである。スマートフォンなどで自分の動きを撮影し、SNSにアップロードして指導をもらうという手段をとってはどうか。特に、YouTubeの限定公開機能を使うと、時間無制限で動画をとることができる。昔と今では事情が違うので、このように今日に合わせた練習しやすい環境をつくっていくべきなのではないか。

参考文献

※1：山形県年鑑1957 p108-111, p152, p226-227

※2：鮭川村観光情報

<http://www.vill.sakegawa.yamagata.jp/kanko/kanko-event/164>



農学部 Sさん

四日間の活動を通して、滅多にできないような体験を経験することができた。食事や風呂、トイレや熱中症まで気配りしてもらい、村の皆さんのあたたかさを感じた。第一回目では主に鮭川歌舞伎の準備を手伝わせてもらい、伝統を繋いでいくということの表面上ではない課題や、大変さを感じることができた。二日目では主に湿原の保全を手伝わせてもらい、湿原を保全するというとても大変な作業を身で知るとともに、ボランティアで行っているということで地域内での結びつきを感じた。

そのような活動の中で、私は自身の経験をもとに鮭川歌舞伎の後継について考えた。鮭川歌舞伎に参加しているのは高齢の方だけではない。こども歌舞伎も存在し、若い人も演者として参加しているように見えた。しかし、私が課題として感じたのは、参加する人の年代にばらつきがあることである。全体としては幅広い年代の人がいるように見えるが、コンスタントに人が入っているわけではない。それはとても不安定であると感じ、課題であると感じた。

この課題への解決策を考える際に、私は私が所属していた伝統さんさグループを元にした。そのグループは名前にも三世代と入っており、その名の通り幅広い年齢層で構成されたグループで、公民館を用いて練習を行っていた。人もコンスタントに入っており、小学校くらいからはいってそのまま継続して在籍する、一度やめても帰ってくるといった人が多い。鮭川歌舞伎とそのさんさグループとの違いを考えた時、活動に違いがあるのではないかと考えた。そのさんさグループでは小学校に訪問発表したり、地域のお祭りによく参加したりと、小規模な活動をし、参加する人も何度か知っている子がやっているのを見たことがあるからといった理由が多い。

このようなことから、私は課題の解決策としてこども歌舞伎の子たちに継続して参加してもらうということを目指し、もっと子供たちに見てもらえる場を用意できればいいのではないかと考えた。今回手伝わせていただいた公演は大盛況で、スリッパも足りなくなるほどである。このままでは見てもらえる年代、人が限られてしまうと考えた。よって、小中学校合同で生徒たちに見てもらえる場を用意したり、毎年生徒の一部、例えば5年生などとし、公演に招待したりできれば、もっと身近に感じて伝統の一部を担うという感覚が生まれるのではないかと考えた。

農学部 Aさん

私は仙台市で育ってきたため、田舎の暮らしというものを知らなかった。そのため今回、鮭川村で様々な経験をさせていただく中で、地域の方々の繋がりや強さ、互いを思いやり協力する姿を初めて目にし、感銘を受けた。このような素晴らしい文化に存続してほしいと心から思ったし、今回に限らずこれからもこの地域にまた足を運びたいと思った。しかし、存続するために乗り越えなければならない問題があるように感じた。それは、様々な分野で見られる後継者不足だ。

鮭川歌舞伎保存会は現在若い方が多く所属している。しかし、一部の年齢の方が集中して所属している状態である。毎年一定の人数が安定的に新たにメンバーとして加わっているわけではない。さらに若い方がこれからどれくらい、どのようなタイミングで入ってきてくれるかはわからないのだ。そこで私たちは、毎年コンスタントに保存会に入る人がいるとよいと考えた。そのため、鮭

川小学校で行われる「子供歌舞伎」を中学校・高校と続けてもらいそのまま社会人になった時に鮭川歌舞伎保存会に入ってもらえるような流れはできないものかと考えた。しかし、鮭川村には高校がないため難しいことが予想される。一度流れが途切れてしまうと、引き戻すことは難しくなるように感じる。また、高校が無いことは大学進学などで鮭川村を離れた人々が鮭川村に戻ってきにくくなる一つの要因になると考える。家庭を持ち子供を育てることを考えたとき、その地域に高校が無いことはハードルを大きく引き上げる要因になるだろう。住む地域によっては公共交通機関を用いて新庄の高校に通うこともできるが、子供の負担が大きくなることは避けられないだろう。

鮭川村自然保護委員会についても同様である。米湿原の葦刈りなど自然保護には継続的な活動が求められるが、現在人手が足りておらず、矢口末吉さんを中心として負担が大きくなっているように見えた。また、日常的に求められる活動だけではなく、米湿原祭りにおいてももっと人手が欲しいと感じた。しかし、実際に自分が今回のようなプログラムとは関係なく参加できるかと考えると難しいものだと感じた。それは公共交通機関を使って来ることができないからである。多くの人に知ってもらうことや、協力を仰ぐこと以外にもこのような障害もあった。

後継者不足を改善するために様々な策を考えると、その先で新たな問題にぶつかった。これらの一つ一つを丁寧に整理し、解決していく必要があると感じたし、できることは協力したいと思っている。それくらい素晴らしい場所だったのだ。



戸沢村の超元気印！幸齢者集団の生き様に学ぶ

活動状況

○実施市町村：戸沢村

○講師：北の妙創郷大学 学長 菊池清一、古口自治会 会長 寺内恵一

○訪問日：平成30年5月26日(土)～27日(日)、6月23日(土)～24日(日)

○受講者：人文社会科学部3名、地域教育文化学部1名、理学部2名、工学部9名 以上15名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p>【1日目】6月23日(土)</p> <p>08:00 山形大学発</p> <p>10:00 古口公民館着</p> <p>10:15 開校式</p> <p>11:00 座学(地域の活動、歴史)</p> <p>12:00 昼食(地域の皆さんと)</p> <p>13:00 炭窯づくり又はメダカ池整備</p> <p>17:00 入浴(ぼんぼ館)</p> <p>19:00 夕食交流会(地域の皆さんと)</p> <p>20:30 振り返り</p> <p>22:00 就寝</p>	<p>【1日目】7月7日(土)</p> <p>08:00 山形大学発</p> <p>10:00 古口公民館着</p> <p>10:15 開会式</p> <p>11:00 ほたる祭り準備又は笹巻づくり</p> <p>12:00 昼食(地域の皆さんと)</p> <p>13:00 ほたる祭り準備、リハーサル等</p> <p>17:00 夕食</p> <p>18:30 ほたる祭り開会</p> <p>19:45 ほたる祭り終了</p> <p>20:00 もらい湯(地域の方の家で入浴)</p> <p>21:30 振り返り</p> <p>22:00 就寝</p>
<p>【2日目】6月24日(日)</p> <p>06:00 起床(朝食作り)</p> <p>07:30 朝食</p> <p>08:30 炭窯づくり又はメダカ池整備</p> <p>12:00 昼食(地域の皆さんと)</p> <p>13:00 ほたる祭り企画会議</p> <p>15:30 閉会式</p> <p>16:00 古口公民館発</p> <p>18:00 山形大学着</p>	<p>【2日目】7月8日(日)</p> <p>06:00 起床(朝食作り)</p> <p>07:30 朝食</p> <p>08:30 炭窯周辺整備等 ピザ作り</p> <p>12:00 昼食(地域の皆さんと)</p> <p>13:00 ものづくり(わら細工等)</p> <p>15:00 閉講式</p> <p>16:00 古口公民館発</p> <p>18:00 山形大学着</p>

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Sさん

私は、戸沢村での2回のフィールドワークを通して、このプログラムのタイトルである「幸」 齢者について考えた。

私の住んでいる地区も今は高齢の方が増え、少子高齢化が進んでしまっている。近所を歩くと高齢の方が歩いているのをよく目にするが、とてもか弱く小さく見えていた。地区の子供会のお祭りも、私が小学生の頃には子供から地域の高齢者までが多く参加していたが、最近参加する人も少なくなってしまう。

では、幸せに齢を重ねるとはどういうことか。戸沢村の方々はそれを体現していた。戸沢村の高齢者の方々は私たちよりも元気で、炭窯の補修や薪割りのときなどに重いものを軽々と持ち上げてしまう。また、生き生きと私たちに作りかたなどを教えてくださったのが私の目には鮮烈に映った。彼らの生き様の根底には、地域の中での役割があった。戸沢村の方からお話を聞くと、夏休みなどに地域の小学生を集めて合宿を開くのだという。そうした時、私たちがしていただいたのと同じように、高齢者の方が活動の手助けをするそうだ。役割があることで、それが生きがいにもなっているのだと思う。また、子供達から元気をもたらえるという声もあった。それは、私たちがほたる祭りで体験したことだった。ほたる祭りでは、予定していた人数よりも来場者が少なかったり、小学生以下の子供が多かったりなどの想定外の出来事もあり、私たちは不安を感じていたが、始まってみると子供達の笑顔で不安は一気に解消されてしまった。最後には、予定していなかったが子供たちが飛び入りで踊りを披露してくれ、会場のみんながつられて笑顔になった。こうした世代間での交流によって、お互いに元気を分け合っていることが、高齢者の方の幸せに繋がっているのではないだろうか。

戸沢村の世代間での交流は、他の少子高齢化を問題とする地域でもモデルとすべきであると思う。少子高齢化が進んでいる地域では、当然、高齢者の方が多数を占めている。地域を活性化するためには、高齢者の方が元気で幸せであることが重要な役割を持つのだと思う。小さな社会の中での役割を作ることで、生きがいにも繋がり、地域の活性化に繋がっていくはずだ。私の住んでいる地域でも、戸沢村で行われているような子供と高齢者の交流を見習っていききたい。

人文社会科学部 Nさん

私はこれまで人前に立ち、積極的に他人とコミュニケーションをとることを苦手とし、避けるようになってきた。今回その点を治すきっかけとできればと思い、このプロ

グラムに参加した。そしてこの班の班長として、ホテル祭りの企画や運営についてなど、準備を積極的に行ってきた。そういった中でも私自身至らないところも多くあり、この班のメンバーに大変迷惑をかけることも色々な場面で助けられた。特に当日のホテル祭りではメンバーの助けがあってこそ成功させられたものだと思う。一人では成し得ないことをいかに班のメンバーと協力して達成するかということや、視野を広く持ち全体の流れをスムーズにする必要性について知ることができる良いきっかけとすることができた。

二回の活動を通して、多くの体験をし、多くのことを学ぶことができた。まず戸沢村の地域の方々とのつながりの深さについてである。古くから人々が協力し合い生活してきた戸沢村には私たちが知らない文化があった。例を挙げると私たちが二回目の活動の際に体験してもらった湯などがそうである。地域の人々がある人の風呂を借り使わせてもらうというものだが、私はこれを体験し、風呂そのものとは違った別の温かさを感じることができた。そしてこういった文化があるからこそ戸沢村の方々はつながりが深いのだろうと思った。学んだことは大きなところではもう一つある。二回目の活動の初日の夜に行ったホテル祭りでのことである。このホテル祭りとは戸沢村で毎年6月に行われる地域の小学生を対象としたイベントである。昔、戸沢村でホテルが大量発生し乱舞したという出来事があり、その出来事を祝って毎年ホテルが現れ始めるこの6月の時期に祭りを行うようになった。これがこのホテル祭りの名前の由来である。私たちはこの祭りのために、一ヶ月間昼や放課後を使って全員で助け合い協力し合って準備を重ねてきた。当日、祭りの前のリハーサルでは修正点も多く出来の悪いものであったが、全員のチームワークの強さと各個人の状況対応能力に大変助けられた。主にこのことで私は責任を感じるとともに班のメンバーに申し訳ない気持ちを持ったが祭り本番は皆で協力し成功させることができたので、班のメンバーには本当に感謝している。残念ながら私たちは現地でホテルを見ることはできなかったが、その代わりに地域の小学生が楽しんでくれている様子を見ることができた。それは私にとって滅多に体験できないことであつたのでこのプログラムに参加した甲斐があつたと思うことができた。

地域が抱える問題としては高齢化が挙げられる。実際現地に行って強くそう感じた。だがこの二回の活動を通して戸沢村の良いところもたくさん知ることができたため、そういった点を発信し、若者が戸沢村に流れるような対策についても今後は考えてみようと思った。戸沢村という自然に溢れた地域で生活する方々が抱える問題や彼らの良いところ、その地域の魅力などはもちろんのこと、自分個人としても様々な経験をして大きく成長できた。そしてこの班のメンバーと活動することができた。このプログラムに参加することができて、大変

満足している。

人文社会科学部 Sさん

2回のフィールドワークの中で、私は戸沢村の高齢者の方々がなぜ「幸齢者」というテーマでフィールドワークを行ったのかを考えた。実際に戸沢村で活動して考えられた理由は2つある。1つ目は自分が必要とされる環境だからである。こうしたフィールドワークを実施し、学生に戸沢村の文化や歴史を伝える役目を担ってもらうことで高齢者の方々が活躍する機会が増える。このような機会から自分が必要とされていると感じられることが幸せと表現される所以なのかと感じた。2つ目は地域の子どもたちとの繋がりである。戸沢村では地域が一丸となって子どもの育成を行う「共育」を推進しており、実際に私たち学生だけでなく地域の小中学生に対しても伝統文化を伝えたり戸沢村を発展させるためには何が必要かといったプレゼンをさせるなどの様々な取り組みをしている。こうした「共育」の中で地域の子どもたちの若々しさに触れることで、高齢者の方々も若々しく活動できるのではないかと考えた。

私は今回のフィールドワークを通して戸沢村の高齢者の方々の若々しさの他にも村の方々の暮らしの知恵やイベントを計画することの難しさを学んだ。戸沢村の高齢者の方々の若々しさについては、炭窯作りで感じたことである。私が苦勞してやっと持ち上げられるような道具を彼らは簡単そうに持ち上げていて、その若々しさに驚かされた。暮らしの知恵については笹巻作りやわら細工で学んだ。現代の私たちは何か必要なものがあればすぐ買ってしまいが、今回体験させていただいたこれらの活動では近くの山ですぐに採れる笹の葉やわらを使用して暮らしの道具を作っていて、昔の人の知恵とそれを受け継いだ戸沢村の方々の技術を学ぶことができた。イベントを計画することの難しさについては、ほたる祭りの計画で感じた。私たちは事前に知らされていた情報だけを頼りに祭りの計画をして2回目のフィールドワークに挑んだが、当初予定されていた小学生の発表がなかったり人が全く来なかったりと予想外のことが沢山起きた。成功させることは出来たが、反省会で地域の方が仰っていた、最悪の事態を想定して動くということが出来ていないように感じた。また、ある程度予想外のことを潰しておくといったことも出来ておらず、イベントの計画をする上での取り組み方が未熟であると思った。

今回のフィールドワークで得られたこれらの経験は普段の大学生活や他のフィールドワークでは得られないものであり、今後の生き方に役立つものだと思う。特にイベント計画をする上での取り組み方は社会に出ても必要とされるものであるため、このフィールドワークを体験させていただいたことに感謝し、これからの生活に活かしていきたいと思う。



地域教育文化学部 Yさん

私は入学前から「フィールドワーク-共生の森もがみ」に興味を持ち、受講したいと考えていた。普段の生活では味わえない経験ができ、自分の考えの幅を広げられるだろうと思ったからである。実際参加し、街の歴史から暮らしの知恵まで様々なことを学んだ。中でも4日間を通じ、「達成感」というワードが多く出てきた。達成感とはただ活動していても感じることはできないと思う。私は今回の活動から、達成感を得るために大切だと思ったことがある。

1つは、目的を持って取り組むことである。今回のメインイベントの1つであるほたる祭りでは、自分たちのイメージと異なる点が多く、本番も上手くいかず不安だった。しかし、来てくれたお客様に楽しんでもらおう、後悔のないようにやろうとみんなが考えた結果、多くの改善案がでて、本番ギリギリまで試行錯誤し、本番中も状況に対応したプログラムで進めることができ、笑顔で閉会を迎えることができた。私自身も人前で話すのは得意ではないが、無事に場を繋げられたことが自分の自信になった。何が大事か、どうしたいかを考え、意思を持って行動することは大切だと感じた。

そして、何事もまずはやってみるということである。炭窯づくりもわら細工もやってみてはじめて大変さ、楽しさが分かった。力仕事に自信は無く、特に炭窯づくりは最初、あまり乗り気ではなかったが、時間いっぱい体を動かし作業した結果、感じたのは作り上げることができて嬉しいという幸せな感情だった。いろんなことに挑戦してみることで、達成感に繋がると感じた。

フィールドワークを終えて、様々な考えを持っている人とともに行動することの楽しさを実感した。また、生活用品に恵まれている今、山に生えた山菜を使った食事、わらを使って道具を作るという伝統技術を受け継ぎ、限りある資源を存分に使って生活している戸沢村の皆さんの知恵に感動した。活動は本当に楽しかったが、全てが思い通りに進んだわけではなく、苦戦したこともあった。また、祭りを1から作り上げるということの大変さ

を知った。しかし、仲間と協力し意見を出し合い、最後に感じた達成感は幸せなものだった。達成感を感じることの素晴らしさを教えてくれた幸齢者の皆さんと出会えて本当に嬉しい。これからも今回感じた達成感を忘れず、色々なことに挑戦していきたい。

理学部 Sさん

私は将来生物学コースに進む上でホテルが過ごしている環境がどのようなものか体験してみたいと思いこのプログラムの参加を希望した。

今回お世話になった戸沢村は山菜や笹の葉、クワガタや蛭などほかにも私が普段生活している環境では観察することのできないような動植物が豊富であることから土壌の栄養価が高いことが予想できる。また近くには山や川があり、様々な生態系があることが分かった。そのような環境下で生活している戸沢村の方々は自然から学ぶ大学を設立していた。戸沢村の高齢者の体力は底無しかと思うくらいで、力も私たち大学生に負けないくらい強かった。フィールドワーク中に行った重労働を定期的に行っているからなのかとも考えたが、もらい湯の時に訪問した家でフィールドワーク中にお世話になった方のお父さん、お母さんを紹介して頂いたときに違うのかもしれないと思った。それは普段まき割りや土壌運びなどの重労働をしていない方も元気であることに変わりなかったからだ。戸沢村では少子高齢化が問題になっているが、公民館に子供が「ただいま」と帰ってくるくらい高齢者と子供の距離は近く、それが高齢者の元気に繋がっているのではないか。

また今回はそんな高齢者の元気に繋がる子供たちを楽しませるほたる祭りの計画を任せていただいた。初めは改善点を思いついても発言することに躊躇してしまったが、一か月間お昼を一緒に食べたり計画を立てたりすることで皆の仲も深まりリハーサルの改善点を本番で修正できたのではないと思う。しかし、最悪の状態を常に予想しながら計画を立てることができなかったのが今回のほたる祭りの反省点であり、次から大学で実験やプレゼンテーションを行うときに気を付けるべきだと学んだ点でもある。

幸福とは心が満ち足りていること、幸せであることらしい。戸沢村で生活した4日間は普段生活していたら味わうことのできないほどの充実感で満たされていた。そんな素敵な戸沢村で毎日生活している高齢者は心が満ち足りていて幸せであるに違いない。だから戸沢村の高齢者は幸齢者なのだと思う。

理学部 Yさん

蛭祭り当日、準備はとてまばたばたして、全員が共通の理解を出来ていなかったこともあり、リハーサルは散々なものでした。でも、それからのみんなの動きはとてよくて、一人一人がしっかりと自分なりの改善案

を発言出来ていて、みんなでいいものにしようという気がすごく伝わってきて、とてよ生き生きとしていた楽しい時間でした。そして、本番に予想外のことが次々と起こりました。まず、来てくれたお客さんが予想していたより大幅に少なく、幼かったことです。しかし、伝言ゲームの内容をより簡易に変えたらなんとか伝言することができ、伝わるか不安だったミステリーもコナンと同じ気持ちになって見守ってくれたり、犯人に「まてー！」と言ってくれるなど素直な反応が見れてとても嬉しかったです。また、小学生のソーラン節がないということで空いてしまった時間も小学生が自主的に踊ってくれたことがとても助かり、またとても温かい気持ちになりました。

私は、もともとで人前で話すのがとても苦手でした。いつも自信がなく、目立たなければいいと思っていました。しかし、今回もがみに参加したら、人前で話さなければいけない場面ばかりで、それを嫌がっている余裕なんてありませんでした。最初は、自己紹介して言われたときにやりたくないなと思っていただけ、食事などに、私の話したことを覚えていてくれて、その話題を振ってくれるというのが、私に興味を持っていてくれるというのがとても嬉しかったです。また、みんな心優しく、同じグループのメンバーも初めは、打ち解ける気がしないと思っていただけ、今では、同じピンチを乗り越えた大切な仲間のように思っています。もがみから帰ってきてから、他の場面でみんなの前で話す機会があっても、それほど緊張を感じないようになりました。

高齢者の方々とご飯のときやもらい湯のときなどに話していると、高齢者の方々の若い頃の姿が透けて見ることが度々ありました。話や作業をするときの動きなどから、高齢者の方々が若いころたくさん努力してきたというのが伝わってきました。その経験が今の幸せな暮らしに繋がっているのかなと思いました。私もそんなかっこいいおばあちゃんになりたいです。



工学部 Tさん

私がフィールドワークの授業を通して学んだことが

二つある。一つ目は今回のプログラム名にもあるように高齢になってからの生き方である。これはわたしの元々イメージに過ぎないが、仕事を退職した後は家で一人や夫婦で過ごすものかと思っていた。しかし、今回戸沢村を訪れてそのイメージは変わった。戸沢村の人々は集まったり、外で様々な作業をしながらとても元気に生き生きとして元気に活動しているのだ。大学生のほうが体力や力はあるはずなのに地元の方は私たちが前日の疲れが残っていて少し疲れている中、重い農具を使ってきばきと作業を行っているのだ。この光景を見て、本当に高齢者なのだろうかという疑問を持ってしまうほどであった。なので、私ものんびり過ごすのではなく積極的に外に出て元気で居たらいいなと強く思った。二つ目は今回のプログラムの一大イベントである、ほたる祭りを通して、「最悪を想定しながら物事を考えていく」ということを学んだ。私たちの班では昼休みや放課後を使って集まり、ほたる祭りをどう楽しんでもらうかなど計画を進めていて、私たちは企画した側も会場に来てくれた人たちにも大満足してもらえらると思っていた。しかし、いざ当日にリハーサルを行ってみるととてもひどく、元々私たちに与えられていた時間の半分ほどであったし、一人一人が自分がどのように動くのかをあまり把握していなかったのだ。改善するための話し合い時間では皆が今までにないくらい緊張感に包まれていた。そして、本番を迎えたが、ここでも私たちが想定していた年齢層よりもかなり下で、お客さんの数もかなり少なかったのだ。不安でいっぱいであったが、班員の特技を披露や地元の小学生の発表に救われて、帰るときにはお客さんがとても笑顔だったので満足してもらえたのだろうと思いき、私たちがとても気持ちよく終えることができた。しかし、今回学び、これからの私たちの課題であることは「最悪を想定する」ということである。これは全部が終了した後、戸沢村の方から言われた言葉だ。物事を企画していくときは、あらゆる面からいろいろなことを想定していつ何が起こってもいいように準備をするべきであるということだ。私はこの言葉がすごく胸に響いた。今回、フィールドワークに参加したからこそ、大学生活ではあまり触れあうことのない小さい子や高齢者と交流を交わすことができた。ただ座学をするのでは得られないであろうものをたくさん得ることができ、とても満足している。なので、これからも行事ごとには積極的に参加し、その都度たくさん物を吸収して充実した学生生活を送りたいなと思った。

工学部 0さん

フィールドワークの感想、内容

「戸沢村の超元気印！幸齢者集団の生き様に学ぶ」というプログラム名の幸齢者の意味を最初は理解できませんでしたが今私はその意味が分かる気がします。私は、まず活動を通して繋がりを学べたと思います。高齢者の

方々は、それぞれ別の経験をし、いろいろな生き方をされていてそこに繋がりがあから幸せなのだと思います。一番それを感じたのは、ほたる祭りの時でした。私たちは、ほたる祭り当日準備に思った以上に手間取り、リハーサルもうまくいかずしかし、本番は上手くいきました。それは、高齢者の方々の助言や私たちの計画の修正もありましたが、一番はグループでの繋がりが感じました。高齢者の方々の話にも人との繋がりはとても大切だという話もありました。

ほたる祭りは、動画やレクレーション以外にパフォーマンス、小学生たちによるダンスでとても盛り上がり、主催側も客側も楽しめたと思います。活動としては、ほたる祭り以外にピザの石窯の修繕作業、ピザ焼き、笹巻づくり、わら細工、もらい湯をしました。もらい湯では、地域の人の家のお風呂を借りて入り、借りた方の地域の話やゆっくりできました。戸沢村の課題について、問題について、また山形の生活に対するアドバイスまで詳しく聞けました。笹巻づくり、わら細工は初めての体験で保存食をつくったり、虫かごを作ったりできてとても楽しくできたと思います。

地域もしくは自分の課題

自分の課題に関しては、プレゼン能力だと思いました。今回のフィールドワークで、高齢者の方々から時間制限付きで自己紹介や感想を言うのが難しく、黙ってしまったりしていたのでそこを改善したいです。地域の問題は、話を聞いた限りでは山形に対して積雪量が多いことや20代から30代の方が少ないことと感じました。

課題に対する探究と提案

自分の課題に対しては、積極的にグループのプレゼンに参加するようにし、また慣れていないので自分が前どのように話すかプラン建てし、話す内容を決めてからやってみたいと思います。地域については、地域を挙げて子供に対する学習はしっかり出来ているのでとても良いと思いました。また、初めて行った戸沢村に対してまた行きたいと感じる人が多いと感じたので、戸沢村に行く機会を増やすために地域を挙げた大きなイベントを増やすといいと思います。

工学部 Hさん

*フィールドワークの内容

炭窯作り

座学（地域の活動、歴史）

ほたる祭り企画・運営

ピザ作り

わら細工

*戸沢村と韓国

戸沢村と韓国との交流の歴史は、昭和60年まで遡る。戸沢村で農業に従事している若者たちが、栃木県にあるアジア農村指導者養成専門学校「アジア学院」の留学生たちと交流を始めたことが始まり。平成元年に、韓国中

部に位置する忠清北道堤川市と戸沢村の「国際交流塾」のメンバーによる、農業技術交流を主とした相互訪問がスタートし、両国の冬季農業の課題や農村開発について意見交換した。

その後、農業の後継者対策、嫁不足解消として国際結婚を推進し、戸沢村に韓国出身の女性が暮らすようになった。彼女たちに日本人社会により早く馴染んでもらえるよう、戸沢村は日本語教室の開講をはじめ、村民との相互理解を図るための交流事業などを実施し、親交を深めた。

現在、戸沢村は韓国の文化が色濃く残った村となっている。

*フィールドワークでの感想

フィールドワークを通して一番印象に残ったことは、ほたる祭りの企画・運営だ。私たちは戸沢村の公民館で行われるほたる祭りのすべてを任せられた。

一回目のフィールドワーク以降、毎日メンバーで集まってほたる祭りの企画内容について話し合いをした。例年通りの参加者である小学生40~50人を想定し、彼らが楽しめるような企画を考えた。

しかし当日来場した方々は幼稚園から小学校低学年20人足らずとなってしまった。考えてきた企画は今年の参加者の方々には難しかった部分もあったと思う。

そこで、土壇場で話し方の改善やプログラムの変更を行った。そして参加者の方々の笑顔を見ることが出来た。これは毎日の会議を行っていた私たちだからこそできたことだと感じていて、非常に充実感のあるフィールドワークとなった。

*地域の課題

戸沢村は「来る者拒まず去る者追わず」の精神を持つ村で、実際に私たちは戸沢村の方から大変あたたかく受け入れてもらった。また、地域の全員で団結しているという印象を持った。

高齢者の方々が教員、子供が生徒、戸沢村すべての自然が学校の「北の妙創郷大学」がそれを象徴している。

しかし、「北の妙創郷大学」も高齢者の方々の貴重な知識も韓国と親交のある村であるということも世間に全く知られていない。全国的に見ても非常に特徴のある村であるため、もったいないと思った。

*地域の課題の改善策

戸沢村を知ってもらおうと先代のフィールドワークの参加者がFacebookを立ち上げた聞いた。このようにSNSを活用して戸沢村を広めていくことが手軽で学生でもできる有効な策だと考える。

*自分の課題と成長

わたしがこのフィールドワークで果たしたいと考えていた課題は二つあった。

一つ目は祭りの企画を経験するという事。二つ目はコミュニケーション能力の向上である。今回のフィール

ドワークを通してこの課題を果たせたと感じている。今までは大人数での話し合いは人任せにすることが多かった。しかしほたる祭りの企画には主体的に取り組みしていたと思う。その結果、コミュニケーション能力の向上にも繋がった。

実際に打ち合わせを重ねるごとに発言の回数が増えていることを実感することが出来た。



工学部 Kさん

私が二回の活動を通して感じたこと・学んだこと・考えたことは主に二つである。

一つは「地域の人々のつながり」である。戸沢村には子供が少ない。そのため、高齢者の方々が子供たちの先生として、地元の自然を活かした多くの技術を教えている。学校とは異なり、子供にとってはより自然を学ぶ機会が豊富にあり、さらに高齢者にとっては子供たちの交流の場であり子供の笑顔に触れることができる環境がそこにはあった。また、地域の方々は互いの名前や人柄を理解しており、私たち学生が来ても初めて会ったとは思えないほど、明るく、優しく接してくれた。その結果、私も気兼ねなく会話や食事をする事ができた。これらのことは、住民が少ないため互いに協力し、来た者を歓迎し生きてきたからこそその文化であると思ふ。

二つは「自分の意見を積極的に伝える」である。ほたる祭りの運営は私たちが全て行った。その中で、祭りをより良いものにするために早急に企画を伝える必要があり、初めは強引に活動を進めていた。しかし、それでは祭りに来てくれる方に失礼であると同時に自分たちが楽しくないのではないかと思った。そこで、これまでの企画を振り返り、積極的に発言した。すると、ミーティングも円滑に進み、祭りも成功させる事ができた。また、仲間や地域の方々とのコミュニケーションにもこの積極性を活かす事ができた。だが、自分の意見を伝えることだけがコミュニケーションに必要なことではない。同時に相手の話を聞き、会話が一方通行にならないようにすることの重要性も学ぶ事ができた。

今回のフィールドワークで見つけた課題は、自分の意

見を上手くまとめようとして、話すときに何を一番に伝えたいのか分からなくなってしまうことだ。解決策としては、人前で話す機会を増やすことで慣れる、普段から何を伝えたいのかを考えてまとめる癖をつけることが挙げられる。地域の課題としては若者の減少だ。解決策としては、SNSなどのソーシャルメディアを通して地域の魅力を積極的に発信していくことだ。最近若年層の間でSNSの利用が増加しつつあり、地域の魅力が山形内外に広がることで地域活性の一步になると考えた。今回のフィールドワークは、戸沢村の方の優しさに触れ、地元にはないような地域全体のつながりを間近で感じた。戸沢村は来る者を拒まないのだ。そして、多くの人にこの戸沢村の優しさや魅力を直接感じてほしいと思った。私自身も機会があれば戸沢村を訪問して、また地域の方との交流を深めたいと思う。

工学部 Kさん

私はフィールドワークを経験する前に目標を立てた。一つは人の目を見て話せるようになること。もう一つは自然を体感し、大いに楽しむことだ。もともと戸沢村についてをよく知らなかったから、すごく楽しみな状態で行った。この二つの目標は、結果から言うと両方達成したと思う。

私は生まれてからずっと人見知りだ。閉鎖された空間で何十日もかけて仲良くなった友達しかいなかった。それが今このフィールドワークを終えて、軽減されたと思う。

母はもともと川崎町生まれで、私自身、それなりに自然を知ってると思っていた。しかし、戸沢村はそれ以上に自然があり、生き物がおり、私はこれが本当の自然なんだと感動した。見るもの感じるものが新しいものばかりで、気がついたら色々な方に色々な質問をしていたのだ。「人見知りの私」は戸沢村のいたるものへの興味で、その時はほとんど存在していなかったと思う。そして、ほたる祭りをみんなと一緒に作れたこと、色々想定外だったが無事祭りが成功したこと。その影響あってか、2回目の最終日のスピーチでは戸沢村の方たちを含めた全員の目を見て話せたと思う。自分に自信をつけさせるようなプログラムであったのだと思う。

2つ目の自然を体感したことは言うまでもないと思うが、すごく気持ちが良かった。ピザ窯作りで訪れた場所は緑が生い茂り、川には魚が泳いでおり、カエルや白いトンボ、クワガタムシまでいたのだ。私は地元が仙台で、仙台は杜の都と謳ってはいるが、その実都会であり、申し訳程度のケヤキ並木があるくらいである。そのようなところで育ったが故、戸沢村では大いに楽しめた。自然だけではなく、もらい湯、稲細工、笹巻き作りと貴重な体験をさせてもらった。特にもらい湯では地元の方の貴重な話を聞いて、人生得をした気分になった。

名実ともにピザであった私は、もちろんピザも楽しみ

であったが、そのこと以上に自然、人とのつながりに惹かれていった。

フィールドワークを通して、人見知りが完治とまでは行かないが、軽減出来たこと、自然を感じ、戸沢村の方たちのはなしをいっぱい聞いたこと、様々な経験をさせてもらった。これから先、フィールドワークを通じて得られたものはこれからの私の人生において大切なものになるのだろうと思う。

とても楽しい4日間だった。失ってみて初めて大切さに気付くなんて言葉が、フィールドワークを終えた私の身に染みることとなった。ただ一つ言いたいことがあるならば、プログラムにあったメダカ池の整備をしてみたかったと思うが、それがなくても十分に濃い内容であった。

工学部 Sさん

このプログラムを受けて、主に大変だと思ったことが二つあり。一つ目はほたる祭りで、二つ目は炭窯づくりです。

一つ目のほたる祭りでは40分間、大学生が発表する時間をもらい、みんなで動画を流して子供たちを楽しませようということになりました。自分は休み時間に動画を撮って、音声や効果音をつけたり、切ったり張り付けたり、編集の作業を一人でしていました。牛乳パックの灯籠を一人一つやらなければならなかったのですが、班長が代わりにやってくれて、忙しかったので助かったと感じました。

ほたる祭りの日に、一つハプニングがあり、小学生がダンスをする予定だったが、来なくなって、時間が余ったということです。そこで、時間のつなぎとしてやる予定だったジャグリングを10分間やったら、子供たちが拍手してくれて、楽しんでくれてよかったです。そこで、ジャグリングで使った曲が、たまたま小学生が運動会で踊った曲だったので急遽小学生4人で踊ってくれて、盛り上がりました。ほたる祭りが終わって去年より楽しかったと小学生が言ってくれたので頑張ってたよかったですと思いました。

二つ目の炭窯づくりは一回目にピザ窯をつくり、二回目にピザを焼いて食べるというものでした。

一回目に粘土を運ぶという作業をして、自分が数回やって疲れていたのですが、高齢者の方は疲れていなさそうだったので、学生より高齢者のほうが元気だなと感じました。

感想

僕は説明会の時に「戸沢村の超元気印！幸齢者集団の生き様に学ぶ」を選んだ理由として、一つ目は高校の時部活で自然と接する機会が多く、米沢に行ったら自然と触れ合うことができないので、自然に触れあいたい。二つ目は姉が大学でボランティア活動をして人が変わったという話を聞いたので、ボランティア活動をしたい。

三つ目は高齢者と触れ合いたい。と書いたのですが、実際はピザを食べたかったという理由でこのプログラムを選びました。

しかしこのプログラムを受けてみて、ピザ窯を作るときに周りは木や草で生い茂っていて、クワガタなどの虫もいて、自然と触れ合うことができ、ほたる祭りでは戸沢村の人に代わって企画して、大学生で協力して、子供たちを喜ばせるというボランティア活動もでき、二回目の近隣の家の風呂に入ったときに、高齢者の方とお孫さんや娘さんのお話を聞いたりして、高齢者と触れ合うことができ、志望理由で書いたことを体験できて、有意義だと感じました。



工学部 Kさん

フィールドワークにおける4日間は私にとって、とても貴重なものであった。炭窯作りやホタル祭りの企画運営、ピザ作りなど普段の生活では、決して体験できないことばかりで、あっという間に時間が過ぎてしまった。その中で私が今回のフィールドワークで学び、感じたことが2つある。

1つ目は、「達成感」である。今回のプログラムのメインであるホタル祭りの企画運営で私は、大きな達成感を味わうことができた。私たちは、ホタル祭りを成功させるため、班長を中心とし、1ヵ月前から準備した。そのおかげで、ホタル祭りは大成功に終わることができた。しかし、すべてが順調というわけではなく、リハーサル時は、流れの把握ができなかったことやメンバーの役割が不鮮明だったりして、肝を冷やした。けれども、みんな臨機応変に対処し、成功につなげることができた。最後のほうでは、戸沢村の子供たちが自主的に祭りに参加し、より盛り上がりを見せた。年配の方、同年代、小さな子という3世代が関わり、その誰もが笑顔であった祭りの雰囲気はとても心地良かった。祭りの企画運営は楽なものではなかったが、みんなが笑顔だったことでその苦勞が報われただけでなく、達成感も感じることもできた。誰かを楽しませることの楽しさを知ることができ、本当にうれしく思う。

2つ目は、「みんなで食べるご飯はおいしい」ということである。大学生になり、1人でご飯食べることが多くなり、大勢の人と食べることの楽しさをより感じた。出される料理は、どれもおいしかった。山菜料理、韓国料理のアレンジなどバリエーション豊富で、私たちのためにたくさんの料理を作ってくださった婦人会の方々には感謝の気持ちでいっぱいである。食を通して、年配の方と交流し、いろいろとお話を聞くことができた。

今回のフィールドワークで私は自分に対して新たな課題を見つけることができた。それは、何事も積極的に行動するべきであるということである。私は、あまりコミュニケーションをとることが得意ではない。しかし、だからといってコミュニケーションをとることを避けていては、いろんな情報、チャンスを得ることができないと感じた。そのため、少しでも行動していこうと思う。私は、このフィールドワークに参加して本当に良かったと思う。この経験や学んだことを生かしていきたい。

工学部 Iさん

私は4日間にわたるフィールドワークを通してたくさんのことを学んだ。

まずはこのプログラムのメインイベントであるほたる祭りを通してだ。1回目のフィールドワークから約1ヶ月の間準備をしてきたつもりだったが、直前になってやらなければならないことがたくさん出てきて急いで準備した気がした。もっと計画的に進めることが大切だなと考えた。また本番前のリハーサルにおいて、全然うまくいかず、さらに想像以上に人が集まらなかったため、このままでは失敗するのではと考えていたが、実際大成功であったと私は考えた。このことから、人生はすべてが「なんとかなるもの」であると考えた。

次に村の人たちについては、小さい子供から高齢者の方まで、すごくエネルギーでむしろ都会に住んでいる人たちよりも充実した私生活を送っているのではと感じた。戸沢村はこのままでも十分やっつけられるのではないかと考えていたが、プログラムの中にあるもらい湯をした帰りの車の中で、村の方が「君たちが作るのを手伝ってくれたピザ窯は今いる80歳のおじちゃんしか作れない。あの人がいなくなったら誰もピザ窯を作ることができない。」とおっしゃっていた。彼らはピザ窯を作るのに適した粘土が戸沢村のどこにあるのかがすぐにわかるらしい。これを聞いたとき、私は戸沢村には後継者が必要であると考えた。そのためにも戸沢村をより多くの方々に知ってもらう必要があると考えた。今回のフィールドワークで私は戸沢村の方々はとてもやさしく寄り添ってくれるし、なんといっても面白い方がたくさんいると感じた。この人々の温かさは実際に触れ合わないとはわからないことなので、私たちが行ったフィールドワークのような行事を都会の人々にむけて行うべきと考えた。偏見ではあるが、都会の人々で人

間関係に悩んでいる人は少なくないのではないだろうか。私も田舎育ちで、高校がやや都会であったために高校で人との感性があわずに悩んでいた時期もあった。そんなときに地元の温かさに感動したものだ。

最後にフィールドワークを通して、班のみんなと大変仲良くなれたのではないかと感じた。私はもともと人見知りではないので、フィールドワークでコミュニケーション能力が上がったとは感じませんが、自分の良さ、そして残念な部分を含め、自分を班のみんなに十分理解してもらえたのではないかと考えた。フィールドワークは終わってしまいましたが、学園生活でも班のみんなと仲良くしたいと考えている。

工学部 Aさん

私がこの授業を履修し、フィールドワークで実際に感じたことには、座学では得られないものがたくさんあった。

まずはじめに、少子高齢化が著しく進んでいるということだ。私が今回訪れたのは、最上地方にある戸沢村の古口地区という場所だ。最上地方は山形でも少子高齢化が進んでいるということは知っていたが、実際に行ってみて、私が想像していた以上にそれが感じられた。その原因について、私は若者の集まる高等の教育機関や就職先がないからではないかと思った。実際にまちを車で走っても、私は中学生以下の子供数人ほどしか見ることが出来ず、私たちと同じ年代の人々は目にしなかった。しかし、私はこの問題の解決について、山形市のような大きな市を見習ったり、戸沢村と同じような規模でも違う地区の成功例を真似したりするのではうまくいかないように思う。戸沢村に限らず、私は少子高齢化について、その土地にあるものを利用して雇用を生み出したり、学びの環境を整えたりすることが必要だと感じた。そのため、山形大学のように地元の大学と協力し、最上地方をエリアキャンパスとして学生の学びの場にするのはとても良い試みだと思った。また、戸沢村では、数十年前から最上川の舟下りなどを目玉に観光業に力を入れ始めていると聞き、そういった新しい分野も積極的に産業として発展していければ良いと思った。

次に、戸沢村には私の地元の山形市にはない良さがあったことも感じた。それは地域の人々のつながりの強さだ。戸沢村の小学校では、地域のお年寄りを地元料理や民芸品づくりの先生として招き、授業を行っているらしく、とても良いことだと思った。お年寄りにとっては、子供との触れ合いの場になり、子供にとっては地元の魅力に知り、お年寄りを敬うきっかけになる。私が戸沢村で感じたことの一つにお年寄りがパワフルなことがあったが、それは子供から活力をもらっているからではないかと思った。これは少子高齢化が進むこの地区で、その状況を逆手に取ったとても前向きな動きだと感じた。私はこのフィールドワークで、もがみの問題点ばかり見

つけて帰ってくるのではなく、良い点もたくさん見つけることが出来て良かったと思っている。今回実際に戸沢村を訪れてみて、少子高齢化が進んでいても、その状況をうまく利用してお年寄りの活気づけや、子供の教育につなげているのはこの地区だからできたのだと感じた。



授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Bさん

<活動内容と感想>

第1回 1日目…そば打ち体験、里山自然観察、山菜採り
2日目…山菜料理づくり、原木キノコの菌植え
第2回 1日目…山菜採り、山菜料理づくり、
杉林の除伐・間伐
2日目…炭焼き材料調達、炭窯見学、
ログハウス修繕

計4日間の戸沢村での活動は、これまで私が行なったことのないものばかりで、とても貴重な体験をすることができました。自分たちの手で採った山菜を料理することで、山菜料理は本当においしいと思うことができた反面、山菜は種類によって、下準備に時間がかかる上、加減が難しいということを実感することができました。キノコの菌植えや杉林の間伐などは初めて体験しました。それをすることによって、戸沢村にあるたくさんの資源（木）をキノコの栽培に用いたり、炭にしたりすることで存分に活用しようとしているということに気づくことができました。また、最後に班のみんなでログハウスを修繕することで、一体感が増したようにも感じました。機械を使わず、自分たちの手で何かを行なうことはとても労力を要するため大変であると感じましたが、それによって達成感も味わうことができました。

<課題とそれに対する私の見解>

私は2つの課題を発見しました。1つは、資源の活用です。戸沢村の方がおっしゃっていましたが、戸沢村にはたくさんの資源があるものの、それを最大限に活用できていません。私たちが体験した、キノコの栽培や炭焼き、ログハウスの修繕などにたくさんの木を使用したものの、それでもなお資源が残っていました。もう1つは、伝統の継承です。かつて産業として発展していた炭焼きなどの様々な伝統産業が戸沢村にはあります。しかしながら、これは戸沢村に限ったことではありませんが、高齢化が進んでおり、その伝統の担い手が減少しているという問題があります。炭焼きに関しても、技術を有している方がいるものの、高齢であるため現在では行なわれていないそうです。私は、伝統は絶対を守るべきだと思っていましたが、現地の方の「伝統を守ることも大事だけれども、雇用を増やすことも大事だ」というお話を聞いて、伝統と雇用のバランスをとることが必要である一方、それはとても難しいことであると実感しました。そして、この課題に対して、私は資源を上手く活用しつつ、どうにかして伝統を守ることはできないかと考えました。やはり、炭焼きを昔のように産業として行なうには、現在の時代の流れなどを考えても難しいと思うし、雇用を確保することはできません。ですから、私たちが行な

ったフィールドワークのような、炭焼きを体験することができるプログラムを、小さな子どもから若者を対象に企画すればいいと考えました。炭焼き窯の作成は大変なので簡易的なドラム缶になりますが、資源を使うこともできるし、現地の方は教えることで技術を思い出し、それを伝えることができるので課題が解決できると思います。



人文社会科学部 Sさん

今回の戸沢村のフィールドワークを通して、私たちが普段できないような体験とともに、里山が抱える深刻な問題についてじっくり考えることができました。

1回目と2回目の活動を通して行った山菜採りでは、わずかな環境の違いでとれる山菜の種類が大きく異なることが分かりました。また調理の方法もその山菜ごとに適した調理方法があり、どの山菜がどの時期にどこでとれるのか、どういった調理をすればいいのかを完全に熟知している必要があると感じました。したがってこういった体験は素人では全くできないことであり、山菜の知識を持つ人も過疎化が進むにしたがって少なくなっていくという課題を発見しました。

主に2回目で行った里山保全の活動では、「木の除伐・間伐」で切った木を用いた活動を行いました。原木キノコ（しいたけ）の菌植えの体験では、一時ほかの作物が取れないときの重要な産業としてしいたけの出荷が行われたことを知りました。また、木を薪として使った炭焼き窯をこの目で見ることができ、これもまた一時期村の重要な財源となっていたこと、今では炭窯自体の数と炭焼きの技術を持っている人の双方が減少している事実について知りました。「間伐材を利用による炭小屋づくり」では輸入製品のほうが安いために今では余剰産物になってしまう間伐材を用いてログハウスのようなものを作りました。こういった用途に各種木々を用いることによって無駄となってしまうことを防ぐ発想に魅力を感じました。

それぞれの体験で私が考えたことは、どちらも著しい過疎化が原因になって山菜・炭窯の文化・伝統が失われ

つつあることについてです。文化・伝統が失われ、さらにお金を得る手段がなくなり、村外に流出していったという悪循環に陥ってしまっています。

このような状況を改善するために、私はこの村でしか体験することのできない、山菜採りや炭窯の体験がもっと対外的に伝わればいいかなと思います。具体的には、今回のフィールドワークで体験したようなプログラムを大学生が主導となって定期的に組んでみて、様々な人に体験してもらい、それを発信してもらうことによって、「自然の魅力と他ではできない体験がこの村にはある」と多くの人に思ってもらい、人々の山里への関心を集めるのがいいと思います。地元の方たちの協力を仰ぎつつ大学生が計画から実行までできるプログラムが可能かどうかは発表でもぜひ検討して、具体的にどういふことをして何を一番伝えていければいいのかを考察していきたいと思います。

理学部 Nさん

5月に一回目のフィールドワークと6月に二回目のフィールドワークがあり、計4日ばかりの短い期間だったが戸沢村での色々な活動を通して多くのことを学ぶことができ有意義に過ごせたことは凄く自分のためになってよかった。

一回目のフィールドワークでは、そば打ち体験、山菜採取を行って材料集めをしてから山菜料理を自分達で作った。これらの活動を通して感じたことは、やはり普段の生活ではスーパーなどである程度完成した状態の材料を買って家で焼いたり、茹でたりするだけの簡単な工程を通して料理を作ってしまった日々慣れてしまっていたせいで、いざ色々な下準備などの工程を必要とするそば打ちや山菜料理を自分で手間をかけて作ろうと思うと、なかなか思うように行かず凄く苦労してしまうということだった。特に、山菜料理に関しては自分で山まで行って山菜を採ってくるという作業がさらに入ってくるのもあり大変だったので、自給自足的な生活をしている人ってなおさら苦労しているのだなと感じた。しかし、やはり自分で頑張って材料集めをして自分の手で色々な準備を経て作った料理だけあって美味しく作る事ができたので、機会があれば自分でもこんな風に一から色々な工程を経てもう一度料理をしてみたいなと思った。

二回目のフィールドワークでは、一回目と同様の山菜採取の他にも、杉の木の伐採や炭焼きの材料調達、ログハウス作りなどのより力が要るタイプの仕事をやった。これらの活動を通して、感じたことはどれも力の要る仕事だけあって少人数でやるにはとても大変な仕事だということだった。さらに、ただでさえ人口が少ない戸沢村でこのような仕事を受け持ってくれる人が高齢の方々しかいないという事実もより大変さが増して深刻な状況であるように思えた。

これまでの活動や現地の方々の話を振り返って、個人的に知る事ができてよかったと思った事は自然って自然だけの力で成り立っているのではなくて、色々な人の手が加わって成り立っているという事実だった。具体的には、森林などで根の部分まで日が当たらず木の子が育ちが悪い問題を人間が木を伐採する事によって地面まで日が当たるようにする事により解決したり、山菜採取に行った時そこら中に大量に生えていた山菜も全部自然発生してそこにあるものだと思っていたが実際には現地の人が決まった場所に植えていたものがそこに存在していたなどの事例がある。

戸沢村の今後の課題として、力仕事が多い分経験を積んでくれて将来産業の力になってくれる若い人達を村に招き入れる事が重要であるように思えた。また、炭焼きについても生産性が少ないという理由で伝統的な文化が消えてしまうのは非常に勿体ないなと思ったので、炭焼きでしか出せない良さみたいなものを外部の人に伝える事ができたらいいんじゃないかと思った。

医学部 Mさん

第1回目の1日目は、まずそば打ち体験をした。うどん作り体験はしたことがあったが、そばは初めてだったので、とても新鮮だった。はじめは一度に入れる水の量が多過ぎたりしてしまい少し苦戦したが、練る工程はそれなりに上手くいった。麺を切るときは細さがバラバラになってしまい、全体的にはやはり難しかったが、元々好きなそばへの関心がより深まってよかった。

次に山菜取りに行った。この時季はわらびやうどがよく採れるらしい。豊かな山菜の生息地を守るために採取の際に山菜を少し残しておくことを学び、自然保護に対する意識を高めることができた。

夜は田中さんという方の民泊ふきのとうに泊まらせていただいた。山菜を使った料理など、美味しいものをたくさんご馳走くださった。外国人の宿泊者の方も多らしく、最近では台湾や中国の方が多く滞在するそうだ。

午前中は前日に採った山菜を使って料理を作った。私はうるいの味噌汁の担当だった。

<うるいの味噌汁>

(材料)

うるい、豆腐、だし顆粒、味噌

(作り方)

- ①うるいの葉の部分を持ち、茎だけ残す。
- ②うるいの茎を短時間ゆでて水にくぐらす。
- ③葉を食べやすい大きさに切る。
- ④沸騰した湯にだし顆粒を入れ、具、味噌を入れる。

次に原木キノコの菌植えを行った。近年キノコは菌床栽培が盛んになってきており、原木での栽培が縮小していると伺った。私の祖母は原木しいたけにこだわって食べている。このような需要があると思うので、絶やしてはならないものだと思った。実際に自分で作業してみ

と思ったより疲れたので、お年寄りの農家の方には厳しいだろうと感じた。体力のいる農作業にもっと若者が参入できたらと思う。

第二回目の1日目はまず山菜採りに出向いた。フキとミズを中心に収穫した。私はコシアブラとウルイの花の天ぷら、フキの肉巻きを作った。フキの肉巻きは時季が6月下旬と少し遅かったこともあり、硬い仕上がりになってしまった。重曹を入れると柔らかくなるというお話を聞いたので、この経験を次につなげていきたい。

午後は杉の管理について学んだ。北日本では雪に耐えうる太さにまで杉を成長させるために間伐をよく行うそうだ。そして1本の杉から数本の柱を作る。一方、あまり雪が降らない地域では間伐をあまり行わずに杉を育てるらしい。そうすると幹が細いので、1本の杉から1本の柱を作る。今回杉の管理を間近で見学して、かなり危険を伴う作業だということが分かり、体力も要る仕事なので、林業に携わる若者が少ないことは問題点であり、これから考えていくべき課題だと思った。

2日目は炭窯を見学した。木炭製造業は、大正時代にはそれで生計を立てていた人も多かったが、現在では労働生産性の低さから従事している方が減っていて、村でも数人しか従事者がいなくなってしまうとお話を伺った。産業として続けて行くのは難しくても、伝統的な製法として後世に伝えていければいいだろうと思った。

戸沢村の課題の1つの解決法として、戸沢村を広くPRすることが挙げられる。方法としては、まず何を売り出したいのかをはっきりさせ、その上でHP、パンフレットを整備。そして山形県観光連盟や山形市観光協会、山形新聞社、JR東日本山形支社、東京の山形県アンテナショップ、全国の山形県人会、大手旅行会社などの支援をもらってPRすることができるのではないだろうか。

医学部 Yさん

1回目のフィールドワークでは蕎麦打ちや山菜採り、山菜料理、原木キノコの菌植えを行った。2回目のフィールドワークでは山菜採り、山菜料理、杉の間伐、用材作り、炭小屋の見学を行った。山菜採りや山菜採りを通じて里山のもつ資源の豊富さやその魅力を実感し、杉の間伐などを通じて里山の保全を行う大変さを感じることができた。

今回、計2回のフィールドワークを通して、戸沢村の魅力を感じると同時に戸沢村が抱える問題点について学ぶことができた。

まず、戸沢村の魅力については里山が身近にあり里山に触れることで自然を感じることができるという点だ。今回にフィールドワークでは山菜採集、杉の間伐・伐採などを行い、里山の良さに触れ、また、その保全の大変さを知った。他にそばなど多くの特産品があることも戸沢村の魅力の一つだろう。

そして、戸沢村の課題については人手不足や交通の便の悪さが挙げられるだろう。戸沢村の特産品である炭焼きも現在では技術を継承する人が減少してしまったり、経験してわかったことだが里山の保全にも人手がかかるので、里山の保全が困難になっている。

この課題を解消するためには、戸沢村が持つ多くの魅力を積極的にPRしていき村外からの誘致を行って人を増やすことが重要になると感じた。



工学部 Sさん

第1回目(5月19日、20日)

・活動内容 そば打ち体験

山菜取り(わらび、ごごみ、うど、ウルイ)
山菜料理(ウドの炒め物、灰汁だしわらびのおひたし、ぜんまいの炒め物、わらびのたたき、ごごみの和え物、ウルイの味噌汁、ウルイ・きゅうりの漬物)
原木キノコの菌植え

◎感想

一日目は天候が曇りでどうなるかとても不安なスタートでした。高速道路が通っておらず、戸沢村までに車で2時間かかるため、交通面では不便なところがあるというのが正直な感想でした。戸沢村に着いてオリエンテーションを終えると、まずはそば打ちを体験しました。戸沢村ではそばを昔から作っていて、今でもそれが残っているということでした。実際に作ってみると、材料となるそば粉と小麦粉を混ぜたものに水をいい塩梅で足していくのが難しかったです。また、生地を練っていくときに、全体がよく混ざり合うことや、中の空気を抜くことが最後の仕上がりに大きく影響するということが身をもって体験できました。先生の作る蕎麦は、太さが均等でとても食べやすかったです。自分たちで作って食べた不揃いな蕎麦もとてもおいしく感じられました。午後の山菜取りでは、天候が雨に変わってしまいました。先生に教えてもらって山菜を集めることができました。そして次の日、いよいよ山菜料理を作りました。山菜料理はほかの料理と比べて下処理が多いことが特徴です。そうしないと苦みがあったりえぐみがあったり

固いかつたりするからです。戸沢村の方が事前にした処理してくれたので、おいしく調理することができました。とても健康的でとてもおいしかったです。その後、山にいて事前に切っていただいた原木にドリルで穴をあけてそこにキノコの菌床を打ち込みました。これは一種の産業ですが、労働生産性がとても低いのが難点です。第2回(6月23日、24日)

・活動内容 山菜取り(みず、ふき)

山菜料理(たけのご飯、みず汁、フキの肉巻き、コシアブラ、ウルイの花の天ぷら、みず切り、漬物)

杉林の間伐

炭焼きの材料調達

間伐材利用による炭小屋づくり

◎感想

第2回目は天候が抜群に良く、テンションがとても上がりました。まず最初に前回と同じように山菜を取りました、そしてそれらを含め山菜料理をまた作りました、前回よりもグループのみんなは山菜料理づくりに慣れた感じがありました。そして午後には杉林の間伐がありました。この作業は里山保全には欠かせない作業であるなど感じました、間引きをすることで丈夫な杉が育つだけでなく光が地面に届くことで雑草が育って地盤が強くなります、これは土砂災害などから村を守ってくれる役割を担っています。またこの作業は危険を伴うもので、労災が1000人当たり60人程度であると話を聞きました。また戸沢村では杉の間伐をできる人材が足りていなく、放置された杉林も少なくないということでした。切った間伐杉も使い道があまりなく、売ったところでお金にならないというのが現状です。この間伐杉はおもに燃料に使われたり、このあとに体験した炭小屋づくりに生かされています。先日に体験した原木のキノコ植えもその利用法の一例です。

体験を通して・・・今回の体験では貴重なふるさと体験ができたとともに過疎化が進む村の実情にすこし触れることができました。この経験をこのままで終わらせるのではなく、自分たちで発信していくことが大切だと感じました。

工学部 Aさん

私は二回のフィールドワークで戸沢村が抱えている課題について実際に体験して知ることができた。

一回目の訪問ではまず戸沢村の立地の不便さを感じた。大学がある山形市内から車で約二時間、ひたすら山の中を走った。その中で、戸沢村に近づくほどに店がなくなり、すれ違う車の数も減った。到着して最初に感じたのは、木や田んぼが多く自然が豊かであるということだ。これらの資源がこの戸沢村を支えていると感じた。しかしこの交通の不便さが故に資源を生かしきれてない。これが一つ目の課題と考えた。戸沢村では杉やくり

などの木材資源、それらを利用したいけの栽培や炭焼きでの上質な炭作り。そして季節ごとに変わる様々な山菜。そのすべてが運搬のしづらさという面で交通網の未発達が一つの壁となっています。木材は重く大きい物なので車での運搬も容易ではなく、また山菜も生ものであり迅速な運搬が必要になるため資源として他の地域に運ぶことで産業の一つとするならばトンネルや地下を使った運搬方法を取り入れるべきだと考えた。

二つ目の課題として考えたのは人手不足である。高齢化や働き手の減少は都会部から離れたいわゆる限界集落になりかけの場所ならどこでも抱えている問題だが、戸沢村ではその問題がより深刻である。それは稼ぎとなる仕事が林業や山菜採りなどであり体力を使うものが多いからである。田畑での作業が多い地域では耕運機などの機械が容易に使えるが、山での作業が大部分を占める戸沢村では機械の利用が難しく自力で行わざるを得ない状況となっている。この人手不足は作業の効率を下げただけではない。もう一つの問題は伝統的な技術が継承されないことである。一つの例としては炭焼きである。炭焼きは焼くときの時間の管理や非の加減も技術がいるが、それだけでなく炭を焼くための窯を作るのにも技術が必要なのである。釜は隙間が少しでもあるとせっかくの木材が炭ではなく灰になってしまうほど重要なものであるのだ。

これらの課題を解決するために私たちにできることを考えた。それは現地に訪問した私たちが戸沢村をPRして人を集めることだ。戸沢村は観光資源が豊富であり、山菜はもちろん最上川も近くにあり川下りも体験できる。これらをPRすることで戸沢村に興味を持つ人が増え、林業や山菜採り、炭焼きをやってみたい人、仕事にしたい人が現れることで道路整備などにも資金を割くことができ、より活気づくでしょう。小さなことかもしれないがこの様な積み重ねが村の将来を変えることになるかもしれない。

工学部 Iさん

私は今回の事前学習、中間学習、2回のフィールドワークを通して、様々なことを考え、課題を見つけることが出来ました。

私が考えた課題では、本当に残すことが大事なのか？という共通点があります。確かに山菜料理に関しては、戸沢村の使える資源としてもっと広めていく必要があると思うので、残していくべきだとは思いますが、原木きのこや炭焼きについては少し考える必要があると感じました。もちろん戸沢村のすべての産業を残して引き継いでいけると最もいいのですが、少子化や高齢化を考えると、本当に残すべきものとそうでないものを見極めるべきです。

私は中間学習で原木きのこ菌床きのこについて調べましたが、今の技術では菌床きのこも原木のものに

負けないくらいおいしくなっているし、炭焼きでは、中国からはいつてくる炭のすさまじい安さを考えると、いくら物が良くても買う人が増えることはないのではないかと思います。観光資源として残すという手もありますが、その場合は常時やるわけでないことから余計に手間がかかってしまうし、実際に採算がとれるかという確証はありません。

そこで私は、山菜採りと山菜料理、また私たちはフィールドワークで農家民宿に泊めていただきましたが、農家体験などを観光資源として考え、それ以外の産業はあったん考え直すべきだという結論に至りました。山菜料理に関しては、和食だけでなく、洋食や中華料理にも山菜が合うことを伝えられるといいと思います。



農学部 Hさん

私は、戸沢村での様々な活動を通して、戸沢村の問題だけでなく、山にふれあうことができるなどの貴重な体験ができた。

戸沢村は、山に囲まれており、おいしい山菜がたくさん採れる場所だ。はじめの活動はそば打ち体験をした。戸沢村では、昔から家庭内でそば打ちをしており、伝統になっている。次に山菜採りと山菜料理を作った。山菜はクセが強く、下ごしらえをしなければ、山菜が固くなってしまい、山菜の風味がなくなってしまうため、きちんと下ごしらえをする必要があると分かった。次に炭小屋を見学した。昔の戸沢村では炭を燃料にしていたが、石油が使われるようになると炭の消費量は減ってしまった。現在では、炭窯で炭を作る人は数人に減っているため、とても残念だと思った。次に木の伐採をした。初めての体験だったこともあり、木が倒れていく様子は衝撃的だった。また、伐採後に林の中に入ってくる光が多くなったことを感じたため、木と人は共存していかなければならないと強く思った。

今まで経験したことがなく、これからの人生でもなかなか経験できない貴重な体験がたくさんできた。戸沢村では、このような昔ながらの炭焼きやそば打ち、山菜採りや木の伐採などを今でも行なっている。しかし高齢化

問題によりその伝統がなくなりつつある。高齢化による問題は他にもあり、山に入る人が減少しているため、熊などの動物が山から下りて来る頻度が多くなっているという。

また、戸沢村では山菜と採る人が減少しているため山菜が余っており、木も伐採されていないところが多いため、木も余っている。資源がたくさんあるにも関わらず、それが使われていないという問題がある。これらの問題を解決するために戸沢村の高齢化を食い止めなければならない。そのための対策を考えていかなければならないと感じた。

この問題の対策として、戸沢村で多く採れる山菜を使いPRしていくことが良いと考えた。また、戸沢村に行く最中の交通が不便であることやお店が少ないなど、人が来たとしても都市圏よりも住みづらい環境のため、訪問する人などが少ないのだと考えられる。そのため、インフラ整備をし、お店を増やせるようにできれば改善されると考えた。

農学部 Tさん

1回目のフィールドワークではそば打ち、山菜採り、山菜料理、原木キノコの菌植えを行った。特に山菜採り、山菜料理は山菜を自分で採りに行くことも、自分で山菜を調理するという体験も初めてだったためとても楽しく、心に残った。そして里山に人が介入すること、利用していくことの大切さも分かった。2回目のフィールドワークでは山菜採り、山菜料理、杉林の除伐・間伐、炭窯の見学、ログハウスづくりを行った。杉林の中の雑木の伐倒や杉の間引きの様子を見、また戸沢村の方の話を聞いた。またナラの木の伐倒したものの小間切り、木割りを実際に体験した。それにより杉を管理し、利用し続けていくことの大変さ、難しさ、課題がわかった。今回フィールドワークにより、これら多くの貴重な体験をすることができた。それらの体験を通し感じた戸沢村の課題、その解決策を考えた。

戸沢村の課題として挙げられること。1つ目は高齢化が進みそれとともに、若い人が少なくなっていること。2つ目はナラなどの木のように資源として利用できるものを使い切れていないということ。3つ目は炭窯など伝統文化、工芸品が失われつつあるということである。この3つの課題は全て繋がっているように思う。例として炭焼きが挙げられる。炭焼きの材料調達は重労働である。さらに炭も約丸2日できるのにかかる。それに対し得られる利益が見合わない。そのためか若い担い手がおらず、現在炭焼きを行っている方は数人しかいないというのが現状である。それは炭焼きを行うための炭窯を使う、また炭焼きのために使用する木の利用機会の減少。炭焼きの技術をもつ人の減少などを指す。

例を挙げたがこのように、課題は相互に関係しあっている。これら課題を解決するためには様々な人に戸沢村

の魅力を伝え、知ってもらうことがまず一つの大事なことだろう。そしてそのためには自分たちから魅力や情報を発信していくことも大事である。その際、山菜や木々など資源となるものが豊富にあることは、とても強みになると思う。また炭窯はとても高度な技術が必要であるが、ドラム缶を使うなど簡便な技術にすることで若い人にまずは炭焼きについて知ってもらうなど工夫して伝えていくことも必要となるのではないかと思う。さらにお箸や食器づくりなどを行うなど体験教室のようなものを開く。その際、積極的に間伐材を利用していくなどの利用方法も考えられるのではないかと思う。これらの課題は一朝一夕でどうにかなる問題ではない。しかし私にも戸沢村の良さ、魅力を伝えていくことなどできることはある。自分自身をもっと戸沢村にかかわりさらにこれらの課題を考えていきたいと強く思った。

創作太鼓と伝承野菜栽培

活動状況

○実施市町村：戸沢村

○講師：田舎体験塾つのかわの里事務局スタッフ及び角川地区の講師

○訪問日：平成30年6月9日(土)～10日(日)、7月7日(土)～8日(日)

○受講者：地域教育文化学部2名、工学部7名、農学部1名 以上10名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p>【1日目】6月9日(土)</p> <p>08:00 山形大学発</p> <p>10:00 戸沢村農村環境改善センター着</p> <p>10:10 オリエンテーション、自己紹介、角川地域の概要説明、体験プログラムの説明)</p> <p>10:30 太鼓基礎練習</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:00 太鼓基礎練習</p> <p>16:20 振り返り</p> <p>17:00 宿泊先へ移動</p>	<p>【1日目】7月7日(土)</p> <p>08:00 山形大学発</p> <p>10:00 戸沢村農村環境改善センター着</p> <p>10:10 日程説明</p> <p>10:30 えごま加工場の見学</p> <p>12:30 昼食</p> <p>13:30 えごま苗の定植</p> <p>16:00 振り返り</p> <p>17:00 宿泊先へ移動</p>
<p>【2日目】6月10日(日)</p> <p>08:30 戸沢村農村環境改善センター集合</p> <p>08:40 日程説明</p> <p>09:00 ヒメサユリ観察会</p> <p>12:00 昼食</p> <p>14:00 伝承野菜苗定植(からとり芋)</p> <p>15:20 振り返り</p> <p>16:00 戸沢村農村環境改善センター発</p> <p>18:00 山形大学着</p>	<p>【2日目】7月8日(日)</p> <p>09:00 戸沢村農村環境改善センター集合</p> <p>09:10 日程説明</p> <p>09:20 太鼓曲練習</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:00 太鼓曲練習 発表会</p> <p>15:20 振り返り</p> <p>16:00 戸沢村農村環境改善センター発</p> <p>18:00 山形大学着</p>

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

地域教育文化学部 Hさん

戸沢村では、主に角川太鼓の演奏と伝承野菜の定植を中心に活動しました。角川太鼓は地域のお祭りなどで演奏活動をしており、今回私たちに太鼓の指導をしてくださいました。太鼓をたたくコツとして、足をしっかり開くこと、自然な姿勢で太鼓の真ん中を叩けるような位置に足を置くこと、バチを上げるときはまっすぐすることなどを教わりました。角川太鼓の皆さんは廃校になった校舎で練習をしており、またこの校舎では村の交流の場としてカフェが運営されていたり、ユニフォームを作るYONEXの工場となっていたりと、地域で連携して校舎を有効活用していました。太鼓は今回初めて演奏しましたが、角川太鼓の子供たちに一つ一つ丁寧に教えてもらい曲を仕上げるのが出来ました。一回目の活動ではとにかく自分のパートを覚えることに必死でしたが、二回目は他のパートを聞いて音とリズムを合わせることや、曲のどの部分を強く叩くのか、など視野を広くして演奏ができました。班の皆で一つのものを作り上げることに達成感を感じましたし、太鼓演奏を通じて班としてのチームワークも高まったように感じました。お昼の休憩時にはカフェで地域の方々とお昼を一緒に食べ、戸沢村のオオスギを見に森に連れて行ってもらいました。戸沢村の人柄の良さや豊かな自然を間近に感じられました。今回体験した伝統ある角川太鼓を後世に伝えるために、楽譜の作成や私たちが地域のお祭りで演奏をしていくことで広めていきたいです。

また、えごまやからどり芋の苗を自分の手で植える体験もしました。えごまはシソ科の植物で栄養素が豊富に含まれていて、食べると十年長生きするとも言われている健康的な食べ物です。しかし、資金が足りないことやえごまの加工や販売が上手くいってないことで、戸沢村のえごまの良さがあまり伝わっていないという問題がありました。また、今回実際に農作業を体験することで、その大変さを実感しました。えごまについての問題解決のために、他の地域で栽培されているえごまとは違った戸沢村のえごまの良さをアピールすることが必要だと思いました。

私はフィールドワークに参加するまで、戸沢村についてほとんど知識がありませんでした。しかし実際に行ってみると、浄の滝やヒメサユリなどの豊かな自然があり、戸沢村の活性化のために地域の人々が協力しあっている素晴らしい村だと分かりました。地域の課題解決の力になるために自分ができることについて、今回だけでなくこれからも考え続けていくことで、戸沢村の今後の発展に繋がると考えました。



地域教育文化学部 Uさん

今回の戸沢村でのフィールドワークを通して得たものが主に2つあります。1つは角川太鼓という太鼓の文化に触れられたという経験と、戸沢村で実際に生活をしたという経験です。

私は、これまでに太鼓をやってきた経験も太鼓の知識もありませんでした。実際に私が担当したのは締太鼓という楽器で、他の宮太鼓や大太鼓に比べると小さめの楽器でしたが、他のパートが締太鼓のリズムを聞き、それに合わせて演奏するという様な重要な役割を持つ楽器だと知り、責任感があつた一方で曲全体を支えるという面白さもありました。また、太鼓の演奏は他の人の掛け声を聞いて合わせるものであるため、他のメンバーとの一体感が高まったように思いました。初めての経験だったために、すぐに上手くなるようなものではありませんでしたが、主に地域の小学生、中学生、高校生に親切に教えてもらいながら少しずつ演奏を完成させていくことができました。地域を活性化させたり、角川太鼓の文化を広めたりするために、私たちが太鼓の演奏をして他の人々に聞いてもらいたいと思いました。

太鼓の練習や発表は角川小中学校の校舎で行いましたが、この校舎は既に廃校となっており、現在工場やカフェとして使われているとのことでした。少子化の影響で今後も全国各地で学校が減っていくと予想されますが、同時に廃校をいかに利用して地域の活性化に生かすかということが課題になるでしょう。そんな中で、この角川小中学校は工場、カフェ、太鼓の練習場等様々な観点からの方法によって上手く利用されていると感じました。

2日目は浄の滝へのトレッキングを行いました。道中は険しい山道がずっと続いていましたが、山道を抜けると秘境がありました。そこには高い気温に見合わぬ大きな雪塊があったり、美しいヒメサユリの花が咲いていたりしました。また、そこでは実際に山菜を取って鍋を作って食べるという活動を行いました。新鮮な山菜の風味があり美味しかったです。4日目は、えごまの搾油を

する工場を見学し、工場の機械の台数が少ないことや、えごま油の販売価格が高いことを知りました。また、えごまの定植を行い、農作業の大変さを知りました。これらの活動を通して、農業における労働力や、機械を導入するための経済力などの問題が繋がっていることがわかりました。

工学部 Tさん

今回のフィールドワークでは創作太鼓や伝承野菜栽培の学習はもちろんのこと地域の方々の温かさにも触れることができ多くのことを学ぶことができました。戸沢村で活動している角川太鼓は約30名で、年齢層も幅広いです。その地域で伝承されている創作太鼓は、少子高齢化により伝承することが難しく、また太鼓には楽譜がないためより困難になってきています。そこで、私たちが今回取り組んだフィールドワークのような活動により若い世代に知ってもらい、その後文化祭などの行事でもっと多くの人に知ってもらえると考えました。実際に太鼓を演奏させていただき、このような素晴らしい伝統はその地域だけの課題ではなく多くの人たちが考えなければならない課題であると思いました。戸沢村には最上かぶ、エゴマ、からとりいもなど多くの伝承野菜があります。そこで私は実際に定植させていただいたエゴマについて詳しく学習しました。エゴマはシソ科の植物で5月下旬から6月上旬に種を蒔き10月中旬に収穫します。利用方法としては、実を焙煎し、機械で絞り油を取ります。焙煎した実を菓子やすりつぶしてパウダー状にして利用することができます。

エゴマを加工した商品はえごま油、エゴマかりんとう、などたくさんあります。しかし、戸沢村の地域では生産に対して販売力が間に合っておらず生産することが難しい現状を抱えています。少子高齢化の進んでいる地域では生産者の減少に加えて販売力の低下が進んでいるのでより改善が難しくなっています。そこで、私は戸沢村では韓国と友好都市を結んでいることを生かして韓国で販売すると良いのではないかと思います。始めの事前学習ではインターネットを用いて戸沢村について調べましたが、実際に足を運んで見なければわからないことがたくさんあり少子高齢化はもちろんのこと伝承が途絶えないような取り組みをしていかなければならないことが一番の課題であると思いました。そのためには、そこに住んでいる人々だけではなく外部からきた人たちが戸沢村で学んだことを発信していき、今回のフィールドワークが一度だけではなく今後も繋がりを持ったまま将来に生かしていきたいと考えました。フィールドワークだけではなく今後の活動にも積極的に参加して山形でしか味わえないことに足を踏み入れてみたいと思いました。

工学部 Oさん

私は一回目の活動を都合が悪く、二回目のみの参加になりました。戸沢村に訪れるのは人生で初めてだったので、たどり着く前までは緊張がありましたが、いざたどり着いてからは現地の方々がとても気さくに話してくださり、子供たちもとても元気で自然と緊張はなくなっていました。

戸沢村で活動している角川太鼓は、子供から大人まで幅広い年齢層で構成されています。実際に曲のレクチャーを受け、太鼓を叩かせていただきました。角川の創作太鼓はいままで伝承されてきましたが、近年は少子高齢化の影響で伝承する世代が少なくなり、後世に伝えるのが難しくなっているそうです。私は、高校を卒業するまで地元の栃木県益子町の和太鼓団体に所属していました。その団体では、その団体では、地元の祭りなどで演奏するほかにも、他の町や市でも演奏を行い多くの人に知ってもらおうと活動をしていました。若い世代に創作太鼓を伝えてくためには、まず、多くの人に演奏を聞いてもらい、角川太鼓の魅力を知ってもらうのが大切だと思います。こんなにも迫力があり、胸に打ち付けるような演奏を知ってもらわないともったいないです。私はこのフィールドワークを通して知ることができてよかったです。

次に、角川地区の伝承野菜である「エゴマ」についてです。「エゴマ」はシソ科の植物だといわれたとき、「ゴマじゃないの!？」と少し戸惑いましたが、においを嗅がしてもらおうとかすかにそれらしいにおいがしました。二日目の午前中は、エゴマ油の製造工場を見学させていただいたり、実際に売られているエゴマ商品を見させていただいたりしました。実食としてエゴマアイス、エゴマかりんとう、エゴマドレッシングをいただきました。どれもエゴマの風味を強く感じながら、癖が強くも食べやすく、とてもおいしかったです。午後はエゴマ苗の定植をさせていただきました。農機をつかって畑を耕したり、エゴマの苗を一つ一つ植えたりと、どの作業もとても体力をつかうものばかりでした。エゴマ油は製造過程でコーヒーフィルターを使っているという話を聞いてとても驚きました。製造過程をもっと改善して、整えていけば今の値段よりも安く、あまり酸化させることもなくなると思いました。

工学部 Oさん

今回の集中講義で初めて最上地域に入らせていただきましたが、とても自然豊かで人の温かみを感じるとてもいい場所でした。自分がお世話になったのは角川という地域で、山に囲まれ、畑仕事で盛んなところでした。今回2度訪問させていただき、計4日間の滞在となりましたが、角川地域では人口減少の問題が深刻でした。まず、近くに高校、大学などがいないため若者が成長するにあたって村から出て行ってしまい、その後村には戻ってこないものが多いため、村の高齢化が進み人口が減少してい

くといったことでした。村ではこの問題を解決するために多くの地域おこしを行っていました。その代表的なものとして、祭りと太鼓がありました。角川地域には角川太鼓という太鼓を昔から生産していて、その太鼓を使って地域で太鼓のグループを作っていました。その中には小学生、中学生、高校生といった幅広い年齢層の子供たちが所属していて、とても若い力を感じることが出来ました。今回そのグループに入らせていただき実際に太鼓の演奏をさせていただきましたが、とても素人がまともに演奏できるような簡単なものではなく、周りとの息を合わせることがとても重要になってくる難しいものでした。最終的には自分たちも少しばかり形にすることが出来たと思います。夏には廃坑のグラウンドを使い祭りを行っているということでその場で太鼓の演奏を披露するといったことでした。また近くには浄の滝という観光スポットもあり冬から春にかけては雪と滝のコントラストがとても美しい景色を生み出していて、夏から秋にかけては雪が解け壮大な滝の全貌を見ることが出来るとても素晴らしい場所でした。また、地域では伝承野菜があり特にえごまに力を入れていました。えごまの生産工場に行かせていただきましたが、実際にえごまを生産するための機械が日本にはあまりなく基本的に韓国製の機械を使って生産していました。事前学習で学んだように戸沢村は韓国との交流が根強く道の駅では韓国色に染まっているものを目の当たりにしました。自分が想像していた道の駅とは地域の特色が出て、地域の人での交流が盛んな場所といった印象だったために、少し驚きました。

今回戸沢村に訪問させていただき、人口減少が地域にどのような影響を及ぼすのか分かったような気がします。そしてその問題がとても深刻でその解決に多くの人が努力をしているのがわかりました。あとは自分たちなりの解決策を発表会に向けて講じていきたいと思います。



工学部 Wさん

今回、フィールドワークで戸沢村に行きました。戸沢

村では、廃校になった学校を有効に活用していて、まずそのことにとっても驚きました。廃校と聞いていたのでロボロボの木造の校舎を想像していたのですが、実際に訪れてみるとそこにあったのは自分が普通っていた小学校とよく似た造りの校舎で、イメージしていた廃校とは全く違って、過疎化のせいで廃校になったと聞いて過疎化についての実感がわきました。

私達はフィールドワークの1日目と3日目にそこで太鼓を教えていただき、無事に1曲を叩けるようになりました。太鼓は音楽というよりスポーツの様な感じで、終わった後は毎回腕が思うように動かず大変な思いをしました。太鼓を教えてくれたのは、大人の方達もいましたが主に子供たちで、小学生や中学生の子供たちから複雑な曲を教わるうちに、仲良くなることができ、普段あまり子供と話すことがないので貴重な体験ができました。1日目が終わると、私達は民泊に泊まらせていただきました。美味しい蕎麦を出していただき、とても満足でした。

フィールドワーク2日目、私たちは浄の滝という滝を見るために長くつに履き替えて絶景の滝を見ました。また、4日目はえごまという野菜の説明を聞き、えごまの加工工場も見せていただきました。えごまのアイスクリームやかりんとうをご馳走になった時は、予想していたのと違った味に驚き、えごまが美味しいと思えるようになりました。その後、えごまの苗を畑に植える作業を体験し、体験用に簡略化された作業なのにとっても大変で、仕事としてこの作業よりもさらに難しいことをしている人たちはとてもすごいと実感しました。

戸沢村はとても良いところで、また行きたい、他にもいろいろな人が来るべきだと思いましたが、課題もいくつか見つけました。まず、伝承野菜のえごまがあまり知られておらず、韓国などのもっと有名なえごまに負けてしまっているという点です。資金の面で大量生産が難しいのかもしれませんが、とにかくなにかしらの宣伝を行なって知ってもらうことが大切だと思いました。また、浄の滝などのすばらしい絶景があるのに、駅から遠いせいで初めてくる人たちは来ることを躊躇してしまうと感じました。浄の滝に来てもらえれば道の駅などにも寄ってもらうことができ、そこから戸沢村のえごまの知名度も上がると思います。

今回のフィールドワークで、過疎化などの問題を、文章だけでなく実感として感じる事ができました。難しい問題ですが、とても良いところのある戸沢村を応援したいし、その手伝いの一環として発表に力を入れたいと思います。

工学部 Oさん

私はこのプログラムを通してこの戸沢村の人たちがこの村をより良いものにしようと努力していることが感じられた。私が出会った人は戸沢村の住人のほんの一

部だが、みんなで協力して努力していた。例えば、これまで作っていた野菜とは別な新しい野菜を作っていたり、summer partyのようなイベントで帰省のきっかけを作っていたりなどだ。このように住人一丸となって努力や行動できる環境は大変うらやましく思う。しかし私が一番強く感じとったのは地域愛の強さだ。私は小中学生の時に何度か転校、引っ越しをしていて、今戸籍がある土地のいいところを上げると言われてもすぐには出てこないだろう。だからかこの村の人たちの地域愛に憧れる。ほんの数日泊まっただけでもほんとに良いところなのだなおもった。

次に戸沢村の課題について自分なりに考えてみた。フィールドワークの体験を通してなので、一部の課題しか見ていないのだが、まず挙げられるのが、えごまの生産体制についてだ。大量に生産しても加工が間に合わず、販売にも手が回らないと言っていた。人手を増やせばいいと言ってしまったらすぐ解決するのだが、これはかなり難しいといえる。この課題についてはこれから解決策を考えていきたい。次に挙げられるのは、角川太鼓についてだ。この角川太鼓は発足から約20年で、廃校となった小中学校の校舎を利用して活動している。私個人の見解だが太鼓というものは「伝統」の色が強いものと思う。この先伝統として継承され続けるであろうこの太鼓曲には見たところ楽譜は存在しない。だから後の世代に残すためには実際に演奏して教えるしか手段がない。そこで楽譜を製作するというのが私の考える最善の解決手段だ。ここに挙げたものは、私が体験プログラムを通してかなり大きな課題と思ったものだ。しかしほかにも課題がたくさんあるだろう。この課題を一つ一つ解決していくことでこの地域がより良いものとなるだろう。



工学部 Kさん

私は今回初めて太鼓を叩いた。見た感じ簡単に見える太鼓だが、実際に叩いてみると撥が重いので自分の叩きたいタイミングで叩くことはとても難しかった。しかし、角川太鼓の皆さんがとても丁寧かつ分かりやすく教えてくださったので、最後の太鼓の発表の時にはうまく叩

くことができた。また、一回目の二日目のヒメサユリ見学会では長い時間山を登ったので、とても体力的に疲れたが戸沢村の自然を体で感じることもできた上に絶滅危惧種に指定されているヒメサユリも見ることができ、とても貴重な体験をすることができた。二回目の二日目にはエゴマの加工工場やエゴマの定植体験のほかにエゴマを使った商品を実際に食べることもできた。エゴマはとても独特な匂いと味が特徴的で、エゴマの実からとったエゴマ油は認知症やアルツハイマー病の予防に効果的であることを知り、戸沢村はエゴマをもっと売り出していけば村的にも発展していくのではないかと思った。

戸沢村の課題としては商品の需要と供給が足りていないことがあげられる。エゴマ油が世界的にブームになった時も生産が追い付かずブームに乗ることができなかった。また、生産のほうは追い付いてきても、その商品を買いたいお客さんはもういない。また、戸沢村のエゴマ油の生産方法は焙煎式であり加熱すると参加が進んでしまうエゴマ油にとってはとてもマイナスな部分である。資金が足りていない戸沢村では例えばエゴマ油に資金を調達してしまうとほかの農産物を生産している農家からクレームを受けてしまうということも懸念される。また、戸沢村まで最寄り駅から徒歩二時間なので、観光客も足を運びにくい傾向にある。人口が1000人ほどしかいないので何かをやろうとしても人手が足りない。また角川太鼓の音楽の楽譜がないため、伝承していくのも厳しい状態である。そのうえ、戸沢村の道路がデコボコで狭く、坂道がとても多いため、生活しづらく移住する人が少ない傾向にある。

工学部 Tさん

私は、今回の二回にわたるフィールドワークを通して、最上地域の魅力にたくさん触れることができました。

私達の班は、最上地域の中にある戸沢村というところに実際に行き、その地域の良さ・その地域が抱えている問題点などを活動を通すことによってじかに感じることができました。たくさん活動を行ったのですが、今回はその中でも私達の班のテーマである創作太鼓と伝承野菜栽培について紹介したいと思います。

まず創作太鼓からです。私たちが訪れた戸沢村の角川地域というところでは、角川太鼓という伝統の太鼓があります。私も小学校のときにこのような伝統で太鼓をやっていたので、とても楽しみにしていました。しかし実際にやってみると、リズム感を忘れていたのもあり、とても覚えるのが大変でした。二回目には発表会も控えていたので必死に練習して、なんとか良い発表をすることができました。とてもいい伝統だなと肌で感じたのですが、この角川太鼓は、継承が難しいという問題点を抱えていました。それに対して私たちは、実際に自分たちが演奏した曲を楽譜にするという解決策を作ること

功しました。

次に伝承野菜栽培です。角川地域には、たくさんの伝承野菜があり、私たちはその中で特に育てられているエゴマとからとり芋の定植を行いました。畑を耕すところからやらせていただき、暑さともたかいかいながら、農家の人の大変さや努力をじかに感じることができました。しかし、若者が少ないことによる農家の人口の少なさや資金不足などもあり、思うように農業が行えていないように感じました。そこで私たちは、地元の人たちにごすればたくさん売れるようになるのではという提案をたくさん行いました。

今回の二回の活動を通して、戸沢村の良さ・問題点だけでなく、トレッキングや民泊を行う中での戸沢村の方々の温かさにもたくさん触れることができました。今回の経験はこれからの生活で絶対に役に立つので、無駄にせずしっかりと還元できるようにしたいと思いました。

農学部 Aさん

戸沢村では、主に2つのことを活動しました。一つ目は角川太鼓の練習・発表です。角川太鼓のメンバーは約30名で、小学生から子供がいる大人の方まで幅広い年齢層で活動を行っています。角川太鼓には楽譜がないため、曲はすべて覚えているそうです。太鼓には締太鼓、宮太鼓、大太鼓と種類があり、私は締太鼓を担当しました。締太鼓はほかの太鼓に比べると小さい太鼓でしたが、演奏中のリズムを左右する重要な役割を持つ楽器でした。一回目のフィールドワークでは、他の太鼓の音や掛け声を聞く余裕がなく、全体に合わせて演奏することが出来ませんでした。二回目のフィールドワークでは、一回目よりも周りの音を聞くこと余裕ができ、掛け声などを強く叩けばよいのかなど意識しながら練習することが出来ました。最後に行った発表会では、山大生だけで全て通して演奏することが出来ました。二日間という短い期間でしたが、角川太鼓のメンバーの方との交流を通して、角川太鼓をもっと広めていきたいと思いました。今はありませんが、角川太鼓の楽譜があればさらに広めることが出来ると思います。楽譜の作成、また私たちが今回の経験を生かして角川太鼓の演奏を行っていくことで戸沢村の角川太鼓を多くの人に知ってもらいたいです。

二つ目は伝承野菜の学習・定植です。戸沢村ではえごまやからとり芋といった伝承野菜の栽培が行われています。えごまは、食べると十年長く生きるかもしれないことから「じゅうねん」と呼ばれている野菜です。このえごまを使用して、えごま油、えごまかりんとう、えごまアイス、えごまドレッシングなどの商品が販売されています。これらの商品は戸沢村の手作りもありますが、他県で加工され販売されているものもあります。また、通販では売られていなかったりするものもあります。戸

沢村には、このえごまを油にして健康に生きよう、ということから始まったえごま加工場があります。しかし、手作業で行っている過程などにより需要に供給が追いついていないのが現状です。また、えごまの生搾りの機械を導入したいのですが、生搾りの機械では今よりも生産の効率が落ちてしまい、商品の価格がさらに高くなってしまおうという問題点があります。えごまを広めていくためには、生産の効率を落とさない機械の開発や導入、販売するルートの拡大が必要だと思いました。

第二部 授業記録

○後期「フィールドラーニング-共生の森もがみ」プログラム

1. 七所明神伝説と地域活動のあり方を探る 150
3. 新庄市の市報を創ってみよう！！ 156
4. 山里の秋を体感しよう 162
5. 森と人との共存を考えるⅡ～山間地の文化を探り地域振興へ～ 169
6. 最上町の人・自然・文化に触れよう② 175
8. 子どもの自然体験活動支援講座2 180
9. 里山保全とキノコ料理 187

七所明神伝説と地域活動のあり方を探る 活 動 状 況

○実施市町村：新庄市

○講 師：七所明神の環境を良くする会 代表 叶内克和

○訪 問 日：平成30年10月27日(土)～28日(日)、平成31年1月12日(土)～13日(日)

○受 講 者：人文社会科学部6名、地域教育文化学部1名、医学部1名 以上8名

○スケジュール：

1 回 目	2 回 目
【1日目】10月27日(土)	【1日目】1月12日(土)
08:00 山形大学発	08:00 山形大学発
09:35 セブンイレブン新庄新町店着	09:30 セブンイレブン新庄新町店着
09:50 お宮着(宮内) 開講式 オリエンテーション	09:40 お宮着 オリエンテーション
10:00 説明 「七所神社の環境を良くする会」の活動	10:00 御祭燈祭の準備
11:00 講話 「七所明神の由来」について	12:00 昼食
12:00 昼食(同一の場所で食事)	13:00 御祭燈祭の準備
13:00 巡検 「七所明神巡り」	15:00 地域住民、子ども達との交流
16:30 お宮到着	16:00 もちつき体験
17:00 夕食 懇親会 BBQ	17:00 御祭燈点火 御祭燈祭 夕食 (御祭燈に願いを託す催し)
19:00 宿泊先へ	19:30 御祭燈祭終了 宿泊先へ
【2日目】10月28日(日)	【2日目】1月12日(日)
09:00 お宮着 萱刈り作業(御祭燈用)	09:00 お宮着 御祭燈の後片付け
10:15 昼食準備 芋煮準備 作ってみよう	10:00 伝統工芸(はけご=小物入れ)製作体験
12:30 昼食 後片付け	11:00 昼食準備 炊飯作業 作ってみよう
14:00 絵馬製作	12:00 昼食
15:20 次回活動の説明 及び御祭燈祭のブースについて企画立案	13:00 伝統工芸(はけご)製作体験
16:20 お宮発	15:00 活動に参加しての感想と提言
16:30 セブンイレブン新庄新町店発	16:20 お宮発
18:00 山形大学着	16:30 セブンイレブン新庄新町店発
	18:00 山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Kさん

私がこのプログラムに参加した動機は、地域活動のあり方に興味を持ったからだ。また、地域のつながりや活性化のプロセスを考えて、自分の知識や経験として保持することも目的としてあった。今回の4日間の活動の中で多くの発見があったように思う。1回目の活動では、主に七所明神伝説の概要と萱刈りについて知ることができた。2回目の活動では、御祭燈の準備や片づけを地域の方々で行った。前回の活動を踏まえ、自分たちが七所明神に何ができるのか考えたうえで行動を起こすことができたのではないと思う。今回の活動において、七所明神の存続に向け何をすべきかが課題となった。最初は七所明神に来る観光客が増加すれば存続していけるという考えから、外部の方はどう七所明神をアピールするかを考えていた。しかし、実際に必要とされることは、地域の方々が互いに協力し合い七所明神を維持していくことであった。よって、地元であっても七所明神を知らない方や将来後継者になり得る若い世代を地域活動に取り込むことが課題の解決につながると考えた。これに関しては、すでに小学校に対して七所明神の広報活動がなされており、総合的学習の題材として利用されている。私たちの班では、この広報活動の範囲を子供だけでなくその親の世代に広げることを提案した。若い親世代は神社を交流の場として認知する機会があまりないため、現在七所明神を支えている世代ほど維持に対する関心がないと考えられる。そこで、若い親世代が子供と一緒に七所明神のお祭りなどのイベントに訪れるよう促し、それによって楽しい思い出を作ることができれば、七所明神を支えていく人材が得られるのではないかと考えた。この案が上手く機能した場合、若い親世代が現在活動している世代を手伝うことで負担が軽減され、後世まで七所明神を存続できる可能性が大きい。しかし、すぐに人手が集まるわけではないだろう。よって私たちは大学への広報活動を行うことも提案する。このもがみのフィールドワークでは、微力ながら私たちも七所明神の存続の手助けに貢献したと思っている。少しでも七所明神の抱える課題に関心を抱く参加者を見込めることができれば、人手の確保と地域の方と大学生の交流で地域の活性化が期待できるだろう。以上の案がこのフィールドワークで考えた現状の改善案である。結果として、課題がすぐに解決するような提案をすることは困難であった。しかし、明確に提案できなくとも話し合いを重ねたことで、目的によって地域活動にも様々な形があることを知った。また、地域の方の話を直接聞いて自分で考える活動が新鮮でとても有意義であった。



人文社会科学部 Tさん

私がこのプログラムに参加した理由は、七所明神の伝説に興味があったからだ。新庄市への一回目の訪問1日目では、宮内神社へ行った。七所明神社は7つの場所へと散らばっていて、その一つ一つに体の部位が祀られていることを知った。そして、その祀られているものが頭、右足、左足、胴、右手、左手、男根であることも知った。また、その由来を知った。とても興味深く、面白い伝説であると感じた。そして、今いる宮内神社が7つに分かれている神社のうちの一つであり、頭を祀っているところであるということに気付いた。また、午後からは、その七所明神を実際に回ることとなった。実際に見ると神社独特の厳かな雰囲気を感じることができた。2日目には、絵馬製作を行った。絵馬を描いたことはなかったので貴重な体験となった。最後に、七所明神の方々から彼らが我々に期待していることを教えていただいた。それは、大きく分けて地域を活性化させたいということと七所明神社の後継者を獲得したいということの2つであった。1回目の活動を終えて、七所明神の魅力にとりつかれ、こんなにも魅力的な場所、歴史が途絶えてしまうのはとても悲しいと感じた。よって、彼らの期待に応えることを決意した。そのためにはまず七所明神を訪れる人を増やすこと、ターゲットを確定することが大切であると感じた。新庄市への2回目の訪問の1日目は御祭燈祭の準備と手伝い、片付けであった。ここで、ターゲットを確定させるため、来る客に注目していたが、御祭燈祭にくる客は、地域の住民が多く、また子供連れで来る親が目立つと感じた。2日目は、はげごの製作体験をした。1回目の活動を終え、課題の解決案として、退職した高齢者をターゲットとする案、子供をターゲットとする案など、様々な案が出たが、最終的に幼い子供の母親をターゲットとする案に決定した。この案のメリットとしては、子供も母親もどちらも獲得できるという点、母親はすぐ後の後継者となれるので七所明神社の方々に安心を提供できる点、子供はかなり先の後継者となれるため、神社の長い存続が考えられるという点がある。そのためには具体的にはイベント告知などのポスターに親子で遊びに来ること、子供の遊び場になることを強

調し、広報活動を行う範囲を親まで拡大すること、また、我々が来年のものがみ共生の森の説明会で実際に説明しに行くことを実行しようとする。このプログラムでは様々なことを学んだ。明確な答えが存在しない課題に直面したことは、自分にとって初めての体験だったため、大いに悩み、大学生として少しばかり成長したと感じた。このような答えのない課題にはこれから多く直面すると思われるため、そこでここでの経験を生かしていきたいと思った。

人文社会科学部 Sさん

今回私はこのプログラムに参加して、地域活動を続ける難しさを知った。

一回目の活動では、七所明神について講師の三浦さんから話を聞き、またバスでそれぞれの神社に実際に行って歴史や地域の伝統を知ることができた。七所明神は大山守命という皇子の分けられた体を祀っており、神社にお参りするとその部位の病を治すと伝えられている。そのためお参りした人はお礼にその部位に関係するもの、例えば手であれば手袋、足であれば靴下などを納めるという話がとても興味深かった。

二日目は御祭燈用の萱刈りの活動を行った。地域の方が萱を刈って、それを束ねて運ぶ、という単純作業だが予想以上に大変で、終わったころには腕と腰が痛くなった。

一回目の話合いで、私たちは知名度が低いためそこを改善すれば良いのでは、という意見で一致していたが、先生からの助言と萱刈りの活動で、問題点がそこだけでは無く解決策がそれではだめだということに気づかされた。地域活動を続けていくためには、そこに集まる人とそれを知る人を増やすことが必要だ。この時ではあまり具体的な解決策を思いつくことはできず、先送りとなった。

二回目の活動では、一回目に刈った萱を使って御祭燈の準備、運営をメインに活動し、私は御祭燈の点火も体験させていただいた。御祭燈に作った山形大学コーナーには、地域の方々と小学生たちが来てくれて玉こんや甘酒をふるまったのだが、次々と人が来るため慌ててしまってスムーズに動くことができなかったのが悔しかった。

活動を通して一番思ったのが、七所明神を無くしたくないということだ。私たちを迎えてくれた地域の方々は、「昔七所明神で遊んでいたから」この活動をしていると話してくれた。私にも地元になんな場所がある。それに、七所明神に伝わる伝説や伝統は私たち若者にとっても魅力的だ。

最初の「観光客を呼ぶ」という考えと地域の人の「地域の人を呼びたい」という考えの食い違い、今後の維持管理など様々な課題があり、案を出しても現実味が無く、その後グループで「広報活動を拡大する」という形でま

とまったが、やはりそれも確実に効果があるとは言い切れないと思う。改めて、地域活動を続けていく難しさを強く感じた。

今回の活動を通して、地域活動に目を向けることができたのは良かったと思う。このように課題を抱えているのは新庄だけではなく、身近なところにも無くしたくない場所がある。私も、これからできることを実践していきたい。

人文社会科学部 Oさん

私がこのプログラムに参加した理由は、元から神社仏閣が好きだということ、その地域独自の伝統に興味を持って私の興味とこのプログラムがぴったりだったからだ。4日間の活動でたくさんのことを学ぶことができた。1回目の活動で七所明神についての伝統の講話を聞き、絵馬作りそして萱刈りなどを行った。2回目では、御祭燈の準備などを行った。2回目の活動の反省があり、それは思ったよりも御祭燈が忙しく事前の準備が不十分だったことでお客さんの地域の方々とあまり交流ができなかったことだ。他の活動は滞りなく、行うことができた。七所明神の存続を課題とし、その解決策を話し合うため、1、2回とも夜にミーティングを設けた。最初は、「活動報告会の発表に向けて話し合っていたが、徐々に「どうしたら今の状況がよくなるか、解決するか」「何の案が現実可能か」など議論が発展していった。そのおかげで全く、活動報告会の発表の話し合いはあまり進まなかったが、「やらされている活動」ではなく、「自発的に活動」しているのが感じられとても嬉しかった。2回目のミーティングでは市役所の方が夜遅くまで付き合ってくれ、有意義な議論ができた。だが、今までの私たちの考えが未熟かつ単純だったことが思い知らされ、落ち込んだ。そしてそれから何時間も、次の日も休みの日も集まり、話し合いを行った。そして私たちは、去年の先輩たちの活動に目をつけた。去年の先輩たちは、「小学校に広報部を製作する」という案を提案した。実際、製作には至らなかったが総合的な活動の時間で取り上げられたり、子ども会のお母さんが七所明神ツアーに参加するなど兆しが見えてきたことを知った。そして私たちは子どもだけでなく、子育て世代の親にも広報活動の拡大を提案することにした。神社の維持活動を行っている人たちに比べ、若い親世代は「神社を遊ぶ場所」「思い出のある場所、残したい場所」として認識していないため維持活動に関心がないのではないかと思った私たちは、親たちが気軽に子どもと一緒にイベントに参加することを促し、思い出を作ってもらおうと考えた。私たちができることとして、このフィールドワークがより活発になるよう実際に参加した私たちが後輩の説明会で自分たちが経験したこと感じたことなど魅力を伝えることを提案した。大学側にも相談して実行出来たら、と思う。2回の活動を通し、苦しいこともあったがとても

楽しい活動ができた。受け入れてくれた地域の方々、交流してくれた地域の方々、市役所の方、そして先生に感謝したい



人文社会科学部 Mさん

私達は新庄市の七所明神伝説のプログラムを受講した。七所明神とは体の7つの部位を新庄市の7か所の神社に散りばめたものであり、それぞれの部位にはご利益があるというものだ。その七所明神社のひとつ、宮内神社を拠点に活動している「七所明神の環境を良くする会」の皆さんに今回、私達はお世話になった。そこで非常に有意義で楽しい活動をさせてもらい、また同時に自分が大学に入って初めて現実的な課題に直面した。

フィールドラーニング1回目は七所明神についての講話、会の皆さんの活動を踏まえて七所明神社巡りをした。それぞれの神社は歴史があり、それを感じさせた。そして活動2回目の御祭燈祭に向けて、萱刈をした。地域の方々の素早い作業には驚かされた。2回目はいよいよ御祭燈祭本番。地域の方々と餅や甘酒、玉こんにゃくをお客さんに振る舞った。活動最終日には新庄の冬には欠かせない納豆汁を作り、いただいた。私達はそれぞれの活動日初日の夜にミーティングを行った。2回目のミーティングでは市役所職員でこのプログラムを支援していただいた方のお話も聞かせてもらった。どちらのミーティングでも現在の課題の大きさや、自分たちの考えの至らないことを思い知らされた。

自分には模範解答のない課題を、意見を出し合い深く考えたのは初めてのことであった。ミーティングを経てただ楽しんでいた活動を見直し、地域の方々や御祭燈祭のお客さんたちに積極的にお話を聞きに行き、積極的に課題に向けて行動するようになった。そうして初めて見えてくるものも多かった。例えば自分の中での考えが外に発信していくような傾向があったが、地域の方々の望みとは本質的に異なっていること、また会の方々の行動によって少しだが展望が見えてきたことなど。

そしてフィールドラーニング終了後も集まって意見を出し合い、自分たちの考えを必死にまとめた。

ミーティングや多くの方と話して考えるというように深く考えることが多いプログラムだった。自分はミーティングの時、現状の課題を目の当たりにして、それに対して無力であることにただただ悔しかった。変な話、そこに成長の幅があることに嬉しさを感じ複雑だった。加えて改めてコミュニケーションの重要性にも気づかせてくれた。このプログラムを履修して良かったと心から思った。

地域教育文化学部 Kさん

1回目のフィールドラーニングにおいて。10月27日、1日目の活動で、七所神社の由来と歴史、神社参拝の作法「二礼二拍手一礼」を勉強しました。七所明神の伝説を聞きながら、神社にお参りをする。様々な様式の絵馬、神社の木造建築と彫刻……自然に詰め込んで。七所明神とは

この七所明神には、応仁天皇時代の、天皇の第二皇子・大山守命にまつわる伝説があります。

いわゆる、大山守命の遺骸が、この7カ所に奉祀されているという伝説です。

宮内には首、升形には胴、鳥越には左手、角沢には右手、本合海には男根、京塚には左足、松坂には右足が奉祀されているということです。

埋められた部位ごとに御利益のある病気の種類も異なるとされる。

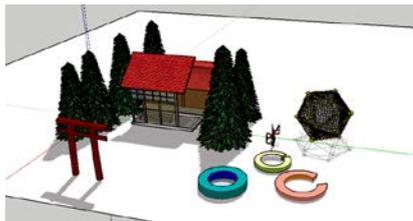
10月29日、2日目の活動で、第二回の御祭燈のため、午前、萱刈り作業を行われた。ステップ1、萱を刈り。ステップ2、刈ったものを束ねる。ステップ3、トラックに積む。体力が必要な作業である。若者たちが必要だと思います。午後の活動は絵馬製作。絵馬製作活動は母親たちと自分の子供たちと一緒に参加するのらいいなと思います。

第二回の活動は1月12日、13日で行われた。1日目の午前は、「御祭燈祭」会場の準備。第1回の活動で刈り取った萱を使って御祭燈を組み立てました。その後、玉コシ、甘酒、マシユマロの準備、餅つき体験、色々な装飾。みんなと役割分担して会場を準備した。

2日目はお祭りの後の片付け、郷土料理納豆汁の調理実習と「はげご」の制作。伝統工芸の制作体験は面白かった。

御祭燈祭の時、地域住民から「以前、会場の後ろに公園があります」と聞きました。私はもがみで考えたのは、「移動できるの神社公園」(図1)。活動をする時、神社周りの空間が狭い、休憩所が少ないだと思う。冬の御祭燈祭で御祭燈を燃やせる場所は神社後ろの空き地であるから、この「移動できるの公園」を設計した。

この設計のポイントは「可移動」、「座るところが増やして欲しい」と「子供の遊びところ」である。御祭燈の日だけでなく、普段の日にも人を集まりたい。



移動できる神社公園予想図 図1

グループメンバーと一緒にポスターを設計して、作りました。みんなと一緒に御祭灯のポスター(図2)を完成して、問題の解決方法を探ることが私に対して貴重な体験である。



図2

言語の力はすごいなって思います。日本語が分からなかつたら今回の活動参加できないし、優しい地元講師、地域住民、素敵なグループメンバーと会ってないし。いろんな景色、風景を拝見しました。日本に来てよかった、最上に来てよかった。一生忘れられない思い出を「七所明神伝説と地域活動のあり方を探る」のメンバーと一緒に作りました。最高の4日間でした。

参考文献：

<http://www3.ic-net.or.jp/~nya-ju/town/sitisyomi/sitisyomi.html> (2019年1月19日閲覧)

地域教育文化学部 Eさん

私は新庄市の七所明神伝説と地域活動あり方を探るというプログラムに参加した。七所明神とは大山守皇子の体を7つの部位に分けて、新庄市宮内を中心に島越、升形、合海、角沢、鮭川京塚、戸沢村松板の七ヶ所に祀られていることだ。外国人にとって、日本の神社文化に興味を持っているので、このプログラムに参加することをきっかけに自分の願いも叶えた。

新庄市への一回目において、私たちはまず、7つの神社を訪問した。その時に神社の参拝方法を学んだだけではなく、7つの神社の後ろの神様についてのことも分かった。次に、私たちはこの地域に住む人と御祭灯の萱刈りを協力して作業したり、芋煮を作ったり、絵馬をデザインしたりするなどが面白かった。皆は厳肅な気持ちを

持って、一緒に七所明神を体験した。これは神様に最も近いの一度と思う。二回目には、みんなが主に御祭灯を準備した。男生の一人として昼がかまくらを作っていて、とても疲れたが、自分の完成したくまくらを見ると気持ちが軽くなった。それはいい経験だと思う。また夜に御祭灯祭のお客様と交流するも楽しかった。二回目の中にかまくらを作ることとははげご制作体験は最も面白かったと思う。また、御祭灯点火の時に皆は自分の願いが火花と一緒に空に飛び込んで、神様に伝えるような感じの全く忘れられないと思う。

課題について、みんなはミーティングを行ったことがあるが、自分の課題についてのを話させていただく。私は新庄市にいた時、七所明神を守っている人の中に老人が多く、少子老年化は明らかだ。御祭灯祭に来たお客様も近くのところに住んでいる人。そして、七所明神の物語を宣伝するのが必要だ。現在の時代において、インターネットの作用は無視できないと思う。

七所明神についての情報はインターネットでもあるが、七所明神についてのことを記すだけのものが少しかたいと思う。七所明神の固定な情報の以外は七所明神を守って、努力して宣伝している人達の物語がより面白いと思う。地元の人が少ないが、地元の人と山形大学の学生が毎年七所明神を守るために努力しているのをインターネットで発表すれば、多くの同じ目的をもっている人、特に七所明神に興味をもっている若者に引き付けることができる。そして、七所明神がもっと守り続けていくことができると思う。

医学部 Yさん

フィールドワークの感想

・降雪について

雪国出身ではないため、大量の積雪を前提とした生活を見て新鮮に思った。積雪・雪対策・雪捨て場の仕組みなど、今まで見たことのないものばかりだった。実際に暮らすうえでは降雪は大問題であるが、雪国に暮らす人々はしっかりとそれに対応する生活を構築しているのだということを見ることができた。豪雪地帯ではない人にとっては、最上地域の降雪は非日常として楽しみの一つであり、豪雪地帯であるということは魅力とも見ることができると改めて感じた。

七所明神の環境を良くする会の方々の熱意を感じた。

・御祭灯当日の準備と実行について

神社活動に客としてではなく実行側として参加することは滅多にできないため、貴重な機会だった。自分たちが作った御祭灯が神事の一部として役割を果たしていることに不思議な気持ちと充実感を感じた。

・実際の問題の解決を考える困難さを思い知った

現実の問題には原因が複数あり、その中には少子化など解決が非常に困難な要素が含まれる。そのため、特効薬のような解決策を考えることは非常に困難であるこ

とが分かった。また、ターゲットを絞るなどのマーケティング手法が問題解決の糸口として有効であることが分かり、そういった手段を勉強することでより有効な解決を考えることができるのではないかと感じた。

地域の課題

・もともと神社に関りがある人以外は、最初に神社活動に参加するハードルが高いと感じた。

→どんなことでも、初めて参加する際には人に誘ってもらって行くことが多いと思う。一定の集客が得られたら、口コミで誘いあう輪ができるとさらに広めていくことができると思う。

自分の課題

・指示待ちが多かった

→手が空いているときには、課題にないことでも手伝えることがないか聞く。

・目の前の作業に集中しがちで、調査をする方向まで意識が回らないが多かった

→フィールドワークは作業をこなすだけでなく、作業を通して地域の方から学ぶ場であることを忘れない。

新庄市の市報を創ってみよう！！

活動状況

○実施市町村：新庄市

○講師：新庄市総合政策課広報・総合情報室

○訪問日：平成30年11月3日(土)～4日(日)、12月8日(土)～9日(日)

○受講者：人文社会科学部7名、地域教育文化学部2名、農学部1名

以上10名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p>【1日目】11月3日(土)</p> <p>08:00 山形大学発</p> <p>09:35 新庄市役所着</p> <p>09:45 オリエンテーション ・講師紹介、プログラム説明 ・自己紹介</p> <p>10:15 市報についての講義 ・市報の役割</p> <p>11:45 移動(マイクロバス)</p> <p>12:00 昼食(新庄市内ラーメン屋)</p> <p>13:00 移動(マイクロバス)</p> <p>13:15 印刷現場見学(共栄印刷さん)</p> <p>15:00 移動(マイクロバス)</p> <p>15:15 市報の企画立案 ・企画のコアメッセージの決定</p> <p>16:30 振り返り</p> <p>17:00 宿泊先へ</p>	<p>【1日目】12月8日(土)</p> <p>08:00 山形大学発</p> <p>09:35 新庄市役所着</p> <p>09:45 前回の振り返り&各班の進捗状況共有</p> <p>10:15 紙面構成</p> <p>11:15 取材(素材収集)</p> <p>15:00 素材確認</p> <p>15:15 市報の紙面作成 ・班ごとに紙面制作 ・適宜取材</p> <p>16:30 振り返り</p> <p>17:00 宿泊先へ</p>
<p>【2日目】11月4日(日)</p> <p>09:00 宿泊先出発</p> <p>09:30 市報の企画立案 ・企画立案 ・取材先選定(班分け)</p> <p>11:45 移動(マイクロバス)</p> <p>12:00 昼食(新庄市内ラーメン屋)</p> <p>13:00 移動(マイクロバス)</p> <p>13:00 市報の企画立案&取材交渉</p> <p>15:30 指導者との振り返り</p> <p>16:30 新庄市役所発</p> <p>18:00 山形駅着</p>	<p>【2日目】12月9日(日)</p> <p>09:00 宿泊先出発</p> <p>09:15 市報の紙面作成 ・班ごとに紙面制作 ・適宜取材 ~完成まで</p> <p>12:00 昼食(新庄市内ラーメン屋)</p> <p>13:00 市報の紙面作成 ・文字校正 ・最終チェック</p> <p>15:30 指導者との振り返り</p> <p>16:30 新庄市役所発</p> <p>18:00 山形大学着</p>

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Tさん

私が今回このプログラムを選択した理由は、地域の人が読む市報がどのように作られているのかを知り、自分でも作りたいと思ったからです。また、将来働きたい職業にこのプログラムの活動が最も近く、自分にこれから必要な力に気づくことができると考えたからです。

私は今回のフィールドワークを通して、二つのことを学ぶことができました。

一つ目は、市報づくりについてです。市役所の方々の話や自分で市報を作ったことで、多くの人が携わっていることがわかりました。一から内容やレイアウトを毎回考えている人の大変さを強く感じました。私は今まで市報のような一つのものを人と協力して作り上げることをしたことがなかったので、それぞれ伝えたいことが違う中、それをまとめることは非常に難しいことだとわかりました。しかし、作り上げた時の達成感は素晴らしいものでした。また、私はもともと意見を考えることが苦手ですが、班の人の考えをたくさん聞いたことで幅広い見方を学べたと思います。そして普段は当たり前ものとして読んでいた市報を、自分の力で作ったことで裏での苦労も考えて読むようになりました。

二つ目は、新庄市民のラーメンの身近さです。私はこのプログラムを受講するまで、山形県のラーメンが有名であることは知っていましたが、新庄市のラーメンについては知りませんでした。市報を作るにあたって新庄市の高校生やラーメン屋さん話を聞き、新庄市民にとってラーメンが身近なものであると感じました。高校生の話によると、ラーメンは幼いころから身近なもので、ラーメン屋さんにはいつまでも変わらないでいてほしいとのことでした。人によって好きなラーメン屋さんが違っていたので、選ぶことができるほどラーメン屋さんがあることはうらやましいと感じました。また、ラーメン屋さんの話によると、自身もラーメンを食べることが大好きで、お客さんに「おいしかった、また来る」といわれることが一番うれしいとのことでした。これを聞いて、今まで知らなかったラーメン屋さんの姿を見ることができたように感じました。そして、新庄市民はそれほどまでにラーメンを愛しているのだと感じることができました。しかし、新庄市民の方々はラーメンが身近なものの過ぎて、それがどれほど素晴らしいことなのかを分かっていないようでした。そのため、「新庄市のラーメンはすごい」と感じてもらうために新庄市外に住む私たちが市報で市民に伝えることの重要性を考えながら作りました。

このプログラムは、今の自分にとってとても良い経験となったと思います。この経験をこれからの大学生活や、

将来の社会生活に生かしていきたいです。ありがとうございました。



人文社会科学部 Oさん

今回のフィールドラーニングでは山形県新庄市に訪れ、全部で四日間の活動を通して市報を作成する難しさを実感しました。今回のプログラムは「新庄市の市報を作ってみよう」というテーマで、ラーメンについて特集記事を作るという活動課題がありました。そのため、新庄市のラーメンについて何も知らない私たちは、一泊二日の2回あった活動の中で二日目の朝食以外すべてラーメンを食べて情報を集めました。私は、まずここで一つの課題を見つけました。それは人に自分の考えを伝える難しさです。私たちは限られた時間の中でより多くの新庄市のラーメンの情報を集めるために、2、3人の班に分かれて様々なラーメン屋さんを訪れました。その後それぞれの班で食べたラーメンの感想を全体に発表し、共有する作業を行いました。その際に自分が食べたラーメンの味、食感、具材やお店の雰囲気、店内の様子などの情報を集めることが重要になりました。いままでは、なんとなくで「美味しい」と感じていたものを改めて細かく分析し、さらに他人に「そのラーメンはどう美味しいのか」を自分が持つ語彙力で伝えるということが難しかったです。

人に伝えることの難しさは、市報づくりの際も課題としてでました。班全体で発見した課題として、「新庄市民に新庄のラーメンの魅力再認識してもらいたい」という想いを市報に託すことも重要でした。そのため、ただの紙に印刷された決まった文字数の中で、新庄市のラーメンの本当の魅力を市民の方に伝えることが大変でした。また、数人で一つの意見を決め、一つの文章を作るのは、なかなか意見がまとまらず時間がかかりました。私たちの班は良い意見を提案してくれる人が多かったのですが、必ず全員の意見を取り入れるということは難しいことだったため、一つに絞るのに苦労しました。しかし、時間を掛けて市報のページが完成した時は達成感を感じました。市報を作るという実践的な活動を通して、自分で集めた情報や想いを、より良く相手に口頭と文字の両方で伝える能力を身につけることができました。

今回の活動で、普段では決してできないような体験をさせていただきました。それと同時に、初めて訪れた新庄市の魅力を体全体で感じることができました。ありがとうございました。

人文社会科学部 Kさん

私がこのプログラムを選択した理由は、市報づくりのような、文章で何かを伝える仕事に強い興味があったからです。特に市報は作文やレポートとは違い、本当に広い範囲の人に情報を伝えるものなので、その難しさを体験してみたいと思っていました。

初回のフィールドラーニングでは、広報誌の意義についての説明を受け、印刷所の見学等を通して「市報づくりとは何か」を学ばせていただきました。分かっていたことですが、市報には多くの人が関わっており、多くの苦労があるということ、肌で感じて再認識しました。それと同時に、自分たちで記事のターゲットと内容を決めるという作業も行いました。今まで文章を書くというと、自分だけで考えるが多かったように思います。ですが、今回は多くの人の意見を取り入れながら内容を考えるということで、単純なようでとても難しい作業でした。個人的に嬉しかったのは、高校までの困ったら多数決のような話し合いではなく、きちんと意見を聞いて、互いが納得して内容が決定されたことです。

2回目のフィールドラーニングでは、実際に前回決めた内容に沿って取材をしました。取材の中で実際に新庄市民の方やラーメン屋の方にインタビューをする機会があり、より地元の雰囲気に触れることが出来たように思います。そしてそうした地域への理解も、市報づくりにおいて多くの助けになってくれました。特に市報のテーマが「ラーメンと人のつながり」だったので、どうしても人へ目を向けなければならなかったのです。人というのは勿論新庄市民の方ですから、やっぱり新庄の温かい雰囲気や穏やかな人々のことを知らなければ、人に関する記事は書けません。そしてそのインタビューを元に、グループの皆さんと話し合いながら文章を作成したのですが、そこで私はある問題に直面しました。それは、実際に新庄で過ごした体験やインタビューなどの、生の情報を形にすることの難しさです。初回で話したターゲットや意図を意識しつつ、実際に体験した物事をまとめ、短い文章にする。それも、多くの人の意見を取り入れ、その全てを取得選択しながらです。悩み過ぎて気付かぬうちに呻き声を上げていた程でした。しかし、そうして苦しみながら考えた記事だからか、最後には市役所の方に「良いものが出来た」と仰っていただくことができました。普段の勉強とは違った頭の使い方をする必要があったので、とても疲れましたが、素晴らしい経験でした。

これらの体験から、私がかみで考えたのは「伝えることの難しさと楽しさ」です。前述の通り元々こうした活動に興味があったのは勿論ですが、私はこの数日の体

験で、新庄市のことがとても好きになりました。そして、ラーメンや関わった人など、その「好き」を市報を通して伝えたいと思ったのです。そのために皆さんと一緒に真剣に考え、悩み、記事を形にしました。そこには想像以上の苦労と、喜びがありました。今は新庄市の皆さんへ記事が届くことが、ただただ楽しみでなりません。

人文社会科学部 Yさん

私が今回のFWを通して学んだことは、主に2つです。1つ目は「自分の想像以上に『その地域独自の魅力』はそこに住む人々の目につきにくい」ということです。自分自身、このプログラムに参加する前は、新庄はラーメンが有名というイメージはなく、名物であるとりモツラーメンに至っては事前学習でようやくその存在を知るような状態でした。しかし、実際に4日間新庄でFWに参加してみて、そのあまりの店舗の多さ、種類の豊富さに私はとても衝撃を受けました。それと同時に何故これほど目に見えて分かりやすい魅力があるのに、新庄＝ラーメンというイメージが広まっていないのか疑問に思いました。それはやはり、その地域に長く住んでいる人々にとってそれは当たり前のことであり、魅力という意識が薄れてしまっていることにあると私は考えます。これは新庄に限った話ではなく、自分自身、地元の魅力を自覚するようになったのは高校や大学といった外部の人に良いところを紹介する必要がでてきてからであり、もしこれらがなかったなら、私は今説明できる地元の良いところのほとんどを意識できていなかったと思います。これを受けて、外部の人間である私たちが市報でこれらの魅力を取り上げ、新庄市民のラーメンに対する思いを可視化することで、市民に新庄のラーメンの魅力を意識するきっかけを提供したい、というコンセプトのもと、それぞれの班で活動に取り組みました。この話し合いの中で得た学びが、2つ目にあたります。それは「意見を交流し、時にはぶつけあうことの大切さ」です。私はこのFWに参加する前、主張することがあまり得意ではありませんでした。自分の考えに自信がないのもありますが、異なる意見をぶつけ合うことが嫌で、すぐ自分の考えを引っ込めてしまうこともしばしばでした。しかし、今回の市報作成にあたり、思ったままを言ってみたらそれが通ったり、最初に意見が合わなかったことで「じゃあこれならどうだろう」と新たな考えが生まれたりして、意見を交流することで、自分の想像を超えるような、数段良いものを作ることができる、ということ強く感じました。

このような学びを与えてくれたプログラム関係者の皆さん、新庄市民の方々、そして何よりも市報作成に取り組んだグループのメンバーには本当に感謝しています。実りある時間をありがとうございました。

人文社会科学部 Iさん

私がこのプログラムに参加した理由は、広報誌を通じて町の魅力を発信するというに興味を持ったからです。私は以前から、まちづくりに関心があったものの、具体的に何がしたいという明確なものがありませんでした。そのように感じていた中で、今回こういった市報を通じて、よそ者の視点から町の魅力を発信することに惹かれ、このプログラムへの参加を決意しました。私が新庄市でフィールドワークをする中で感じたことは2つありました。

1つ目は、新庄市は方言やなまりが強いということです。私は愛知県出身で名古屋弁、三河弁といったものがありますが、方言を用いて会話したことがほとんどなく、新庄市では独特の方言が飛び交っていてとても新鮮な気持ちになりました。さらに、若い人は方言をしゃべることが出来ないと言うことをよく耳にしますが、世代関係なく方言を通じて会話されている姿に本当に驚きました。これも新庄市の魅力の1つとして挙げられると思いました。

2つ目は地元の方々の距離がとても近いと言うことです。今回市報の特集がラーメンだったので、市内のラーメン屋さんに行く機会が多くありました。ほとんどの店で共通していたことが、お店の店主さんとお客さんが楽しそうにおしゃべりしていたことでした。また、ある店ではテーブル席に番号がなく、「〇〇を注文した〇〇さん」のようにお客さんの名前をオーダーをとっているお店がありました。都会育ちでは考えられないメニューの取り方に驚きを隠せませんでした。地元の方々の関係性の深さに羨ましさを感じました。

最後に、私はこのプログラムの班長をやらせてもらいました。班長をやると思ったきっかけは何もなく、「誰もやらないなら僕がやろう」といった感じでした。実際に班長の仕事をやると、話し合いの内容決めや司会をしたり、フィールドワーク以外の学内で集まるときの日程調整をしたりと、やることが多く大変でした。しかし、どのメンバーも私が指示したことはすぐにやってくれて、時には「こうした方が良いんじゃない？」とアドバイスをくれるメンバーもいて、助けられたことが多くありました。メンバー全員が自分の役割をこなし、協働してやれたからこそ市報を完成させることが出来たと思います。まだ活動報告会での発表が残っているので、メンバー全員で最後まで手を抜かず、お世話になった市民の方々に感謝の気持ちを伝えられるよう頑張りたいです。

人文社会科学部 Sさん

私は以前から広報誌の制作に興味があり、このプログラムに参加した。地域によって様々だが、誌面のほとんどをイベントや住民生活に関する情報の羅列が占める地域広報誌が多いと以前から感じていて、その中で新庄市の市報は私の中で特別に感じた。毎月巻頭には特集ペ

ージが生まれ、丁寧な記事が載っていたからだ。その市報を制作する広報担当の方々に直接ご教示いただきながら『広報しんじょう』の1ページを創った。

制作にあたり、初めに今回の特集記事の対象とする人やその人にどうなって欲しいかなどを考える時間があった。私はここに一般的な雑誌との違いがあると思った。単に「自分たちが伝えたいこと」が広く伝わればよいということではなく、役所が発行する以上、なにか目的を持って記事を書かなければならない。記事を読んだ人がどういった感情を持ち、どういった行動を起こしてほしいのかといったことを考えることは簡単ではなかったが、成り行きからどういった記事を書けばよいかが見えてくることを実感した。

そこで私たちは、新庄市民に外部へ新庄の魅力を発信してもらおうと考えた。一般的には外部の人々に向けて「新庄のラーメンのここがすごい！」と伝える記事を書くが、市民に向けた市報の役割ではないためこのアプローチにした。さらに、広報担当の方からは、新庄市の魅力を山大生という外部の人からの視点で伝えてほしいというオファーがあった。そこで私の属する班ではラーメンを食べる前と後での心境の変化に魅力を見つけ、記事にした。個人的には、新庄のラーメンについての知識がなかったため考えたこともなかったが、一度食べてみるとその美味しさに惹かれまた来て食べたいと思うようになった。

最後に、フィールドワーク全体を通して、内部からの魅力発信について考えた。今回の市報制作では新庄市外の人から見た市の魅力を伝えてきたが、私が自分の住んでいる街や所属している団体、あるいは自分自身を紹介するとなるとどうするだろうかといったことを考えた。自分で客観的な視点を持つて見ることの難しさがある。ここに他人の意見を柔軟に取り入れることができればより良い魅力発信ができるだろう。「他人は何もわかっていない」と割り切るよりは、外部の視点を使って多面的な分析をしたい。広報誌とは違い、自分にとって都合の良いことも魅力発信を考える上では重要な要素になりえるため、積極的に活用していきたいと思う。



人文社会科学部 Kさん

私は今回のフィールドワークはラーメンが食べたいという理由と、地方公務員の仕事について知りたいと考えたので受講することにした。もともと山形はラーメンが有名であると知っていたが、どのようなラーメンが有名であるのかは知らなかった。そのため今回のフィールドワークで山形県新庄市のみの地域を見てみて、すでに40店舗以上あり、山形県全体ではどのくらいラーメンの店舗があるのか疑問に思った。私は普段ラーメンを食べに行かないので今回のフィールドワークで様々な種類のラーメンを知った。特に新庄市の名物であるとりもつラーメンは珍しく、とてもおいしかったので最も印象に残っている。そして今回のフィールドワークのメインの活動である新庄市の広報誌づくりでは自分の意見が通らないことに対してきちんと自分の中で折り合いをつけて話し合いを進めていくことの大切さを学んだ。また、広報誌ということもあり、読む人のことを第一に考えなければならぬため言葉遣いや一人ひとりが書いた感想の内容をどのようなターゲットに絞って考えていくかが非常に難しいと感じた。しかし普段私は読み手を意識して文章を書くことがないので読み手を意識しながら文章を考えることは良い経験になった。これを習慣づけて伝わりやすい文章が書けるようになりたいと思った。

私が今回のフィールドワークで感じた地域の課題は新庄市民自身が新庄市の魅力に気づいていないという点である。外部の私から見てこれだけラーメンのお店があるということは新庄市の魅力の一つであると思う。私が訪れたお店のラーメンはどれもおいしく、もし自分の家の近くにあったら友達や知人に紹介したいと思うラーメン屋ばかりだった。このような魅力があるのにそのこと自体が魅力であると感じずに過ごしていくことは本当にもったいないことだと思った。また、今回のフィールドワークで新庄市民は自分とラーメンの距離が他の県の人よりも近いということも認識していないと感じた。新庄市役所の方たちがラーメンを頻繁に食べていたという印象があった。それに加え、他の地域と比較をする機会がなければわからないことがほとんどになると思う。そのため私が考えた解決方法は今回私たちが作成した新庄市のラーメン特集を通して読んでくれた新庄市民のラーメンのイメージを今よりも更に良くすることという方法である。新庄市の広報誌を読み終わったら新庄市以外の人にラーメンを勧めたくなるくらい新庄市のラーメンが好きな人を少しでも増やすことが課題解決に繋がるのではないかと私は考えた。

地域教育文化学部 Kさん

「新庄の人はラーメンをアピールできていないのではないか。」

これが、今回のフィールドワークでの新庄市の課題で

した。しかしこの課題は、私達にも当てはまります。私はよく「寒河江さはなんにもない。」と言ってしまいます。しかし、果てしない量のさくらんぼを食べられることは、当たり前ではありません。新庄市民も同様に、新庄のラーメン文化に溶け込みすぎて、当たり前になってしまっているのだと思います。新庄市民に「おらだのラーメンすげーんだ。」と思ってもらうためには、私達のような外部から来た人の視点が重要なのです。

そこで、私の視点から考えた新庄のラーメン文化について、3つ紹介したいと思います。

1つ目は、市役所の方がラーメンを食べる頻度の高さです。毎日違う店のラーメンの写真を送ってくださり、魅力的なラーメン店の数、市役所の方のラーメン愛に驚きました。

2つ目は、「ラーメンをあまり食べないが、週2で食べている。」という市民の矛盾した発言です。これこそ、新庄のラーメン文化が当たり前になっている証拠です。3つ目は、お客さんと店員さんのコミュニケーションです。私が行った店では、「おー〇〇さん。今日何にする?」、「おー〇〇ちゃん久しぶりー。今、何したな?」といった会話を見かけました。そこから、新庄市民にとってラーメン屋は、家・学校・職場につぐ、もう一つの居場所になっているように感じられました。以上のことから、単純にラーメン店の数や、とりもつラーメンの存在では言い尽くせない、新庄のラーメン文化の魅力を感じ取ることができました。

これを市報という枠組みで、どう表現していくかが難しかったです。いいなと思った企画もページの制約や、情報の責任についての問題で没になることがありました。

このように、大人数で企画を考える中で、あきらめなければならないこともありました。しかし、それぞれの良い部分や問題点に向き合い、一人ではできないものをつくっているのだという実感がありました。これから、より良いものをつくるために「妥協」も大切にしていきたいです。

私は、大学生のノリを活かしたおまけ企画を担当しました。

まず、おまけということでゲーム性があり、楽しめるものというぼんやりとしたスタートでした。制作中はタイトルもテーマもぼんやりとした状態が続きました。しかし、そのぼんやりとしたものができたときに、タイトルやテーマが急に決まりました。私は今まで、テーマがはっきりしていない状態で何かをつくったことがなく、今回のような経験は初めてでした。ぼんやりしていてもいいから、まずつくってみることが大切なのだと感じました。これから「まず何かやってみる」ということを大切にしていきたいです。

このようにフィールドワークを通して、今後の人生に役立つ経験ができました。このような学びを提供してく

ださった皆様に感謝しています。ありがとうございました。



地域教育文化学部 Rさん

フィールドラーニングのような形の授業は、日本人の学生はもう慣れていないかもしれませんが、私にとっては、すべてのことが新鮮でした。もちろん、印刷場の見学とか市報の制作とかは皆にとって珍しいチャンスですが、私の場合は、市役所、小学校からできたセミナーハウス、畳の上で寝ること、正座をしてご飯を食べること、他の人と一緒にシャワーすることさえ新鮮でした。一番印象深いのは、「挨拶」のことでした。車（バスも）に乗る時は「お願いします」、降りる時は「ありがとうございました」を必ず運転してくれる人に言います。別れる時は必ず全員集まって「今日はありがとうございました」と何度も言います。とても面白いと思いました。

日本に来てから接している人は先生と学生（しかも、留学生が多い）がほとんどでした。この四日間に、日本人の学生さん、社会人の方々とたくさんコミュニケーションができました。メンバーたちは皆一生懸命に自分の力を貢献しているし、インタビューを受ける人々は真面目に答えてくれたし、特に市役所の人々は優しくいろいろ教えたり案内したりしたから、とても感動しました。

このプログラムで学んだ一番大事なことは何かというと、「模倣する」という学び方の有効性です。中国には「唐詩をたくさん読めば、自然に詩を作れるようになる」という諺があります。今度のフィールドラーニングを通して、文章を書くことだけではなく、この理論はほかのことにも適用することが分かりました。市報を作るには、難しく、いろんな知識を持たなければなりません。しかし、たくさんの知識を勉強すれば必ず作れるというわけではありません。「市報というのは...だ」、「記事は...のように書くものだ」、「背景の写真を選ぶときは...方がいい」と教えられるより、この前作られた市報を見たり、先輩の指導のもとで、実際の制作に参加する方がもっと分かりやすく、効率いいと思いました。日本の学校教育では、このような学び方がうまく利用されているように感じます。とてもすばらしいと思います。ただし、この学び方にも、既存のものに囚われるという

危険性があるかもしれません。例えば、今回私たちが作った記事は写真と文字の並び方とか、文章の書き方とか、前の市報の影響を受けたところがかなり多いと思いました。もちろん、何もかも初めての私たちにとって、もう大成功と言えますが。しかし、それを仕事として、どんどん作っていく人なら、やはり前の作品に囚われず、新しい進歩を遂げるための心がけと勇気が大事だと思います。

農学部 Nさん

私がこのプログラムへの参加を決めたのは、情報を伝えるための様々な手段がある現代で市報という紙の媒体で多くの人々へ情報を伝えることに興味があり、実際に体験することで深く知りたいと思ったからです。また、フィールドワークに参加することで自分の視野や考え方の幅を広げたいと考えたことも理由のひとつです。

フィールドワークは一度の参加になってしまいましたが、プログラムで学んだことが大きく3つありました。1つめは、市報で伝えることの意味です。市民へ向けたものとは言え、市報づくりは想像以上に根気と時間が必要であることを知りました。作り始めから一つの冊子になるまでの過程を教わる中で、随所に読み手側への配慮や工夫が感じられ、普段自分たちの手元に届くまでに携わる人たちの思いを考えさせられました。そういったことも含め、コンスタントに紙面で市の情報を発信していく事はまちにとって重要なのだらうと思いました。

2つめは、地方の魅力を客観視する重要性です。新庄市民が、ラーメンの文化は市の魅力であるという自覚が小さかったように、近くにある素晴らしいものに対してスポットを当てるのは簡単ではないのだと思います。しかし現地の人自身が誇っていなければ、外に広まっていく可能性も小さくなると考えられます。また、それは単純にもったいの無いことです。近くにあるからこそ気が付かないことを見直し、外部の意見を取り込んでみることで地方の活性や魅力再発見になると思いました。

最後は、グループで物事を決定し作り上げることの難しさです。人の数だけ意見があり、都合があります。話し合いの中でいかに互いが柔軟になり許容できるか、または自分の主張ができるか。そのバランスを自分の中でうまく取らなければならないと思いました。良いものを作り上げたいという同じ思いを持っているからこそ苦労したこともあったように感じますが、一つのことを成し遂げるためにかけた時間や労力は、これから生きていく中でも確実に役立つ学びを与えてくれました。

今回得たものは、初めに私自身が期待していた成果以上に大きなものだったと感じています。そして何より、それぞれの役割を果たし、グループをうまく機能させてくれたメンバーの皆に心から感謝します。このプログラムでの出会い、学び、経験、様々なものを大切にしていこうと思います。

山里の秋を体感しよう

活動状況

○実施市町村：金山町

○講 師：須藤功、石井芳五郎、斎藤正昭、中野光雄、岸末吾、須藤幸一、岸浩樹、岸吉三郎、柿崎喜一、樋口勝也、小野花子、岸ミツ子

○訪 問 日：平成30年10月27日(土)～28日(日)、12月8日(土)～9日(日)

○受 講 者：短期留学生3名、人文社会科学部3名、工学部1名、農学部3名 以上10名

○スケジュール：

1回目	2回目
【1日目】11月3日(土) 08:00 山形大学発 10:00 道草ぶんこう着 10:00 開講式 10:30 オリエンテーション カメラの使用について 撮影スポットについて 12:00 昼食 13:00 秋の風景の撮影(田茂沢地区) 17:00 入浴(温泉) 18:00 ホームステイ先に移動 18:30 夕食	【1日目】12月8日(土) 08:00 山形大学発 10:00 道草ぶんこう着 10:00 オリエンテーション 10:30 なし団子飾りづくり(子供との触れ合い) 11:30 講義・安全祈願 12:00 昼食 13:00 写真鑑賞、フォーラム発表 17:00 入浴(温泉) 18:00 ホームステイ先に移動 18:30 夕食
【2日目】11月4日(日) 06:00 暮らし体験 07:30 朝食 09:00 道草ぶんこう集合 10:00 秋の風景の撮影(町内) 12:00 昼食(餅つき) 13:30 祭の企画フォーラム 春・夏・秋・冬の祭り企画 16:00 道草ぶんこう発 18:00 山形大学着	【2日目】12月9日(日) 06:00 暮らし体験 07:00 昼食 09:00 クリスマス・正月用リースづくり 12:00 昼食 13:30 雪囲い作業体験、清掃作業体験 16:00 作業終了 16:00 道草ぶんこう発 18:00 山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

短期留学生 Kさん

今回2回金山町を訪れ、フィールドラーニングに参加しました。色々な体験してからお祭りの課題を研究した後で、感想と研究結果について述べていきたいです。第1回目は、金山町の秋を感じる体験をしました。まず、先生が私たちにカメラの操作方法を教えてくださいました。初めて使うけど先生がとても優しくのおかげで、最後に私はその操作方法を習いました。金山町の景色が本当に綺麗だが光と景色の組み合わせるのが難しいです。様々な場合を調整する割合は違うので、完璧な写真を撮るのは簡単ではありません。私たちは先生に連れて来てくださったの金山町の街並みを楽しむことができました。外国人として、黄色い楓と色々な花から素敵な景色を組み立てるのは忘れがたいです。金山町の道で歩いて日本人の友達と話して嬉しかったです。

第2回目は、その日に日本で雪を見るのは初めてです。金山町の雪は私の出身地より大きくて更に綺麗だと思います。先回はお先になし団子飾りとお祈りを体験でした。その前に、子供たちと一緒に折り紙をして楽しかったです。そして、お正月の時に金山町のお祈りを聞いて特別だと分かりました。お願いを書いて掛けられています。皆さんのお願いがきっと叶えると思います。また、リース作りや清掃作業など初めての体験をたくさんさせていただきました。私は自分で作ったお正月用リースづくりのテーマは日中友好で、中日両国の仲がますますよくなるのを祈っています。

温泉とホームステイは初めて体験しました。さすが日本の温泉に入った後で気持ちがいいです。1回目と2回目のホームステイは素晴らしいし、主人も優しいし、郷土料理も美味しかったです。日本語は下手なので、おじさんは私とゆっくり話したのは本当に感動しました。日本料理は美味しいけど中華料理と全然違います。それで、偶にある伝統的な食べ物は慣れませんでした。こんな経験があると嬉しかったです。

課題のお祭りについてたくさんの考えがあります。金山町のお祭りはほかの場所と違います。とりあえず、特徴的なお祭りは一番大切です。もし花火まつりを企画したら、東京とか大阪とかそんなの都会ほど美しさが皆んなの前に現れることができると思います。雪まつりを行ったら、北海道のいいかもしれません。外国人として、今回のフィールドラーニングは珍しい思い出ができました。だから、お祭りは外国人と関係があるのです。更に金山町の郷土料理が特別で美味しいので、私は「国際的な料理お祭り」が提案です。同じ国の人是一个グループ、日本人にとって、同じ町は一個グループ。金山町は毎組に同じ材料を1組ずつ提供してあげました。毎組は

自分の国と故郷の料理の作り方を使います。最後、世界中の美味しい食べ物を金山町で食べることができます。私にとって金山町の経験も十分な貴重です。国に帰った後で、家族や同学とこの喜びを分かち合います。皆さんが留学生の私たちのために世話をされていて、本当にありがとうございました。



短期留学生 Kさん

フィールドワークを二回体験させていただき、大変貴重な経験になった。自然豊かな金山町で、紅葉か雪に染められた川と山と共に、ゆったりした時間を過ごし、今にして思えば、まるで夢だった。道草文校の会議室で、先生のオリエンテーションを聞きながら、時々窓の外を見渡していた。一回目は、唐紅に、金色と、黄色っぽい緑が織り込んでいる山、二回目は眠っているように静かな雪景色だった。窓は風が荒れていたが、中にいる私たちはストーブを向けており、暖かくて頬が赤くなっていた。その時のみんなの生き生きとしていた表情、今でも目の前にあるかのようだ。

会議の後、温泉体験をさせていただいた。暖かい白い蒸気とお湯に入り、気分が非常によくなった。ホームステイも素晴らしかった。地元の食材を生かした御馳走を満喫しながら、ホームステイ先のお父さんかお母さんのお話を聞いていた。時々方言でわからない言葉があったりしたが、その熱い親切さと優しさは、確かに心まで伝わってきた。夜、雪のかさこそとした声を聞きながら、お布団の中でぐっすり眠っていた。

翌日の帰りのバスで、故郷を離れるような、寂しい気持ちで胸にいっぱいだった。窓から、金山町の方々が何度も何度も手を振っていたのを見て、胸が熱くなった。そして、私たちも、何度も何度も、名残惜しく手を振っていた。その向き合って手を振った瞬間、人と人との「絆」というものを深く実感した。国籍や年齢が違う私たちは、目にえない糸で繋がりに、不思議に出会い、話し合っていた。出会ったからこそ、誰かの口調か笑声、一緒に見た町の景色、聞いた雪の溶けている音、そのような細かい瞬間も、絆になり、かけがえのない宝物になった。

そのすべての思い出は、人情味溢れの金山町が与えてくれた。

この大好きな金山町を、より多くの人に知ってもらいたいというふうに思った。そこで、日本の都会の人、また外国人に、金山町の民家に泊まってもらい形のイベントを行ったらどうかというふうに思った。外国人としての私が金山町の自然に魅了したように、その人達にもきっと、好きになってもらえるのではないと思う。この企画を実行するには、まず宣伝に力を入れなければならない。例えば、金山町を代表するキャラクターをデザインし、ラインの無料スタンプとして発行したり、コマースのCMを製作し、テレビやネットで放送してもらったりする。うまくいけば、人達がとんとん金山町に来てくれて、それは金山町の収入になる。そして、その収入でさらに宣伝と、ほかのお祭りの計画に力を入れ、金山町の名をだんだん多くの人に知ってもらい、地域経済の活性化を向上していく。しかし、外国人のお客様の場合は、日本語がどれぐらいできるのか、訛がどれぐらい聞き取れるのか、地元の人に許してもらえるのか、ということも考慮しなければならない。そうすると、山形大学か東北芸術工科大学の留学生に限定したほうが現実的かもしれない。

私は、里山を体験しに来てくれる人たちも、金山町で自分だけの絆が見つかったらいいなというふうに思っている。そして、金山町がますます活性化していくように、期待している。



短期留学生 Rさん

二回のフィールドワークはもう終わった。とても楽しく四日間を過ごした。色々な初めてを体験して、親切でやさしい人に会うことができ、この授業を取ってよかったとつくづく感じた。道草分校での四日間は一生も忘れられない四日間で、この思い出を大切にす。

最初、「このように日本人と触れ合ったことがないし、言葉が通じない時もよくあるし、私できるかな」と心配したが、みんなと一緒に話し合ったり、笑ったり、同じことをしたりしているうち、仲がだんだんよくなってき

て、不安もなくなった。

この四日間はとても意義があると思う。一回目の日程は主にフィルムカメラの使い方を勉強して写真を撮ることだった。小さい頃、親もフィルムカメラで私に写真を撮ってくれたが、自分で使うのは初めてだ。奇妙な気持ちできれいな紅葉や仲間の笑顔を撮った。スマートフォンやデジタルカメラではないし、写真の枚数の制限もあるので、普段の撮り方と違って、角度やしぼりなどちゃんと調整してから写真を一枚一枚とても大事に撮った。そのうち、携帯やデジタルカメラがまだ出てこない時代にフィルムカメラを使った人々の気持ちがだんだん分かってきた。ただ一瞬の記録は一生の思い出になることは不思議だからこそ、フィルムカメラで撮った写真は宝物とも言えると思う。記念写真を撮った時、太陽が出てきて、もともとどうとうしい天気も晴れになってきた。その時何となく感動した。私たちはまだ若くて、何か困難があっても希望を持って生きていけばいいのではないかと思った。二回目の時、写真展示会が行われた。人々の写真には自分なりのいいところがあるから、他人の写真を見てよく勉強になった。二回目の日程はほとんどは手作りのことだった。手作りが苦手な私は積極的に子供に話しかけてバラの作り方を学んだ。そして、作ったバラやなし団子を枝に飾りつけたり、願い事を書いたりして、来年の安全を祈願した。翌日もクリスマス用と正月用のリースを造った。面白いと感じたと同時に、神聖だなと思わずに驚嘆した。また、餅つきや温泉やホームステイなどどれも楽しくて、深く印象に残っている。

今回のフィールドワークで見つけた課題は金山町の人口が減っているため、祭りを行い続けることが難しくなるという状況に対して、どうやって金山町の祭りを復興するのかということです。実は、外国人として、地元の訛りや祭りが詳しくわからないが、外国人の立場から提案したいと思う。祭りの内容は料理コンテストであろうと、フリーマーケットであろうと、地元の人だけでなく、留学生や外国人観光客も対象にしたらどうだろうかと思った。そうしたら、人不足で祭りができないという問題がないし、金山町をピーアールすることもできるし、もしかしたら、経済の促進に役に立てるかもしれない。具体的に例をとると、仮にクイズをしたらどうだろうか。金山町の歴史など伝統的な文化知識や金山町の観光スポットの写真をたねとしてクイズを出題するのは面白いのではないだろうか。参加者に答えてもらって、優勝の人に金山町ならではの物産やお土産を賞品として与えたらどうだろうか。きっと記念になると思う。そのような形式で、祭りが賑やかで、それを復興する可能性があるだけでなく、地域以外の人にも金山町についてのもう一步了解することができると思う。

この四日間は短かったが、学校でできない収穫が山ほどある。残念なこともなくて満足だった。みんなはいつも私の下手な日本語に耳を傾けて一生懸命理解して

くれて、感謝な気持ちで胸がもういっぱい。金山町の美しい自然や親切な人々を永遠に頭に残したいと思う！

人文社会科学部 Kさん

四日間の活動を通して私は、普段の大学生活の中では絶対に経験できないようなことをたくさん学ぶことができました。このレポートでは、金山町で具体的に体験してきたこと、町が抱えている問題、私たちが考えた催し物について述べていこうと考えている。

10月27日、28日は主に、金山町の風景や街並みをフィルムカメラで撮影するという内容だった。初めて本格的なフィルムカメラに触れることになり、最初の頃は恐る恐るといったような触り方だったが、少しずつコツをつかんで撮影できるようになっていったと思う。写真に入れる光の量やシャッターの速度などを考えながら撮影することは、普段はスマートフォンもしくはデジタルカメラ等でしか写真を撮影しない私たちにとってはとても貴重な体験となった。フィルムは限られており、撮影した写真も現像しないと見ることができないため、一枚一枚を大切に撮影した。

後半である12月8日、9日は、まず前回もお世話になった道草ぶんこうにて子供たちと「なし団子飾り」や正月用のリースを作った。私は手先が器用ではなかったが、子供たちが楽しげに教えてくれた。その後、皆で昼食をいただいた。体が温まってとても美味しかったのだが、鍋を開けた途端に強い納豆の匂いがして驚いた。納豆汁といい、私の地元（岩手県）では食べたことがないものだった。他には「やたら漬け」という数種類の野菜と一緒に漬けられた漬物もいただいた。その土地に根付いているものを食べるのもこのプログラムの醍醐味なのだと思った。その後は10月に撮った写真を皆で鑑賞した。予想よりもピンボケした写真が少なく、安心した。

また、私がこのプログラムに参加しようと思立った動機の一つであるホームステイも、とても楽しかった。小学校の頃に農家の方のお宅にホームステイしたことを思い出し、懐かしくも感じた。炬燵を囲んで食べた夕飯は美味しいだけでなく、私を温かい気持ちにさせた。金山町は今、高齢者の割合が多い。加えて、若者が都市部に流出していつているため人口は減少する一方である。そのため以前と比べて活気が無くなったように感じるとの声があった。

そこで、私たちは金山町で起こる「かたゆき」と呼ばれる自然現象を上手く利用して、何かイベントを企画できないかと話し合った。かたゆきが辺り一面を覆うと、そこはどんなに乱暴に歩いてもびくともしなくなるそう。かたゆきは時期的に3月の雛祭りとならぶ可能性があるため、雛人形の格好をした子供たちにかたゆきでできた場所を回ってもらうというウォークラリー形式のイベントを考えた。また、かたゆきの上に皆で大きな

絵を描き、上空から記念撮影をするのはどうかという案も出た。

これらの意見をさらに練り上げ、実現に向けて皆で協力し合っていこうと思う。

人文社会科学部 Kさん

今回10月と12月の2回金山町を訪れ、フィールドラニングを行いました。

第1回目となる10月27・28日の訪問ではフィルムカメラを通して金山町の秋を感じる体験をしました。私は風景を眺めることが好きで携帯のカメラで写真を撮ることがあります。そのときは光の具合やピントをカメラが全て行ってくれますが、フィルムカメラではそうはいきません。絞りやシャッタースピードまで自分で調節しなければならずなかなか難しかったのですが、写真1枚にかける重さが全く違ったので楽しかったです。フィルムカメラを使うと同時に金山町の綺麗な街並みも知ることができました。山に囲まれたのどかな風景は疲れた心に癒しを与え、ゆっくりとした時間を過ごすことができました。町内の伝統的な建物や蔵カフェ、水路に放流された鯉なども金山ならではの綺麗な景色で目に焼き付き、もう一度訪れたいと思いました。

2回目のフィールドラニングではなし団子飾りやリースづくりなど初めての体験をたくさんさせていただきました。なし団子はお正月の飾りですが、願いを書いてご祈するという冬の七夕のような新鮮な体験になりました。わらにお餅をくっつけるというのも私の地元にはなく、同じ山形県でも地域によって違う風習があるというのが大変興味深かったです。その行事も衰退しているということでしたが、価値のある伝統文化だと思うのでぜひ続けていってほしいです。

ホームステイも初めての経験でしたが、1回目と2回目どちらのお宅でも優しく迎え入れてくださりとても嬉しかったです。金山の伝統的な食べ物や山に囲まれた地域の特色である山菜の漬物など、ご飯からも金山の文化に浸ることができました。金山杉を使った家に実際に寝泊まりしたことも貴重な経験でした。

この講義のメインでもあるお祭りの企画は非常に悩みました。田茂沢・蒲沢地区を盛り上げるお祭りということでしたが、子供や高齢者の人口の割合を無視はできません。子供の数は少なく、50・60の年代が一番多いというのが現状です。お祭りのマンネリ化やリーダーシップをとる方の減少など他にも問題は多く存在します。お祭りの企画を考えるにあたり、そのような現状に即したものでなければ実行・継続は難しいと思います。私たちが実現できる範囲でとなるとそれはさらに難しくなります。その度合いを見つかることが今回のフィールドラニングの課題となったので、活動報告会までにじっくり話し合い企画案を練りたいと思います。

今回は本当に貴重で楽しい体験をさせていただきま

した。ぜひもう一度金山町を訪れたいです。
4日間本当にありがとうございました。

人文社会科学部 Eさん

4日間のフィールドラーニングを通して、大学の教室では学べない多くのことを感じ取ることができた。本レポートでは、その数多く得た学びの中から特に考えた2つの点と地域の課題、解決策について述べていきたい。

1つ目は、大人の方との接し方についてだ。普段の生活では、同世代の人と接する機会が多く、異なる年代の方とお話をする機会はあまりないので、今回、様々な大人の方の人生経験、考え方を聞くことができ、とても新鮮だった。接し方として失敗してしまった言動もあったが、町の皆さんはあたたかく受け止めてくださり、本当に感謝している。また、私が課題としている、「自分から」の行動は、意識をしていたにも関わらず、できていなかった。今後も私の課題だ。ホームステイ先のお家で社会ニュースや将来についてお話をされていて、意見を求められたときに答えられなかったことも反省している点だ。社会の一員になるという自覚を持って、自分の意見や芯となるようなものを持ち、伝えられるようになろうと強く思った。

2つ目は、1人1人の違いを理解することの大切さだ。1回目の感想発表で言ったことだが、同じものを見たり、同じ時間を過ごしたりしても、それぞれの視点や感じ取ることには違うのだと実感した。ホームステイは、家の方々との出会いはもちろん印象深いが、班員と1泊一緒に過ごしたという点でも心に残っている。私は2回とも留学生の方と一緒に、生活をする中でちょっとした文化の違いを度々感じた。そのようなときに、優劣をつけたり、どちらかの文化を押し通したりするのではなく、各々の習慣をしっかりと伝え、お互いが合わせていくことが重要だと考えるようになった。

地域の課題と解決策については、課題として、祭りのマンネリ化とリーダーシップをとる方の不足があると教えて頂いた。そこで、これらの課題を解決するために1つの祭りを提案する。その祭りの内容は、かた雪の上に絵を描いてフォトスポットを作り、衣装を着てその上に立ったり、写真を撮ったりして楽しんでもらうというものだ。さらに、描く絵は毎年異なるテーマを設定すること、山形大学の学生が運営、参加させてもらうこと、撮った写真をSNSや広報誌を通じて発信することを考えている。

4日間を通して得たことは社会に出て人と接するうえで大切なことばかりで、学生のうちにこのような体験ができて良かった。また、金山町について考えさせてもらったことは、自分の故郷について考えるきっかけにもなった。そして、一緒に生活させてもらい、あたたかく、言葉の1つ1つに重みのある、皆さんのような大人になりたいと思ったので、そのために、最後のお話にあった

ように、夢を持ち、周りの人を大切にしながら過ごしていきたい。



工学部 Kさん

感想

まずは、フィールドワーク全体の感想です。人生で初めてのフィールドワークでしたが、11人の中で私が一番活動を楽しんだ自信があります。田舎の里山でゆっくりとした週末を過ごすという、普段生活している中では経験できない貴重な4日間でした。ぶんこうやホームステイ先のおばあちゃんたちが作ってくださるご飯はあたたかくて、美味しく、ひとの優しさや暖かみをしみじみと感じました。一回目の活動では中国人の留学生の方とうまくコミュニケーションがとれなかったり、メンバーが10人全員女子で、男子のサポーターさんとも会話が少なかったりしました。しかし二回目の活動では、もうみんなの名前を覚えてしまって、中国人の方とも積極的に会話をしたり、サポーターさんも交えて楽しく活動出来たり、まるで友達で旅行をしているような感覚でした。この11人で過ごしたのはたった4日だけですが、このメンバーでもっとたくさん活動したかったと名残惜しく感じます。

活動を通して考えたこと・学んだこと

次に具体的な活動についてです。なし団子やクリスマスリースを作ったり、雪囲いを手伝ったり様々な活動をしました。やはりフィルムカメラを使って秋の風景を撮影したことが特に印象に残っています。現代では使う機会の少ないカメラは持つだけでわくわくして、シャッターを切るたびに現像が待ち遠しかったです。待ちに待った二回目の活動では、撮った写真を見て写真家の先生にアドバイスをもらったり、お互いに撮った写真を見せ合ったりしました。他の人の写真を見ているうちに、同じ風景を見ているようで、違うところに着目して見ていることに気付きました。また、同じ構図・同じ場所で撮った写真でも光の量で発色が違って驚きました。先生に撮ってはいけないと言われた室内で間違えて撮った写真が綺麗だったり、頑張って撮った写真のピントが

合っていなかったり、初心者で不慣れな部分もありましたがみんなの撮った写真を見ると、一回目の活動を昨日のこのように鮮明に思い出すことが出来ました。それも写真の魅力のひとつだと思います。

地域や自分の課題

地域の課題としては、人口減少と少子高齢化が進んでおり、地域おこしの先陣をきれるリーダーがいないことで金山町全体の生活の質が落ちてしまっている可能性があることがあげられます。

自分の課題としては、上記の問題を抱える金山町の地域おこしのきっかけとなる「お祭り」のようなイベントを企画運営することだと考えます。

提案

地域の課題を解決するために、秋に行っていた「さわやか祭り」の復活と、2月下旬から3月上旬の雪解けの時期に見られるかたゆきとひな祭りを合わせたお祭りを提案します。「さわやか祭り」ではこのフィールドラニングの授業として毎年企画をしたり、「かたゆきわたり」ではおひなさまの着ぐるみを着たりして盛り上げます。

農学部 Kさん

今回、計4日間金山町で活動させてもらった中で、多くのことを体験させて頂きました。

特に1回目の活動で、実際に金山町を散策しながら秋の風景を撮影したことはとても記憶に残っています。撮影の際、貸して頂いたフィルムカメラは今まで使用することがなかったため初めてでした。大変貴重な経験をさせて頂きました。デジタルカメラとは異なり、光量やピントの調節が必要であるなど操作工程がいくつかあり難しさを感じました。しかし、花など近くのものを撮影するときはしぼりを少なくする。それにより背景をぼかすことができる。このように撮りたいものをどうしたらより良く撮影することができるのか。これらを考えながらの撮影はとても楽しく、より被写体を見ることが出来、フィルムカメラの奥深さを感じました。また金山町を散策しながらの撮影は、実際に歩き、見ることでしか分からない金山町の風景、様子を知ることが出来ました。豊かな自然が広がっており、紅葉の季節だったため、山が赤、黄色と色づいていてとても綺麗でした。また金山町の様々な方達とも撮影する中でお話させて頂き、交流する機会にもなり金山町の魅力を多く発見することが出来ました。

2回目の活動では、なし団子飾り作り、リース作り等のものづくり体験を造形教室の子ども達と交流を通してでき、自由な創作の楽しさ、みんなの個性を感じました。また雪囲い作業など多くの初めての体験をすることが出来ました。これらの体験を金山町の皆さんと一緒に行うことで、私自身も金山町の一員となれたように思いました。

これらの活動を通していく中で、金山町の田茂沢、蒲沢には人口減少、若い人の他の地域への流出などの課題があることが分かりました。これらを解決するには、まずは金山町の魅力を知ってもらうことが大切だと感じました。そのため私達は、金山町のことを知り、その魅力に気付いてもらいたいと思い、新たな祭りを企画、実行しようと考えました。

私達が考えた祭りは、「かたゆきまつり」です。金山町では「かたゆき」が起こり、普段歩くことができない田んぼの上も歩くことができる状態になります。これを利用し、金山町の方、また他の地域の方にも楽しんでもらえる、継続して続けていくことのできる祭りを作りたいと考えました。具体的には、雪灯籠、宝探し。また「ひな祭り」と融合させ、造形教室の子たちにひな祭りを題材にしてTシャツにデザインしてもらい、ファッションショーをするなどの案が出ました。

また「さわやか祭り」を料理コンテスト、おばばミスコンなど新たな企画も取り入れ復活させようという案も出ました。

農学部 Sさん

四日間の活動を通して、里山の暮らしを自分の体で感じる事ができました。一回目のフィルムカメラをお借りしての活動では、レンズを通すことによって里山の秋の風景、金山町の美しい風景をクローズアップして見ることができた。現像してもらった写真には風景だけではなくその時の会話、気温、においも詰め込まれていて、大事な宝物となった。また今後の祭りについて考える祭りフォーラムでは、普段参加者としてしか関わっていなかった地域のお祭りについて、企画者側として考える貴重な経験となった。

金山町の課題について、資料とともに説明していただいた。その中で特に私が気になったのは、今まで行われていた「さわやか祭り」という地域のお祭りがマンネリ化を理由に無くなってしまったことだ。地域のつながりを強め、コミュニケーションの機会となる祭りが無くなってしまふことはとても勿体ないと思う。そして、解決策として新しい祭りを今回の活動で話し合ったいということ聞き、是非考え、そして実行にまで移したいと考えた。

初めに考えたのは祭りをを行う意味についてである。祭りをを行う意味は大きく二つに分かれていると考える。一つ目は「他地域から人を集める」という意味、二つ目は「地域の結びつきを強める」という意味である。どちらに重点を置くかによって、どのような祭りをを行うか内容が変わってくる。一回目の祭りフォーラムでは祭りをを行う意味を考えられておらず、挙げられた企画がばらばらだった。それ以降、意味について考えることで、他地域で同じような目的で行われている祭りを参考にして話し合うことができた。

次に考えたのは実現性である。企画したからにはぜひ実現し、実際に開催したいと考えている。そのためには祭りに必要なもの、人、時間まで細かく考えなければならない。留学生やキャンパス移行生がいることから、今年の春に行える企画を考えた。

最後に考えたのは、一番大事である地域を生かすということである。これまでの活動を通して、金山はどこを歩いてもきれいな風景ということが大きな強みだと考えた。町を歩いているとき、店や観光場所だけではなく建っている家でさえも綺麗で、是非生かしたいと考えた。また、話していただいた「かたゆき」もぜひ生かしたいと思う。

農学部 Mさん

今回私はフィールドワークの4日間の活動を通して他ではできない貴重な体験をさせていただきました。

一回目の活動ではフィルムカメラを使った秋の風景撮影、餅つき体験、祭りの企画フォーラムを行いました。特に秋の風景撮影では、初めてフィルムカメラを使うということで壊してしまうのではないかと不安や緊張などがありました。ですが、使い方を丁寧に教えてくださったたりきれいに撮影するためのアドバイスなども聞いたりしながら楽しく撮影することができました。また、自分で歩きながら田茂沢地区内や金山町内を撮影することで金山町の良いところである自然の豊かさや空気のきれいさを自分の体で見て感じるすることができました。

一回目のフィールドワークが終わった後、二回目のフィールドワークに備えて、祭りの企画をもっと練る作業を行いました。その中で私たちは、本当に実現可能なのか、人が集まることのできるのかなど様々な壁にぶつかりました。その中で一番高かった壁は町の方々はどういった目的の祭りを求めているのかということです。聞いた話なのですが、祭りの種類があります。伝統的な祭りとその地域が盛り上がるような祭りとの地域から人を呼んで行う祭りの3種類です。今、金山町の方が大学生に求めているものはどういったものなのか考えることが大変だったと記憶しています。

二回目の活動ではなし団子飾り作り、写真コンテスト、祭りフォーラム、リース作り、雪囲い作業をおこないました。なし団子飾り作りではただ飾りを作るだけでなく、餅の数の意味や由来などを聞いたことが良かったなと思いました。そこでは、もし、伝統的な行事がなくなってしまった場合、同時にそれを受け継いできた精神やその行事に込められた意味などを失ってしまうのだなと強く感じました。写真コンテストではぼやけていた写真も多くありましたが、自分で思っていたよりもよく撮れていてうれしかったです。今、手軽に写真を撮ることができますが、撮ることが目的になりつつあり、じっくり写真を鑑賞するという時間はなくなってきていると感

じています。その中で一ヶ月ほど時間をおき改めて見てみるという経験は新鮮で、またそのときの記憶がばあつと蘇ってくるようでした。

2回の活動を通して金山町の良いところをたくさん感じることができました。そこで、一番に思ったことはもっと他の人にも金山町について知ってもらいたいということです。その手段として有効なものが祭りなのかなと個人的には感じています。祭りについては、一緒に行った仲間とともに「かたゆきまつり」の企画を進めているので楽しみにしてくださいと幸いです。



森と人との共存を考えるⅡ～山間地の文化を探り地域振興へ～ 活 動 状 況

○実施市町村：金山町

○講 師：遊学の森案内人会 会長 星川隆弘

○訪 問 日：平成30年12月8日(土)～9日(日)、平成31年1月12日(土)～13日(日)

○受 講 者：短期留学生2名、人文社会科学部4名、地域教育文化学部2名、理学部1名、
農学部1名 以上10名

○スケジュール：

1 回 目	2 回 目
【1日目】12月8日(土)	【1日目】1月12日(土)
08:00 山形大学発	08:00 山形大学発
10:15 遊学の森木もれび館着	10:15 遊学の森木もれび館着
10:15 オリエンテーリング	10:15 オリエンテーリング
10:30 うどん打ち	10:30 餅つき、ナシ団子
12:00 木もれび館で昼食	12:30 昼食(餅)
13:30 スノートレッキング	14:00 雪遊び
15:30 夕食づくり	16:00 終了、入浴
17:30 夕食・片付け	18:00 地域交流
19:00 有屋少年番楽の奉納	20:00 ふりかえり
20:30 終了、入浴	
21:30 ふりかえり	
【2日目】12月9日(日)	【2日目】1月13日(日)
06:00 起床、朝食、雪かき	05:00 起床、朝食
07:30 地域のお歳灯準備手伝い	06:00 祭典の準備と運営 「りゅう馬スプリントスキーフェスタ2019」
10:00 遊学の森でリースづくり	13:00 終了
12:00 里山バイキングで昼食	13:30 昼食
13:00 ぶどう蔦でペンダントづくり	14:30 終了、ふりかえり
14:30 終了、ふりかえり	16:00 遊学の森木もれび館発
15:45 遊学の森木もれび館発	18:00 山形大学着
18:00 山形大学着	

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

短期留学生 Tさん

今回のフィールドラーニングに参加した理由は授業以外の体験をしたいでした。留学生として、勉強しかではなくて、地元の人と交流したいし、山形市内以外のところが知りたいし、その上、金山町の有屋地域のプログラムが最も興味を持っているので、参加しました。この4日間を通して、有屋地域の人々や自然からたくさんの魅力を知っていましたし、この地域が直面している課題もよく考えました。

私は台湾人なので、最初に有屋地域に着いた時、とてもきれいなところと思って、こちらは絶対に台湾人にアピールできます。なぜかと言うと、台湾にはあまり雪を降っていませんので、雪に関する活動が引き付けやすいです。例えば、カンジキを履くやソリ遊びなど、大人でも子供でも体験できます。その上、今の台湾は町散策という旅行がとても流行していますので、さらに有屋地域の魅力を宣伝すれば、人が来るかもしれないです。

そして、4日間の体験についての感想を書きたいと思います。二回の活動は主に住民の方々と交流して、および有屋地域の魅力を発見しました。交流していた時、住民の方々はいっぱい方言を使って話して、理解ににくいでしたが、みんな優しく、詳しくに説明してもらって、本当に感謝しました。また、「有屋番楽少年」を見た後、子供たちと話した時、練習が疲れたのと聞きましたけど、いいえと答えました。私は子供たちが学校の勉強だけではなくて、小さい頃から地域の伝統芸能をよく学んで、心から地元の伝統を守りたいという気持ちを感心しました。2回目のりゅう馬スプリントスキーフェスタも強い印象を残しました。ほとんど前回の番楽少年をやっている子供たちは参加しました。みんなは朝早く起きて、会場に準備に来ました。しかし、だれでもやる気満々して、真剣にウォーミングアップしていました。試合の時も、フィニッシュラインまで全力で走りました。そして、私もこのイベントに参加しました。カンジキを履いて走って、思うより難しかったです。地域の方と一緒に頑張っていて、こんなに活気にあふれている雰囲気に囲まれて、自分も元気になりました。

二回のフィールドワークを通して、若者は年配の方より本当に人数が少ないです。そのため、労力が足りないと思います。例えば、お歳灯の準備はいっぱい木を運んで、雪の中に立つのが力をいっぱいかかりました。私は若者でも、そんなに楽な仕事ではありませんでした。その上、もし若者はほとんどないなら、伝統の伝承もできません。これは一番困った問題かもしれません。

4日間には、台湾で体験できないことが有屋地域で様々なことを経験させて、心も考えも成長することがで

きたと感じています。大変お世話になりました。ありがとうございました。



短期留学生 Kさん

私は最初にこのもがみのフィールドワークに参加した理由は、色々な山形のことを知りたいです。市区の景色だけじゃなくて、自然な景色も見たくて、参加しました。

今回のフィールドワークを通して感じたことは、「人と人の繋がり」についてです。なぜかと言うと、この四日間でフィールドワークのプログラムに参加した仲間たちと地元の方々とたくさん話をし、たくさんの交流をしました。そして、話し合いの中で他人の人生の経歴や考え方や気持ちなどもよく了解してきました。とても面白いと思います。

第一回のフィールドワークで皆はお互いにまたそんなによく知ってないけど、仕事を手分けすることがとても良いです。そして、地域の人たちは色々な活動を用意しました。例えば、うどん打ちや雪遊びです。特にうどん打ちは面白いと思って、皆は自分のグループの昼ご飯の分を作って、作りながら、いっぱい話をしました。うどん打ちは時間をかかったけど、材料から手で作って、感心しました。それに、地域の人から、うどん打ちは地域によって違う話を聞きました。本当に勉強になりました。夜に有屋小学校に行って、少年番楽のパフォーマンスを見ました。子供たちは長いセリフを覚えることができるのはすごいと思います。そして、一生懸命練習している姿を想像して、子供たちは偉いと思います。

第二回のフィールドワークで前より地域の人たはもっと交流するチャンスがありますから、もっと楽しかったです。そして、今回は日本のお正月を体験することができて、台湾人にとって、特別な経験だと思います。例えば、最初はナン団子は食べ物と思ったけど、飾り物を聞いたときはびっくりしました。台湾もお正月がありますけど、文化なんて全然違うのが面白いと思います。

四日間のフィールドワークが終わった後、私はどうしても他の人を金山町の魅力を知らせたいと思います。そ

して、地域の人の力になりたいです。ですから、今回は地域の人から有屋地区と台湾のカレンダー作りを依頼されていました。このカレンダー通じて、日本人だけじゃなくて、台湾人などの外国人を吸い寄せたいです。今はまだ完成してないけど、もし完成した後、地域の観光を役に立ちたら、非常に嬉しいです。

人文社会科学部 Sさん

4日間のフィールドラーニングでは多くの経験をさせていただき、金山町有屋地区の魅力を肌で感じてきました。その上で、金山町有屋地区の課題とその解決策についても深く考えました。

一回目の活動で最も印象に残っているのは、有屋少年番楽です。小学生が小さいころから地域の伝統に親しんで、一生懸命頑張っている姿を見て、とても感動しました。昔は女子禁制であったことや、楽器も上級生から受け継いだなどのお話を聞くことができました。番楽を披露してもらった後に子供たちとの触れ合う時間があり、金山町の子供たちは年齢、性別関係なく仲が良く、つながりの強さを感じました。また、かんじきを履いてスノートレッキングをしたり、雪遊びをしたりして、雪国ならではの楽しみを経験できました。

二回目の活動では、一回目の活動の時に学生同士で固まってしまったという反省を生かして、地域の方々とたくさん交流しました。地域の方々と一緒にナシ団子を作ったのが印象的でした。地域の方々とは、普段、学生同士では話さないような貴重なお話や、金山町についてのお話をたくさんさせてもらいました。地域の方々に作っていただいた料理がとてもおいしかったです。料理には、山菜が多く使われており、こういった郷土料理も魅力の一つだと感じました。

町の方々から金山町有屋地区の課題は「人が少ないこと」だとお聞きしました。金山町有屋地区には素敵な伝統や文化、魅力があるのに、人が少ないがゆえにそれらが衰えてしまうのはもったいないことだと思いました。そこで、私たちは、解決策として何か形に残って、人々に金山町有屋地区の魅力を伝えられるものを作れないかと考え、カレンダーを作ることにしました。カレンダーには、金山町有屋地区の行事と、私たちの班には台湾からの留学生もいるので、台湾の行事も書き込み、海外の観光客にも目を向けてもらえるように工夫することに決めました。フィールドラーニング中に撮った写真や行事の説明も加えていこうと思っています。カレンダーはまだ製作途中ですが、金山町で学んだことを生かして完成させて、お世話になった金山町に少しでも貢献したいと思います。

最後に金山町有屋地区では、三上さんをはじめ、町の方々に大変お世話になりました。あたたかく迎えていただき、お話をたくさん聞かせていただき、とても感謝しております。ありがとうございました。

人文社会科学部 Nさん

今回のフィールドワークでは、有屋少年番楽の鑑賞やお歳灯準備の手伝い、杵と臼での餅つき、ナシ団子作りなど、金山町有屋地区の伝統文化を体験しました。地域住民の方々が優しく私たちと接してくださり、金山町は人情味溢れるあたたかい土地でした。地域の間人間関係がよく、助け合いの精神をもって生活しているのだと思いました。様々な地域交流を通して、住民の地域の伝統を守り抜き後世に残そうとする意思を感じました。また、住民の方々が話す方言も自分の地元とは全く異なる方言で、この方言も残すべき文化のひとつであると思いました。

4日間を通して、金山町は「過疎地域自立促進特別措置法」により過疎地域に指定されており、過疎化や若者の県外流出による人口減少が課題であると感じました。少年番楽の子供たちに話を伺うと、同学年が自分一人しかいない子がいることがわかりました。実際に生の声を聞くことで課題は深刻であることを実感しました。

人口減少という大きな問題を解決しようと様々な提案が出されたが、私達学生が実行できるようなことがほとんどなく、無力感を覚えました。しかし、直接的な課題解決に至らなくとも、解決への何かの糸口になるようなことを私達は金山町有屋地区にしようと考えました。班で議論したところ、交流人口を増加させるという提案になりました。私たちが町の魅力をPRし、それを外部の人に知ってもらえば町の魅力が広域に伝達され、人がもっと集まると思いました。また、それによって住民にも改めて魅力を知る機会になると思います。

魅力を伝えるための方法としてカレンダーを使うことにしました。カレンダーに有屋地区のイベントや町の文化や伝統を記すことで、四季折々の町の魅力を発信できるからです。さらに、地域のカレンダーとしてだけでなく、日本と台湾のインバウンドカレンダーとしての一面を盛り込むことにしました。なぜなら現在外国人観光客が増加しており、その中でも台湾は訪日外国人のなかでも大きい割合を持っているからです。さらに私たちの班には台湾からの留学生がおり、私たちの班でしかできないオリジナルのものでできると思いました。カレンダーはまだ作成途中ですが、完成できるように頑張ります。

人文社会科学部 Tさん

4日間のフィールドラーニングを通して、伝統行事の魅力やそれに対する地域の方々の熱い思いを肌で感じることができました。様々な体験をして、多くの人とたくさんのお話をさせていただいて、金山町・有屋地区の課題の発見、そして解決策の探求をすることができました。

1回目のフィールドラーニングで特に印象に残ったのは、有屋少年番楽の奉納です。小学生がとても迫力のあ

る演技をしていて、伝統を受け継ぐために一生懸命練習してきたということが伝わってきて、その姿勢を見習わなければと学ぶことができました。1回目のフィールドラーニングの反省としては地域の方々との積極的な交流ができず、地域振興へ真剣に向き合うことができていませんでした。地域資源でもある雪を有効活用するアイデアなどの想像力や、有屋地区に対する知識不足から、課題の発見・探求まで展開することができませんでした。

その反省を生かし、2回目のフィールドラーニングでは役割分担をし、地域の方々から話を聞いたり調べたりして、最終的に情報を共有するという形をとり、積極的な交流を意識しました。そしてお正月ならではの餅つきやナシ団子作りなどを通して、地域の方々がたくさん関わることができました。いろいろなことが便利になり発達している今とは違い、昔の人たちは自分たちで考えて工夫しながら遊んでいたということを年配の方々や雪遊びをして実感し、また、その雪遊びなどで私たち学生より元気に動く地域の方々を見てより一層この有屋地区での交流を増やし、活性化させたいと思いました。「りゅう馬スプリントスキーフェスタ2019」では、小学生などの子供たちと地域の方々がとても密接的で、年齢関係なく交流されていました。これもこういった地域ならではの特徴だと思い、とてもあたたかい気持ちになりました。

人が少なくなってしまう有屋地区に、たくさんの人に来てもらうためには、まず有屋地区の魅力を知ってもらうこと、そして今住んでいる人たちにも改めて知ってもらうことが大切だと私たちは考えました。そのため解決策として行事、旬の野菜の時期などが一目でわかるカレンダー作りを提案させていただきました。空いたスペースには、私たちが食べたり、見たり、聞いたりして実際に感じた魅力や豆知識、移動手段、伝統料理のレシピなどを記載し、楽しい内容にしたいと思っています。私は4日間のフィールドラーニングを通して、有屋地区にまた行って今回の提案だけでなく他にも地域活性化に繋がる政策を自分なりに考えていきたいと思うことができました。そして大きく成長することができたと感じています。本当にありがとうございました。

人文社会科学部 Iさん

今回のフィールドワークを通して、金山町にある沢山の魅力を発見するとともに、貴重な体験を行うことができました。また、大学生活では交流する機会が少ない年代の方々とお話することもできました。それらを通して、金山町の課題がみえてきました。

計四回のフィールドワークを通して様々な活動を行ってきましたが、その中でも特に印象に残ったのは「有屋少年番楽」でした。小学生の男の子や女の子達が、和楽器を演奏したり獅子舞や剣舞をしているのを見て、非常に感動しました。この素晴らしい伝統芸能をより沢山の

の人々に見てほしいと思いました。かつて、少年番楽は「少年」という言葉が表しているように、女の子が参加してはいけないものでした。しかし、子供が減少するにつれて番楽を維持するのが困難となり、女の子も参加することになりました。そのようにしてまで、子供に番楽をしてほしいという地元の人の強い思いに心を打たれました。この番楽に参加している子供達は、毎週金曜日の七時から八時半までの1時間半を練習時間としています。してたがって、練習場所である学校までの送迎といった、保護者さんの協力なしでは成り立ちません。一つの「伝統」を維持するのも、町民の協力なしでは不可能であるということも、番楽を通して実感しました。「伝統」だけではありません。二回目のフィールドワークで参加した、「竜馬スプリントスキーフェスタ」もそうです。このスキーフェスタは金山町のスキースポーツ少年団が参加する大会です。この大会の運営も、有屋スポーツ少年団の保護者の方々が行っています。町で行われる行事も、地域の皆の協力を得て成り立っていると思いました。また、「有屋少年番楽」「竜馬スプリントスキーフェスタ」のどちらにもいえることですが、子供達が参加する活動には、とても活気があるものだと思います。それゆえに、地域復興には人口増加が必須ですが、特に子供を増やすことで活気があふれる町になるのではないかと考えるようになりました。しかし、私達には町の行政や政策を変える力がありません。私達の手で行えることには限りがあります。その限りがある中で行えることは、金山町の魅力を一人でも多くの人に知ってもらうことです。そこで、金山町の魅力をつめたカレンダーを作ろうと考えました。このカレンダーで少しでも多くの人に金山の素敵な魅力を知ってもらいたいと思いました。



地域教育文化学部 Wさん

私は今回のフィールドワークで、多くのことを学び、感じた。至らないところの多い私達を温かく迎えてくださった三上さんを始め、金山町の住人の皆様の優しさに助けられたことが多くあった。

4回目のフィールドワークを通して、金山町の抱えている1番の問題は人口が少ないことだと理解した。番楽の見学をした時に、小学生の子どもたちから実際に話を聞いた。同じ学年の友達が少ないから寂しいんだ。と言っていた。子どもたちが寂しい思いをするのは嫌だし悲しいことだと思ったが、番楽が終わった後に鬼ごっこをして遊んでいる子どもたちを見て人口が少ないからこそ起こるメリットがあるのではないかと考えた。性別や学年を問わず笑顔で声を掛け合いながら遊んでいるのは、人口が多い他の地域よりも縦や横の繋がりが強いからではないかと思った。しかし、子どもたちが寂しい思いをするのはやはり悲しいことなので、金山町の人口を増やすお手伝いを、私たち山大生ができないか考えた。金山町の人口を増やすためには金山町の魅力を知ってもらわないといけない。自分たちでカレンダーを作って魅力を伝えるのはどうだろう、ということになった。12枚綴りの机に置けるようなカレンダーで、グループの留学生の協力を得て台湾との年中行事の違いを載せたり、金山町の豆知識を載せたものを作ることを考えている。

私は、山菜についてかんじきについての豆知識の内容を担当している。金山町に多く見られる山菜については中間学習で調べ済みなので金山町に来てまでも食べてみたいと思わせられるような内容にしたいと思っている。スプリントフェスタでかんじきレースに出たときに、かんじきをぶつけないで走る方法や、速く結ぶ方法を金山町の住人の方から教えていただいたので、それらも書けたらいいなと思っている。また、自分でインターネットや大学図書館を利用してかんじきがどういう経緯で作られ、誰によって考案されたのかなど、かんじきの歴史についても記載できれば、金山町の住人ではない人だけでなく、住人の方々にとっても目新しいカレンダーができるのではないかと思っている。

4日間金山町の方々にお世話になり、フィールドワークという場を与えていただきたくさんの経験をさせていただいたので、私たち山大生はその恩に報いなければならぬと思った。金山町の1番の問題である人口減少を少しでも緩和するお手伝いを、金山町の未来に貢献できるように努力していきたいと思う。そのために、カレンダー完成までに金山町で学んだことを元に豆知識の内容を深いものに仕上げたいと思う。

地域教育文化学部 Aさん

私は、今回のフィールドワークを通して、金山町の魅力と地域振興の難しさ、自分の視野の狭さを実感しました。私がかみみのプログラムに参加した理由は、自分が生活してきた地元の中でまだ知らないこと、魅力を知り他の人々に発信したいということと、地域振興という課題に向き合いながら人の役に立ちたいと思ったからです。私は今回の班の中で唯一の山形県出身者でした。金山町と聞いて、わかっているつもりでしたが実際に事前

学習をすると知らないことばかりで驚きました。

一回目のフィールドワークでは、地域の方々との交流、雪やぶどう蔦を使った活動など金山町ならではの活動をさせていただきました。特に有屋少年番楽をみて学ぶことが多くありました。番楽は有屋地区の伝統行事として受け継がれているもので、小学生の子どもたちを中心に今でも演奏されています。今回は、番楽を実際に聞くだけでなく子どもたちや保護者の方々との会話をする機会もありました。一連の活動を通して感じたことは、有屋地区では子どもたちや大人も含めて地域の人々の関係、つながりが密接であるということです。お互いのことをみんなが理解しており協力して生きていこうという姿をみて感動しました。このつながりは現代では失われつつあるものなので、金山の魅力として伝えていきたいと思いました。また同時に、事前学習の甘さを痛感しました。情報を見て調べただけで地域のことを分かっているつもりでいる自分の姿に気づきました。ですから、二回目に行く前の学習を濃くし現地でしか得られないものを得よう、という目標を決めて二回目に臨むことにしました。

二回目のフィールドワークでは、伝統的に続いているナシ団子作りやスプリントスキーフェスタの運営を体験しました。スキーフェスタには、スキーを一生懸命にし、友達と戦う子どもたちの姿やその姿を応援し支える大人の方々の姿がありました。一回目で反省点としてあがった、地域の方々と自分たちから話し交流する、ということ意識して活動すると、伝統的な文化や新たに始めたスキーフェスタのようなイベントを続けていきたいという思いを聞くことができました。

今回の四日間のフィールドワークを通して、金山町には人のつながりや伝統行事、自然に恵まれているという魅力を実感しました。しかし、有屋地区には人が少なく、伝統が受け継がれなくなったりルールが変わってしまったり人手が足りないという課題がありました。人を増やすためには、ただ単に観光の人を増やすのではなく、交流人口を増やして実際に体感してもらう必要があります。観光をアピールするだけではないという地元の人々の考えを現地での活動で学びました。今回の学びを生かし実際に人が金山町を訪れるきっかけとなるよう、行事や魅力の詰まったカレンダーを作りたいと思います。有屋地区の皆さんありがとうございました。

理学部 Aさん

今回の4日間のフィールドワークでは、金山町の有屋地区の伝統的な文化や行事などを、自ら体験して、肌で感じることによって、様々な魅力を感じることができました。また、それと同時に有屋地区の課題というのも実感しました。

1回目のフィールドワークでは、班員全員での料理作り、御歳灯の準備、少年番楽隊との交流をしたりし

ました。特に、番楽はこれまでたくさんの人たちによって後継されてきた伝統あるものだという事を、代表の人から聞きました。しかし、少子高齢化の影響から、昔は女子は番楽に参加することは許されていませんでしたが、現在は、女子も参加できるようにして、伝統を何とかして引き継いでいるという課題があるということでした。また、「現地の人たちに自分から話しかけて交流することができなかつた。」という意見が出たため、2回目では積極性に配慮して、活動しました。

2回目のフィールドラーニングでは、餅つき・ナシ団子作り、また、「りゅう馬スプリントスキーフェスタ 2019」の準備と運営をしました。ナシ団子作りでは、実家などでも毎年目にするものではありませんでしたが、実際に自分で作るという貴重な経験をする事が出来ました。さらに、「りゅう馬スプリントスキーフェスタ 2019」では、班員の9割が雪の無いところで育った私たちにとっては、初めての光景や経験が多くありました。特に、かんじきという伝統的な履物を履いての競争などをすることで、伝統を感じる事が出来ました。

このフィールドラーニングを通して、私たちは魅力がたくさんあるのに、人が少ないことが課題であると考えました。そこで、まずは交流人口を増やすことが大事であり、その方法としてカレンダーの作成をする事になりました。カレンダーで有屋地区の魅力や年間の行事を伝えたりすることで、今ある伝統を絶やさず交流する人を増やせると考えたのです。さらに、私たちの班には、台湾からの留学生がいるため、カレンダーに台湾の祝日などを盛り込むことが出来れば、私たちの個性を前面に押し出したものになり、カレンダーを目にした人に印象付けられるオンリーワンなものになるだろうという意見もありました。

まだ、カレンダーは完成していませんが、自分たちで完成させることで、私たちが有屋地区で学び、肌で感じた伝統をカレンダーとして形に残すことで有屋地区の地域振興に少しでも貢献出来たらと思います。また、次回以降、金山町にフィールドラーニングで来る山形大学の学生には、カレンダーを引き継いでもらい、その年毎にそれぞれの特徴がみられるカレンダーを是非とも作成してほしいです。

農学部 Fさん

私がこの金山町のフィールドラーニングに参加しようと思った理由は自分の地元が福島県の太平洋側で雪がほとんど降らないため、雪を使った活動をしてみたかったからです。そのため一回目の活動で金山町に着いたときに雪の量の多さに驚きました。そして一回目、二回目ともに雪を使った様々な活動ができたので、素晴らしい経験を積むことができたと思います。このような豊富な雪は金山町の魅力の一つだと思いました。

4日間のフィールドラーニングで私が印象に残ったのは

一回目で見学させてもらった有屋少年番楽です。まだ小学生の小さい子供たちのとても長い言葉を覚えていることや複雑な踊りに感動しました。またそれらが保護者だけでなく上級生からも教えてもらいながら受け継がれてきたということに、地域の人たちの距離の近さ、親しさを感じました。また2回目の活動で行われた竜馬スプリントスキーフェスタの手伝いをさせてもらった際に見た小学生が生き生きとクロスカントリースキーをしている姿も印象に残りました。このクロスカントリーの練習は雪の降った校庭で行われていると聞きました。これらのことからこの金山町有屋地区は子供が様々なことを体験し成長することができる場所だと思いました。

フィールドラーニングの活動の中で地域の人から聞いた有屋地区の課題は人が少ないことです。子供が少なくなり男子だけでは番楽をすることができないため女子が参加できるようにしたと聞きました。人が少なくなることですばらしい文化や伝統が変わるだけでなく衰退してしまうのは食い止めなければいけない問題だと思いました。課題の解決として私たちは金山町の交流人数を増やすことが必要だと考え、カレンダーを作ることにしました。カレンダーには有屋地区の行事だけでなく番楽や山菜についての知識や歴史についても書きます。カレンダーを見た人が有屋地区に関心を持つ、行ってみたいと思うだけでなく、有屋地区の人が自分たちの住んでいる地区の魅力を改めて感じる事ができるようなものを目指します。



最上町の人・自然・文化に触れよう②

活動状況

○実施市町村：最上町

○講 師：放課後子ども教室事業ワイルドエドベンチャースクール（コーディネーター大場満郎）、
その他地域の方々

○訪 問 日：平成30年10月27日（土）～28日（日）、平成30年11月24日（土）～25日（日）

○受 講 者：理学部2名、工学部3名 以上5名

○スケジュール：

1 回 目	2 回 目
【1日目】10月27日（土）	【1日目】11月24日（土）
08:00 山形大学発 09:45 大場満郎冒険学校着オリエンテーション 10:00 ワイルドエドベンチャースクールに参加 （野菜収穫販売体験等町内小学生との交流） 12:00 昼食（おにぎり持参） 引き続きワイルドエドベンチャースクールに参加 14:30 中央公民館着 15:00 ワイルドエドベンチャースクール終了 16:00 中央公民館発 16:30 宿舎着 夕食付	08:00 山形大学発 09:45 大場満郎冒険学校着オリエンテーション 10:00 ワイルドエドベンチャースクールに参加 （町内小学生との交流） 12:00 昼食 引き続きワイルドエドベンチャースクールに参加 14:30 中央公民館着 15:00 ワイルドエドベンチャースクール終了 16:00 中央公民館発 途中スーパーにて夕食、朝食の買い出し 16:30 宿舎着 夕食自炊
【2日目】10月28日（日）	【2日目】11月25日（日）
9:00 宿舎出発（朝食付） 9:30 町内小学校文化祭見学 12:00 昼食（町内飲食店にて各自注文を予定） 13:00 町内見学および体験 16:00 中央公民館発 18:00 山形大学着	10:00 宿舎出発（朝食付） 10:30 大場満郎冒険学校 石釜によるピザ作り体験 12:00 昼食（手作りピザ） 13:00 大場満郎さんの講話・懇談 16:00 冒険学校発 18:00 山形大学着

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

理学部 Kさん

私は今回、10月27、28日と11月24、25日の4日間にわたりフィールドラーニングで最上町に触れてきた。この4日間は私にとって初体験のことをたくさん経験し、最上町について多くのことを知る貴重な経験となった。

第1回フィールドラーニングでは最上町の人、自然、文化にたくさん触れる経験となった。1日目にはワイルドエドベンチャースクールに参加し、小学生と一緒に里芋、大根を収穫し町内を売り歩くという体験をした。最初のころは恥ずかしそうな様子で話していた子供たちとも野菜を売り歩くころには日常生活の話をするなど、すぐに仲良くなることができた。町内の人たちは子供たちが収穫した野菜を嬉しそうに買う姿を見ることができた。この時に感じたことは町内の人々同士の仲が良く、私の育った町では見られない特徴だと感じた。その日の夜には最上町の瀬見温泉のある旅館に泊まり、自然にも触れることができた。2日目には午前中に2つの小学校の文化祭を訪れ劇の発表をみるという、経験をした。前日に野菜を売り歩いた子供たちの姿も見ることができ、前日にはみられなかった一生懸命発表する真剣さを感じた。そのうち1つの小学校は来年度に廃校が決まって町の少子化が原因によるものだと思った。午後には松尾芭蕉ゆかりの宿の法人の家の見学を行った。屋根を修理する職人が非常に少ないことが分かった。その近くにある日本一低い分水嶺をその後に見た。

第2回フィールドラーニングでも最上町の人、自然、文化に触れた。1日目の午前にはワイルドエドベンチャースクールでお茶の文化を小学生と経験した。小学生の数は前回よりも増えていて、その理由としては前回の子供たちが友達を誘ったことによるものであった。昼休みには小学生と鬼ごっこをして遊んだ。小学生の底のない元気よさを感じることもできた。午後には押し花でしおりを作った。子供たちは真剣に自分オリジナルのしおりを作っていた。この1日で小学生は和の文化を体験する貴重な1日になったと思う。2日目にはピザ窯でピザを作り、午後には大場満郎さんのお話を聞いた。大場満郎さんの語る話は彼の経験を通して感じたことの内容で、これからの生き方を考えさせられるとても良い経験になった。

この4日間を通して感じたことは最上町はとにかく良いところだということだ。地域の人はとても親切だった。その中で最上町の課題として一番は人口減少だと考えられる。小学校の廃校が決まっていたり、大きな温泉宿も閉館してしまっていたりといったものが見られた。その解決のために役場の方は様々なこと精一杯行っていると感じた。その様な中で私が考えたことは子供たちの

力を借りるといったことである。子供たちが与える影響力はとても大きな力だと感じた。子供たちがたちの力を通して最上町のPRをぜひ行ってほしい。また今回経験したことを私たち自身も他社に伝えていきたいと思った。



理学部 Sさん

最上町での体験を通して、多くの事を発見することができた。

一つ目は、同じ地域の人通しのつながりが非常に大きいところである。それはとりわけ、フィールドランニングの一回目にワイルドエドベンチャースクールに参加した時に感じた。ワイルドエドベンチャースクールとは、地位の人々が子供の教育をサポートする子供たちの体験活動である。その時のワイルドエドベンチャースクールでは、大根等の野菜収穫並びに販売等を行う子供たちの手伝いをした。野菜販売のために街中を子供たちと共に歩いたが、子供たちは通りすぎる多くの人と「こんにちは」と親しげに挨拶していた。子供たちの、より大きな野菜を渡そうとしている光景も非常に印象に残っている。しかし、子供たちの注意力が散漫であり、時折危ないと感じた。また、町内小学校の文化祭見学を通して地域との交流の深さを感じることもできた。例えば、大人の人々と子供たちとで「大谷大漁唄い込み」という最上町独特の発表を行っていたところだ。最上町の子供たちと大人との関係は、自分の地元と比較し、かなり親密である。その関係は、最上町が持つ大きな財産であると感じた。

二つ目は、最上町にはいくつもの興味深い場所があるところだ。その一つに、松尾芭蕉ゆかりの宿である「封人の家」周辺が挙げられる。「封人の家」の建物の様式や技法は元禄をくだらない古さが見られる。その建物を維持するために、一年で何千万円もかかるという話には驚かされた。「封人の家」周辺には分水嶺も見られる。この分水嶺は日本で最も標高が低いとされ、非常に興味深い。また、その近くに、小さな販売所が見られる。そこで私は鮎をいただいたが美味であった。

三つめは、最上町出身の大場満郎さんの持つ経験が貴

重であり、多くの人に影響を与えることである。実際に大場さんの話を聞いた私もその一人である。大場さんは、世界初の北極海単独徒歩横断に成功した人である。その際の大場さんの経験は非常に興味深く、またその体験から大場さんが学んだことや感じたことも実際に聞くことで、大場さんの凄さを理解した。特に、北極海単独徒歩横断中に支えになったものとして「地元」を挙げていたことが印象に残っている。大場さんはワイルドエドベンチャースクールにも深く関わっており、子供たちが大場さんから多くの事を学ぶことが予想される。

以上より最上町は魅力的な街だといえる。しかしそれは、実際に行ったからこそ発見できたことである。最上町に行く前は、その魅力を全く知らなかった。よってまずは最上町について多くの人に知ってもらうことが、さらなる町の活性化につながると考える。

工学部 Sさん

今回私たちは、フィールドワークとして最上町を訪れることとなったが、私は、山形県出身でありながら最上町のことについてまったく知らなかった。事前学習の段階では、最上町の課題として、人口の減少や老年人口の割合の増加による生産年齢人口の減少が問題になっているという事実しかわからなかった。こんな状況で体験学習を迎えた。

はじめに、大場満朗冒険学校にてワイルドエドベンチャースクールに参加した。ここでは、子供たちと一緒に大根や里芋を収穫して街中を売り歩くものであった。ここで私たちはワイルドエドベンチャースクールにスタッフとして参加した。売り歩く際にたくさんの家にチラシを配るのだが、子供たちが家に宣伝しに行くと、顔見知りのように大根を買ってくれる人が多かった。この様子を見ると子供たちと地域の人との距離がとても近く感じられた。しかしその一方で、子供たちの緊張感が無いせいか、道路に急に飛び出す子がたくさんいたのが目立った。このワイルドエドベンチャースクールは、自然の中で冒険の心を持ちながら教育するというものである。このような細かな部分からでも学ぶことができることがわかる。

次の日には、町内の向町小学校と赤倉小学校の文化祭を見学しに行った。赤倉小学校は、一学年が少人数で合併する話を聞いたがそれを思わせないような発表であったと感じた。

封人の家では、とても歴史的な建物であることを知り、伝統的な保存方法で建造物を守っていることが分かった。また、封人の家のかやぶき屋根は、直せる人がほとんどいないことを知り、国の重要文化財に指定されているものが残せなくなる可能性があるのがとても不安である。

二回目の体験学習で、初めにワイルドエドベンチャースクールで和菓子、お茶の体験をした。お茶が出されるま

でに様々な礼儀作法があることを知った。さらに、ここでは、裏千家について学んだ。その次に押し花クラフトの体験をした。この体験は自分で好みの押し花を選んで詩織を作るものであった。これらの体験は、小学校の時に普通に生活しては経験できないものであり、ワイルドエドベンチャースクールの教育の部分に大きくあてはまると思う。

次の日は、大場満朗冒険学校でピザ作りの体験をした。ここでも普段できないような経験をすることができた。そのあと、大場満朗さんとの対話をした。大場満朗さんは、南極や北極海の単独横断成功など様々なことに挑戦してきて、人生の糧をたくさん学ぶことができた。特に何か挑戦した時点で冒険しているという言葉が印象に残っている。この大場満朗さんとの対談を経ると大場満朗さん自身が人生の糧のような気がする。

二回の体験学習を通して、最上町の魅力を少しだけでも理解できた気がする。しかし、この魅力は最上町に来て、人や自然、文化と触れ合わなければ分からない気がする。最上町にもっと人が来るようにうまくPRできれば良いと感じた。

工学部 Kさん

私たちは、フィールドワークで最上町を訪ねた。そこで様々な発見、気づき、出会いがあった。それを以下に書く。

初めに、今回のフィールドワークは課題発見型というより、最上町のいいところを体感して、身の回りの人にそれをPRするというものであった。（このことは事前に知らされていたわけではなく、体験一回目の夜の反省会で担当の阿部さんから告げられたことである。）

また、全体を通して大場光郎さんがマネジメントする「ワイルドエドベンチャースクール」にサーポーターとして参加している。

<一回目について>

一日目は、ワイルドエドベンチャースクールに参加して、小学生と一緒に大根と里芋の収穫、水洗い、町での移動販売を行った。ここでの私たちの役割は小学生の補助である。まず、収穫した大根と里芋を川の水で洗った。自分たちは長靴を持っていなかったため裸足で川に入って土を落とした。川の水がとても冷たく大学生は怯んだが、小学生は水の中で寝そべるほど元気に仕事をこなしていた。次に全体を二班に分け町へ売りに出かけた。私たちはメガホンでの呼びかけと小学生の誘導を行った。すると町民がたくさん出てきて完売まで時間はあまりかからなかった。小学生が少ないのもあったが町民と小学生との親しさが強く印象に残っている。だが、地元慣れすぎているあまり、交通マナーや挨拶などをおろそかにしがちだと感じた。これに対し少し都会へ出かせるといっても手ではないかと感じた。

二日目は最初、小学校の文化祭へ行った。2校行って

きたのだが、そのうち一つは来年閉校するところであった。そこは生徒全員の仲が良く誰も劇を笑う人はいなかった。これは大規模小中学校が見習わなければならないとこれである。

次に松尾芭蕉が訪れ唯一現存する民間人の家である「封人の家」へ行った。とても珍しいものであり国もお金を出すくらいの貴重さであると感じた。維持にも毎日手が込まれていた。だが正直人があまり来ないのではないかと感じた。道路とかを見ていてもそこへと誘導する看板やのぼりを見かけなかった。結構大きな道路の路肩にあったので途中の道の駅のようにして大々的に売り出すのもいいかと思った。

最後に分水嶺へといった。ここは日本で一番低い日本海と太平洋の分水嶺であった。その水を飲んだがとてもすっきりしていて雑味がなく飲みやすかった。これも売り出せるポイントではないかと考えられる。

<二回目について>

一日目は前回同様ワイルドエドベンチャースクールに参加した。今回は日本文化を味わう会であり茶の作法を学んだ。まず餡を色付きの餡で包み、絞りで絞って模様をつけ和菓子を作った。そのあと裏千家の作法で茶をたて、作法にのっとっていただいた。(裏千家とは茶の作法の流派であり特徴として泡を立てて茶をたてることがあげられる。)ここでこれは海外に行っても日本が誇れることであるということ学んだ。当時小学生は自分の番になると熱心に学んでいてとても感心した。中でも足がしびれているのに正座を崩す人がいなかったのが印象的である。

次に全員でお昼ご飯を食べ、昼休みには仲良くなった小学生と鬼ごっこをした。小学生が鬼を買って出て、大学生を追いかけるのだが私達に引けを取らない体力で追いかけてくる小学生にはとても驚かされた。

午後は押し花でしおりを作った。講師の方からお話を伺い、全員個性のある作品ができた。これも後世の引き継ぐべきである文化のひとつであると感じることができた。

2日目は大場光郎さんとの交流の日であった。小学生は参加していない。午前中はピザ作り体験をし、おなかを満たした。午後は交流会をした。最初、話が弾むものかと考えていたが光郎さんも急だったようであまり話が弾まなかったため、私が質問攻めにした。例えば、海外行った時の日本人の扱われ方や言語の壁についてである。どれも納得のいく答えでとても説得力があり感激した。私自身も地元を冒険するので、世界の冒険家に話を聞くことはとても嬉しかった。また、この人を上回りたいとも感じた。とても貴重な機会絶対忘れられない時間になったと思う。

<まとめ>

全二回の体験を通して私は、最上町はとても居心地の良い場所であると感じた。なぜなら、人とのつながりの

温かさを十分に感じる事ができたとし、生活するには窮屈ではないと感じたからだ。だがその反面とてもくすぶっているとも感じた。例を出すと、人同士のつながりが強すぎるあまりかワイルドエドベンチャースクールのチラシには大場光郎さんの写真は載っているのだが名前と成し遂げたことが載っていないのだ。これでは、地元こんなすごい人がいるということがいまいち伝わらず第三者まで情報が回らない。そのため「北極単独踏破成功者、大場光郎によるワイルドエドベンチャースクール」のようにするのもいいかと思う。また、景色がきれいなことから一番写真をきれいにとりSNSで「いいね」を稼いだ人が温泉無料にして知名度を高めたりするのもいいかと思った。

今回の経験はとても自分のためになったと感じた。この経験を生かして、これからを過ごしていきたい。

最後に山形大学をはじめ、地元の小学生、大場光郎さん、担当の先生方へ感謝を示したい。とても貴重な経験ありがとうございました。

工学部 Yさん

私は今回フィールドラーニングー共生の森もがみの最上町の人・自然・文化に触れよう②に参加した。活動は1回目10月27、28日の2日間と2回目11月24、25日の2日間、計4日間であった。

1回目。

1日目の午前の活動は大場満郎さんが開くワイルドエドベンチャースクールのスタッフとしての参加であった。最上町の小学生は活気があり男の子も女の子も関係なしに元気であった。採取した大根と里芋を小川で洗い流す光景は山形市でも私の地元の栃木県でも見る事の出来ないものであった。お昼ご飯には採取した大根を使った豚汁を食べながら小学生と交流した。午後は採取した大根と里芋を地元地域の方々へ販売に出かけた。荷台に沢山の里芋を積み、それでも乗らない分を軽トラックに乗せて二つのグループに別れて回った。公道を回るため危険を伴うことが多く特に注意をしなければならなかった。最上町の小学生は少し歩けば知り合いに会いまた少し歩けばまた知り合いに会う。このような地域との関わりが深いことも最上町の特徴なのだ改めて感じた。しかし、周りが知り合いが多く安心出来ることとは裏腹に注意力が欠け道路を飛び出したりなど安心が裏目に出てしまうこともあった。このことは一緒に活動したメンバー全員が感じていたことで気になったことであった。2日目は最上町の小学校2校の文化祭にお邪魔した。片方の人数の少ない小学校は廃校になることが決まっていた。しかし、その小学生の発表はどの子も主役のように元気に声を出していた。廃校になることを跳ね飛ばすくらい素晴らしい発表は私たちに勇気を与えてくれた。発表を見ていると1日目にいた小学生がこちらを見て気がついてくれたのか笑って手を振ってくれ

た。その時はとても嬉しく心が温まった。
2回目。

1日目の活動は前回同様ワイルドエドベンチャースクールに参加した。まず、和菓子・お茶体験をした。和菓子の作り方を地元の和菓子屋さんから学びひとりひとつ作った。布を使った模様は初めて見るものであった。お茶は入れ方の作法を学び他の人に提供した。お茶には3つの流派があり私たちが体験したのは裏千家という流派であった。泡を立てるのが裏千家である。午後はしおり作りをした。押し花の要領でカラフルなしおりを作った。夜には民宿でお好み焼きをお腹いっぱい作って活動のお話や学校のお話を先生や先輩とした。聞きたかったことや気になっていたことを緊張せずに聞くことが出来て参考になった。2日目は大場満郎さんのもとのピザ作りをした。ピザにはそれぞれの個性がよく出た。午後は大場満郎さんのお話を聞いた。聞いたと言うよりは聞きたいことを質問してそれに応えて頂く形で対談のようになっていた。大場満郎さんのこれまでの経験からみた景色や考え方を学べた。特に、自分のやりたいことに挑戦することが大切で、何もしないことが勿体ないと教えて頂いた。私は起業したいと考えていて、それについて悩みや不安が多くあったが話を聞いたことによって今では失敗を恐れずやれると思う。

今回の活動を通して最上町に抱いたものはどれも私たちの地元では味わえない豊かなものであった。最上町は地元との結び付きが強く地元で愛された小学生が多くいて、それは小学生だけでなく中学生も高校生も同じであると思う。しかし、生徒が少なく学校がなくなってしまうのも事実である。少子高齢化の影響を肌で感じることでより重大なことであると思った。最上町には素晴らしい自然と人間関係があり、この魅力を広げていくことができれば少しずつではあるが改善していくと思う。これからはこの魅力をそとに広げていくことを考えるのが大切であり、私達は最上町の魅力を外に発信するひとつの手段になれば良いと思う。



子どもの自然体験活動支援講座2

活動状況

○実施市町村：真室川町

○講師：山形県神室少年自然の家職員

○訪問日：平成30年12月8日(土)～9日(日)、平成31年1月19日(土)～20日(日)

○受講者：地域教育文化学部4名、工学部3名、農学部4名

以上11名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p>【1日目】12月8日(土)</p> <p>08:00 山形大学発</p> <p>10:00 神室少年自然の家 着 オリエンテーション</p> <p>12:00 昼食 地域体験 ～「人」と「文化」～ 夕食づくり</p> <p>20:00 入浴</p> <p>21:00 「伝承文化ふれあいキャンプ」の企画運営 内容と進め方について</p> <p>22:30 就寝(館内泊)</p>	<p>【1日目】1月19日(土)</p> <p>08:00 山形駅東口発</p> <p>10:00 神室少年自然の家着・打合せ</p> <p>10:50 わんぱく探検隊～冬の巻～ 出合いのつどい・シュラフ・テントづくり</p> <p>12:00 昼食 雪上活動① 夕食づくり 雪上活動②</p> <p>21:00 就寝(テント泊)</p> <p>ミーティング</p>
<p>【2日目】12月9日(日)</p> <p>06:00 起床 朝食 準備</p> <p>09:20 「伝承文化ふれあいキャンプ」開始 みんなで遊ぼう</p> <p>10:00 あったか料理づくり 昔語りを聞こう</p> <p>13:00 注連飾り(しめかざり)作り</p> <p>15:00 別れのつどい 後片付け・ふりかえり</p> <p>16:00 神室少年自然の家発</p> <p>18:00 山形大学着</p>	<p>【2日目】1月20日(日)</p> <p>06:00 起床 テント・シュラフ干し</p> <p>07:30 朝食 雪上活動③</p> <p>12:00 昼食</p> <p>12:30 別れのつどい</p> <p>13:15 子ども解散 後片付け・ふりかえり</p> <p>16:00 神室少年自然の家発</p> <p>18:00 山形駅東口着</p>

授業記録

○活動レポート「私はがみで考えた！」

地域教育文化学部 Sさん

この講義は、大学のパンフレットに掲載してあったため入学前から知っていて興味があった。「せっかく山形に来たのだから山形でしかできないようなことをしてみたい」「地方に住む年配の方や、子ども達などの幅広い世代と関わりたい」という思いから、前期に受講を希望したが、残念ながら抽選落ちしてしまった。しかし、後期も開講されることを知り、自分がしたいと思う活動内容と近いプログラム⑧選択した。最上地域は雪が多く寒さの厳しい地域であることを知っていたが、私の地元は大雪に見舞われることはほとんどないため、バスが最上地域に到着して、目の前に広がる真っ白な世界と、自分の背丈ぐらいの積雪にとっても驚いた。寒さが厳しい時期の活動であったが、たくさんの方のおかげで、とても価値ある時間を過ごすことができた。

1回目の活動では、関東老人クラブの皆さんとの交流、「伝承文化ふれあいキャンプ」の企画運営を行った。この活動からは、主に異世代交流を通じた学びの重要性を学んだ。関東老人クラブの皆さんと注連飾りの土台を制作する中で、真室川町に伝わる年越しや新年の文化を聞いた。特に、ぼたもちに関しては私の地元とは作り方や味付けが異なっていて、聞いていてとても興味深かった。2日目は、参加者の方とぼたもちを作ったり、真室川音頭を実際に踊ったりと体験を通じた活動をした。前日に関東老人クラブの方から聞いた注連飾りの意味を伝えるとき、参加した子ども達が真剣に話を聞いてくれた姿がとても印象的だった。別れの集いの際、同じ班のお母さんから「大学生の皆さんと関わることは、子どもたちだけじゃなくて、親の私たちも新鮮でとても楽しかった。」と感想をいただいた。この時、企画運営側の私たち大学生が、参加者の方に何か意味のある存在となることができたと思えて、ぐっと胸にくるものがあった。私自身、家族以外の年配の方や子どもたちと触れ合うことが久しぶりで、活動する中で家族のような温かさを感じ、とても楽しかった。世代を超えた活動はそれぞれに意味のあるものになること、そしてそのような機会から、伝承文化のような次世代に残すべきものを伝えることができると考えた。

2回目の活動では「わんぱく探検隊」の班付きスタッフとして参加した。小学3・4年生の子どもたちと一緒に雪の中で活動をしたが、私自身初めてのことでばかりで戸惑ってしまう場面が所々あったように思う。子どもたちは、私が思っていたよりもシュラフづくりやテント立てなど自分のことは自分でやっていて、逆に助けてもらうこともあった。子どもたちをどこまでサポートをするかを考えながら見守り、お互い協力し合う姿や、できないと

ころまであきらめない姿に感動した二日間だった。私は将来小学校教師になることを考えているため、この活動で子どもたちと触れ合うことができるのをとても楽しみにしていた。わずか二日間の中で、子どもたちのいろいろな姿を見ることができたのと同時に、声のかけ方などまだまだ自分に足りないことがあると気付くこともできた。

大学の講義型の授業では学ぶこと、感じることのできないような計4日間の活動内容だった。私自身とても楽しみながら活動することができたが、2回の活動とも、参加者の笑顔を見ることができたことが何より嬉しかったし、この講義を選択してよかったと思えた。この講義を通して感じたことを来年参加する1年生に伝えたり、将来の自分へとつなげたりしていきたい。



地域教育文化学部 Iさん

一回目の活動では、伝承文化と異世代交流の必要性について学びました。所長さんの講話の中で、言い伝えや伝承文化のように伝わってきたものには、必ず意味があるということを知りました。確かに、何も意味のないものは流行したとしても、長くは続かず、すぐに次の新しいものが出てきます。そのため、昔からあるものは皆、伝えられねばならない重要な意味を持っているはずなので、大切にしていってほしいなと思いました。伝承文化の一つのしめ飾りづくりでは、今まで考えたことのなかったしめ飾りに飾られている縁起物の意味を一つ一つ丁寧に、関東老人クラブの方から教えていただきました。それと同時に真室川町で行われている活動についてのお話も聞くことができました。今はお年寄りの一人暮らしや核家族化が進んでいる世の中です。今回のように、世代を超えて交流ができたことは、伝統文化ふれあいキャンプの参加者にとっても、私たち大学生にとっても、普段聞くことのない話を聞くことができたり、若いパワーをもらったりと、貴重な経験になったと思います。このような機会を多く設けていくことで、社会の活性化につながるのではないかと感じました。

二回目の活動では、わんぱく探検隊の班付きスタッフ

として参加しました。ギャング・エイジと関わるということで最初は不安でいっぱいでしたが、いざ関わってみるとその不安はなくなりました。私の中のイメージとはかけ離れていたからです。この世代の子供たちは他人のことには無頓着なため、協調性は見られないと思っていました。しかし、班の中で作業がうまく進まない子がいれば、自分の分を終えた子がサポートしたり、隣に行き、自分の分をやりながら手伝っている子が見られました。この様子を見て、協調性がないと思っていましたが、実際に関わってみなければわからないものだと感じました。また一回目の活動の後に課題としていた子供の注意の仕方においては、最初の方は注意したら、雰囲気が悪くなるのではないかと考えていましたが、1日目の夕方に向けてみたところ、理由を聞き納得してくれました。このことから、注意は子供にとって聞きたくないものではなく、理由が子供にとって納得できるものであれば聞いてくれるのだということ学びました。

二回の活動を通して、人と関わることの大切さ、人との関わり方を学びました。たくさんの人々と関わったことで自分の考え方が広がったと思います。このプログラムを通して得た、新しい視点をこれからの生活の中で生かしていきたいです。

地域教育文化学部 Jさん

わたしがもがみで考えたことは3つある。一つ目は、違う世代の方と話すことの難しさと楽しさだ。年配の女性の方と話す機会があり、自分がどこでアルバイトをしているか、どこの高校かだったのかなど、山形県民が分かる話題で盛り上がる事ができた。共通の話題を見つけて話すことで楽しくお話しできると分かった。小学生の男の子とは、静かな子だったので、自分が一方的にゲームのことや勉強のことを男の子に質問した。会話になっているとは思えず、男の子が楽しんでいるか心配だった。しかし、最後の感想発表で、男の子が「たくさん話せて楽しかった」といっていて、自分から積極的にかわりにいくことは意味があるということが分かった。自分も小学生の時、静かな子だったが、年上の人に質問されるのが嬉しかったことを思い出した。子供たちのお父さん方ともお話しする機会があり、どうしたら子供たちが中心になって活動ができるだろうか？を一緒に考えていただいた。常に子供のことを第一に考えているお父さん方の思いが伝わってきて、自分もこんな親になりたいと感じた。

二つ目は小学校3,4年生の子供たちとの接し方についてである。小学校3,4年生の子供たちは寒さも忘れてしまうほどとても元気で、自分のことを話すのが大好きな子供たちだった。一日目は、積極的に話しかけてくれる子の話をたくさん聞いた。あいづちをしたり、質問をしたりしながら聞いた。自分が親になったら、子供の話をうんうん、と否定しないで聞くようにしようと思った。また、

なるべく公平な立場で、子供を尊重して接するようにした。具体的には、自分の友達に接するように自然に話しかけた。そうすると、子供たちは嬉しそうだった。さらに、子供たちに「これどうするの？」や、「これお願いだからやってくれる？」と頼りにすることでも子供たちは喜んでいて、頼りにされることは子供にとっても嬉しいのだと思った。二日目は、一日目はなかなか話せなかった静かな子たちとも話せるようにしよう意識した。具体的には、みんなが分かる共通の話題を出して、一人一人に順番に聞くということをした。どんな教科が好きかという話題をだして、〇〇ちゃんはどう？と聞いた。そうすることで、静かな子の一面が分かり、嬉しかった。その子にとっても、自分のことを話すことが楽しいと思ってくれると嬉しいと思った。リーダーの子は静かな子で、一日目の終わりあたりに「こんなに班長が前で発表するものとは思わなかった、もうやめたい」といっていたが、他の子供たちに大丈夫だよとか、もうやるしかないよと励まされていて、続けたようだった。その子は最後まで選手宣誓も含めやり遂げてくれた。子供たちが発表などを終えるたびに「ナイスだったよ」というねぎらいの言葉を言うようにした。最初は嫌々でもいいので人前に入る経験を重ね、人前に出るときの自信を持つようになってくれたらいいなと思った。

地域教育文化学部 Tさん

今回のフィールドワークは、もともとある事業のスタッフとして大学生企画などを考え、活動するという内容であった。そんな中でも様々なことに気づき、学ぶことができる機会となった。

1回目のフィールドワークの狙いは、伝承文化を学ぶことと異世代交流。伝承文化とは、昔から受け継がれてきた仮説がある文化のことであり、伝統文化ともまた違う。老人クラブの方に注連飾りの作り方や、注連飾りに飾る物の意味をひとつひとつ教えていただいた。最上地区ならではの工夫がなされた伝承文化を理解したうえで、気持ちを込めてつくる事ができた。異世代交流は、小学生から老人クラブの方と、幅広い年代層の中での活動となった。ぼたもちを作り、真室川音頭を踊り、最後に全員で注連飾りを作成した。このような幅広い年代層が集まる事ができる機会は中々設けられないのではないかと。こういった機会に受け継がれてきた伝承文化を伝えていくべきなのではないか。

2回目のフィールドワークは、小学校3,4年生が対象のわんぱく探検隊という冬の行事の班付きスタッフとしての活動。私の班の小学生は自己主張が激しく、どのようにして歯止めをかけるべきなのかが分からなかった。そのため、1日目は小学生の元気で自由な言動、行動をただ一歩引いて見守ることしかできなかった。どのようにして指導したら聞いてくれるのか、どのようにしたら気分を害さないで理解してくれるのか、とても悩ん

だ。しかしその夜の所長さんからのお話の中で、嫌な言動、行動にははっきりと怒ってもいいという心強い一言をいただいた。その言葉通り、2日目は良くないことはしっかり指導するよう心掛けると、1日目よりも活発に行動してくれるようになり、次第に協力性や人を思いやる姿もたくさん見ることができた。少し意識を変えてみるだけでも、小学生の意思が変わることを学んだ。最後には、大学生の企画が楽しかったという言葉もかけてもらい、とても嬉しかった。

1回目と2回目では全く活動内容が異なってしまうが、1回目の事業では、昔ならではの伝統は受け継いでいかなければならない大切な伝統なんだということ学んだ。こんなに幅広い年代層の方と関わりを持つことは中々ない経験だったことから、今回のような事業を大切にしてほしい。2回目の事業では、小学生の班付きスタッフということで、私たちがすべて引っ張るのではなく、小学生が主体となって活動できるようにサポートしていくのが大事だと感じた。

工学部 Sさん

1回目の活動では注連縄作り・真室川音頭体験・ぼた餅作りを行った。活動に際し、「真室川の伝承文化を五感を使い味わうこと、1回目は老人クラブの方々と交流がメインとなるため、交流する時に意識すべきことを探すこと」を目的とした。注連縄作りでは特に自分は米沢市出身なのだが、自分の家では着けない昆布を真室川では付けることに驚いた。またぼた餅も米沢では黄土色のきな粉しか食べないが、真室川では緑色のきな粉を食べているとわかり驚いた。これらの体験により同じ山形でも大きな地域差があるとわかった。真室川音頭体験では保存会の人たちが熱心に踊り方を教えていたことから、地元の伝承文化への愛や情熱を感じた。

2回目は子どもとのスノーハイク・テントでの雪中泊・雪中運動会といった雪上活動が中心であった。どれも慣れない活動であったが、同班の子ども達と協力しながら取り組めたため、スノーハイクは誰一人ケガすることなく安全に楽しく、テント設営・撤去は素早くすることが出来た。また、注意事項・マナーの周知の徹底にも努めることができた。昼食・夕食時間などでは、率先して子供たちの話を聞いたり子供たちと距離を縮めるゲームをするといった活動ができたため、打ち解けることができた。特に、最後の雪中運動会ではスノーハイクやテント泊で培われた私達と子ども達との絆を十二分に発揮し優勝することが出来た。加えて優勝に向け一致団結し作戦会議をしながら挑んだプロセスも子ども達に楽しんでもらうことが出来た。

2回の講義を通して異世代間交流をする際、お爺ちゃんお婆ちゃん世代と交流するときは適宜聞き役に回ることや相手の特技に興味を示し教を乞うことを意識することで楽しんでもらいつつ活動できるとわかった。

また子供たちと交流するときにはすべて指示を出すのではなく状況にふさわしい言動を考えるよう促す、また考えるヒントを与えることを心がけるとうまく注意事項やマナーに関する注意を伝えることができたため円滑に双方楽しく活動できることが分かった。しかし世代ごとに特徴があっても、一人一人考えていることは異なるため、今回の経験も参考にしつつ毎回相手に楽しんでもらうとともに自分もより多くの学びを得るには相手にどう接するべきか常に考える必要があると思った。

工学部 Oさん

一回目の活動では伝承文化に親しみを持ち、同時に異世代交流をするという活動を行った。初めに、フック船長から初対面の人と仲良くなる秘訣を教わった。大事なことは名前を呼びあうことであり、しっかりしたコミュニケーションをとることだと分かった。その後、地元の老人クラブの方々と一緒に翌日の注連飾りづくりの準備を行った。最初は緊張して老人クラブの皆さんと和することがあまりできなかったが、老人クラブの方々が温かく声をかけてくださり交流を深めることが出来た。その中で独特の訛りや伝承文化に関する話を聞くことが出来た。地域の人の温かさを感じながら注連飾りを作ることが出来た。二日目は親子と老人クラブの方々と一緒に注連飾りとあったか料理を作った。子供たちはとても元気があって会話や行動についていけないことが多々あった。危ない場面が出てきたときに注意できずに親御さんが注意している姿を見て自分からもっと厳しい言葉をかけなければいけないと感じた。誰一人けがなくできたことはよかった。一回目活動で学んだことはイベントの進行をスムーズに行うことの難しさとそれにあたって準備の大変さを学びました。私はゲーム担当だったが、事前にリハーサルをしてなく、本番に焦ってしまったのでこの反省から準備がとても大切だと感じました。二回目の活動ではあらかじめ準備をして臨みたいと感じた。

中間学習では一人一人の反省をいかして次回のもがみにむけて企画の準備をした。企画は複数の案が出たが、話し合いがスムーズにいきすぐ決めることが出来た。

二回目の活動では小学3,4年生と二日間を共にした。子供たちは初めから自由奔放に行動していた。子供たちが危険なことや自分がされて嫌なことをしたときに注意することが困難だった。一日目の最後に子供に振り回されずに、厳しくすることで子供たちが自分で考えて行動できるようにしようと考えた。二日目は雪中運動会をやった。子供たちはどうやったら勝てるのか知恵を出し合っていました。自主性と協調性を見ることが出来てすごいと思った。結果はどうあれ一位のチームを讃え、自分たちが精一杯努力したことを胸張ってる姿は子供とは思えなかった。一日で心が大きく成長した子供たちを見ていて微笑ましかった。

今回の二回に分けての活動を通じて自然にふれあいながら異世代交流をするという普段体験できないよう体験をすることが出来た。体験学習は終了したが、これから老人や子供たちとかかわるための架け橋ができたので学んだことをいかしていきたいと思った。



工学部 Sさん

私は今回真室川町を訪れ、「子供の自然体験支援体験講座2」を通して普段の座学中心の授業では得られない学びや経験を得ることができました。

まず、1回目のフィールドラーニングでは、真室川町関栗地区の老人クラブの方々から小学生や幼稚園児と一緒にふれあい、活動することで異世代交流を体験しました。この異世代交流については今まで深く考えたことがあまりなかったのですが、自分自身年齢が上がるにつれて異世代交流が少なくなっていたことに気づきました。また、神室少年自然の家の所長さんもおっしゃられたように、異世代交流をすることでその地域に伝わる伝承文化が次の世代につながっていくことを実感しました。実際に、私たちは、老人クラブの方々から注連飾り作りや地域の食事やそれにまつわる言い伝えについてお聞きし、子供たちに伝える側と老人クラブの方々から教わる側の両方に立って異世代交流をすることができました。そして、伝承文化とは形がありしっかりと固定された文化とは違い、主に口伝えなどで伝えていく文化であるからこそその伝え方や教わり方などの難しさも同時に感じました。

そして、2回目のフィールドラーニングでは、わんぱく探検隊の班付きスタッフとして子供たちの自然体験をサポートしました。この活動では、私たちはあくまで小学生の自然体験をサポートする立場にありましたが、私たちが小学生のできないことなどだけでなく、小学生がやるのを嫌がることも代わりにやってあげてしまっていたことに神室少年自然の家の職員の方から気付かされました。その後は、子供たちが学ぶ環境を作ることを第一に考え行動しました。そうすることで、だんだんと子供たちも自分たちで考えて行動することができ

ました。また、そのおかげもあってか最初はほとんど自分から話したりしなかった班の子供たちも、みんなで話すだけでなく、班の仲間のことを思いやって行動しているように見え感動しました。そして、子供たちもスノーバイクや雪中運動会を通して、冬や自然がより好きになったと言ってくれたので、私たちが子供たちの学ぶ環境を整えるサポートをできた実感しました。

これからは、今回のフィールドラーニングで学んだことをさらに深めていったり、異世代交流の機会があれば積極的に参加して、そこにある文化なども学んでいきたいと思えます。

農学部 Aさん

[1回目の考察・気づいたこと]

1回目は「伝承文化体験」と「異世代交流」がキーワードであった。このキーワードから考えた私の気づきは、主に3つある。まず、異世代交流の難しさである。イントネーションの違いや訛りなどもあって、話の内容が理解できないこともあったし、私たちの話が聞こえなかったりする場合もあった。異世代とのコミュニケーションでは、特に相手に応じた言葉遣いや話し方を意識する必要があることがわかった。次に、五感を使った体験は、記憶に残る学びになるということだ。牡丹餅を食べたり、注連飾りを作ったりなど、実際の活動を通して文化や知識を知ることができた。机上での知識ではわからない感覚や味を経験し、感動するという経験が、それ以降も地域や文化に触れる意欲にも繋がると思った。最後に、自分の住んでいた地域の伝承文化について知らないという気づきもあった。ホラ貝や真室川音頭等の真室川町の文化に触れるうちに、そもそも自分の出身地である地域の文化をよく知らなかった。二つのキーワードの意味や意義は活動の中でグループのメンバーと理解を深めることができたので、今度は自分の住む地域にも還元できるような働きかけをしたい。

[2回目の考察・気づいたこと]

2回目は、わんぱく探検隊～冬～のサポートスタッフとして活動した。大学生自身、スノーシューや雪中テント泊など、初めての体験も多かったが、何度も神室少年自然の家で活動したことのある子どもを中心に、自主性、協調性が培われていく過程を目の当たりにした。初日は自分のことでいっぱいだった子どもも、班員の仲間や大学生を手伝ってくれ、その成長に胸を打たれた。

[感想]

私は前期のFW共生の森もがみでも、このプログラムを受講した。このときは、一生懸命な小学生と向き合うこと、状況に応じて、今はどのような支援が必要なのかを考えることに精一杯だった。小学生への苦手意識や、慣れしていないことも原因だったと振り返り、神室少年自然の家のボランティアとして秋のわんぱく探検隊にも参加した。

ボランティアの経験も生かしながら、子ども達との関わり合いが増えるたびに、自分自身も余裕を持って考えていくことができるようになった。体験活動というコンテンツを通して、どんなプロセスで、どんな資質や能力を伸ばして欲しいのかを考えながら、今後も子どもたちの豊かな人間性を引き出すサポートを行っていきたい。

農学部 Iさん

1回目の伝承文化にふれあいながら異世代交流をする活動では様々な気づきがあった。まず伝承文化についてである。伝承文化は伝統文化とは違い言い伝えによって後世に受け継がれているため様々な情報がある。この活動で大学生が主体で文化について説明をした。私も説明の準備をしたが、一晩で資料の準備をしなければいけなかったこともあるが伝承ということもあって情報がたくさんあったためどの情報を伝えれば良いのか分からず困ってしまった。また地元の人たちの独特の訛りも印象的だった。大学生は地元の人たちの会話についていけず困ったことも多々あった。山形でも少し距離をおくと全く違う言葉になる事が分かった。またこの事業では地元の人達にとって心の憩いの場であることも確認できた。私自身も様々な人達と話ができて楽しむことができた。反省としては子供たちと関わる時にやってはいけないこと、危ないことをどう伝えればいいのか分からなかったことがある。保護者が同行していたため大きなケガはなく無事に終えることができたが、次回の子供たちと過ごす活動でどうすればいいのか考えるきっかけになった。

2回目の事前学習では子供たちとどう接すればいいのか、参加者みんなと仲良くなるにはどんな企画を立てたら良いか主に話し合った。私は班長であったが班員が積極的に活動を進めたおかげでスムーズに計画がたてられた。

2回目の活動では小学校3、4年生と共に行動し子供の成長をサポートした。私が1番不安に感じていた子供に注意をする時の対応が1日目はうまくできなかったが2日目は勇気を出して伝えたところ、素直に聞いてくれたので全く心配は無かった。気づきもたくさんあった。小学校3、4年生でも自主性、協調性があった。1日目より2日目の方がよりその様子が見えた。今まで客観的に子供達を見ることがなかったためその様子はたくましく、頼もしかった。他の班の子供達も個性は様々ではあったが困っている子を助ける、班長は自分の役割をこなすなど団体行動の意識をしっかりと持って活動をしていた。今回の全ての活動を通して座学だけでは分からない貴重な体験をすることができた。班長としても周りのサポートを借りながら無事に役目を終えることができた。

農学部 Sさん

私たちの班は、真室川町にある神室少年自然の家とい

うところで、2回の活動を行いました。1回目の伝承文化ふれあいキャンプでは、異世代でコミュニケーションを取り合いながら伝承文化を体験し、学ぶという活動をしました。一日目は最初これからお世話になる関栗老人クラブの方々と交流をしながら、翌日のふれあいキャンプで使う注連飾りの準備をしました。続いて学生達で手分けして、ふれあいキャンプにむけて企画を練りました。私は牡丹餅の伝承文化について伝える係の一員だったのですが、老人クラブの方に教わった知識を使い、小さな子どもから小中学生にまで伝わるように工夫したクイズを作りました。二日目の伝承文化ふれあいキャンプ当日の牡丹餅作りや注連飾り作りでは、小さな子ども達が思っていたより積極的に参加してくれました。注連飾り作りの際、私の担当していた班の子ができた注連飾りを嬉しそうに持ってきてくれたことに感動しました。また、真室川音頭保存会の方々に踊りを教わりながら、みんなで踊ったこともとても印象に残っています。

1回目の活動で、老人クラブの方と触れ合う場面もたくさん見られ、異世代交流を通した伝承文化体験の意義を感じました。また、普段私たちが何かを知ろうとする際、人に教わったり体験したりすることがとても少なくなってきており、このように文化を体験しながら知識を得たり、またそれを人にどう伝えていくかを考えたりすることはとても重要だと思いました。

2回目は「わんぱく探検隊」という小学3～4年生を対象とした冬の自然・共同生活体験の班付きスタッフとして参加しました。この年代は社会性を身につけつつあるが、まだ幼さが残る世代だと言うこともあり、小学生への適切なサポートの仕方や加減を何度も考え行動することを心がけました。活動内容として、主にスノーハイク、雪中でのテント泊、雪中大運動会のサポートをしました。私が付いた班の小学生達は比較のおとなしく、真面目に物事に取り組むため逆に主張があまりなく心配していたのですが、最初のスノーハイクの後半あたりから、遅れるメンバーを応援する場面が出てき始め、次第に打ち解けていくのを感じました。また、テント泊でのシュラフ作り、テント立てではそれまで分かっていた男女が助け合い、班全体で協力している様子が見られました。雪中運動会では皆が意見を出し合って絆を深め、全力で楽しむ姿が印象的でした。

わんぱく探検隊で小学生と関わりサポートの仕方を工夫していく中で、徐々に小学生の方も自主的に行動し協力し合う場面もあり、感動や発見を得られました。

この2回の活動で共通して感じたことは、体験することは今後の記憶に残るとことです。異世代や初めて出会った仲間と、伝承文化や自然活動を体験することは、自分の世界、価値観、人間性を豊かにします。それは子ども達にとってだけでなく、私たち大学生にも言えることなのだという事を神室少年自然の家での活動を通して改めて感じさせられました。

農学部 Tさん

一回目の『伝承文化ふれあいキャンプ』では、異世代交流をテーマとして活動した。今回のフィールドラーニングはイベントを運営するという立場での参加だったため、戸惑ってしまう場面が何度かあった。私は、緊張したり自信がなかったりすると声が小さくなってしまうため、同じグループの老人クラブの方とうまく会話ができず、一日目の午前中はほとんど無言での作業となってしまった。しかし、楽しそうに会話している班の様子を見て、なるべく大きな声で話すように心がけると、自然と会話が弾むようになった。また、それぞれがゲーム係、料理係、伝承文化係に分かれて活動した際には、他の係りのメンバーが子ども役としてゲームのシミュレーションに参加して注意すべき点を確認したり、作成した模造紙の見え方をお互いに確認しあったりと、全員が協力して役割を果たすことができた。さらに、二日目の真室川音頭保存会の方々に踊りを教えていただいた際には、最初は全く踊ることができなかつたにもかかわらず、円になって何度も繰り返し踊っているうちに自然と身体で踊りを覚えることができた。このように『伝承文化ふれあいキャンプ』を通して、文化は実際に自分の手を動かし、その文化にまつわる話を聞きながら作業すると心や身体に自然と刻まれるのだなと感じた。一方で、このような機会がないと私たちの身近にある文化について改めて考えることはほとんどないため、こうしたイベントを通して一つの場所に世代を超えて様々な人が集まり、一緒に一つのことに取り組むというのは非常に大切であると思った。

二回目の『わんぱく探検隊～冬の巻～』では小学校三、四年生の子どもたちと共に、一泊二日の自然体験型キャンプに参加した。真室川町に到着するとさっそく雪の洗礼を受け、バスが立ち往生してしまうというアクシデントに見舞われたが、何とか参加者全員が神室少年自然の家にとどり着くことができた。時間が押す中であわただしく活動が始まったが、最初はみんなの顔と名前が覚えられずうまくサポートすることができなかつた。そこで一回目の反省を生かして大きな声で話すこと、間違いを恐れずに名前を呼ぶことを心掛けると、徐々にみんなと打ち解けることができた。しかし、小学生にどこまで手を貸してよいのか線引きが難しく、最初は自分がすべてやってあげてしまうことが多くあった。すると職員さんから「王子様・お姫様扱いしすぎては、子供たちの成長につながらない」との指摘を受け、なるべく自分の力だけでやり遂げるまで見守るようにしてみた。すると、子どもたちは「自分の力で出来た」という経験が自信につながり、それをきっかけに困っている友達を助けるようになったり、自分から行動するようになったりと、二日間でそれぞれの成長を見ることができた。最後はグループの全員がハイタッチをしてくれて、帰りのバスが発車

してからも見えなくなるまで手を振っていた姿を見て胸が熱くなった。

一回目と二回目の活動を通して、普段生活している中では気が付かないような新たな発見があったり、子供たちだけでなく私たち学生も成長できたりと、神室少年自然の家でしか得られない貴重な体験をすることができた。私は農学部なので、今回の学びが直接活かされる場面は少ないかもしれないが、また神室少年自然の家でボランティア活動をして、様々な経験がしてみたいと思った。



里山保全とキノコ料理

活動状況

○実施市町村：戸沢村

○講師：田舎体験塾つのかわの里事務局スタッフ及び角川地区の講師

○訪問日：平成30年10月27日(土)～28日(日)、平成30年11月17日(土)～18日(日)

○受講者：人文社会科学部1名、理学部1名、医学部1名、工学部2名、農学部3名 以上8名

○スケジュール：

1回目	2回目
<p>【1日目】10月27日(土)</p> <p>08:00 山形大学発</p> <p>10:00 戸沢村農村環境改善センター着</p> <p>10:10 オリエンテーション</p> <p>10:30 そば打ち体験</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:00 ナラの伐倒・小間切り・搬出</p> <p>15:50 木の実拾い</p> <p>16:20 振り返り</p> <p>17:00 農家民宿へ移動</p>	<p>【1日目】11月17日(土)</p> <p>08:00 山形大学発</p> <p>10:00 戸沢村農村環境改善センター着</p> <p>10:10 オリエンテーション</p> <p>10:30 薪づくり</p> <p>11:15 焼おにぎり、焼いも、焼栗づくりなど</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:00 杉の枝打ち・間伐</p> <p>16:20 振り返り</p> <p>17:00 農家民宿へ移動</p>
<p>【2日目】10月28日(日)</p> <p>09:00 戸沢村農村環境改善センター集合</p> <p>09:10 キノコ採り</p> <p>10:00 キノコ料理づくり</p> <p>12:20 昼食</p> <p>13:20 キノコの植菌</p> <p>15:20 振り返り</p> <p>16:00 山形大学へ出発</p> <p>18:00 山形大学着</p>	<p>【2日目】11月18日(日)</p> <p>09:00 戸沢村農村環境改善センター集合</p> <p>09:10 ログハウス修繕</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:00 木エクラフト</p> <p>15:20 振り返り</p> <p>16:00 山形大学へ出発</p> <p>18:00 山形大学着</p>

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Kさん

私は二回にわたる計四日間のフィールドワークを通じ、多くの学びや気づきがありました。

一回目の活動で、特に印象に残っていることは今年の夏の台風による被害でした。災害の発生時、ニュース等で報道されているのを目にし、大変な被害が起きていたことは知っていました。しかしながら、その後報道もなくなり、少し記憶から薄れかけた頃に戸沢村へ行くことになりましたが、崖崩れや橋に引っかかったままの流木など、バスの中から見る災害の爪痕に衝撃を覚えました。現地の講師の方の口から聞く災害発生時のお話やその話し方から、バスの中からではうかがえきれなかった被害の重さがひしひしと伝わってきました。また、お話によるとまだまだ復旧作業があるとのことでした。

講師の方々によると、これらの被害の原因はあの台風だけではなく「森林保全」が行き届いていないことにもあるそうです。里山に人の手が入らないことで、老木が伐採されることなくそのまま残り続け、「ナラ枯れ」と呼ばれるものに感染し、本来森の果たす地盤を維持する役割を果たせなくなるそうです。また、さらに里山に手が入らない理由は人手が足りないことだそうです。一本の木を育てるのに八十年近くかかるにも関わらず一本当たりの単価が高くないことに加え、戸沢村のような豪雪地域では雪の重みにより根が曲がってしまいさらに価値が下がってしまうようで、林業をする人が出てこない現状があるようです。私は林業の何か新しい機械を導入すれば良いのではないかと思ったのですが、金銭的な面で難しいところがありました。しかしながら、私が最も大きな課題だと思ったことは、災害の被害を含め戸沢村の課題について戸沢村の人以外にあまり知られていないことだと思いました。この課題を知ってもらうことで、今まで気付かなかった新しい切り口からの解決策が見つかるかもしれないと思いました。

続いて、二回目の活動についてですが、印象に残ったことは意外にも急遽行ったネイチャーゲームでした。一緒に取り組んだ小学生たちが、将来自然のことを考えるきっかけになるという教育的な目的がありながら、五感で戸沢村の豊かな自然を楽しめて素敵だと思いました。また、私はこの「ネイチャーゲーム」と「出会い」を結び付けて企画を作ったら、若い人が戸沢村に来るきっかけになのではないかと思いました。既に、トレッキングと出会いを結び付けた「トレコン（トレッキング合コン）」というものがあるらしく、戸沢村の自然を利用することで出会いの場を提供できるのではないかと思います。

活動全体を振り返り、教科書からは感じることででき

なかった、自分が住む環境と異なった環境に住む方々の「リアル」が知れたと思います。戸沢村には多く課題がまだあると思いますが、可能性もたくさん秘めていると思いました。山形大学として自分たちに出来ることがあれば、協力していきたいです。



理学部 Sさん

一回目では、そば打ち体験、キノコの植菌、ナラの伐採・小間切り・搬出、キノコ料理作り、幻想の森の見学、地域住民達から戸沢村の歴史と特徴の話がうかがった。里山保全の話を知ったり、実際に自分たちでナラの伐採など体験してみて、今まで森林の生態系の保護のために行っていると思っていた里山保全が、実は、それだけではなく、山崩れ・土砂災害などの防止につながるという事を学ぶことができたと同時に、よく、里山や自然を守ることは大事と言われてはいるが、実際に自分でのこぎりを持ち、枝を切ったり、切った枝を移動させたりして、”里山保全大事”と言うのは簡単だが、実際にやるとなると、ものすごく重労働であり、人口減少や高齢化が進む地域では、特に保全を行っていくのは難しいという事を実感した。また、キノコの植菌、収穫では、一つ一つ手作業で菌を木の穴に入れるとの大変里、キノコがどのくらい収穫できるのかは、その年の気候などに左右される事を感じ、キノコはできるまでに非常に手間暇がかかるものだと思うと思った。

二回目では、森の感謝祭への参加、ログハウスの修繕、木工クラフト作り、枝打ち・間伐、薪作り、焼きおにぎりや焼き芋作りを行った。

森の感謝祭では、木質チップ敷き、木のコースター作り、ネイチャーゲームを行った。チップひきでは、機械でチップをひくと思っていたので、手作業でまくのは大変であった。また、この様なこどもが楽しみながら自然にふれあえるイベントは大切だと思った。しかし、このイベントには、参加している人が少なく、また、参加している人は地元近辺の人ばかりであったように感じた。このような地域をアピールするイベントを行っていても、そのイベントを村の外に発信できていないのはもっ

たいなと思うと共に、情報の発信力の弱いのがこの戸沢村での課題の一つだと感じた。枝打ち・間伐では、山の奥に入り、不安定な山の斜面で作業を行った。周りの木の生え方や倒す向きを考えながら間伐を行う事、木は90、100年程成長しないと木材として利用できない事に驚いた。また、腐った木と、腐っていない木では、倒すときの音が全く違う事に気づいた。そして、2回目のお昼では、廃校となった学校をカフェとしているのを見て、廃墟になった家が多いと聞いていたので、廃墟となった民家を村人の憩いの場として利用したり、観光施設として利用すれば良いのではないだろうかと思った。

全日程を終えて、戸沢村は、人手不足・高齢化による里山保全ができていないこと、村の魅力や情報を発信しきれていない事が課題であると感じた。



医学部 Yさん

今回、2回のフィールドワークを戸沢村において行った。

戸沢村では、蕎麦打ちやキノコの植菌、キノコ採り、ナラの伐倒や薪作りなど里山ならではの活動を行うことができた。実際に里山保全の活動を行ってみるとその危険さや必要な労力の大きさを感じ、農村の高齢化、人口減少のもつ問題の大きさを実感した。戸沢村では最近大規模な土砂災害が起こっており、その原因の一端として里山保全の不足によるナラ枯れがあるとお聞きして、この問題が様々なところへ影響を及ぼしていると感じた。

戸沢村ではネイチャーゲームやチェーンソーアートなど里山に多くの世代の方に興味を持ってもらうための催しが多くあり、ほかにもログハウスや廃校を利用したレストラン、木工クラフトなど多くの取り組みがなされていた。

このような課題は戸沢村だけでなく多くの農村や里山にも当てはまることだと考えるため、同じような問題を抱える地域で解決策を模索し、多くの人を惹きつけるような取り組みをなして行く必要があると感じた。

工学部 Sさん

今回のフィールドワークでは、森の感謝祭でドングリを種として植えることから始まり、杉の間伐の体験、伐採した木を材料としてログハウスの修繕を行い、材料とは出来ないような木を粉々にしてウッドチップにして道に敷いたり、燃料として薪にしたり、小枝は美術品の材料にするなど木の種類は違えど一通りの木の一生のようなものを見ることができたと思う。その他にも道端に生えている栗の木を使いキノコを育てたり、そばや戸沢村で育てた野菜をたべたりした。これらのことはこの村ならではのことであり十分に人を呼び込む材料として利用できると考える。ただ、このことは実際にこの村にきて分かったことでありそれまでは知る機会すらほとんどなかった。そのためこの村ではこういうことをしているという知名度をより上げるべきだと考える。首都圏などのより木とのふれあいの少なくなった人にとっては少し値段が高くても魅力のあることだと考える。交通の便もあまりよくはないので今回のようにバスなどで送迎を行いポスターやチラシなどを使い宣伝することで人はかなり集まると思う。今回のようなことをより多くの人に知ってもらうことにより森や木のことを知ってもらう良い機会になると考える。

工学部 Sさん

僕はこのプログラムに参加して楽しかったと思ったのは薪割りをしたのと、キノコの菌植えをしたことです。薪割りは初体験ということもあり、なかなか難しかったのですが薪がしっかりと割れたときの爽快感は最高でした。

よかったと思ったことは、まず民泊の良さを知れたということです。ホテルや旅館とは違い民泊は人の温かさを肌で感じる事の出来る場所でした。一回目のプログラムの時に泊まった民泊では家主の家族の方もいてまだ幼い子供とふれあうことができとても心温まる経験ができました。そしてなにより民泊のお父さん、お母さんから戸沢村のことや日常の面白い話をいっぱい聞くことができとても面白かったです。このような理由から僕は民泊がとてもいいものであると感じました。そこで僕は民泊の良さがもっと広まれば戸沢村に人がより訪れるようになるのではないかと思います。

次にナラの伐倒、小間切り スギの間伐、枝打ち体験を通して実際に里山保全の大変さが身をもって感じる事が出来たことです。やってみての感想は音のほとんどしない静寂の空間で大きなスギの木が音を立てて倒れるのを目の当たりにしたときはすごく心が打たれました。またのこぎり使って木や枝を切ったのですが、広大な面積の森林の手入れとなるとチェーンソーがなければとても大変な作業であると思うし、人手もかなり必要だと思いました。よくテレビなどで環境問題や農林業の人手不足などのニュースは目にしますが、改めて考え

ないといけないと強く思いました。問題だと思ったのは担当の方が言っていたのですが、人手不足にもかかわらず機械の値段が高く個人での購入が難しいこと、また木材の値段が安くなかなか商売にならないということです。そしてスギに関しては入植から80~100年で収穫期を迎えるということもあり何世代にもわたってスギを育てないといけないため後継者が不足というのも大きな問題だと思いました。そこで僕はメンバーの一人が言っていたように森林保全のアルバイトというものをやってみるのがいいのではないかと思いました。しかしここで大きな問題があります。それは交通網が発達していないということです。そうすると学生が戸沢村に自力で行くというのは難しく対策が必要ではあると思いますが人手不足解消にはいいと思いました。

農学部 Hさん

私は、戸沢村でキノコ採りやそば打ち体験、ナラの伐倒、薪作りなどの現代の普通の生活では味わえないことを体験することができた。今まで戸沢村について、何がいいところで、どんな観光スポットがあるのかなど全く分からなかったが、全国ランキング第2位のコナラがあることや健康保険の発祥地であること、幻想の森という観光スポットがあること分かった。また、民泊を通して戸沢村の人々のあたたかさや居心地の良さを発見することができたため、観光スポットだけでなく戸沢村に住む人々も戸沢村の魅力の一つだと感じた。また、活動中に「森の感謝祭」という里山保全のイベントにも参加でき、実際に現在行われている里山保全活動について知ることができた。

今回のフィールドラーニングによって、戸沢村での問題をいくつか発見することができた。

1つ目は、高齢化による管理放棄地の増加や伐倒の減少である。今回ナラの伐倒を体験し、切る木までの林道が険しいことや下刈り、伐倒後の木の持ち運びなどの作業は大変だった。この作業を高齢者だけで行うのには危険を伴い、労力も大きいので伐倒などは高齢化が進む地域で増加させるには難しいのだと感じた。

2つ目は、里山保全のイベントで、小学生ほどの子供の参加者は多いが、中学生以上の学生や一般人の参加者がとても少ないことだ。イベントの対象者を子供にするのは分かるが、多くの世代の方に興味を持ってもらうことが大事だと思った。

私を感じたこの問題に対する解決策として次のことができれば良いと考えた。

1つ目の問題では、高齢化が進み、人口減少にあるが、これから地域の人口を増やすのは難しいと考えられる。そこで、交流人口を増やせば良いと考える。戸沢村の観光やフィールドラーニングのような活動によって観光客伐倒などの作業をしてもらうことで、1つ目の問題を解決することが出来る。また、観光客に戸沢村の魅力を

伝えることが出来るため良いと思った。

2つ目の問題は、戸沢村だけではないが、日本の里山保全活動全体で多くの人が興味を持てるようなイベントなどを考えていかなければならないと思った。



農学部 Kさん

今回の2回のフィールドワークを通じ考えたことや、感じたことは全国の農村や過疎地域で問題になっている、後継者問題や高齢化などの問題は戸沢村でも実際に感じました。ですが今回はそちらの問題ではなく戸沢村固有の問題について述べようと思います。まず自分はこのフィールドワーク以外にも戸沢村を出入りしていましたが、夏の雨による土砂崩れなどの震災への復興があまり進んでいないことが目につきました。その中でも一番に気になったことは、土砂崩れの影響で木が倒され流れて橋の柱に引っかかっている状況です。もし今回と同じ規模の災害や、大雪による多量の雪解け水が生まれれば、多量の水や流木などが流されてきて、あの橋の柱に当たることがあれば、あの柱は壊れると思います。震災への復興が遅いことは二重に災害を引き起こす可能性があると思いますので、そこにはかなりの危機感があります。

二つ目は2回目のワーク時に気になったことで、人工林が死んでいること。杉の人工林に唐松が生え、雪害によって木の先端は曲がり、中身が腐ってバイオマスにも使えないような木が多くあるところがあるということ。中身が腐っていると台風や何らかの天災時にたくさん木が倒れると思います。そうすると木が重なり合ったりなど複合的なことが重なると土の中に空間が生じます。そうすると土砂の流出にもつながり、被害が広がるので、対策が必要だと思いました。

このような課題が自分の目にはつきました。その他にも宣伝する力が弱いことなど感じることは多々ありましたが、戸沢村には新しいことを始めようとしている人や、実際に始めている人がいるので戸沢村自体に自分は元気な姿を感じました。その新しいことを広げていけば、戸沢村はより明るくなると思います。

以上が今回の戸沢村で感じたことです。

農学部 Mさん

共生の森もがみにおける里山保全とキノコ料理の学習を通しての感想と、学んだことを書こうと思う。

1回目の1日目は、まず、そば打ち体験をした。そば打ちのスタートが遅れたのにもかかわらず順調に作業を進めることができた。そば打ち体験が小学校ぶりぐらいだったので、案外楽しかった。次に、原木になめこの菌を植えた。原木にドリルで10cm間隔で穴を開け、その中になめこの菌を詰めた。最初に考えていたよりもなめこの菌を植えるところが多かった。2日目は、去年植えたなめこの収穫を行った。原木の穴からは、なめこではない種類のキノコも生えていた。今年はなめこの出が悪く、あまり育ってもおらず、収穫できる量も少なかった。次に、ナラの伐倒も行った。はじめは、学生が一人ずつ木を丸々一本切り落とすのかと思ったが、実際は職員の方が木を丸々一本チェーンソーで切り落とし、細かい枝を学生がのこぎりで切り落とした。太い枝は一定の長さに切って、キノコの菌を植える原木にした。切り落とした枝を運ぶのが、考えていたよりも重労働だった。

2回目の1日目は、「森の感謝祭」というイベントに参加した。そのイベントで、「ネイチャーゲーム」というゲームを体験した。自然の中にハートや星などの記号を探してビンゴをする、という内容で小学生ほどの子供たちに交じって行った。自然の中で星形を見つけるのが難しく、見つけることができなかった。自然の景色の中にも足下にも、よく見てみると様々な形があるのだと感じた。また、薪割りも行った。薪割りは、コツをつかむまでに時間がかかった。お手本を見ると簡単そうに見えたが、実際に体験してみると難しく、一本割るだけでも手こずった。2日目は、ログハウスの修繕を行った。木の板に防腐剤を塗ったり、柱のカーブに沿うように木の板をカーブさせて切った。板をカーブさせるのが大変で、釘を打つたりのこぎりで小刻みに切ったりいろいろ工夫した。

この4日間の集中講義を通して感じたことは、なめこの菌を植えるにしてもナラの伐倒にしても最初のイメージと体験してみて感じるものが大きく違ったことだ。こんな感じかな、と考えていたこととの違いが多いぶんだけ新しい発見や気づき、学びも多くなるのでよいと感じる。また、ネイチャーゲームでは、普段は周りの自然をあまり見ていないが、ゲームを通して周りの自然を見渡すことで、改めて植物の形や色などを知ることができた。よって、こうした活動が広まることで私たちが自然をより身近に感じることができ、地域の活性化にもつながるのだと思った。今回の集中講義では、初めて民泊をしたが、とても居心地がよく、よい制度だと感じた。このように、戸沢村のよいところはたくさんあるので、その長所を伸ばすことで自ずと地域活性化につながるのではないかと感じた。

山形大学エリアキャンパスもがみ運営会議委員名簿

平成31年3月31日現在

山形大学

エリアキャンパスもがみキャンパス長	玉 手 英 利	小白川キャンパス長
教育開発連携支援センター	小 田 隆 治	教 授
人文社会科学部	松 本 邦 彦	教 授
大学院教育実践研究科	江 間 史 明	教 授
理学部	栗 山 恭 直	教 授
医学部	石 井 邦 明	教 授
工学部	木 俣 光 正	教 授
農学部	保木本 利 行	助 教
教育・学生支援部	布 施 一 明	学務課長
小白川キャンパス事務部	小 山 和 佳	教務課長

最上地域

新庄市教育委員会	高 野 博	教育長
金山町教育委員会	岸 隆 一	教育長職務執行長
最上町教育委員会	中 嶋 晴 幸	教育長
舟形町教育委員会	齊 藤 涉	教育長
真室川町教育委員会	門 脇 昭	教育長
大蔵村教育委員会	有 馬 眞 裕	教育長
鮭川村教育委員会	矢 口 末 吉	教育長
戸沢村教育委員会	市 川 重 保	教育長
山屋地区連合会	押 切 明 弘	事務局長
高等学校長会	岸 善 一	代表
新庄東山焼弥瓶窯	涌 井 正 和	窯元
最上地方町村会	丹 文 哉	事務局長
七所明神	叶 内 克 和	代表

オブザーバー

山形県最上総合支庁総務課連携支援室長	浅 沼 道 生
同 総務課連携支援室主査	坂 本 健太郎

エリアキャンパスもがみ事務局

(大学事務局)

教育開発連携支援センター	阿 部 宇 洋
小白川キャンパス事務部	平 賀 久 義、前 田 佳 恵、 佃 美 穂、八 柳 育 代

(最上事務局)

事務局長	森 洋 一
事務局員	澤 野 ひろみ

エリアキャンパスもがみ研究年報2018

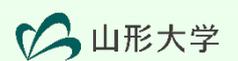
エリアキャンパスもがみ 平成30年度 事業報告書

平成31年(2019年)3月31日

編集：山形大学エリアキャンパスもがみ



エリアキャンパスもがみ



事務局 山形大学教育開発連携支援センター
〒990-8560 山形市小白川町 1-4-12

TEL 023-628-4720 FAX 023-628-4836
E-mail acmogami@jm.kj.yamagata-u.ac.jp